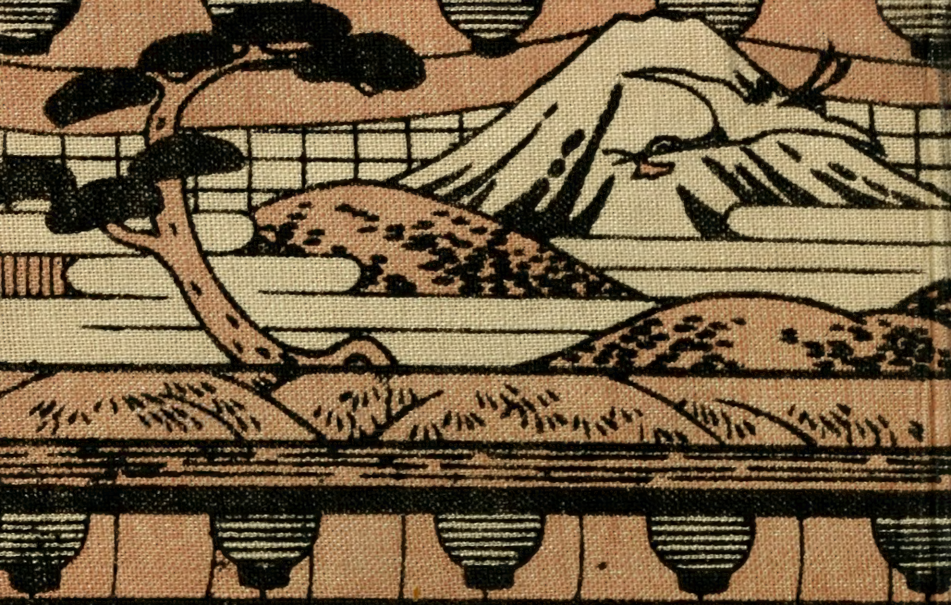


第八巻

朝顔日記

廓文章

梅の由兵衛

敵討噂高松

PL Kawatake, Shigetoshi
767 Sewa kyogen kessaku shu
K32
v.8

East Asia

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

河竹繁俊
濱村米藏
渥美清太郎 共編

第八卷

世話狂言傑作集

東京
春陽堂發行

UNIVERSITY OF TORONTO
MAR 15 1971
LIBRARY

PL
767
K32
v.8

目次

解説……一―三
◎曙色蕣日記（朝顔日記）……一
◎廓文章（吉田屋）……九七
◎春景色梅由兵衛（梅の由兵衛）……一三三
◎敵討高砂松（研辰）……二五五

解說

「曙色葬日記（つゆのひぬまあさがほにつき）」は「增補生寫朝顏日記」と全く同一である。この作の出來上つたには、大體次のやうな經過がある。

芝屋芝馬臾（本名は芝屋勝助）といふ人は、長崎圓山の遊女の腹から生れた畸人で、浪花に出てからの淨瑠璃の作にも「箱根靈驗躄仇討」などの名作もあるが、常に長話といふ小說稗史を綴り、自ら好事の人を寄せて、一夜讀切りに話す事をして連中を組み、その社中で話の種の勝れたものゝある時は、これを稗史に綴り、その席でも講じ一夜の讀切にする事を初めた。その長話には數種あるが、その中に葬、油、首、櫛、狗などといふものがあつた。この中葬を歌舞伎に脚色して、二世嵐吉三郎に宮城阿曾次郎をさせようと思ひ、狂言作者の近松德臾に話し、狂言は大方書いたが深雪に扮する俳優がなかつたので、その儘に四五年經つた。その內馬田柳浪といふ醫師に話して挿繪を加へ、小說稗史として前編五卷、後編五卷を出版した。それから四五年經つうちに芝臾も德臾も歿し、葬日記の小說だけが廣く行はれたのを、文化九年頃に堀江市の側芝居で「生寫葬物語」の名題の下に、出來島千助が狂言作者で市川團三郎に駒澤をさせたが、これは不許に終つた。文化十一年に江戸から若女形澤村田之助が七年振りに浪華へ來

たが、田之助は器量もよくそれに琴三味線に達してゐたので、これ幸ひと芝叟徳叟の遺稿を取り出し、奈川晴助が修正して、正月から角座へかけた。これが今日の朝顔日記の始めであつて、名題は「けいせい筑紫琴（つくしのつまごと）」と呼んだ。

義太夫の方では文政年間に山田案山子といふ人が、竹本重太夫の爲に作したが、完結せずに歿したのを、翠松園主人が刪補潤色した。それは嘉永三年のことで、「生寫朝顔日記」といつたのであるが、六字の名題は佛號に通ふといふので、その道で忌む事であるから、「増補生寫朝顔話」と變へたのである。この作は隨分長篇のものである。而して現今行はれる宿屋の段や、大井川の段は、この作の一節である。

この作の大體の骨子は大内家のお家騒動である。豐前大友家の殘黨が、大内家に仇をしようと企む。深雪は阿曾次郎に添はれぬ悲しさから、小瀬川へ身を投げる所を助けられて、荒妙といふ大友の殘黨の惡婆に誘拐されて摩耶山に幽閉されたりする。種々な事件が起つて來るが、深雪は忠僕に伴はれて首尾よく駒澤の屋敷を訪ね、婚儀を取り結ぶ。岩代一派大友の殘黨の奸計も、駒澤の忠義によつて露顯し、大内家は安泰に治まる。この間に大内の當主義興公は、大磯の揚屋で瀨川といふ女に迷ひ國政を怠るが、瀨川が貞女で自殺して殿を諫め、且つ駒澤の異見で眼が覺めるなどといふ挿話もある。

こゝに收めた臺本は「筑紫琴」とこの義太夫物とをとり合はせたものと言つてよい。院本には蛇皮六といふ人物は出て來ない。然し琴を彈ずる所と大井川とは院本通りである。文久三年七月中村座上場の時の臺本で「右興行の節原本を得て寫し置くもの也」と三世瀨川如皐の筆で奧書のある臺本である。

その時の役割は、

秋月の娘深雪（澤村田之助）、宮木阿曾治郎、駒澤次郎左衞門（坂東彥三郎）、藤屋德右衞門（關三十郎）、岩代瀧太（市川米十郎）、蛇遣ひ蛇皮六（嵐冠五郎）、秋月由美之助（中村鶴代）等。

「曙色葬日記」といふ名題は深雪を勤めた三代目澤村田之助の俳名が、曙山であつた所から附けた名題である。深雪といふ役は二世田之助によつて有名になつただけに、三世の田之助にとつても由緒ある芝居であつた。

「廓文章」はいふまでもなく「夕霧阿波鳴戸」の一節から出て、現在のものにまで、次第に進化したものである。「夕霧阿波鳴戸」は近松門左衞門の作、寶永七年七月廿四日から竹本座にかかつた淨瑠璃物である。

夕霧といふ太夫は「澪標」によると、京都島原の遊女屋に桔梗屋意得、扇屋四郎兵衛といふ者があつたが、寛文十二年に島原から大阪新町に移つた。夕霧はこの時一緒に移し植ゑられた名花だつたといふ。島原に居た時分から芳名は聞えてゐたので、大阪では移つて来るのを待ち構へた程の全盛であつた。この夕霧は江戸の三浦屋高尾、京都林屋の吉野、浪華の扇屋夕霧と並べて、その土地の名物とまで數へられてゐた。三浦屋高尾は橋詰の道哲寺に墓があり、仙臺侯との關係によつて名高く、吉野は灰屋紹益に嫁いで數寄の道に志しが深くて名を殘したが、この夕霧は一點の瑕もなく全盛を極めたもので、客の招きに應じ切れない所から、圍ひ女郎を置いて客の座敷へ出した。これが即ち引舟の濫觴であるといはれる。延寶六年正月六日に夕霧がかりそめの病に罹り、百方醫療をつくした甲斐もなく、年二十七歳で遂に死去した時、浪華市中は夕霧の噂で持ちきる有様であつたといふ。「時の人惜しむ事松を離るゝ蔦かつらの如し」と迄形容されてゐる。下寺町淨國寺に葬り、花岳芳春信女といふ戒名で、墓の右側には鬼貫の「この墓は柳なくてもあはれなり」といふ句が彫つてあつたといふ。

かくの如く人氣があつたから、劇にも直ぐ脚色された。夕霧の歿した年、延寶六年二月三日から、大阪道頓堀荒木與次兵衛座に、「夕霧名殘正月」と題して、その追善劇が興行されて、伊左衛門には坂田藤十郎、夕霧には霧浪千壽が扮して大當りであつた。この作は近松門左 門

の作だと傳へられるが、遺憾ながら傳本がない。之に次いで出たのが「夕霧七年忌」で作者は近松門左衛門、貞享元年の作、俳優はやはり伊左衛門に藤十郎、夕霧に千壽であつた。藤十郎は伊左衛門が得意の藝で、一生の中十八回演じてゐる。操りの方では貞享三年の「三世相」が最初で近松の作。その次はこゝに云ふ「夕霧阿波鳴戸」である。これが寶永七年七月廿四日で、夕霧の三十三回忌に當り、且つ坂田藤十郎の歿した翌年の事である。近松は名優と遊君との追善をこの作に於てなしたのである。「廓文章」はこの作を更に安永九年に改作したもので、今も局屋に夕霧の文を傳へて居るといふ所から、この外題が産れたのである。

「夕霧阿波鳴戸」は三段物である。その梗概を記すと、

上の卷は卽ち廓文章の場であるが、阿波の大盡に化けて來たのは平岡左近の妻お雪で、夫左近が夕霧に馴染み、仲に子まで儲けたと聞き、樣子を見に來て實は伊左衛門の子といふ事が分かるが、流石は武士の妻、あくまで左近の子といふ事にして、伊左衛門にも承知さして連れ歸る。

中の卷は平岡左近の邸　子の源之介はこゝに引取られてお世繼として育てられ、心優しいお雪の才覺で夕霧も源之介の乳母といふ事にしてこの家に來る事になる。伊左衛門も我が子なつかしさ、顏見たさに傷盡界となつて夕霧の供をして來る。喜左衛門が萬事のとりもちである。玄關

先で伊左衞門は餘所ながら我が子を見ていとしがる。左近夫婦は喜左衞門に金渡すとて中へはひる。後に殘つた夕霧と伊左衞門は源之介にひしと抱きつくが、小兒ながら侍育ちの源之介は慮外者め眞二つと脇差に手をかける。夕霧は驚いて種々になだめ、乳母が始めての御對面に、この二人を一度父母と呼んでくれといふ。源之介は早速承知して「とゝ樣かゝ樣」と呼ぶので、二人は嬉し淚にくれる。所へ左近出て玄關先でそれを云はれては自分の武士がすたるとて、お雪のとめるのも聞かず源之介の大小をとり追出す。夕霧は源之介に我等こそ誠の父母であるとあかす。源之介は誠の父母が戀しいと、伊左衞門と共に出て行き度いといふ。夕霧は病中なり、あまりの悲しさに氣を失ふのを、喜左衞門がすかしなだめて元の廓へ歸らせる。この場は先年新派の伊井蓉峰が近松研究劇として演じた事がある。

下の卷では、夕霧は大病で扇屋に寢てゐる所へ、伊左衞門源之介親子が深編笠に身をやつして來て、相の山を唄つて夕霧に逢ふなとさとす。情の深い扇屋夫婦は伊左衞門と悟つて家の中へ入れる。吉田屋喜左衞門はお雪の名代とて來て八百兩出し身請けするといふ。所へ又伊左衞門の母親妙順の使も二千兩持參し、家の嫁は廓では死なされぬとて身請けを申込む。扇屋了空はそれを見て今迄働いてくれた夕霧は此方で證文を卷くといひ放す。夕霧はこの世の名殘りに妙順樣を一度拜みたいといふ所へ、門口にゐた妙順が入つて來て「妙順こちの家へ迎へとり、

金づくめにしても養生し、この姑が精力で本復させてみせるぞと、家内が勇む勢につられて諸病は氣より本復の、顏もいき〳〵にこ〳〵と立つて踊るや扇屋夕霧、變ひかへつて喜びを語り傳へて三十五年、又五十年又百年千歳の秋の夕霧を、なほ萬代の春の花見る人袖をぞ傳へける」といふので終る。かうして夕霧の全快をほのめかしたのは、一代の名妓を舞臺の上でも無駄に死なせまいとする、近松の注意であつたといはれてゐる。

富本でこの芝居をした最初は、天明四年正月森田座で「夕ぎり伊左衛門春夜障子梅」といひ、夕霧に三枡德次郎、伊左衛門に四世幸四郎。太夫は富本齋宮太夫。この他富本物には寛政七年正月都座の「今樣冬籠廓水仙」夕霧（中村のしほ）、伊左衛門（三世瀬川菊之丞）、富本豐前太夫等と、寛政十年三月桐座の「道行菜種裳」夕霧（二世菊之丞）、伊左衛門（三世宗十郎）などがある。これ等は皆現今清元に傳つてゐるものである。常磐津では嘉永五年十一月市村座で「三[illegible]褥中吉田屋」といふ名題で、夕霧をしうか、伊左衛門を高助が演じてゐる。

十郎兵衛おつるの芝居「傾城阿波鳴戸」も亦この原作によつたもので、明和五年竹本座にかゝり作者は近松半二、竹本三郎兵衛等。この當時竹本座は窮亡のどん底にあつて、せめて全盛期の作者の物と同じやうな名題のものをと、此作を選び、座本の名まで故人の近松門左衛門の名を使つたのであつたが、この作は不入りで失敗であつた。この外夕霧伊左衛門に關する作には

「夕霧筺の袂」、「澪標浪花詠」、「題浪花文章夕霧塚」などがある。

「春景色梅由兵衛」は原名を「隅田春妓女容性」といつて初代並木五瓶の作、寛政八年正月、江戸桐座の二番目狂言として興行されたものである。「春景色梅由兵衛」といふのは、たゞ單にその名題を替へにすぎない。然し稿下當時のものに後年狂言作者が多少の補筆を施こしものであるには相違ないが、原型に近いものには既に一二印行本もあるから、わざと現行脚本、江戸末期の舞臺本によつた。

この狂言に脚色された梅の由兵衛といふのは本來俠客ではない。西澤一鳳の「傳奇作書」によると大阪案樂町の梅澁の吉兵衛といふ者で、胡椒頭巾といふ事を始めて仕出した程の大惡黨であるといふ。大阪中の兩替屋の手代小者の親兄弟の在所までも知つてゐて、盜みの方便にしたといはれる。常に丁銀數枚を兩替屋へ持つて行つて子銀にかへ、今一度見せよとて丁銀を受取り、それを摺りかへる事に妙を得て、異名を「摺替の吉兵衛」といつて恐れられた。博奕で入牢したが、元祿二年四月十九日の大赦に獄を出て、その五月十九日天王寺屋九左衛門方の小者長吉が、金子百兩をかへに行く所を呼びかけ、在所から親が來たと僞つて厭がる長吉を無理に連れ歸り、女房の小梅といふ十五六の年増りの博奕の巧い女に云ひつけて、長吉の後から蒲團を被せて刺

し殺し、百兩を奪つた。近所の者が之を見付けて訴人しようとしたのを、家主の與次右衛門といふ者が、あれは夫婦喧嘩だとて止めた。吉兵衛はその金で新地堂島北町で茶屋を出さうと用意してゐる中に、小梅の弟三右衛門がその妻を離別した。その女が天王寺へ落し文をして、長吉は梅澁の吉兵衛が夫婦して殺し、その死骸は三右衛門が捨てたと書いてあつたので、與力同心を新地に遣はした。吉兵衛が新町の廓へ行つた所を六月十九日に捕へて、死骸の捨場所を尋ねると小初瀬の邊の古井に捨てたといふので、捜して見ると色も變らずにあつた。金は八十兩ばかり殘つてゐたといふ。吉兵衛は磔にかゝり、他の三人は大阪追放になつたが、與次右衛門は高津に隱れてゐたのを訴人あつて斬罪になり、小梅はその後子殺しをして磔になつたと傳へられる。

この梅澁の吉兵衛を梅の由兵衛といふ名にして、始めてこの役を勤めたのは、初代澤村宗十郎である。元文元年中村座で「遊君鎧曾我」といふ名題の下に、二番目狂言として梅の由兵衛を演じた。「澤村家賀見」によると「正月二日より打續き大當りになり、二番目梅の由兵衛、男達にて白と紺の襦子片身替りに鷺と烏の縫、紫の鐵頭巾に錠をおろし敵役を相手に男達、今を初めの旅衣ヨイヤマカショと頭巾をとると奴にて、見物の眼を驚かせ、大評判古今の大入なり、今もつて云傳ふ」と記してある。その烏の模様と頭巾とは今日迄も襲用せられ、所謂「宗十郎

頭巾」といふ言葉さへ生じたのである。

次いで出たのが淨瑠璃劇で、「昔米野中の隱井」といふ、原田由良助の作並木宗輔の添削で、元文三年豐竹座へ上場された。此作は五瀬の作に似通つた點があるから、梗概をのべておく。

初段の口、備前國中島の宅中、唐琴浦右衞門は妻お吉の兄磯島伴七の惡心から、殿のお刀銘藤四郎の銘ある刀を紛失の科で閉門中、上使として大日附牛窓十郎左衞門が來り、その情で刀詮議の日限を延ばして貰ふ。切は大阪。お吉は刀詮議に大阪へ來り元の家來梅の由兵衞を便り一時借家して住ひ、表向きは由兵衞の妻としてゐる。由兵衞の女房小梅は本八といふ者にそゝのかされて、お吉の留守に家に上り、緣の下へ身をかくし樣子を見ふが、由兵衞が來合はせてお吉は元のお主と分かり、二人は初對面の挨拶をする。

二段目の口は淺草寺由兵衞の伯母の家。由兵衞は藤四郎の刀を買ふために金を借りに來るが、伯母が吝嗇だとて伯母に事情をあかされて歸る。切は由兵衞の家。小梅の弟長吉は久し振りで姉の所へ來る。金を百兩持つてゐるといふ。小梅はその金は慾しいが云ひ出しかねて、由兵衞が早く歸つてくれゝばいゝと待つてゐる。所へ由兵衞が歸つて來て小梅を用達に表へ出し、大の蟲を助ける爲と小の蟲の長吉を切り殺す。小梅が歸つて來て悲しむがお主の爲にはゝ得心せしめ、臨終の長吉に樣子を聞けばこの金は盗んだ金、小梅が常々金のない事を苦にやむを助け

る爲に持つて來たもので、殺されるは覺悟だといふ。夫婦涙にくれながら、來合せてゐた伯母の諫めで野中の井戸へ葬る。

三段目は「道行涙のたま呼」で小梅由兵衛が長吉を葬りに行く道行。切は目出たく刀を買ひ戻してお吉に渡す。代官が出役になり本八、古手屋三ぶの惡事露顯し、由兵衛と三人引立てられるので終つてゐる。

「野中の隱井」は明和八年に竹本三郎兵衛、寺田兵藏二人によつて改作され、豐竹座の舞臺にかかつた。名題を「迎駕籠死期菩薩」といふ。

これ等の作に、小三金五郎の筋をなひまぜにして作られたのが「隅田春妓者容性」である。初演の時の役割は。

梅の由兵衛(三世澤村宗十郎)、女房小梅、丁稚長吉(三世瀨川菊之丞)、金谷金五郎(初代市川男女藏)、額の小さん(松本米三郎)、綾瀨主水之助(源之助後の四世宗十郎)、信樂勘十郎(二世坂東三津五郎)、娘お君(市山富三郎)等。

であつて、大當り大評判であつたといふ。

俗に研辰と呼ばれる「敵討高砂松」といふ作は、作者、年代ともに不分明である。作者は並

木五瓶とも傳へられるが、作柄の上から見て初代五瓶の作ではないやうに思はれる。或ひは二代目、三代目の五瓶の作であるかも知れないが、正確には知られてゐない。これを興行した座も一流の大劇場に於てではなく、大阪の濱芝居といふ二流三流の劇場であることは知られてゐるが、それすら年代記的に明確にするは困難であるらしい。

　昨年の十二月、猿之助、左右衞門、鶴藏等が歌舞伎座で演じた竹柴兼三氏の作「研辰の討たれ」といふ芝居は、この作にヒントを得て作られた、近代的意義ある時代喜劇である。

　茲にこの臺本を收めたのは、何となく活動寫眞のやうな、興味本位な、通俗な世話狂言の見本として存置したいからでもある。

　（例により、本冊の校訂、解説に關しては、文學士間民夫氏の援助、研究に俟つ所多い事を附記して謝意に代へる。大正十五年四月上旬、河竹繁俊しるす。）

曙色蕣日記（つゆのひぬまあさがほにつき）

曙色蕣日記（朝顔日記——三幕）

序幕

役名　宮城阿曾次郎、娘深雪、母操、腰元皐月、同千代竹、同桔梗、醫者遊仙、坊主醫者桂庵、瀬田伴藏、藪野丹六等。

本舞臺一面の淺黄幕、上の方宇治橋の欄干、石の傍示杭、宇治平等院槇の島道としるしあり、下の方葭簀張りの茶屋、すべて宇治川橋詰の體、幕の内より仕出し床几に腰を掛けて居る、茶屋男茶を汲んでゐる、茶摘唄にて幕あく。

○　なんといつも、賑やかなことの。

△　螢見がたんと出るぢやないか。

茶屋　當年は殊のほか螢が早う出ました。

○　いやもう宇治川の螢狩といふは、諸國に聞えてある事ぢやて。

△　日暮れから見物して行きませう。

茶屋　さやうならよい見晴しへ御案内申しませう。

○　さあ〳〵ござれ〳〵。

トやはり右の唄にて仕出し下手へはひる、ト花道よりくわゐ頭の醫者遊仙、後より坊主醫者桂庵連れ立ち出て來り、

遊仙　これは桂庵老、よい所でお目にかゝりました。

桂庵　さればさ、お出でを存じたらお誘ひ申さうもの。

遊仙　この間は病氣も閑ゆゑぶら〳〵と、この宇治のほとりへぶらつきに出た所さ。

桂庵　然らば川端を夕方まで御同道。

遊仙　マア〳〵あの床几へ。

ト右の唄にて兩人床几へ腰をかける、桂庵こなしあつて、

桂庵　さてはや尊公には何とも申譯もござらぬ仕合、御存知の通り病家も少ないこの桂庵、それ故にお借り申した金子も段々延引、何分流行風か麻疹でもはやる時分までお待ち下されい。

遊仙　ハテようござる、ない物を無理に取らうと申すやうな遊仙ではござらぬ、愚老も大内家のお手胃なれども親どもが死去致し、ゆづり受けた金銀が澤山ござる故、先づ當分何不足なく暮し居りますがや、同じ九州より上つて來てもこなたの懇意めさるゝ、菊地の浪人阿曾次郎とはきつい違ひ。

桂庵　そりや一口に云へるものでござらぬ、先の世によい種を蒔いてござつた上、この桂庵などに金貸しても催促めされぬ隱徳は、誠に此世からの生佛。

遊仙　さてその生佛も此頃は、戀煩ひで石佛のやうになつてゐますわいな。

桂庵　ムウ尊公が戀煩ひとはとんと解せぬ、シテその先の相手は傾城にて候か、但し白拍子にて候か。

遊仙　傾城も傾城も、楊貴妃や小町から雲上を取りさうな大美人でござる。

桂庵　シテマアそれは何者の娘でござる。

遊仙　ハテそれが知れてをれば戀煩ひはせぬわいの、この間開帳參りにふと見染めてから朝夕忘れぬ娘の顏、この戀さへ叶ふ事なら金は何ぼでも惜しまぬ、何とその娘に逢ふ知惠はあるまいか。

桂庵　知惠というたら何がなし、人立ち多いくんじゆの所をぶらぶらあるくが上分別。

遊仙　いかさまこの宇治などへ、螢見物などに出かけまい物でもない。

桂庵　犬もあるけば棒に逢ふといへば、川端をぶらぶら見あるいたら棒に逢ふまいものでもない。

遊仙　そんなら日の暮れぬ内に、宇治川のあたりを。

桂庵　サあるきませうか、行き戻りでも大きな道。

遊仙　ヲツトみたまでのたまうな、性をつける前祝ひに、少々なれども。

ト紙入より金を出し、

けんじ天皇。

桂庵　ヤこりや二兩、受納峠の孫息子。

遊仙　見らたつたらば又あとで。

桂庵　そんなら遊仙老。

遊仙　桂庵老隨分氣をつけて。

桂庵　サアござりませ。

ト茶摘唄にて兩人下手へはひる、ト前の道具殘らず引いてとり、淺黄幕を切つて落す。

本舞臺見付け奥深にして遠見宇治川の景なり、上の方丘の心にて柳の釣枝、舞臺前浪板、東西の花

道に青皮をとり付けし浪板せり上る、後ろ一面に浪の張物、手摺りの樣にして、こゝに綺麗なる屋形船、一面に障子立てあり、浪の音一聲にて道具納まる、ト直ぐに獨吟になる

〽よるべなぎさのあま小舟、いづく泊りとしらぬ火の。

トこの唄の内下の方より小舟に宮城阿曾次郎、瀬田伴藏、藪野丹六着附け袴大小にて提重を出し酒盛りしながらよき所に出づる。

伴藏　ヤア彈きをるぞ〳〵。

丹六　あの屋形舟と見えるわえ。

伴藏　聲はよいが、歌が解らぬ。

丹六　いかさま、歌が聞きたうござる。

ト始終酒盛りしながら捨ゼリフよろしく、阿曾次郎棹をさして、

阿曾　アイヤ隨分唱歌は解つてござる、あの琴歌は不知火と申して九州菊地の秘曲にてあの外十八段の浪返しと申す手がござる、西國にさへ彈ずる者稀なるに誰が傳へて、ハテ奥床しい。

伴藏　イヤモ我等などは歌の事は一向なもの、咲いた櫻に駒つなぐ心なしでござる。

丹六　ソレソレ、酒と肴で氣儘より外に存じませぬて。

伴藏　然しあの音聲では定めて顏も美しからう、あの障子を開けて歌はいでなア。
丹六　イヤ〳〵障子を開けて二度びつくり、思ひの外瞽女かなぞではあるまいか。
伴藏　いかさまさう聞くと、盲のやうに聞えまする。
阿曾　イヤ〳〵あの女は瞽女ではござるまい。
兩人　そりや又なぜでござります。
阿曾　さればさ、すべて女の聲は陰聲と申せども盲目はわけて陰なれど、あの聲は陰中に陽を含み居れば、女は女なれど兩眼は明らかと存じられます。
伴藏　いかさま目明きと聞くと、一倍顏が見たうござります。
阿曾　何を仰せらるゝやら、ハヽヽヽ。
兩人　サアサア酒に致さう酒に致さう。
〽かぞへんとすれば秋の風。（ト歌の切れにとまる。）
ヤンヤ〳〵。
ト此内酒盛りになり歌の切れにて屋根船の障子一面開く、内に母操、着流し屋敷なりにて香をきいてゐる、娘深雪振袖帽子にて琴を前に置き、皐月、千代竹、桔梗腰元にて附添ひ居る。

千代　申し御寮人様、船の内もあまりお氣づまりにござりませう。
桔梗　ちつと川を御覽なされい。
深雪　イヤモウ、やつぱりこゝがよいわいなあ。
千代　そのやうにおつしやらずとも、まあ〳〵これへ。
兩人　お出でなされませいなあ。
　ト無理に深雪を前へ連れ來る、此内小舟は酒盛りしてゐる。
皐月　なんとこの景色は、どうでござりますえ。
　トこれにて深雪ふつと阿曾次郎を見て、
深雪　ほんにまあ、よい、けしきぢやわいなう。
　ト風の音の鳴物になり、舟の内の鼻紙一面に散る、この内深雪の帷子卷上がる、皆々びつくりして、小舟の内もこなし。
伴藏　南無三寶、天狗風ぢや。
深雪　アレエ。
　ト舟の中へ逃げてはひる。これにて障子を閉める。

丹六　萬歳樂〳〵。（トいろいろ散る物を押える。）

阿倉　ハテけしからぬ川風、もうしづまりましてござる。

丹六　鼻紙も残らず散り、すんでの事羽織をとられようとした。（ト千代竹上を見て、）

伴藏　アレ〳〵、何やら空にちらちら飛んでをりまする。

ト皆々空を見て、

丹六　イヤ見事々々。

阿倉　これがかのかまいたちと申すもので、風を巻き上げて風なぎますれば下りるものでござる。

トやはり静な風の音にて最前の帽子上よりちら〳〵舞ひ下る、腰元両人捨ゼリフにて手をたゝきいろ〳〵ある。此内阿倉次郎片手にて棹をさし片手に扇を持ちそろそろと舟を出す、此内[illegible]障子を開け窺つてゐる、此時帽子は川の中へ落ちようとする。阿倉次郎程よく扇にて受け止める。

伴藏
丹六　イヤ見事々々。

ト褒める、此時小舟は屋形舟の際へ行きとまる。

ヲツトあたるぞ〳〵。（ト阿倉次郎帽子を見て、）

阿倉　こりや帽子と見えます。

腰元　ア、申し。

ト腰元三人を阿曾次郎見て。

阿曾　これはこなた衆のでござるか。

皐月　ハイ私の所の、御寮人樣のでござります。

阿曾　それは幸ひ、納めておかつしやれ。

ト扇に帕子をのせて出す。

千代　これはまあようお取りなされて下さりました、今の樣子では、なうさつきさん。

皐月　さいなう、定めてお喜びなされますわいの。

桔梗　ほんによう取り下さりました。

ト帕子を取つて障子の內へはひる。

丹六　とても事にこの舟を、もそつとそつちの方へやつてはどうでござる。

伴藏　それ〳〵あの舟の前へむけたらようござらう。

阿曾　ア、イヤ〳〵、これではよその舟のお邪魔になれば、此舟を遠ざけるがようござらう。

ト棹をさし戾さうとする所へ、舟の障子を引き拔く。

腰元　ア丶申し申し、ちよつとお待ち下さりませ。
伴藏　これ〳〵、舟を待てといはれますする。
丹六　さア〳〵おひかへなされぬか、ドレ〳〵。（ト丹六入りかはつて。）御用と仰せらるゝは。
千代　イヤ此方の主人の申されますには、唯今帽子をお取り下されしは御親切の段、一寸お目にかゝりまして、お禮申したう存じますれば、
桔梗　さもしきさゝえもお慰みかたがた、何卒此方の舟へ御出でなされまするやう、どうぞお願ひ申しまする。（ト伴藏丹六こなしあつて。）
阿曾　これは〳〵御挨拶忝うござりますれど、女中ばかりのお舟に同席致すは不躾にござれば、この儀は御容赦下されい。
伴藏　これさ先生、そりや何事でござる、願つてもない幸ひなれば。
丹六　まあ〳〵あれへござるがよろしうござる。
阿曾　イヤ、男女七歳にして席を同じうせずと申す事もござれば。
伴藏　ハテ左様ではござれど、今日一日は學者をうつちやつて。

丹六　ぐつとくだけるがようござらう。
阿曾　これは又何事を仰せらるゝ、イヤなに女中方宜しくお斷り申して下されい。
桔梗　左樣ならあなた方をお願ひ申して、口上を申しておもらひ申しませう。
千代　それがよいわいの。サア申しあなた方、どうぞ一寸御出でなされまして。
皐月　唯今の通りおつしやつて下さりませ。
伴藏
丹六　サア私共は。

ト阿曾次郎へ氣兼ねのこなし。

腰元
三人　イエイエ、マア〳〵一寸でござります。

ト無理に引つぱるこなし。

伴藏
丹六　然らば我々名代に。
腰元　サア〳〵お出でなされませ。

ト無理に引ぱり兩人上へ上る。

阿曾　左樣なら拙者は川下へ舟をさげて。

ト棹をさしにかゝる、舟操前へ出て、

操　ア、モシ〳〵マア〳〵お待ちなされませ、先程より女子共に承りましたれど申さば逆鱗の場所、ひたすらこれへお出でなされますやう。

阿會　イヤその儀はそれなる御兩所にお聞き下され。

ト又舟をさげようとするを伴藏丹六あわてゝとめ、

伴藏　どつこい、我々二人を人質におき、舟を下げようとはあまりでござる。

丹六　折角の仰せなれば、マア〳〵これへお出でなされい。

ト無理に手を取る。

阿會　イヤ〳〵拙者は。

皆々　ハテさて、マアお出なさるがようござる。

トかすめたる遊山舟の鳴物になり、皆々無理に阿會次郎を連れて舟の內へはひる。

腰元　マアマアこれへお出でなされませ。

ト上の方へすゝめる、此內深雪こなしあつて。

阿會　イヤ〳〵矢張りこのまゝ。

操　それではかへつて惡うござります、マア〳〵ひらに。

阿曾　さやうなら御免。

ト三人よろしく上へならぶ、操、深雪、腰元下の方へならぶ。

操　イヤモウお構ひ下さるな、たつてのお招き故推參仕りましたが、誠に存じがけないお欵待に預り忝き仕合せにござりまする。

操　ほんに先程は娘が帽子を、お取り下されまして有難うござりまする。それ、お禮を。

深雪　ありがたう。

ト恥かしきこなし。

阿曾　これは〳〵御挨拶いたみいりまする。

操　持ち合せましたるさゝえもあらしてお呼立て申し、何の風情もござりませねど、まづお氣晴しに一つお上りなされて下さりませ。

ト杯を阿曾次郎にさす。

阿曾　これはお杯下されまするでござりませう。

ト杯取り上げ阿曾次郎呑んで、

此のお杯は丹六殿へ。

丹六　これは忝い。

伴藏　その次は拙者に廻さつしやれ。

丹六　ハテせはしない。

ト丹六飮んで、此内深雪阿曾次郎にこなしあつて千代竹に囁く、千代竹傍の扇を取つて深雪へ渡す。深雪扇へ歌を書き千代竹に渡す、千代竹阿曾次郎の傍へそつとおく。

阿曾　頂戴仕らう。お上りなされいでも、まづこれは御返杯。

ト杯を取つて飮み操深雪へこなしあつて伴藏にさす、伴藏飮んで。

伴藏　憚りながら。

ト腰元へさす、各々捨ゼリフによろしく、此内阿曾次郎扇を取つて使つてゐる。

丹六　なんと小舟と逢ひ、氣が晴々と致したではござらぬか。

阿曾　成程諸國に名所もござれど、山城の宇治川はとりわけ名所も多く、川の景色は繪に描きましたやうな風情、なんと御兩所絕景ではござらぬか。

ト云ひながらふと扇を見てこなしあつて、

梅が香をこむる霞の絶間より、顕れて匂ふ鶯の聲。こりや拙者の扇。手蹟の見事さと云ひ歌のやさしさ、こりやいつの間に。

皐月　申し、そりや御牢人様でござりますわいなあ。

阿曾　さやうならばこれが。

操　ハイ、これはまあ娘とした事が、あなたの御扇子に。大方取違へましてがなござりませう。おゆるしなされて下さりませ。

阿曾　これは〳〵御挨拶、いたみいりまする。

伴藏 丹六　どうぞならう事なら我々にも。

阿曾　イヤそれは格別、先程あれにて承りました爪音こそ、あれは筑紫の松浦検校が手をつけましたる不知火と申す調べにて、かゝる秘曲は都といへど知る人稀なるに、何國のお方でござりまするか、卒爾ながら承りたうござります。

操　これはお尋ねにあづかりお恥かしう存じます、申すに名もない者ども、お明し申すは又折もござりませう、あなたこそよしあるお方と見受けました、何卒御名をお聞かせ下されませうなら有難う存じます。

阿倍　ア、イヤ私儀は西國方の浪人、おこがましう名乘りますやうな者でもござりませぬが、とかく律の調べを好みまする、それにつけて菊地家には菊の雫と申す秘曲がござるよし、近頃なれなれしき申しやうながら、此の曲をお聞かせ下されませうならば、喜ばしう存じまする。

操　これはまあくわしう御存じ、その歌は娘がよう覺えてをりまする、最前のお禮に彈かせてお聞かせ申すでござりませう、なう娘、

ト深雪、阿倍次郎へ見惚れうつとりして居る。

コレ娘、コレ、これいなう。

ト深雪びつくりして、

深雪　アイ。

操　これあなたの御所望ぢや程に、菊の雫をお聞かせ申しやいなう。

深雪　イヱ私しや。

操　サアお聞かせ申しやいなう。

深雪　お恥かしうござりますわいなあ。

トこれにて操阿倍次郎と顔見合せ、

操　ホヽヽヽ。

阿曾　ハヽヽヽヽ。

ト此内深雪扇を出して皐月に囁く。

皐月　申しあなた様にはこの扇へ、何なりともお書きなされて下さりませとお願ひでござります。

阿曾　イヤモウ、拙者は筆と申しては不風雅でござれば、この儀はひらに御免下されい。

作藏　ハヽヽヽヽ、我らが申すやうな儀を仰せらるゝ。

丹六　見事な御手蹟で、ツイ何なりと。

千代　一筆是非にお願ひ申しまするゝ。

阿曾　これは一しほ困りいつた事。（ト扇を取つて開き、）
ムウこの扇面には一輪の蕣。

ト筆を取る、操こなしあつて、

操　ほんにまあさつきにからお話ばかり致して、あなた方には嘸御退屈にござりませう、ソレ御酒をあげてたも。

桔梗　ハイ〳〵サアお一つあがりませ。

伴藏　左様なら一つ下さりようか。

ト又酒を飲む、此内阿曾次郎件の扇にさらさらと書き、

阿曾　これは御扇子をよごしました。

ト深雪一寸見て操へ渡す。

操　露のひぬ間の蕣に照す日かげのつれなさに、あはれ一ト村雨のはら〳〵とふれかし。ほんにまあ情のこもりしこの御作意。

阿曾　何卒唯今申した菊の琹を。

伴藏　イヤそれよりは御作意の蕣の歌に手をつけたらば。

丹六　いかさま、こりや面白うござらう。

阿曾　幸ひ菊の琹の調子にて。

伴藏　いづれ一節お頼み申す。

皆々　サア所望ぢや、所望ぢや。

ト深雪恥かしきこなしにて、琴にかゝる事よろしく。

〽露のひぬ間の蕣に、照らす日影のつれなさに、あはれ一村雨の、はら〳〵

と降れかし。

ト此内皆々酒盛りして居る、東の揚幕より以前の遊仙うそ〳〵として出て來る、下手より桂庵出て行き合ひ、東の假花道にて、

遊仙　ヲヽ、桂庵か。

桂庵　遊仙老。

遊仙　とかく娘に逢はぬわいの。

桂庵　日が暮れかゝつたらなほの事。

遊仙　どうぞ逢ひたいものぢやが。

桂庵　氣をつけてござりませ。

ト行き違ひ桂庵は舞臺の方遊仙は東の揚幕へはひる、唄切れる。

皆々　やんや〳〵。

トこれにて入相の鐘鳴る。

阿曾　アリヤもふ入相、日が暮れまして女中と同船は人の思わく。

作藏　ハテこれからが螢の最中。

腰元　まそつとこれにおいでなされませ。

阿曾　イヤ御縁もござらば、又御意得まするでござりまする。

ト春阿曾次郎捨ゼリフよろしく深雪桔梗に囁く、桔梗心得て硯と紙とを持ち伴藏に聞く。

伴藏　名か、ムヽよし〳〵。

ト此内丹六は先へ小舟へ乘り伴藏を見て、

丹六　伴藏殿、何をなさるゝ。

伴藏　拙者は唯今戀歌を書いて居ります。

ト書付けて渡す、桔梗深雪へ渡す。

阿曾　サア〳〵伴藏殿。

伴藏　アヽ大分食べ醉つた。

トひよろ〳〵とする。

阿曾　これはしたり、まづ〳〵。

ト無理に小舟へおろす。

操　なんの風情もござりませぬにおひまを取らしまして、お氣の毒に存じまする。

阿曾　これは〳〵御挨拶。

操　くるしからずば今しばらく、なう娘。

深雪　アイ。（ト恥かしきこなし。）

阿曾　アイヤお暇申しまする。

深雪　そんならどうでも。

阿曾　御縁もござらば。

腰元　アヽ申し。

阿曾　おさらばでござります。

ト以前の鳴物にて阿曾次郎棹をさし丹六倶藏に酔ひたるこなし、この舟花道へはひる、舞臺皆々後見送りうつとりとしてゐる深雪へ腰元附人。

腰元　御寮人様。

ト深雪矢張りうつとりしてゐる。

申し、もうし、もシ。

操　これ娘。

ト操深雪の春を扇にて一寸打つ、これにて深雪びつくりして持ちたる扇を落して心付き取り上げ、顔にあてるを、木の頭、操思入。腰元本意なきこなし、双方よろしく。

ひやうし　幕

二幕目　明石の浦舟の場

役名　宮城阿曾次郎、深雪、腰元三人、關助。

本舞臺見附け奥深に浪幕、舞臺前一面に浪幕、上の方にひがき元船、下手に百石程の船、両方より傍へよせて両方共苫かけてあり、日覆より月をろし、すべて明石の浦風待の體、浪の音、幕あく。直ぐに床の淨瑠璃。

〽晴れて行く播摩潟、一夜明石の浦がゝり苫をならべし舟もやひ、頃さへ秋の月滿ちてこゝぞ名に負ふ磯貝の、娘深雪は過しより積る思ひのかこち顔、何がな心なぐさめの腰元共がよりこぞり。

ト浄瑠璃の内幕を上げると内に深雪短冊をかざし歌書など讀んで居る、腰元三人侍附きて居て。

腰一　アレ〳〵見やしやんせ、向うの方が淡路島、こちらに見ゆるが舞子の濱、夜でさへこの景色ほんに晝とつくりと眺めたら、よい慰みでござんせう。

腰二　これにつけても辛氣なは、御寮人樣のお顔もち。

腰三　いろ〳〵とおなぐさめ申しても、お心が浮かぬので困つた事ではござんせぬか。

侍　イヤモそれ故に身共が心配、此度御主人實右衞門樣御歸國のところ大阪よりの御病氣にて、陸路をお下り、母御樣にも引き續いてお立ち、荷物も殘らず積み入れ、深雪樣をあづかり下る船中にて、もしお煩ひでも出ては我々が不調法、日頃お氣に入りのお手前達隨分お諫め申しておくりやれ。

腰一　申しお寮人樣、あの月でも御覽じて、お心をうき〳〵とあそばしませ。

〽すゝむるつき〳〵うかまぬ深雪。

深雪　我が心すぎにし方をたちかえり、ふるき都ぞ今は戀しき、この歌は源氏の君須磨の浦にさすらひ給ひて、都を思ひやり給ひし歌、ほんに思へばあぢきないは我が身の上、なんぼそなた衆がいさめてたもつても、なんの心が勇まうぞえ。

〽打ちしめりたる苫の露消ゆるばかりの物思ひ、知つたる中の腰元ども、

腰一　ヲヽお道理でござります、過し宇治の螢狩のゑにしの帽子のお世話。

腰二　船へお迎ひ申したる御浪人のその立派さ。

深雪　それ故ふつと思ひ染め、こがれくらすその内に。

腰一　桂庵が妁沙汰をこちらも聞いて喜びしが。

腰二　思ひがけない間違ひで。

深雪　どうぞ今一度逢ひたいと思うて居る間にこの迎ひ、國へ行つたその時は一生お目にかゝらぬかと思ひまはせばまはすほど、心の内の本意なさ戀しさ、推量してたもいなう。

〽推量してとばかりにて、泣く音は浦の小夜千鳥、浪間たゞよふ風情なり。

侍　ヤアこれはしたり、皆よつてお氣を慰めようとはせずに、かへつて何か申し出し泣じめ〳〵、コレどうぞおいさめ申して呉れ。

腰一　サアそれが私の思ひ付き、その時にお彈きなされた菊の栞を、ここでさらふもせめてものお心ゆかし。

皆々　そりやよい思ひ付きぢやわいなあ。

侍　なるほどこれはよいお氣慰めであらう、サア〳〵こゝで、サ、早う。
〽とすゝめられさすが否とも岩ばしの、まだ解けやらぬ谷間の深雪、心づくしの爪琴を、月に向うてかきならす。
ト阿曾次郎深雪の前へ琴を出す。
〽紋によるてうつなぎそふ、こなたの小舟は東へとさしのぼる月眺めんと、苫を拂うて阿曾次郎空に見入りて獨り言。
阿曾　ア、誠や同じ月とは云ひながら所によつてこれを賞す、信濃に更科近江には石山、こゝも名に負ふ明石の浦、幸ひの舟がかり思はぬうつさん、ハテ心涼しき風情ぢやなあ、これにつけても思ひ出すは故郷の空、兄駒澤主膳殿には不慮の御最期、心に望まぬ家督の御役も兄の横死の實否を糺し、後室のお頼み江戸表へ立ち歸り若殿治部之助樣をお迎へ申し、これを功に正三郎が跡目の願ひ、佞人共を退けんがこの身の望み。これはしたり沖中とは云へど他聞もあり。
ト あたりへこなし。
ハテ、ひとしほの眺めぢやなあ。
〽心ゆるまぬ弓張の月の餘念もなき目の座頭、聲をしるべにさぐり出で。

ト苦市座頭のこしらへにて出て來り、

苦市　申し阿曾次郎樣、それにござりまするか。

阿曾　ヲ、苦市殿、あぶないぞや。

苦市　イヱ〳〵私の名の苦市をしつかりと捕へをりまする。

ト さぐりよつて、

誠にあぶないと云へば私の身の上、此度旦那衆のお蔭で都へ上り參る道々にて胡麻の蠅につけられまして、ア、かう申す内も震えが出ますやうなあぶない事、所をあなたのお蔭を持ちましてやうやう遁れ、このやうに室から一所に便船して下さるお心ざし、何とお禮を申しませうやら。

阿曾　何の〳〵、弱きを救ふは武士の習ひ、禮におよぶ事ではない。

苦市　イヱ〳〵それでも命の親。

阿曾　ハテようござるわいの。

苦市　有がたうござります。

〽座頭の禮の子期伯牙、それにはあらねど美妙の爪音、思はずハッと心耳を

すまし。

ト琴の音に氣をつけることなし。

阿曾　ア丶隣りの舟にも、お仲間が乘つてゐらるゝやら、あの爪音。

苫市　ほんに、こりや妙手でござりまする。

ト阿曾次郎こなしあつて、

阿曾　あの爪音は菊の栞、菊池のお家より外に稀なるあの祕曲。

苫市　イエ〳〵筑紫では專らはやりまして、我々風情の者迄も彈き覺えた菊の栞、お慰みに一寸お聞かせ申しませうか。

阿曾　それは幸ひ、貴公のお手許承はらうか。

苫市　せめてお伽を申すがお禮、さらば一曲調べませうか。

〽どれ一曲と三味線に合す調子も浪返し〽舟をへだての連れ彈きと。

ト苫市三味線にかゝる。

〽菊の栞の端手唱歌。

〽こなたの船には娘の深雪、それと聞くより不審顏。

ト この淨瑠璃の内苫市琴に合はせて三味線を彈く、深雪こなし。

深雪 アレ隣りの三味線もやつぱり菊の栞、思ひもよらぬつれ彈きは互ひに想ふ想夫戀、これにつけても思ひ出す。

ト扇を出してこなし。

〽戀しゆかしにその人のもしやと思ふ娘氣の、見やる目先に思はずふつと。

ト深雪こなしあつて阿曾次郎と顏見合はせ、

深雪 や、あなたは。

ト行かうとするを皆々留めて、

皆々 これはしたり、おあぶなうござります。

深雪 ほんに思ひがけないと云はうか、夢ではないかいなあ。

皆々 これはまたけしからぬ、お氣のふれた、マア〳〵こちらへござりませ。

深雪 フム、やつぱりあなたぢやわいなう。

腰一 これはしたり、夜露があたるとお身の毒。

皆々 サアこちらへござりませ。

〽サア〳〵こちへと皆々が、無理に連れ立ち船の内〽後に心はひくばちの緣の糸や、三味線の、どうなる事と是非もなく、なんと唱歌やかたみの扇、目あては小舟ばつたりと、落ちしはなんぞと取るひまに〽打ちつれてこそ入りにけり。

ト此内深雪阿曾次郎の方へ扇を投る、阿曾次郎取り上る、皆々深雪を苫の蔭へ連れてはひる、阿曾次郎いろいろとすかし見て、

阿曾　ハヽア、大船より女中方が取り落したものと見える。

〽露けき繪面蕣は。

コリヤこれいつぞや、宇治で書いたる蕣の畫讃。

苫市　エ。

阿曾　イヤ潮あらしには船を出すであらう。こなたは先へ休まつしやれ。

苫市　左様ならお先へふせりますでござりませう、あなたももうお休みなされませ、アヽ明けても暮れても目が塞いでゐながら寢るといふもおかしなもの、左様なら横になりますでござりませう。

〽苫市はさぐりもつてぞ入りにける。

ト苫市苫の内へはひる。

阿倉　ハテどうしてこの扇が、思はずこゝで我手に入りしは、合點のゆかぬ。

〽思案に月も雲がくれ、心もそらに娘の深雪常には細き娘氣も、思ひ詰めては一筋に忍び出でたる船やぐら、すかし眺めて。

ト深雪出て來り、

深雪　申し阿倉次郎樣。

阿倉　身が名をよばしこなた樣は。

深雪　いつぞや宇治でお目にかゝりし。

阿倉　ム、、すりやその時に思はずも。

深雪　帽子をおめぐみ下されました。

阿倉　その息女がどうしてここへ。

深雪　これには段々深い樣子の、マア何よりはあなたはどうして。

〽飛び立つ心〽あぶなやと手をさしのべて〽ひつたりといだき月影〽苫船に

〽折しも晴るゝ〽むら雲〽空にも粋や〽通すらん。

ト阿曾次郎手をとりおろす。

阿曾　テモ思ひがけない、していづれへお越しなるぞ。

深雪　阿曾次郎様、あなたはお胴慾でござりまするなあ。

阿曾　これはしたり、この阿曾次郎お恨み受ける覚えはござらぬ。

深雪　サアそれがあなたの御胴慾、いつぞや宇治でお目にかゝり恥かしい事ながら、思ひ染めても母さんの手前、本意ないその場のお別れに、聞いたあなたの御名前。

〽家へ帰れば父さんが、殿御持たすといはしやんす。

一旦見染めたあなたをのけ外に殿御は持つまいと、思うて暮すその内に桂庵様といふお人がくわしいあなたのお話に、父さんは御存じなけれど私が嬉しさ、月待ちの折りからあなたのお出と聞き、待ちこがれて居りましたに、あなたと偽り似ても似つかぬお人のお出で、私のびつくり父様のお腹立ち、その日暮方誠のあなたのお出なれど父様の不興のお言葉、其時お別れ申してより、どうぞまア一度お目にかゝつてこのわけをと、思ふ心の届いてや、おなつかしうござります。

〽すがりなげくぞ道理なり。

阿曾　ハテ扨てそれは思ひもよらぬ事でござつた、いつぞや宇治でお別れ申してより桂庵樣をもつて度々のお招き、然し邊鄙の儀は少しも存ぜず、所にちと仔細あつて他國仕る故何かの御禮、又はお暇乞に參りしが何か不興の御挨拶、合點ゆかぬが心せく儘そのまゝ出立致せしが磯貝氏の御息女と、とくにも存じてをつたれば又致方もあるべきに、それは格別御兩親へも何かの御禮。

深雪　父樣も母樣もあの船にはをりませぬ。

阿曾　して女儀ばかり、たゞお獨りにてこの旅路は。

深雪　サア父樣も母樣も先へお下り遊ばして私を後に殘しおきしが、急に下せとのお便り故是非なく京地を立ちましたが、國へ歸ると父樣が殿御持たすとおつしやるけれど、一旦思ひ染めたあなたをのけ外に殿御をもつ心はござりませぬ、幸ひこゝでお目にかゝりましたは神佛の御引き合せ、私と一所にあの船へお乘りなされて、國へ歸つて父樣にお逢ひなされて下さりませ。

阿曾　サアそのお心は嬉しけれど娶るには必ず媒介あり、殊に某はこの度鎌倉のお使、首尾よくしおほせなば、表むきより媒介をもつて申し入れん、それ迄は隨分御無事で、サア早う船へお歸りなされませ。

深雪　そんならあなたと一所に、お連れなされて下さりませ。
阿曾　ハテ、それでは親御の手前。
深雪　そんなら私の願ひは叶ひませぬかえ。
阿曾　サア唯今からと申すわけにも。
深雪　さうぢや、南無阿彌陀佛。
思ひきつたる覺悟の體、
阿曾　これはしたり、早まるまい。
深雪　それぢやといつて。
トふりきらうとする。
阿曾　これは又短慮千萬。今入水なす時は兩親へ不孝になるがや。
深雪　そんなら連れて退いて下さりますか。
阿曾　サアそれは。
深雪　ならぬはやつぱり。
阿曾　ぢやと申して。

深雪　イヱ〳〵私しや死にたい、死にたうござります。
阿曾　すりや某が得心なくばどうあつても。
深雪　なんの生きてをりませう、どうぞ願ひを叶へて下さりませ。

トすがりつく、阿曾次郎思入。

阿曾　是非に及ばぬ、叶へて進ぜう。
深雪　そんならあなたと御一所に。
阿曾　義を立つる時には磯貝氏の御愛子を見殺すに似たり、これも一つは不仁のいたり。
深雪　ヱヽ嬉しうござります。
阿曾　さはさりながら御兩親の御歎きなきやう、某と立ち退きしと一紙を殘して。
深雪　そんなら私は委しいわけを。
阿曾　隨分人目にたゝぬやう。
深雪　かならず待つて下さりませ。
阿曾　一旦の言葉は金鐵、サア早う。
深雪　アイ。

〽あいと返事も愛嬌の露重げなる苫船へ、いそ〳〵立つて入りにけり。

ト苫船の蔭へはひる。

〽後見すまして阿曾次郎、溜息ほつと月隠れ。

ト此時月を引き上げる。

阿曾　思ひがけない深雪殿の心ざし、この場で否むその時はわれ故命すてたりと、風聞あつては言譯なし、ひとまづこの場を連れのいて九州長へ飛脚をもつて、さうぢやさうぢや。

〽思案は胸に碇綱、露の命の風ふせぐ、苫押し分けて入りにけり。

ト阿曾次郎はひる。

〽時分はよしと惡者共苫わきより窺ひ出で、相圖の呼子を吹き立つれば小舟早めて押し來る、互に何か囁き合ひ元の所へ忍び入る、折りから向ふに關助が逃げ來る惡者のがさじと、息を切つて馳せ來り。

ト關助と惡者一卷を奪ひ合ひながら出て來り一寸入れかはつて、

關助　大切な預りの一卷、怪我せぬ内に渡してしまへ。

惡者　折角手に入るこの品を、うぬらに取られてつまるものか。

關助　何をうぬが。

　ト又一寸立廻つてきつと見得。此時阿曾次郎苫船より出て來り關助と顏見合せ、

阿曾　ヲヽ、關助か。ヤ旦那樣か、お尋ね申しましたわいな。

　ト此時惡者窺ひ出て、

二人　阿曾次郎觀念。

〽打つてかゝるを身をかはし、裾を拂へばこなたも曲者、さうはさせじと双方より岩をも碎けと打ち込む刄物を、しつかと留めて動かせず。

〽深雪は何かと調へて、またも櫓にのび上り。

　ト深雪出て、

深雪　阿曾次郎樣。

阿曾　深雪殿か。

深雪　よう待つて居て下さりました。

　トこれより又立廻りになる。

へ乗り移らんとする所へ。

大勢　風が直つた、船を出すぞ〳〵。

ト方々にて云ふ、立廻りの内船頭一人水をくゞつて逃げる、阿曾次郎悪者を後へ打ち込む、此時大船は帆を十分に揚げ此船をはすに段々と奥へ引く、深雪氣をもむこなし、又悪者阿曾次郎にかゝるを見事に切り込む、途端阿曾次郎尻餅をつく、此時苦市出てかぢりつくをおさへる、小べりへ手をかける、木の頭、刀を拔き海を見こむ。

へ後白浪とぞ。

ト三重にて双方よろしく。

幕

大詰

島田宿屋の場
大井川の場

役名　駒澤次郎左衛門實は宮城阿曾次郎、岩代瀧太、朝顏實は深雪、戎屋德右衛門、奴關助、奴三平、坂田勇藏、出來島團平、蛇遣ひ蛇皮六、番頭善助、女郎お島、同お若、同おせん等。

本舞臺三間の間常足、本陣表がゝり、講中札色々掛けあり、見附け赤鰹駄荷の書割り、上手障子屋體、下手板塀、こゝに御泊宿戎屋と記しこれより下手本陣門の書割り、この間出入りあり、よき所に大内家中駒澤次郎左衛門、岩代瀧太と記せし立札、こゝに戎屋の抱へ女郎おせん、お若、お島の三人いづれも女郎のなり、奴關助外に中間三人、雲助四人とせり合うてゐる、驛路入り馬士唄にて幕あく。

雲一　コレ〳〵親方、興津からこゝまでの道、一本の酒手はお定まり。

電二　お大名であらうが商人であらうが、馬に乘つたら酒手はとらア。

四人　酒手を下せえ〳〵。

關助　ハテ、わいらが興津から酒手なしで乘せようと云つた故、安いものだと銘々乘つたが。

可內　ヲ、この可內も土手平も、乘つたゞけは錢を拂つた。

中間　云ひ分はねえはずを、つけ上りのした馬士ども。

中三　酒手よこせと惡口雜言、思へば〳〵慮外な奴の。

雲二　何も慮外云つた覺えはねえ、たかゞ酒手をとらうやるめえとのいさくさだ。

四　ハテ四も五もいらねえ、酒手を貰ふかこの首をやるか、親方片をつけてくんねえな。

奴皆　云はせておけば法外な奴。（トきつとなるを關助なだめる、）

雲一　何だ切る氣か、道中の雲助は豆腐や西瓜のやうに、造作なく切れねえぞ、なんだ〳〵。

二　びく〳〵するな、駄折助め、二本差しが恐くつては、田樂は食はれねえぞ。

皆々　サア切つて貰へ〳〵。

關助　事を無難に濟まさうと、云はしておけばさま〴〵の出放題、モウ料簡がならないわい。

ト双方又立ちかゝる、馬士唄になり戎屋徳右衛門、やつし羽織のこしらへにて下手より出て來りこの中へはひり。

徳右　これはしたり、マア〳〵お靜まりなされませ、私が惡うは計ひませぬ、お腹が立たうがマアマア御料簡なされませ。

關助　さう云ふ貴樣は誰ぢや。

徳右　私は本陣戎屋徳右衛門でござりまする。サア〳〵あなた方は御尤もでござりますが、相手が

悪うございます、マア／＼おしづまり下さりませ、ヤイ雲助ども。

四人　ヘイ。（ト徳右衛門を見てしよげるこなし、）

徳右　わいらは何をやかましく云ふのだ、こつちの大事なお客様に過言をはくと、街道筋を封じるぞよ。

四人　ヘエ。（ト皆々頭をかく、）

奴皆　ぢやによつて。（トおこつくを徳右衛門とめて、）

徳右　サア／＼ようござります、道中で弱身を見せるとお国の名折れと、思召す所は御尤もでござりまする。

雲一　コレ／＼親方、こちとらの譯も聞いて貰はう、客を馬に乗せて酒手を貰ふに當りまへ、その酒手をかれこれ云はれちやア。

三　さうだ／＼、この府中の宿きつて、東海道を股にかける、おいら達の名折れ。

徳右　サア／＼よいわ、おぬし達の云ふ事も聞えてある。

奴皆　そんなら亭主、こちとらが誤りか。

雲皆　おいら達が誤りでござんすか。

徳右　サア〳〵、双方ともに解つてございます。

鬮助　コリヤ亭主、上げたり下げたり。

奴皆　どう挨拶をするのだやい。

徳右　たかゞ貰ふのぢや。

皆々　ヤアヽ。(ト有り合ふ箒をとつて、)

徳右　おはま、錢一貫取つておじや。

下女　ハイ〳〵。(ト錢箱の錢を持ち來り徳右衛門に渡す。)

徳右　そりや持つて行け。(ト錢を投げ出す、皆々こなし。)あなた方がやらぬとおつしやるも意地、又こいつらが取られねばならぬと云ふも理窟、中をとつて私が挨拶の一貫文、これをとつてすまして貰はう。

雲一　成程、親方のさばきは尤もだ、一貫では足らねども徳右衛門樣の挨拶、これですましてやれ。

三人　ハイ親方、有難うございます。(ト皆々捨ゼリフにてわや〳〵云うて下座へはひる。)

鬮助　コリヤ御亭主、アノ鳥目をその許にやらしては。

徳右　ハテようございまする、あいつらを相手にするはかつたいに棒打ち、うつちやつて奥で御休息

なされませ。
お若　ほんにどうなる事と思つたに、旦那さんのおさばきで。
せん　早速らちがあいてお目出たう存じます。
お島　誰ぢやと思ふ、戎屋の徳右衛門は男でごんす。
徳右　時にあなた方は御休息なされませ。
關助　いかにもさう致さう。そんなら御亭主。
徳右　ドレ、御案内致しませう。

ト馬士唄になり、徳右衛門先に關助、奴三人ついて奥へはひる、女形殘り。

お若　なんと皆さん、どうで今夜はやかましからうぞえ。
せん　サアそのやかましいで思ひ出した。アノこちのやかまし屋の喜助どんが、アノごぜの朝顔をつけつ廻しつ。
お島　それ〳〵この間も道中で捕へて、手を合はせての無理くどき、あんな男にさゝうなら馬にはじかれたがはるかまし。
お若　これはしたり、又そのやうなかげ口、喜助どんが聞かんしたら大抵の事ぢやあるまいぞえ。

お島　それでも私等が聞いて居るともしらず、たつた一度それが厭なら口々なりと、袂をとらへて吸付いたり、あきれて物が云はれぬわえ、ほんに厚皮と云はうか、じんばり男と云はうか。

トこの内宿引喜助番頭のなりにて窺ひ居る。

喜助　そりや誰が。

お島　アノ宿引の喜助づらが。（ト顔を見てびつくりして、）

三人　ヤアお前は喜助どん。

喜助　なんだ、俺が尻引出すとあきもせぬ燒もち、朝顔に惚れたが何ぢや、あいつに男がなけりや俺も女房はない、すりや互ひに妻なし夫なし、連立つて乞食してもわいらに三文も無心云つた事はない、あまりがや／＼とかげ口きゝアがるな、あたいま／＼しい、ソレお客が御膳まへだ、臺所へ行つて手傳へ。

三人　アイ。

喜助　行けやい、ヱヽうせうと云ふに。

三人　ヲヽこは。（ト三人奥へはひる。）

喜助　ヱヽいま／＼しい、帳なとつけておかう。

ト喜助帳合にかゝる、四ツ竹節錫杖の音になり、花道より蛇皮六、蛇を遣ひながら出て來り、

蛇皮　御當地にては長虫、常陸の國では山うなぎ、これわいさで、どつこいしよ御めんよう、あそこの門へ立つと蜂拂ふやうにぬかしをる、いま／＼しい稼業だ。（トこのやうな事云ひながら本舞臺へ來る。）ヤアさて御當地にては長虫、常陸の國では山うなぎ、まづ最初お目にかけまするが、

喜助　通れ／＼、蛇をつけてゐて手がふさがつてゐる。

蛇皮　ハテどこでも悪い受けぢや、これぢやア蛇遣ひも商賣がへとでかけざアなるめえ。

ト行からとするを喜助見て、

喜助　コリヤ／＼、手前は蛇皮六ぢやアねえか。

蛇皮　ヲヽ、喜助さん、見知り越しに通れとは胴慾な人だぞ。

喜助　われと知らぬ故通れと云つたのだ。料簡さつせい／＼。

蛇皮　時にこなさん、何やら相談に頼みたいと云はしつたが。

喜助　われを見掛けて頼むと云つたは、今宵の泊り客岩代瀧太様のお頼み。（ト兩人あたりを見て小聲になつて、）相役の剛澤次郎左衛門といふ人を、しくぢらさねば御分地の大家老が大望の妨げ、又瀧太様の出世の邪魔、そこでその次郎左衛門が預つてゐらるゝお納戸金五百兩は、出來ぬ相談

平といふ人が盗み取つて、俺に渡しておかしやつたが持ちつけぬ大枚の金、隠し所に困つたてや。

蛇皮　さうしてお前五百兩の大金はどこへ埋めた。

喜助　通例の所は古めかしいと人の氣のつかねえやうに、奥座敷の釣花活へ隠して、上へ花まで生けておいたから氣遣ひなし。

蛇皮　うまい〳〵、さうしてその分口でも來るかえ。

喜助　そりや知れた事、割附しなくてどうするものか。(ト小判一兩出して蛇皮六へ渡す。)

蛇皮　忝い、すぐさまこつちへ受内帳。コリヤアノ五百兩の分口がたつた一兩かえ。

喜助　ハテマアきゝやれ、勘定高い次郎左衛門様晩々金のあらため、是非後に金あらための時、五百兩不足と云ひたてるわ、その時におれを盗人にしてまづ國へ連れて行くわ、その時道から逃がしてくれるわ、そこで五十兩貰うた金を茄子割り、なんとちつとの間盗人になつてくれまいか。

蛇皮　そりやはや盗人になるまいものでもねえが、五百兩の盗人になつて五十兩山割りとは、チト壺算用ぢやあるめえか。

喜助　そんなら俺が思案が惡いか。

蛇皮　サア、マアよく思つてもみなせえ、その次郎左衞門といふ奴が短氣者で、用金の盜人詮議にも及ばぬと、討ちはなされたら廿五兩で命の釣りかへ、こいつ中々あぶない仕事だ。

喜助　そんならどうしたものだしらん。

蛇皮　なんでも殺したら殺しどく、後から尻のこぬ奴が有りさうなものだが。

喜助　いかさまなア。

蛇皮　ヲヽ、ソレ、この間からこゝへも來る朝顏といふ盲目女、こゝらあたりに差構ひのない宿なし、あいつはどうだらうナ。

喜助　コレサ、粗相云ふな、俺が蝶よ花よと惚れこんでゐるアノ女。

蛇皮　ハテさて、何をするにも慾づく、あいつを金の泥棒にしてばらして仕舞へばよいぢやアねえか。

喜助　ぢやというてアノ朝顏の器量を見い、この島田宿廣しといへども、あゝいふ面は二町目の花魁にもない器量よし。

蛇皮　さうして お前の戀は叶つたかな。

喜助　イヤモウ、いろ〳〵と口説けども得心せぬわ。
蛇皮　ソレ見なせえ、あいつは云ひかはした男がある故、所詮お前の云ふ事は聞き入れぬ、所で厄病の神で敵討。
喜助　ヲヽ出來た、委細は後に。
蛇皮　首尾よくいつたら。
喜助　五十兩は山割り。
蛇皮　喜助さん。
喜助　蛇皮六、しつかりと頼んだぞよ。
蛇皮　へヽ、さす物ぢやござゐやせん。（トこの時揚幕にて子役大勢。）
大勢　朝顏やい〳〵。
喜助　コリヤ。（ト囁く。）
蛇皮　合點だ。

ト喜助は奥、蛇皮六は下手へはひる、四ツ竹節になり花道より朝顏實は深雪、石竹の切繼ぎ衣裳、袖乞ひの瞽女のこしらへにて琴を背負ひ杖をつき出て來る、後より子役大勢ついて來る。

子一　コレ〳〵盲目の姉さん。

二　常住弾かんす朝顔の歌。

三　三味線や琴が聞きたい。

四　サア〳〵早う弾いて聞かせて。

皆々　下されいなう。

朝顔　アヽコレハ〳〵いつもお門までさんじまする、旦那様方のお子達、ドレ、御機嫌をそこねぬ中にお聞かせ申しませう。（ト云ひ〳〵舞臺へ來る、この時喜助出て來り、）

喜助　ヤイ〳〵、いけやかましい餓鬼めらだ、早く歸りやアがれ。

子一　ヤア、茶屋の男が怒りをつた。

皆々　早く逃げろ〳〵、ハヽヽアイ〳〵。（トはやしながら下手へはひる。）

喜助　エヽ騒々しい餓鬼めらだ。（ト朝顔の傍へより、）コレ朝顔、今日はまだ逢はぬの、マア〳〵こつちへ來やれ〳〵。（ト門口竹の合方になり、兩人眞中へ座る。）ほんにナア、目かいも見えぬが美しい事わいナ、日がな一日宿中を歩き廻りさぞ草臥れるであらうなア。コレ朝顔や、こゝにも長うゐやるがこの近所より何とか云ふであらうが、在郷者は

油断がならぬぞや、てんがう云うても決して返事はしやらぬがよいぞや、どんな深みへはまらうも知れぬぞ、よいか／＼。そなた思ふも身を思ふぢや、コレうんと云つてくれる氣はあるまいか。

朝顔　これは／＼見る影もない私を、有難うござりますれど男を持つ事ばかりは。

喜助　コレサ、さう云ふものではないものだ、なう俺ぢやとて宿屋奉公してゐれども、明日にもこの島田か金谷の内へ店を出さねばならぬ、それ、さうなる時はお主をと心に錠をおろしておいた、コレ朝顔、うんと云ひなよ／＼。

朝顔　サア有難うはござりますれど、かやうに致して居りまするも、私には許婚が。

喜助　エヽ。

朝顔　サア云ふに云はれぬ譯がござりますれば、どうぞこればかりは御免なされて下さりませ。

喜助　ナニそんな野暮を云はずと、コレ朝顔。

朝顔　どうぞ御免なされて下さりませ。

喜助　それぢやアならぬといふのか。いゝわ、さう木で鼻をくゝつたやうに云はれちやア、俺も口を開けて引込んでもゐられねえ、俺もナ、今まで云ふ事聞いて貰はうと思つて、こんな物でも引

ぱらして恩をかけておいたぞよ。サア應と云へばよし、いやなら少しづゝ貸した小遣錢から着せた物、算用せい。

朝顔　サアお前樣のが御尤もでござりまするが、どうぞ。

喜助　それだから云ふ事を聞きなよ。

朝顔　サアその儀は。

喜助　エゝ面倒な、着せた物はがうか。

朝顔　こゝは往來中でござりますれば、お許しなされて下さりませ。

喜助　そんなら云ふ事聞くか。

朝顔　サアそれは。

喜助　サア。

朝顔　サア。

兩人　サア〳〵〳〵。

喜助　えゝ埒のあかぬどう盲目め、どうするか見やアがれ。

ト朝顔の帶を解きにかゝる、この時蛇皮六窺ひ出て喜助をひきのけ顏にてしらせ投げた思入。

蛇皮　アよんやさ。（ト喜助のみこみ投げられたる思入あつて）
喜助　アイタ、、、、ヤイ蛇皮六なんで投げた。
喜助　ヲ、投げたばかりぢやアねえ、四の五のと云やアふみのめすぞ。
蛇皮　なんだふみのめす、コレよう聞けよ、コノ女郎めはさいなむすじがあつてさいなむのだ、わりや又なんで邪魔をするのだ。
蛇皮　俺も又この朝顔はチトかばふ筋があつて、かばふのだが、われがさいなむ筋を聞かうかえ。
喜助　望みなら云つて聞かさう、この女郎めはあとの月からこの宿へ来て、わいらが宿へ泊つて引解き一つでふるつてゐるを見て、俺もふつと思ふにはまんざら悪うも育たぬ奴。可愛事だと思つて昨日は百、今日は二百と銭をやつて情をかけ、口説いてみても色よい返事はなし、コリヤまだ俺が心が届かぬと、コレ聞けよ、このつぎ〳〵の着物から帯ゆもじまでつもつてみれば六貫七百、昨夕も三百はりこんだ、酒肴を買ひ調へ口説いても三文とも思はぬ返事、そのやうに厭がる者に俺も亦大枚の、銭を貸しちやアおかれねえ、サアすつぱだかになつて俺に返せ、またかばふ筋といふ返事を聞かう、どうぢやえ。
蛇皮　ム、、そんなら貴様、アノおめくに惚れて六貫七百入れ上げたのか。

喜助　商賣は宿引でも、世話をしかねぬこの喜助さ。

蛇皮　モシ又その七貫を返したら。

喜助　ハテ、損さへせねばもと／＼さ。

蛇皮　イヽワ、その金返さう。

喜助　アノ乞食のわれが、大枚七貫。

蛇皮　ヲヽおめえも知つてる通り賭場へ直れば、三十貫や四十貫はふり廻す蛇皮六だ、幸ひこゝに持つてゐる七貫といやアマア一兩、これで算用はすんだぞよ。（トかます煙草入より百錢を出して、）そりや一兩。

喜助　いゝわ、一兩が戻るからは料簡してやる、エヽ丁度よい壺を蛇皮六め、ウヌ覺えてゐろよ、いま／＼しい。

トやはり目ツ付の仕方にて思入あつて奥へはひる、この時朝顔探りよつて、

朝顔　申し蛇皮六樣とやら、馴染も薄いこの朝顔に今の難儀をお見捨てなう、大枚のお金を立替下されまして、エヽ有難うございまする。（ト手を合はす、蛇皮六こなし、）

蛇皮　ハテ禮云はんすには及ばぬ、互ひの事でござんすわい。

朝顔　デモ大枚のお金を助力なされて下さります事ぢやもの、さういふあなたのお聲は、モシ立花庵樣とは申しませなんだかえ。

蛇皮　いかにも下拙、ア、イヤそんな者ではない、初めて逢うた蛇遣ひ、こんな身すぎはしてをれど正直正統なこの蛇皮六、こなたに金を助力するのも何の由縁はなけれども、わたしはこなたによう似た娘がある故子のやうに思はれて、見る度毎にハ、アいたはしい事ぢや、目かいの見えぬにとぼ／＼とあちらこちらの門に立つ、心根を察しると胸が一杯になつて、汗と涙がごつちやになつてこぼれるわいなう。この上は煩はぬやうに身を大切にさつしやれや、又これはどのやう事があるまいものでもない、用意に持つてござれ、さうして何でも食べたい物買うて食はつしやれ。

ト以前の小判を出す。

朝顔　イヱ／＼決してお心遣ひ下さりまするナ、さうしてこんな事、マア／＼そちらへ。

蛇皮　マア／＼／＼入るまいけれど年とつた者の云ふ事だ、ハテナ納めておかつしやれ、ありやうはわしや他人のやうには思はれぬ、さうしておりやチト用がある程に、一返り行て來るから待つてゐやんせ。（ト無理に朝顔の懷中へ金を入れる、朝顔こなし、）

朝顔　段々とのお志、嬉しうござんす、けれどこれではどうも。
蛇皮　ドリヤ行てこようか。(ト蛇皮六香を出し小隠れする、朝顔後を見送り、)
朝顔　落目を救ふ人の誠と、由縁もない私に路用の金まで、エ、忝なうござります、それにつけても阿曾次郎様は何處にどうしてござるやら、エ、苦に色かへる濱の松風ぢやナア。

ト四ツ竹の合方になり、朝顔下手へはひる、蛇皮六窺ひ出て。

蛇皮　まんまとつかませたアノ金、今にも五百兩の詮議になつたら喜助どんと云ひ合はして、盗人はあの女郎、廿五兩は我等がしめこ、イヤ待てよ、このやうな小さな事をせうより今喜助が云つた奥座敷の花活に、埋めてある五百兩をわれらが着服。こいつは拍子まんが直つて來たわえ、しかしどこらの花活に隠してあるかしらぬ。(ト奥へ行きにかゝるを、關助出て支へる。)エ、びつくりするわえ。
關助　なにびつくりする、さうしてむせえなりで、貴様は何だ。
蛇皮　俺か、おらア蛇、イヤサ蛇遣ひの蛇皮六と云ふもんでござんす。
關助　その蛇遣ひが奥を見込んで何をする。
蛇皮　われが構つた事ぢやアねえわ。

關助　イヽヤ、この關助の目にかゝつた日にやめつたにこの場。

蛇皮　ヱ。

關助　動かすものか。

蛇皮　さうぬかしや、うぬから。

ト兩人よろしく立廻りあつて、關助蛇皮六を押へる、この見得よろしく道具ぶん廻す。

本舞臺三間の間高二重、上手網代塀、いつもの所枝折戶、向う山水を描きし襖、二重上に岩代瀧太袴着付、駒澤次郎左衛門同じく袴、下に出來島團平、坂田勇藏半纒ぶつさき羽織にて、いづれも酒盛りの體。平舞臺下手に戎屋徳右衛門袴羽織にて手をつかへ居る、誂への唄にて道具留る。

徳右　粗末なる田舍酒でござりまするが、宜しうめし上つて下さりませ。

駒澤　イヤモウ叮嚀の御料理、祝着に存ずる。

岩代　はなはだ馳走で食べ過ぎたて。

坂田　モウ御酒はこれにて納めてくりやれ。

出來　我々は一向御酒は不調法、杯さへ手にとらないわ。

德右　そのやうにおつしやらずと、もう一つお上りなされませ。

岩代　さうして何か耳かしましう奥や中の間で歌ひをるが、アリヤ何だ。

德右　ヘイ、アノ唄は朝顔と申しまして、年の頃は十八九の女子、可愛い事には盲目でござりまするが、いつぞやから參りましてアノ唄を琴に調べて、袖乞を致しまするが、根がうづ高い故郷ら流行まして、あちらの座敷こちらの座敷と、今ではこの島田で流行兒でござりまする。

坂田　イヤ成程それは珍らしい。イヤ御家老へ申し上げます、その女をこれへ招びよせ朝顔の唱歌を承はりまするは、いかゞでござりませう。

出來　いかさま勇藏殿の仰せらるゝ通り、旅中の鬱散でござれば、御家老に承はらずとも苦しうはござりますまい。

駒澤　なにさま鬱散とござれば、苦しうもござるまい、ナウ瀧太殿。

岩代　さやうでござる、亭主その朝顔とやらをこれへよんでくりやれ。

德右　かしこまりました、たしか勝手へ參つて居る様子でござりました、私が連れて參りませう。

ト下手へはひる。

出來　琴が上手で器量がよいとは十分でござる、しかし目が見えぬとは惜しいもんではござらぬか。

坂田　どういふ身の素性か存ぜぬが、不便な者でござる。

岩代　なに、女が來るまでモウ一獻く、みませうか。

駒澤　それがよくござる。（トこの時奥にて、）

德右　サア〳〵朝顏、早うおぢやいの。（トこれにて床の淨瑠璃になる。）

〽むざんなるかな秋月の、娘深雪は身に積る歎きの數の重なりて、塒失ふ目なし鳥、杖柱とも頼みてし朝香はもろく朝露と、消え殘りたる身ひとつをさすがに捨ても縁先の、飛石探る足元も危き木曾の丸木橋、渡り苦しき風情にて、〽やう〳〵座敷へ手をつかへ。

ト朝顏をいざなひ德右衞門出て來り。

德右　これが即ち唯今申し上げました、朝顏でござりまする。コリヤ何も恐い事はない、サ、つツと出やいなう。

朝顏　ハイ〳〵。めしましたはこのお座敷でござりまするか、拙い調もお笑ひ草、おはもじさまや。

〽と會釋する、顏も深雪がなれのはて、一目見るより駒澤はさてはとびつく

りしながらも、あけてそれとも岩代瀧太、己が惡事のあらはれに、互ひに
色目さとられじと、空に紛らす煙草の煙。

徳右　申し御覽じませ、惡うも育たぬやうに見えます、なんといじらしいではござりませぬか。

坂田　ハテ聞いたよりよい器量、これなれば定めてその歌も、さぞかしと思はるゝ。

徳右　イヤモウ私が申すもあやかなものなれど、なか〳〵あやをやりまする。

出來　しからば早く唄はせい。

坂田　朝顔とやら、サア〳〵早う。

兩人　所望ぢや〳〵。

朝顔　ハイ〳〵。

兩人　サア早く。

朝顔　ハイ。

徳右　これはしたり、何を遠慮する事があつて、サア彈きや、コレお客は御大身樣、彈いたらそれだけの事は。サ、早う彈きやいなう。

〽引立てる氣の彈かせたさ、厚き情は身に染みながら、思ひ廻せば。

朝顔　淺間しい。

駒澤　ヤ。

朝顔　ハイ、唄ひますでござりまする。

〽焦るゝ夫のあるぞとも知らぬ盲目の探り手に、戀ゆる心つくし琴、誰かは憂きを斗爲巾の糸より細き指先に、差す爪さへも八橋の、やつれはてたる身をかこち、涙にくもる爪しらべ。

出來　何をうぢ〳〵、早う唄へ。

朝顔　ハアイ。（ト朝顔涙ながらに琴に向ふ。）

〽露のひぬ間の朝顔に照らす日影のつれなさに、あわれ一ト村雨のはら〳〵と降れかし。

坂田　成程奥にて歌ふよりはまた一倍、よく〳〵見ればなか〳〵袖乞をする女とも見えぬが、これには何ぞ仔細のありさうな事ナア。

出來　これさ〳〵勇藏殿、アノ器量で袖乞をするからは、何でもいがみ根性でもあつて、親の勘當一

家親類にも見放されたとかいふやうな事であらう。

坂田　イヤ〳〵、さやうとも見えませぬ、コリヤ女、そちや不義いたづらであらうがの。

朝顔　イヱ〳〵なんのマア、さやうな事ではござりませぬ。

出來　然らばやつぱりいがみ根性。

徳右　イヤ〳〵、モシ可愛さうに何のそんな事でござりませう、コリヤ〳〵朝顔、何もお慮みぢやや、そちがその落ぶれた事、お話し申しやいなう。

朝顔　サアお尋ねに預かりまするもこの身の懺悔、私も以前はよしある武士の娘、小さい時に許嫁の殿御があつたとの事なれども、それはまだ東西わかぬ中の事、様子あつて父様は御浪人なされて都へ御住居、そのうちに重なる月日に人となり、ふつと見染めたお方がござりまして、その殿御の後を慕うて國を出ましたのでござります。（ト岩代こなしあつて、）

岩代　なに男の後を慕ひしとは。どふいふ仔細ぢや、尋ねてみさつしやい。

出來　シテ尋ねる男といふは何者。

朝顔　見染めた殿御は御浪人。

岩代　ヤア。

坂田　シテその馴染は。

朝顔　サアその馴染は、すぎし卯月の中空に都の辰巳宇治の舟、こがれよるべの螢狩。

〽思ひ染めたる戀人と、語らふ間さへ夏の夜の短かい契りの本意ない別れ、所尋ぬるたよりさへ、思ふにまかせぬ國の迎ひ。

親々に誘はれ難波の浦を舟出して、身をつくしたる、

〽うき思ひ、泣いて明石の風待ちに、たま〳〵逢ひは逢ひながらつれなき嵐に吹き分けられ、國へ歸れば父母の、

思ひもよらぬ夫定め、立つる操を破らじと屋敷をぬけて數々の、憂目をしのぎ都路へ上つて聞けばその人は、東國の旅と聞く悲しさ。

〽又も都に迷ひ出で、いつかは廻り逢坂の關路を後に近江路や、みの尾張さへ定めなき、戀し〳〵に目を泣きつぶし、もの丶黒白も水鳥の陸にさまよふ悲しさは、いつの世いかなる報いにて重ね〳〵の歎きの數、あはれみ給へとばかりにて聲をしのびて歎きけり。

岩代　エヽ面白くもない長事で、ほつとりと退屈した、アノ女早く歸せ〳〵。

　　へ早く歸せと云ふ折から、息を切らして驅け來る侍。

　　トバタ〳〵になり下座より、半纏股引の侍出て、

侍　ハツお旦那へ申し上げまする、唯今お納戸金勘定にかゝりましたる所、金子五百兩の紛失故早速申上げまする。

駒澤　ハテ心得ぬ、今日一日に五百兩の大金不足致さうやうもなし、ハテナア。

岩代　旅行のうち金預りは駒澤殿。

出來　見えぬとばかりにては事すまぬ。

坂田　但し盜賊の仕業なるか。

德右　私が宿で金子が失つては、本陣の名折れ。（トこの時喜助上手より出て、）

喜助　ヘイ〳〵申し上げます、その盜賊は外ぢやアござりませぬ、こゝに居る女郎めでござりまする。

　　ト朝顔を引出す、皆々こなし。

皆々　なんと。

喜助　サア盜んだ金出してしまへ。
朝顔　これ〳〵喜助さん、滅相な何のそんな事、夢にも覺えは。
喜助　ないとは云はさぬ、うぬが懷に。（ト引付けようとするを、德右衛門とめて）
德右　コリヤ待て喜助、可愛さうに目も見えぬ者が、大枚五百兩といふ金をどうして取らうはずがない、その上ついに奧へ通した事もないに、イヤコリヤ盜人はあれぢやあるまい〳〵。
喜助　コレ〳〵旦那殿、そのやうにお前さん朝顔をおかばひなされても、もう叶ひませぬ、その證據を出してお目にかけませう。（ト無理に懷中へ手を入れ、以前の小判を出して、）この一兩の金がお尋ねなさる多の字の極印、これでござりませう。（ト出す、出來島取つて）
出來　コリヤこれ正しく殿の極印。
岩代　あと四百九十九兩の金子はどう致した、早く白狀させい。
喜助　かしこまりました、ヤイ女郎め、われ人につらければ人亦われにつらし、よう思ひ知つたか、この金はどうして持つてゐる、サアその譯をぬかせ、ぬかさぬか。
朝顔　サアその金は。
喜助　ぬかさにや、かう。（ト打たんとする、朝顔こなし、）

朝顔　マア／＼待つて下さりませ、恩ある人の難儀とつゝみましたが、ありやうに申しまする、その金は最前、蛇遣ひの蛇皮六様に。（トこの時上手にて、）

關助　ヲヽその盜賊、唯今それへ。

ト關助蛇皮六に繩かけ引立て出る、蛇皮六二重の駒澤、岩代を見て。

蛇皮　ヤヽあなたは。（ト岩代云ふなと思入。）

關助　エヽ下にをらう。この蛇遣ひ迂散な奴と見受けました故、引すへましてござりまする。

喜助　コウ／＼蛇皮六、五百兩の盜賊か、さうではあるまいがの。

蛇皮　どうして／＼正直正道な俺がなにそんな事。ハイ／＼朝顔に相違ござりませぬ。

出來　ヤイ／＼蛇皮六とやら、その方に金子の疑ひかゝりをれば、覺えのない事ならば覺えないと、眞直にこの場で申し上げい。

朝顔　これ／＼蛇皮六さん、最前お前に貰ひました金が紛失のお金とやら、それ故にこの難儀、ありやうに申しました、どうぞ詫言して下さんせいなア。

蛇皮　これ思ひもよらぬ事を云ふわえ、俺がいつ貴樣に金をやつた、貴樣に一兩もやる金がありや、こんなざまをして居ぬわえ、そんな覺えはないぞ、アリヤみんな嘘でござりまする。

朝顔　それでも最前長にて。

蛇皮　ハヽア、コリヤ人違ひだな、ついに見た事もねえ女子。ハイ私は毛頭いさゝか、少しも覺えのない事でござりまする。

朝顔　それはマア何を云はしやんすぞいなア、あれほど最前誠らしう金を貸して下さんしたお前が、そのやうな事を云はしやんして。

蛇皮　ハテ知らぬ／＼、覺えはない。

若代　盗賊は女めに極まつた、ソレ繩ぶて。

出來　ハツ。（ト團平下りて朝顔に繩うつ、）

關助　その女になぜ繩をおかけなさるゝな。

若代　この女は盗賊の科極まりし故、繩かけるが何とした。

關助　イヤ盗賊は此奴に極まる。（ト蛇皮六へ思入、）

出來　蛇皮六を盗賊と云ふ證據は。

關助　その證據と申しまするは、唯今その女が貰ひし金と申したら、彼奴一兩の金借した覺えはないと答へし詞のはし／＼、きつと詮議相とげなば金の在所、又相ずりの輩まで。

皆々　ヤ。（トぎつくり思入。）
關助　ハテ、知れさうなものでござる。
岩代　イヤ何は格別、蛇皮六は金を貸さぬといふがコレ正銘、云ひがけひろぐにツくい女郎め、うぬ許婚を袖に致して不義働くその罰で、今そのざまになり下り、盗賊までひろぐ横道者、ソレ詮議して白狀させい。
喜助　サア女郎め、金の在所ぬかしてしまへ。
朝顏　イヽエ、覺えはござりませぬ。
喜助　ムヽ云はざアこれくらはすぞ、ほえるなよ。
德右　コレまて、どうするのぢや。
喜助　又とめさつしやるか。
德右　さればいやい、たかゞか弱いこの女、そのやうにぶち打擲してひよつと死でもした時は、誰をつらまへて詮議する。
喜助　エヽ。
德右　サアそれぢやによつて、こゝはマア一旦ゆるめておいたが、よさゝうなものゝやうに存じます

る。

岩代　この上は瀧太が、金の在所云はしてみせませう。

駒澤　アイヤ瀧太殿、お待ちなされい。

岩代　ナゼとめさつしやる。

駒澤　さればでござる、惣じて罪の疑はしきは輕うはからふが公の道、最前より見る所なか〳〵アノ女盜み致すやうな者とも見えませぬ、然し證據は彼が懷中より極印金の出でたる上は、コリヤ疑ひはその方に、サかゝり合はせし者どもゝ、手前が存ずる旨あれば立騷がずと下に居やれ。

岩代　これさ〳〵駒澤殿、御自分一人承知でも、手延べにならぬ殿の用金、それだによつてアノ女。

駒澤　ハテ旅中の金子預りはこの駒澤、事あらだてなば拙者はもとより、相役方まで越度ならん、そこを思つてこの詮議、出立までに相紏し金の員數揃ひなば、貴殿の越度と云ふではなし、いらざる事に瀧太殿餘りお氣をもまれぬが、かへつてその身のお爲かと存じまする。(ト岩代思入。)

イヤなに亭主、朝顏とやらはそちにしかと預けおく。

德右　スリヤ私に、ハイ、しつかりと預りました。

岩代　蛇皮六は身共があづかり、きつと紏明。

駒澤　アノ貴殿が。
岩代　いかにも。
駒澤　ハテナア。
喜助　ヤレ〳〵、息勢はつて草臥れた。
徳右　マア奥へござつておしづまり。
関助　なにさま、出立までは間もあらう。
岩代　蛇皮六を引立てい。
駒澤　徳右衛門にはその女。
徳右　きつとお預り申しまする。

ヽ瀧太が胸の算用違ひ、桁ははづさぬ駒澤が、心あるじは朝顔を引立てゝこそ。

ト唄になり駒澤は朝顔へこなしあつて、岩代は日夾島坂田喜助附き添ひ、関助は蛇皮六を引立て皆皆奥へはひる、朝顔、徳右衛門後へ殘り思入あつて。

徳右　預かる事は預かつたが、ひよんな物ではあるわい。

朝顏　このやうな身に落ぶれし故恨みするかと人さんのお疑ひ、ほんに〳〵なんの〳〵誓文そんなさもしい心は持ちませぬ、まだこの上にどんな辛い身になるとも厭はねど、盗人かたりと云はれるは情ない身の上ぢやなア。

德右　ヲヽ尤もぢや、弱い者は歩にとらるゝと目の見えぬそちが、なんの五百兩の金を盗まうぞ、そりや俺がよう知つて居る、お二人の中お一人は、どうやらお慈悲深さうなお方、お頼み申してこの繩は解いてやる、きな〳〵せずと俺次第になつてゐや。

朝顏　エヽ有難うございます、侍の娘が今のやうに打擲に逢ひ、いかに目かいの見えぬ身ぢやとて覺えもない盗賊の惡名、私や口惜しうございます〳〵、死にたうございますわいなア。

德右　これはしたり、今死んだら白いか黒いかはわかりもせうが、その尋ぬる人にはどうして逢はれる、とかく人は命が物種。

朝顏　それぢやと申して。

德右　ハテ、若い者といふものは。（ト朝顏を下へすゑる。）俺にまで泣かしをる。

ト兩人よろしく、この道具ぶん廻す。

本舞臺三間の間中足の二重、見付け襖、上の方床の間、上下落間建仁寺垣、植込み書割、座敷の體上手に釣花活あり、八ツの鐘にて道具納まる。

〽やゝ更け渡る秋の夜や、寢られぬまゝに駒澤は、四邊見廻し獨り言。

ト駒澤二重上手に住ひ居る。

駒澤　君が一日の情に我が百年の命を捨つるといふ事、今までよそ事に聞きしが、今といふ今我が身にひしと當つたり、一人の妹は若殿のために最期をとげ、今又深雪がなれのはて袖乞とまでなり下り、我を尋ぬるせつなる心底、不便とは思へども大事の役目、大望を抱へしこの身、先頃志州鳥羽浦にて逢ひたる時にも、やさしき詞かけずんば今の憂き身をさせまじきに、知らぬ事とは云ひながら、誠ある女に艱難さするも我が誤り、この年月の辛苦を語るその身より、傍に聞き居る心の苦しさ、思ひ廻せば不便やなア。

〽悲歎の泪に暮れ居けり、かくと樣子を白張りの襖押しあけおしやれのおなべ。

ト女郎お島以前のなりにて出て、

お島　モウシ、まだお休みなされませぬか。

駒澤　イヤモウ晝は乘物にて折々睡眠致せば、今夜はどうか寢苦しい。サ、勝手へ行つて休んでたも。

お島　モシ寢苦しうてお伽がゐるなら、おみ足をさすりませうか。

駒澤　ア、イヤそれには及ばぬ、サ、行きや／＼。

お島　そんなら今夜も一人寢せうか、ア、情しらずめが。

〽としや、べり廻つて入りにけり。（トお島よろしくあつて奥へはひる。）

駒澤　ア、時に五百兩の金の紛失、ム、。

〽工夫をこらすその折から、何心なく亭主は立出で。

徳右　これは御家老樣には、まだお休みなされませぬか。

駒澤　ヲ、徳右衛門、さて／＼今宵は大きに馳走、殊に樣々の事が出來致し、定めて亭主も心勞であらうな。

徳右　これは／＼結構なお詞、私はチトあなた樣にお願ひがござります。

駒澤　ム、、願ひとは何事ぢや。

徳右　餘の事でもございませぬ、最前お預かり申しました朝顏が事でございまする、御存知られます通り目は見えず、常に外へはやりませぬ者、なか〳〵もつて盗みしさうな女とは存じませぬ。

駒澤　サヽ、手前もさやう存じた故相役どもの手にかけず、それ故その許に預け申した。

ト徳右衛門横手を打つ。

徳右　アヽシタリ、又お侍様の知恵は別なもの、町人ながら徳右衛門感心致しました、とてもの事にあの繩を。

駒澤　ハテ解くなりとほどくなりと、おぬしの勝手次第、徳右衛門お手前は町人に似合はぬ人の落目を見捨てぬ親切、それについて、チトその許に頼みたい事がある。

徳右　イヤモ、あなた様のお頼みなら何なりとも、シテそのお頼みは。

駒澤　イヤ外の事でもない、やはり朝顏の事、よしある人の娘と見えるがさて〳〵切なる志。かけ構はぬ事ながら不便に思ふ、幸ひ持ち合はせたるこの二品、徳右衛門その方にしつかりと預ける間、朝顏に渡してくりやれ。

徳右　委細かしこまりました。（ト二品手にとり、）コリヤマアおびたゞしいお金、その上この袱紗包みは。

駒澤　ヲ、それこそは大明國秘法の目藥、甲子の年に出生せし男子の生血を以て服すれば、いかなる眼病も即座に平癒、朝顔に渡してくりやれ。

德右　これは〳〵何から何まで、お心を籠められた下され物、朝顔に渡し喜ばせまするでござりませう。

駒澤　何かにつけておぬしの世話、よきにはからうてくりやれ。

德右　かしこまりました、最早更けましたればお休みなされませ。（ト德右衛門、駒澤立ち上り、）

駒澤　ア、世の成行とは云ひながら、我故深雪がなれのはて。

德右　やつれにやつれし朝顔が。

駒澤　身の上話も胸に釘。

德右　戀故にこそ目なし鳥。

駒澤　我が良藥は與へても。

德右　何卒本服させんにも。

駒澤　たゞ得がたきは男子の生血。

德右　一人助けて一人を殺す。

駒澤　人の命は金づくにも。

徳右　かゞなへ見れば我も甲子、モシヤ年度を御存知あつてか。（ト兩人顔見合せ）

駒澤　徳右衛門、まだ行きやらぬか。

徳右　旦那樣。

駒澤　明朝逢ひませう。

〽胸に一物主人の心、奥の臥所へ、

ト兩人こなしよろしく、道具ぶん廻す。

本舞臺三間の間中足の屋體、上手に釣花活かけてあり、すべて奥座敷の模樣、送り返しにて道具納まる。

〽こそは入りにけり、やゝ更け渡る秋の夜や、庭には蟲の聲々に鎌首もつたげ蛇皮六が、

ト下手より蛇皮六窺ひ出る、床の合方、蟲の音。

蛇皮　瀧太樣のお差圖で、治郎左衛門をばらしてくれいとのお頼み、まてよ、アノ治郎左衛門といふ

奴はたしかに宮城阿曾次郎、あれが宮城ならなか〱おいら風情の手ではゆかぬ、なまなか事をしだしたら俺が首はころり、それよりは奥へふんごんで、滿座の中で恥面かゝせ。ヲヽさうだ、まてよ。それよりはとつくりと利害を說き、俺が落ぶれた難儀の事を話したら、少々は貸してくれまい物でもない。まてよ、貸りた所が五兩か十兩の目くされ金、それよりは喜助に聞いた奥座敷の釣花活に、四百五十兩ためてあるを俺が一人着服して、こゝを隨德寺、それがいつちよい料簡ぢや。（ト邊りを見廻し釣花生けを見付け、このうち駒澤障子をあけ一寸見る。）さては話の釣花活、これぢやな、幸ひ邊りに人目もなし、瀧太の頼みはうつちやつて、さらばお金を。

ト二重へ上らうとする所へ出來出て、

出來　蛇皮六か。

蛇皮　アイ。（トびつくりして飛のき、よく〱見て。）お前は最前のお侍。

出來　喜助を知らぬか。

蛇皮　喜助をお尋ねなさるゝは、定めて金の事でござりませう。

出來　いかにも、金を隱しおきしは奥座敷と聞く。

蛇皮　サアその金の在所は、知つて居ります。

出來　スリヤそちが。

蛇皮　シテ分口の五十兩は、どうでござりまする。

出來　氣遣ひ致すな。五百兩盜み出だし内四百五十兩は喜助に預け、殘り五十兩の内一兩は喜助に渡し四十九兩は身共が所持する。

蛇皮　そんなら早う戴きませうかえ。

出來　そりや駒澤を立たして後の事。

蛇皮　そんなら祝ひに一つしめませうか。

兩人　ハよい〳〵。（ト手を打つ、この時鷄笛になり、奥にて、）

それお立ちぢやぞえ。（ト上手より坂田勇藏出る、蛇皮六下手へ隱れる。）

坂田　最早寅の上刻。

出來　出立の刻限。

坂田　お支度がよくば參りませう。（ト奥へ云ふ、兩人奥にて、）

駒澤 岩代　いかにも出立致さう。（ト駒澤、岩代　女共皆々附添ひ出る。）

岩代　駒澤殿、出立は相なりますまい。

駒澤　ム、拙者に出立がならぬとは。
岩代　宵に紛失の五百兩の盜賊は知れましたか。
駒澤　お氣遣ひなさるゝな、五百兩の金に跏躅はござらぬ。
岩代　金に踟躕はござらぬとは。
駒澤　盜みし奴は相知れました。
岩代　スリヤその盜賊は。
駒澤　盜賊はアノ花活。
岩代　ヤ。
駒澤　サ、あやつを吟味致しなば、相知れさうなものでござる。
出來　それ知られたら。

ト團平拔討ちに駒澤へかゝる、駒澤交へながら釣花活へ手裏劍を打つ、これにて四百五十兩落ちる、この時團平の懷中より金包みを引出し。

駒澤　此方も四百五十兩、あと四十九兩は團平殿のお働き。
坂田　あと一兩は當拔の金、それにて都合五百兩の紛失の金揃ふ上からは。

駒澤　蛇皮六そちにも疑ひはれた。
岩代　シテ五百兩の盜賊は。
駒澤　その盜賊はこの花活。
岩代　ヤア。
駒澤　無難に金子かへる上は、强ひて詮議はいらざる事。
岩代　スリヤこのまゝに。
駒澤　許しつかはす拙者が裁判、瀧太殿お心に叶ひましたか。
岩代　イヤ叶ひました、ずんど心に叶ひました。
駒澤　然らば金子紛失の儀は、御沙汰御無用。
岩代　いかにも承知つかまつゝた。
關助　シテこの者は。
駒澤　きつと糺明致す奴なれど、以前いさゝか恩義もあればその返報、エイ。
　　　ト花活の中へ金包みを入れ投げてやる。
蛇皮　ヤア、こりやお金、エヽ、有難い。

へとはう〳〵逃げて歸りける。(ト蛇皮六逸散に花道へはひる、雨車になる。)

岩代 ヤア、けしからぬ雨の脚。

坂田 ソレ雨具の用意。

皆々 ハ、ア。(ト下手より大勢にて乗物を一挺かき出る。)

岩代 駒澤殿、お先へ。

ト岩代乗物へ乗る、供廻りよろしく、團平附いて花道へはひる。

駒澤 コリヤ〳〵女ども、徳右衛門を呼んでくりやれ。

女皆 旦那さん〳〵。(ト奥より徳右衛門出て、)

徳右 これは早お立にござりまするか。

駒澤 ヲヽサ〳〵、さて〳〵昨夜より段々の世話、別して朝顔の一節旅行の鬱散、感心致した、先程の品この扇子もろとも、はなに遣はしてたも。(ト袱紗につゝみし扇を渡す。)

徳右 何から何までお情深い旦那樣、さやうならば隨分ともに御道中恙なく、めでたうお國入りあそばされませう。

關助 エヽ生憎降りが強くなりました。

駒澤　急がずばぬれざらましを旅人の。

徳右　あとよりはるゝ野路の村雨。これが大方やらずの雨とか、申しまするのでござりませう。

駒澤　いかさま、その村雨の露のひぬ間を朝顔に、今のこの身を、語り聞かさば。

徳右　エ。

駒澤　さらば。（ト乗物へはひる。）

關助　おたち。（ト乗物へ關助、坂田勇藏、家來附添ひ花道へはひる。）

お島　なんと皆さん、大水の出たあとのやうぢやないかえ。

せん　大水のはづぢや、このマア雨の降りやうわいナ。

お若　このやうに降つたら大井川が留らうぞえ。

お島　川が留つたら又大客ぢや、覺悟しなさんせ廻しぢやぞえ。

せん　申し旦那さん、まだ夜明けまでは早うござりますれば。

皆々　チトお休みなされませ。

徳右　イヤおりやまだチト用がある、わいらは座敷のはき掃除して早う休みや。

皆々　ハイ〳〵合點でござんす、サ、おぢや〳〵。

ト女形皆々奥へはひる、ト上手より喜助、朝顔を引立て出て來り、

喜助　サア〳〵うせい〳〵どめくらめ、うぬは繩をかけてけつかつたに、どうして繩を解きやアがつた、それはさうとうぬに貸した金を返すか、但し俺が心に隨うか。

朝顏　サアその金故に最前の難儀。

喜助　われの詮議はおりや知らぬ、金返すか抱かれて寢るか、サア〳〵どうぢやぞえ。

ト此時德右衞門、喜助を投げ懷中より金を出して、

德右　そりや借りの一兩、取つておけ。（ト喜助取つて、）

喜助　エ、折角物になる所旦那樣の支へこさへ、何とせう、主と病にや勝たれぬ、マアこの金はお貰ひ申して、思へばアノ女。

德右　ヤ。

喜助　あなたの髷が出つてゐる。（ト喜助振り上げし手を指さして奥へはひる。）

面ふくらして入りにけり。

朝顏　常住お世話になる上、あられもない事お聞かせ申しまして、お恥かしう存じてゐる。

德右　コレ今の志はわしが金ぢやない、今夜お泊りの御家老樣がこなさんに渡してくれいと、くれ

ぐれとのお頼み、まだ〳〵その餘りがこれほど、外に扇が一本、これも御大身樣がはなぢやと云うて下さつた、こなさんにきつと渡しまするぞ。

〽手渡しすればいぶかしげに。

朝顏　このやうに澤山に、お金を下されうはずはなし。

德右　その上にこの扇、ア、何やら書いてある。

朝顏　エヽ、その扇に。

德右　一輪の朝顏が書いてある。

朝顏　モウシ、その傍に何ぞ書いてござりまするか。

德右　ヲヽ、書いてある〳〵、何ぢや露のひぬ間の朝顏、コリヤ朝顏の歌ぢや、さうして裏にも何やら書いてある。

朝顏　何と書いてござりまする、ちやつと聞かして下さりませ。

德右　宮城阿曾次郎こと駒澤次郎左衞門と書いてある。

朝顏　エヽ。

〽ハッとびつくり俄かの仰天。

そんなら御大身と云つたは阿曾次郎様であつたか。エヽ知らなんだ〳〵、遅かつたわいなう。

ト身をもだえ泣き伏す、徳右衛門不審のこなし。

徳右　コリヤ、遅かつたとは、そりや何が遅かつた。

朝顔　さいなア、常からあなたの御親切、焦れて目まで泣きつぶせし殿御といふは、この扇を持つてゐる阿曾次郎様の事でござりまするわいなア。

徳右　ヤア〳〵〳〵。（ト徳右衛門びつくりこなし。）

朝顔　道理こそ最前より、よう似たお聲と思ひしが、御大身とある故詞もかけず居ましたが、そんなら矢つぱり阿曾次郎様、かう云ふ内も心がせく、お後を慕うて。（ト駈け出すを徳右衛門とめて、）

徳右　サア心がせくは尤もながら、折悪うこの大雨、殊に目かいの見えぬ身でこの行先は大井川。

朝顔　水に溺れて死ねば死ね、こゝ放して下さりませ。

徳右　然しながらこの吹き降り、ヲヽ、幸ひの簑と笠。

〽行かんとすれば支へる喜助、ふり切る拍子に身は先へ、よろめく手許へ。

トこの時喜助出て朝顔を支へるを、徳右衛門これを支へて、この立廻りよろしく。

ソレ笠。

へ天の助け忝しと押し戴き、杖を力に降る雨もいつかな厭はぬ女の念力、後を慕うて追うて行く。

ト朝顔簑を着、笠をかざしてよろしく花道へはひる。

徳右　ヲヽ、さうぢや。

ト徳右衛門行きにかゝるを喜助支へる、立廻りながら袴をとる事あつて、トヾ喜助を當て花道付け際にてきつと見得、これにて舞臺の喜助見事にかへる。

へ後を慕うて。

トよろしく三重、雨車、雷の音にて、

幕

返し

本舞臺向う一面大井川の遠見の張物、こゝに以前の奴閑助眞中に立身、左右に川越人足大勢取卷き居

る、この見得禪の勤めの鳴物にて幕あく。

闕助　コリヤうぬら、何とするのだ。

人一　ヲヽ何ともしねえが、おのれが主人。

二　駒澤とやらは川を渡つたそれ故に。

三　われが附添ひあつては邪魔と。

四　さる侍に頼まれて。

五　主從二人ひきはなしたも。

六　一緒において働かせぬため。

七　俺の仲間の大勢にかうとり卷かれちやア。

八　モウ叶はねえ一文奴め。

皆々　覺悟しろ。

闕助　へヽエ、ほざいたり川越めら、うぬらの手ごめに合ふものか。

一　その廣言あとで聞かうわ。

二　面倒だ、たゝんで仕舞へ。

皆々　合點だ。

ト浪の音、誂への鳴物になり關助人足を相手によろしくしぬきの立廻り存分あつて、トヾ皆々を追込みきつとなり、こゝへ人足一人打つてかゝるを當てゝ。

關助　御主人様の御身の上、ちつとも早く。（ト見事にかへし、）

ヲヽさうだ。

ト花道へはひる、ト淺黄幕切つて落す、と旅人の仕出しよろしく捨ぜリフあつて上手へはひる、浪の音打上げ淺黄幕切つて落す。

本舞臺一面大井川の體、二の手三の手遠見の書割り、舞臺上手寄りへの蛇籠並べあり、眞中誂への捨石、所々に蛇籠をおき、よき所に松の立木、日覆より同じく釣枝、浪の音、雨車にて道具とまる。と直ぐに床の淨瑠璃になり。

〽追て行く、名に高き街道一の大井川、しのを亂して降る雨に打ち交りたるはたゝがみ、漲り落つる水音は、物凄くも亦すさまじゝ。

トかすめて浪の音、雨車。

〽夫を慕ふ念力に、道の難所も見えぬ目も、厭はぬ深雪がこけつ轉びつ。

トバタ〳〵になり、以前の朝顔逆散に走り出て來て、花道にて轉び、起上つて舞臺へ來り。

深雪　あの水音は大井川、ア、嬉しや〳〵、こゝまで來たが折惡いこの大雨。

〽やう〳〵こゝに川の端。（トよろしくあつて、）

なう川越たち、今こゝを駒澤次郎左衛門といふお侍、この川をお越しなされたか、まだか、どうぞ聞かせて下さりませ。

〽云ふ聲さへも息切れの、聲に川越口々に。

川越　ヲヽ、その駒澤樣はとうにお越しなされた、殊に最前の大雨で。

皆々　川がとまつた、川止め〳〵。

深雪　ヱヽ。

〽ハヽア悲しやと張りつめし力も落ちて伏し轉び、前後不覺に泣きけるが、又起上つて見えぬ目に、空をにらんで。

天道樣、ヱヽ、

〽聞えませぬ。

聞えませぬ。

〽聞えませぬわいナア。

この年月の艱難辛苦も、どうぞマ一度その人に逢はせてたべと片時も、祈らぬ間とてもないものを、今日に限つてこの大雨、川止めとは〳〵ヱ、何事ぞ、思へばこの身は前の世で、如何なる事を罪せしぞ。さても〳〵、ヱヽ、

〽あぢきなや、焦れ焦れたその人に逢うても知らぬ盲目の、この目はいかなる悪業ぞや、夫の後を戀ひ慕ひ、石になつたる松浦潟、ひれふる山の苦しみも身に比べては数ならず。

三千世界を尋ねても。

〽こんな因果が又と世に、あるべきかはと口説き立て、拳を握り身をふるはし、流涕こがれ歎きしは、よそに見る目もあはれなり、やゝあつて起き上り、

ヲ、さうぢや〳〵、とても添はれぬ身の業因、この川水の増さりしは所詮死ねとの事なるべし、未來で添ふを樂しみに。

〽こゝを三途の岸と定め、弘誓の船にのりの道。

ヲ、さうぢや〳〵。

〽急がんものと泣く〳〵も、夫を戀し小石の數、袖や袂に拾ひこみ。

ト石を拾ひよろしくあつて、

南無阿彌陀佛。

〽南無阿彌陀佛の聲もろとも、すでに飛ばんずその所へ、駈け來る三平德右衛門、かくと見るより抱きとめ、

トバタ〳〵になり、以前の德右衛門、三平奴のこしらへにて出て、直ぐに舞臺へ來り、

三平　コレ申し深雪樣、マア〳〵お待ちなされませ。

深雪　イヤ〳〵誰かは知らねどこゝ放して、殺して下さりませ。

德右　マア〳〵心を靜めて待たつしやれ、コレ朝顏殿、わしもこなさんの身の上が氣遣ひさに、こゝまで走つて來た。コレ、三平殿とやら云ふ人も見えたぞや。

三平　コレ御寮人様。下郎めでございます。モシ三平めでございます。

〽無理に手をとり抱きのくれば。

深雪　ム、、さう云ふ聲は三平か。

三平　モシ下郎めでございます、すんでの事に危い事、これには何ぞ様子がございませう、どうぞ聞かせて下さりませ。

深雪　コレ三平、ヱ、逢かつた／＼わいなう。この年月艱難して尋ね焦れた阿曾次郎様、折角お目にかゝつたに盲目の悲しさ、さうとも知らず別れたれど、どうやらお聲が氣にかゝり戻つて聞けばやつぱりその人、おのれやれ、追付かうと後追うて來たれば、この川止め。コレ三平、どうせう／＼、どうせうぞいなう。

三平　ヲ、お道理だ／＼。

徳右　ヲ、尤もだ／＼。

三平　サア下郎めもあなたの御行方を、尋ね廻るその内に一昨日の夜の夢に、淺香殿に逢ひ、即ちあなた様は島田宿戎屋徳右衛門方にござると、云はつしやると思へば目が覺め、コリヤ何でも不思議と夜を日についで來た甲斐あつて、危い場所でお目にかゝり、これといふも日頃から、

信心致す神佛のお引合せでがなでござりませう。ヤレ〳〵嬉しや〳〵、下郎がお目にかゝる上はお氣遣ひなされまするな、下郎めが駒澤樣にお添はせ申しまする程に、必らず短氣な事をなされまするなや。

徳右　ヲヽさうとも〳〵、三平殿の云ふ通り命あつての物種、その戀しい人に添はうにもその身を大事にせにやならぬ、この後ともに奴どのを力にして。

三平　そりやもうわしが命にかけても、お添はせ申さずにはおきませぬ。シタが申し深雪樣、淺香殿には坂東巡禮になつて、東海道へ尋ねて見えるはず、お逢ひなされませぬか。

深雪　さればいなう、その淺香にはあとの月、濱松の宿で廻り逢ひしが、その夜惡者に出逢ひ數ケ所の手傷、死ぬる今際に私をよび、中山邊には私が産の親古部三郎兵衛といふ人あり、この守り刀を證據に尋ね行き、秋月弓之助の娘と名乘つて逢へとの敎へ、可愛やつひに死にやつたわいなの。

ト錦の袋に入れし懐劍を出す。

三平　ムヽ、スリヤ淺香殿には惡者のために非業の死を遂げられしとや、ホヽホイ。

〽はッとばかりに驚くうち、始終聞きゐる徳右衛門。

徳右　ムヽウ、そんならあなたは秋月弓之助様の、御息女でござりましたか。

深雪　娘深雪が、恥かしいこの姿。

徳右　アノ御息女で、さうとは知らず過せし悔しさ、この上は徳右衛門が深雪様へ御土産。

へと作の短刀抜きはなし、腹にぐつと突き立つれば、三平驚き押しとゞめ。

ト徳右衛門、探索の懐剣をとつて腹へつき立てる。

三平　コレ、こなたには何故この最期。

深雪　モウシ徳右衛門様、早まつた事なされましたなア。

へと云へば苦しき息をつき。

徳右　もと私はあなたのお尋ねなされる、古部三郎兵衛でござりまする。

三平　ヤ、そんなら常々親旦那の、お話ありし古部氏でござつたか。

深雪　その三郎兵衛が何故あつてその生害。

三平　これには何ぞ様子があらう、訳を聞かせて下さりませ。

へ言葉に手負ひは顔を上げ、

徳右　不審は尤も、一通り聞いて下されこ（ト竹笛入り合方になり、）私事はその以前あなた様の祖父様、

秋月兵部様に御奉公、若氣のあやまり奥女中と忍び逢ひ、御手討になる所を弓之助様に助けられ、女もろとも國を立ち退き産み落せしが即ち女子、貧苦の中で育てしが二ツの年に母は病死、男の手で育てもならず、伯母が方へこの短刀を添へて養子にやりしが。

〽廻り〳〵て思はずも、親が命を助けられし。

秋月様へ御奉公、死んでも忠義を忘れずに、導きをつたか。

〽でかしたなア。

最前駒澤様のお物語、唐土傳來の藥、甲子の年の男子の生血にて服する時は、いかなる眼病も即座に平癒との事、今聞き知つた故主の御息女、目しひとなりしこのお姿、せめて少しの御恩返しとこの三郎兵衛が生れ年、丁度幸ひ甲子の年、我が生血にて件の藥を調合なし、三平殿あなたへおすゝめ申して下され。

深雪　その志は嬉しけれど、そなたの血潮を現在この場で。

徳右　ヲヽ三平殿、時刻が延びる、早く〳〵。

三平　ハヽア天晴忠義の古部氏、この生血を用ひざれば心づくしも水の泡、ソレ。

へ三平用意の水吞みとり出し、手負の血潮を受けとめ〳〵、泣き入る深雪が懐の妙薬とり出し。

ト三平懐より水吞みを出し傷口へあて血をしぼり、深雪の懐中より薬を出し水吞みに入れ、

サ御寮人様、少しも早くこの藥を。

へさしよすれば。

深雪　忝い。

へ深雪は受けとりわが夫の情にあまる賜物と、押し戴き〳〵、唯一口に吞み干せば、不思議や忽ち兩眼開き、蟻の這ふまで見えすくにぞ。

ト深雪藥を吞みほす、薄ドロ〳〵になり、兩眼開く。

ヤ、、今まで盲ひたる兩眼の、忽ち開くも藥の奇特。

三平　なに兩眼とも開きしとナ。（ト深雪の傍へより顏を眺め、）ヲ、ほんに兩眼が開いて、常に變らぬ深雪様、ヤレ〳〵嬉しや〳〵、エ、お目があいた〳〵。（ト喜び德右衛門に思入。）ア、これといふも三郎兵衛殿が命を捨てゝ。

深雪　この身へつくす忠義の心。

兩人　エヽ忝い。
　　ヘ深雪が嬉しさ人々も、悦び合ふこそ道理なり。
徳右　エヽ嬉しや、最早この世に望みなし。
三平　開きしお目は盲龜の浮木。
深雪　優曇華まさりの二人の賜物。
三平　露のひぬ間の朝顏も。
深雪　今朝の嵐に散つて行く。
徳右　いづれもおさらば。
　　ヘしげる朝顏物語、後の世までも。（トよろしく兩人愁ひのこなし。）
　南無阿彌陀佛。
　　ヘいちじるし。
　ト徳右衛門落入る。兩人回向のこなし、本釣鐘、浪の音にて、よろしく。

幕

朝顔日記（終り）

廓(くるわ)文(ぶん)章(しやう)

廓文章（夕霧 伊左衞門 吉田屋＝＝一幕）

新町吉田屋の場

役名　吉田屋喜左衞門、阿波の大盡萬右衞門、藤屋伊左衞門、吉田屋の若い衆大勢、扇屋の夕霧、喜左衞門女房おやま、仲居しげの、仲居○△×、禿一、二、三。

竹本連中、常磐津連中

本舞臺、向ふ吉田屋と記せし長暖簾、左右格子造り、一面に注連飾り。すべて新町吉田屋表がゝりの體。爰に若い衆十人、揃ひの半纒にて餅を搗いてゐる。この見得しころの合方通り神樂にて幕あく。と皆々餅を搗く事よろしくあつて、

若一　サア〳〵これから後は搗入れの曲搗き、マア一服喫まうぢやねえか。

若二　いつもは引舟ややりてが打交つて餅搗すれど、
若三　お大盡樣の惣揚げで、おいらが寄つてのこの餅搗。
若四　家の嘉例に搗上げて、後は出入の大一座で、
若五　飮み放體の底抜け上戸で藝盡しの惣まくり。
若六　去年も藝のうまい者におやまさんが岡惚れしたから、
若七　今年も腕に撚をかけ、どうか思ひ付かれたいものだ。
若八　思ひ付かれるはよいけれど、もし其んな事が店へ知れると。
若九　出入は言はずと上つたり。矢張りこりやア持役で、
若十　惚れられないのが互ひの仕合、先づそれよりは御馳走に。
若一　なるのがいつち安心だで、今日惣仕舞のお客の内でも、阿波のお客が此方の見當だ。
若二　何でも阿波大盡樣の御馳走なら、粟餅がよからうわい。
皆々　違へねえ。ハヽヽヽヽ。

ト皆々床几にかゝり煙草を喫んでゐる。賑かなる唄により、花道より阿波の大盡好みの羽織着附花染めの置き手拭にて、後より仲居四人、赤前垂にて、若衆二人禿二人附添ひ出て來り、花道にて、

萬右　「朝寢する旅人もあり年の暮」と、誰やらが句にありしが、寒紅梅の色酒に、難波の女郎見まほしく、遙けき阿波より年籠り。廓に名高き夕霧太夫と、晴れて逢ひたきわが望。藝子仲居が取持で、色の音締も吉田屋に、今日で五日の流連も、君に逢瀬を、コレ働いて呉れ。頼むぞ頼むぞ。

仲○　主が左程に御執心で、遠い阿波から難波津へ、お登りなされたお心は、テモ戀知りの大盡樣、

仲□　この新町にも名の高き太夫さんも多い中で、扇屋の夕霧さんへ登りつめてござんすあなた。

仲△　その御心もじを汲みわけて、どうぞ首尾して太夫さんを、逢はせたくは思へども、

仲×　過ぎし秋の半から、御病氣でござんしたゆゑ。

若一　そこを押してもどうがなと、旦那さんもおかみさんも、氣を揉んでござりましたが、

若二　張と意氣地の太夫さん、心が解けて今夜こそ、よい吉左右が、

皆々　ござりませう。

萬右　この上ともに頼むぞ／＼。

仲○　何は兎もあれまあ／＼あれへ。

皆々　サアお出なされませいなア。

ト右の唄にて皆々舞臺へ來る。餅搗きみな〳〵前へ出て、

若一　これはお大盡様。

皆々　ようお戻りなさいました。

ト萬右衞門床几へ腰をかけ、

萬右　オヽ若い者共には顔揃ひだな、シテ餅搗はもう濟んだか。

若一　ハイ殘らず濟ましてござりまする、ヱヽモウ當年の餅搗は、この吉田屋へ旦那様の御逗留にて、

若二　毎日の下され物で、皆一同に勢みがつき、

若三　勢むと申せば、唯今も搗き納めの一と臼は、

若四　私共が受持つて、杵こね取りの拍子事、

若五　旦那へお目に、

皆々　懸けたうござりました。

萬右　それは見物事であつたなう、併しながら、世間では年の暮の忙しい其最中を、幾日も〳〵流連するとは、夕霧太夫に逢ひたさゆゑに、

トこの時暖簾口より仲居×出て來り、

仲× これは旦那様、唯今お歸りでござりましたか、もしお悅びなされませ。家方の餅搗を幸ひに、家の旦那が自身にまゐり、夕霧さんを無理矢理に賴みましたれば、流石名うての太夫さん、今日は幸ひ氣合もよし、吉田屋夫婦の顔を立て、行かうというてござんすわいなア。

萬右 ム、それでは夕霧が來ると申すか。

仲○ もしお大盡樣、上首尾で、

皆々 ござりませうがな。

若一 夕霧樣がお出でとあらば、これから奥で何時もの通り、

若二 大座敷での大酒盛、飲んだり喰つたり、

皆々 貰つたり。

萬右 コリヤ〳〵皆まで言ふな、承知ぢやわえ。（ト銘々小判を遣る。）

皆々 これは有難うござりまする。

若一 これがほんの濡れ手で粟のお大盡樣。

若二 夕霧と誰だ二人。

若三 仲吉田屋の隱れ家で、

若四　今日餅搗の杵ともなり、

若五　臼ともなつてしつぽりと、

若六　千代も替らぬお床入。

皆々　お目出たうござりまする。

萬右　エヽ煽るなえ〳〵。

仲〇　サアお大盡樣には奧座敷へ、

萬右　皆も一緒に、

皆々　サア〳〵お出なされませ。

ト所作の切にて萬右衛門先に、皆々暖簾口へはひる。鳴物打上げ、床の出語りになる。

〽冬編笠の赤ばりて、紙子の火打ひざのさら、笠ふき凌ぐ忍ぶ草、忍ぶとすれば古への、花は嵐の頸に、けふの寒さを喰ひしばる、はみ出し鍔も神寂びて、鐺つまりし師走の月、胡散らしくも吉田屋の、內を覗いて、

トこの文句の內、花道より伊左衛門、誂への編笠紙衣のなりにて、扇を持ち一本差にて出て來り、門口へ來て、

伊左　喜左衞門家にゐやるか。喜左々々。

へ鼻に扇の横柄なり、男ども飛び出で、

ト暖簾口より以前の若衆十人出て來り、

若一　ハイ〳〵喜左衞門家にをりまするが、何人でござりまするな。何だ、此奴ア風の神の幽靈か。

若二　鳥嚇しを見るやうな態をして。

若三　喜左衞門に逢ふも凄じいわえ。

若四　百貫目も遣ふ大盡のやうに拔かしやアがるが、

若五　奴はまあ何處の小屋から失しやアがつた。

若六　あらう事かあるめえ事か、人の門へ立ちながら、

若七　冠り物も脫らねえで、横柄な物の言ひやう。

若八　圖々しいにも程のあつたものだ、

若九　ちつとは目先を利かせて言へ。

若十　いけ巫山戲た。

皆々　奴ぢやアねえか。

〽棒まかれなといひければ。

伊左　何ぢや、百貫目がそのやうに尊いものでもないわいの。ハテ喜左衛門といふべき者がいふ程に、コレ逢はしてたもいなう。

若一　此奴様々なごたくを吐くな。よいわ、逢ひたくば逢はせてやらう。

皆々　オヽこんな目に逢はしてやらう。

〽竹箒振上る、喜左衛門飛んで出で。

ト皆々有合ふ竹箒鍬などを持ち立ちかゝる　奥より喜左衛門出て、

喜左　アヽコレ／＼待たぬか。けふは餅搗の祝ひ日に、わいら何を騒ぐのぢや。そんな物を振上げて、もし瑕でもついたら如何しようと思ふ。アレ合點の行かぬ身形なれば、もし強請りものかもしれぬもの、兎角騙して歸すがよい、滅多な事をせまいぞ。

トこちらへ來り、

ハイ／＼喜左衛門は私でござりまするが、逢ふと仰言るは、まあ何方様でござりまする。

〽笠を覗いて、

ヤ、あなたは。

伊左　喜左、わしぢやわいなう。

喜左　藤屋の若旦那、伊左衛門樣でござりまするか。

伊左　懷しさに逢ひに來ました。

喜左　それはまあようお出なされました。（ト若衆に向ひ、）ソレ見ろ。これだによつて、俺が常々から言はない事か。滅多な事をするなと吩附けて置くぢやアねえか。あなたを何方と思ふ。俺が大事の旦那樣だ。鉢卷もとり、肌も入れて、お詫言を申せ。氣のよい旦那樣なればこそよいが。へゝゝゝゝお許しなされて下さりませ。

若一　ハイ〳〵唯今のは私共が無調法。

若二　大事のお方とも存じませず、

若三　飛んだ粗相を致しました。

若四　どうぞ今日の所は眞平御免

皆々　なされませ。

伊左　そんなら今のやうに敲きはせぬな。

皆々　どう致しまして。

伊左　さうしてアノ呵りはせぬな。

皆々　どう致してあなた様へ。

伊左　そんなら愈々謝つたな。

若一　謝りましたとも／＼。近年にない大謝りを。

皆々　致しました。

伊左　ちつとさうもあらうわいなう。

喜左　サア／＼早く奥へ行つて、お吸物の仕度でもしろ。

皆々　ヘイ／＼畏りましてござります。

ト若い衆みな／＼奥へはひる。

喜左　ほんに困つた奴等ではおりわえ、ハヽヽヽ。扨お珍しい、どうしてまあ、モシ、あなたが御逼塞と承はり、奈良伏見までお尋ね申しました、よう今日はお出なされました、サア／＼こちらへお這入りなされませ。

ヘ袖引寄すれば、

伊左　アヽコレ／＼喜左、さりとては紙衣ざはりが荒い／＼。

へ引けば破るゝ、摑めば跡に師走浪人、昔は槍が迎ひに出る、今はやう〳〵
長刀の、草履を脱いで編笠の、仲の座敷に通りけり。

ト踊り地を冠せ、兩人思入あつて奥へはひる。知らせに付き、前の大格子を引いて取る。

本舞臺三間の間平舞臺、下手伊豫簾の淨瑠璃臺、正面上の方一間の床の間。續いて三尺の違ひ棚。此下襖の出這入。上手給ごゝろに襖の出這入。この内一間の障子家體、開閉あり。又この内塗骨の障子家體。よき所に置炬燵、蒲團をかけある事。矢張り踊り地にて道具納まる。と下手の襖より以前の仲居四人座蒲團煙草盆手炙り火鉢、外に煙草盆一つ持つて出て、茶を出す支度する事あつて、奥へはひる。これにて喜左衞門を先に伊左衞門出て來り、

喜左　ヤレ〳〵マア御機嫌ようお出なされまして、お目出たう存じまする。今日は又嘸表はお寒うござりましたでござりませう。サア〳〵炬燵へおあたりなされませ。

伊左　オヽコリヤよい所へ炬燵が出來てゐる。置炬燵ぢやな。オヽ暖い〳〵。

ト炬燵へあたる。

喜左　イヤ又この冷えます事は。嘸お寒うござりませう。オヽ幸ひ。

へと羽織をふわと打ちかければ、

ト傍に有合ふ亂れ箱の羽織を着せる。

伊左　イヤモウ寒洒しの伊左衞門を勞つての深切忝い。志を戴きませう。

へ戴いて着る有樣を、喜左衞門つく〲見て、

喜左　成程浮世と申すものは、誰あらう藤屋の伊左衞門樣ともあらうお方に、この喜左衞門が上げます羽織、假令蜀紅の錦二重づるの古金襴でも、戴いて召しませうか。ほんにあなた樣のお心を思ひますると、熱い涙が溢れまする。

へ目をしばたゝくぞ實なる。

伊左　アヽコレ〲喜左、我が身も昔のやうにもない、どうしたものぢや。アヽ愚痴なぞや〱。人は知らずこの伊左衞門。今このやうな姿になつたも、さら〱口惜しいとは思はぬ。何故と言や、例へていはうなら、重い材木でも牛馬が負うては珍しうない、それを猫か鼠が持運びしたら、これはと人も手を打たう。丁度まあ其んなもので、かうして紙衣一枚で、七百貫目の借錢負うてびくともせぬ所は、恐らく藤屋の伊左衞門、申し難いが日本に一人の男。そこで樣子が金ぢやによつて、いかう冷える。オヽ寒む〲。

喜左　總身が金のお大盡樣。やがてあなた樣の御勘當も赦りまして。舊のやうにおなりなさるは今の間。アヽ目出たい〳〵。コレおやま、まだ蓬萊は飾らねど、正月の心で三方飾つて持つておぢや。早う〳〵。

やま　アイ〳〵。

へ　おいと女房が楪葉に、ほながをかしき橙〳〵柑子、蜜柑や何やかやかち栗。

トこの文句の内女房おやま好みのこしらへにて喰積を持ち、仲居衆の、廣蓋に銀の銚子三つ組の杯臺ともに載せ、小さき重詰など持ち出て來り、喜左衞門「おやま、珍らしいお方が來た。當て見ろ」といふ捨ゼリフいろ〳〵あつて、

伊左　コレおやま、わしぢやわいなう。

やま　オヽこれは〳〵伊左衞門樣でござりましたか。ようまアお出遊ばしましたなア。お前樣の事を承はりまして、大抵や大方お案じ申した事ではござりませぬ。太夫樣からは日々のお文なれど、何れにお出遊ばすやら、每日々々お噂申してをりましたが、このやうな嬉しい事はござりませぬ。ほんにまあようお出なされましたなア。

伊左　そなたも變る事がなうて目出たいなう。

やま　有難うござりまする。

伊左　その目出たい序に、尋ねたい事があるわいなう。

ト夕霧の事を言出しかねる捨ゼリフいろ〳〵あつて、

深切な二人の衆、蓬莱とまでは氣がついたが、最前から夕霧が事を、これ程も言出さぬは、此頃餘所で噂を聞けば、わしが事を氣に病んで、患うてゐるとの事、もしや無常の夕霧と消えはせぬか。喜左衛門、どうぢやぞいの。コレ内儀、言うて聞かしや、どうしたのぢや。わしに嘆きをかけまいと思うて、それで言はぬのか。コレ何の泣かう、泣きはせぬ。おりや笑うてゐる程に、言うて聞かしてたもひなう。

〽泣かぬ〳〵といふ聲も、氣遣ひ涙にごりける。

喜左　成程、先程から太夫様の事を申しませぬは、私の不調法。さう思召すは御尤もでござりまする。

ト喜左衛門おやまをこちらへ招き、

コレおやま、旦那へお話し申して呉れ。

やま　何のそれは私より、お前旦那へお話し申したがよいわいなア。

喜左　こんな事は男より女の方がよいものぢや。

やま　ハテそれは男役ぢや、こなさん言うたがよいわいなア。

喜左　男の女のと、何で差別があるものか。内を納めるは女房の役ぢや。お主から言うて呉れ〳〵。

やま　ハテお前言はしやんせいなア。

喜左　イヽヤお主から言やれといふに。

ト　おやまを伊左衛門の方へ突きやる。

やま　言ひ難い事といふと私にばかり。

ト仲居の繋のを入れる事。おやまは言ひながら伊左衛門と顔見合せ、

ホヽヽヽヽ。モシお悦びなされませ、夕霧様も秋中は、お氣色もお惡うござりましたが、この頃は段々とお心持も治つてござりまする。それに又餘りお家にばかりお出なされますのは、却つてお氣がつきようと存じまして、幸ひ奥のお客がお頼みで。

伊左　エヽ。

やま　サア無理にお頼み申しまして、お客へ今日初めて。それでアノ太夫さんも奥へお出になつてをりますわいなア。

伊左　エヽそんならアノ夕霧は氣色もようて客へ來てゐると言やるか。そりやアノほんの事かいな

う。

やま　眞か嘘か、あの障子から奥を覗いて御覽じませ。

伊左　スリヤあの夕霧が、ム、。

〽伊左衞門は急いたる顔色。

ト上手の障子を一重あける。此内に夕霧と客人の影法師映る。伊左衞門いろ〳〵こなしあつて、

〽しばし詞もなかりしが。

ほんにちやんと氣色もよいさうな。わしや又あんな事ぢやないと思うてゐたに、氣合のよいはよけれども、成程。恐らく天地開け始めてより、傾城の誠と座頭の遠眼鏡は見た事がないといふが、それに違ひはない。コレそなた衆の心にも、わしが今日爰へ來たは、定めし夕霧が顔を見たさに來たであらうと、思やる所も恥しいが、さうではない。惣嫁のやうな傾城めに、微塵も心は殘らねど、知つての通り彼奴が腹から出た悴。丁度もう今年で七つ。遣手の玉が才覺で、里に遣つたといふけれど、今思へば里に遣つたも皆んな偽り。大方捻ぢ殺して捨てをつたであらうわいの。

喜左　どう致して滅相な。

やま

伊左　イヤ〳〵餘り違ひもあるまい。これを思へば、傾城買より紙屑買がましであらうわいの。

やま　そりや又何故でござりまする。

伊左　何故と言や、金銀を出して、彼方から取るものとては狀文ばかり。ようまあ積つて見や。七百貫目の紙屑では、富士の山の張拔が出來るであらう。埒もない事思ひ出し、大事の紙衣の袖を、コレこのやうに涙で濡らした。ア、繼目の離れぬその内に、さらばお暇致しませう。

ト立上るを、

やま　まあ〳〵お待ちなされませ。そのやうにお腹をお立てなされますると、折角お出なされましたに、まあ御酒でもお上りなされませ。

伊左　イヤ〳〵酒も飮みたうない。あた腹の立つ、歸りませう〳〵。

ト振切つて花道の方へ行き思入。喜左衞門夫婦氣の揉めるこなし。

とても歸るなら、もう一遍廻つて歸りませう。

ト舞臺へ戻り、三人顏見合せ、

ハヽヽヽ。

喜左　ヘヽヽヽ。

やま　ホヽヽヽ。

三人　ハヽヽヽヽ。

伊左　コレ喜左衞門、ひよんな事言うて、御月待の祝ひ日ぢやのに、忌々しいの何のと言うて、氣にかけてたもんなや。

喜左
やま　どう致しまして、左樣な事が。

伊左　そんなら腹立はせぬな。ヤレ／＼嬉しや／＼。

喜左　サア御機嫌が直つたら、お銚子を早く持て來や。

やま　アイ／＼、お燗もつけて置いたわいなア。まあごゆるりと召上つて下さりませ。サア／＼旦那お一つ召上つて、久し振にてこちの人へお差しなされて下さりませ。

伊左　そんなら目出たう飲んで差さうか。

ト杯を取り上げ、一口飲んで、

イヤ／＼酒を飲んではをられぬ。矢張りわしは歸りませう／＼。

トこちらへ來ていろ／＼こなし。

イヤ／＼こりやどう思うても爰にはをられぬ。歸つた方がましであらう。去んだものであらう

か。爰にゐようか。行からうか行くまいか。いつそ炬燵へあたつてこまさう。

トつひに炬燵へはひり、手枕をして寝るゆゑ、喜左衛門おやまの兩人氣の毒なる思入。

喜左　これだから俺がいふまいと思つたに、手前が夕霧太夫の事を言つたからだ。

やま　それでもお前が言へ〳〵と言はしやんすゆゑ、私が言ふまいというたのに。

喜左　それだと言つて、あのやうに拵んだ言はずとよい事を、口から出任せつべこべと言ふからだ。お枕を持つて來な。

やま　アイ〳〵。

ト襖の蔭より枕を持ち出て伊左衛門にさせる。喜左衛門おやまに囁く。

そんなら奥の、首尾を見合せ。

喜左　早く〳〵。

やま　アイ。

ト矢張り踊り地にて奥へはひる。喜左衛門思入あつて、

喜左　イヤモウ何時に替らぬ旦那様の御氣質、この喜左衛門がためには福の神とも崇めにやならぬ、大事のお方、昔に變る今の御不自由。それを苦にもなされぬは、流石大家の旦那様。やがて御

勘當お詫の時節もござりませう。まあそれまでは千萬日も、御逗留なされて下さりませ。

ヘ心殘して奥へ行く、跡見送りて伊左衞門。

ト喜左衞門夫婦入あつて奥へはひる。伊左衞門起上り、あたりを見て、

伊左　このやうになつた伊左衞門を、喜左衞門夫婦が、志、忘れは置かぬ、嬉しいぞよ。それに引替へあの夕霧。ア、、それも變りし此身の姿、變らぬは廓の騒ぎぢやなア。

ト下座の獨吟になり、

唄へ可愛男に逢坂の、關よりつらい世の習ひ。

ヨウ〳〵引いてさま〳〵、ほんにあの唄を聞くにつけ、去年の月見はあの奥座敷で太夫と二人樂んだ、あの時の面白さ、ほんに彼奴に限つては、あのやうな水臭い氣であらうとは。

唄へ思はぬ人に堰止められ、今は野澤の一つ水。

いかさまなア、戀も情も世にある時。このやうな形をして、腹を立てたり拗ねたりしても、誰も何とも思ひはせまい。コリヤ矢張り思ひ切つて歸りませう。さりながら喜左衞門夫婦の者の志。逢はずに去んでは此胸が。

唄へすまぬ心の中にもしばし、澄むは由縁の月の影。

ト この内又障子より覗く事あつて這入。その儘炬燵へはひる。

常へ むざんやな夕霧は、流れの昔懐しく、飛立つ心奥の間の、首尾はくちせぬ縁と縁、縄と心の相の山、間の襖の具合よく。

ト この内夕霧裲になり、好みのこしらへにて奥より出て来り、

常へ 明け暮れ戀しい夫の顔、見るに嬉しく走り寄り、わが身をともに裲に、引纏ひ寄せとんと寝て、抱き締め締め寄せ泣きけるが。

夕霧 伊左衛門さん、目を覚まして下さんせ。モシわしや侘うてなア。

常へ 疾に死ぬる筈なれど、けふまで命存へしも、神佛のひかへ綱、コレ懐かしうはないかいな、顔が見たうはないかいな、と揺り起し〳〵抱き起せば、

竹へ とつて突退け、

伊左 コレこゝな夕霧殿とやら、夕飯殿とやら、こなさんのやうに、節季師走ゆう〳〵かんと、結構な閑な身の上とは違ひまする。この伊左衛門はナ、七百貫目といふ借金を負うて、夜昼稼ぐ忙しい身の上。こんな時に寝ぬと寝られませぬ、必らず邪魔して下さりまするな、あのこゝな惣

嫁殿。

竹へ　ころりと轉けて空佯。

夕霧　伊左衞門さん、お前何言はしやんす、私やそのやうに言はれる覺えはござんせぬ、恨みがあらば言はしやんせ、サア聞きませう何ぼでも、寢さしはせぬ〳〵。

伊左　ア、コレ〳〵側へ寄つて貰ひますまい、勘當受けても藤屋伊左衞門、今のやうに奧の客に踏まれたり蹴られたりする、傾城に近附は持ちませぬ。あのこゝな萬歲傾城どの、萬歲ならば春おぢや、通りや〳〵。

竹へ　通りやといひければ、

夕霧　ム、、この夕霧を萬歲傾城とわえ。

伊左　萬歲傾城の譯を知らずか。知らずば言うて聞かさう、コレ侍の足にかけて蹴られるを、萬歲傾城といふぞや。

竹へ　誠に目出たう侍りける。

しかも足駄履いて蹴るやら。

竹へ年立ちかへる足駄にて、誠に目出たう侍りける。

然しながら何も身すぎぢや、どんなよい衆に蹴られても損は行かぬ、ア、慾を知らねば身が立たぬ。

竹へ慾若に御萬歳、年立かへる足駄にて、誠に目出たう侍りける。

侍も蹴れば町人も蹴る、町人も蹴れば伊左衞門も蹴る、蹴る〳〵、コレ喜左、餅でも米でもやつて去なしや。

竹へ譯も涙の捨詞、煙草引寄せ吹く煙管、そらさぬ體にてゐたりける。

常へ夕霧涙もろともに、恨みられたりかこつのは、色の習ひといひながら、それは浮氣な水淺黄、思ひ染めた其日より、こんな縁が廓にもあろか、派手な浮名が嬉しうて人の誹りも世の義理も、竹へ白紙に書く文にして、常へ返事とる手も心急き、竹へ口舌の床のよしあしも、常へ嬉しいにつけ悲しいにつれて忘れた事はない。竹へそれにお前の惡性を、わしが案じはうつり氣な、外にもしやと言ひがゝり、竹へ去年の暮から丸一年二年に音信なく、それは幾世

の物案じ、それゆゑにこの病、痩せ衰へたが目に見えぬか。常へ煎藥とねり藥と、竹へ鍼と按摩でやう〳〵と、命つないでたまさかに、逢うてこなんに甘へうと、思ふ所を逆な、こりや酷らしいどうぞいの。竹へ憎やと膝に引寄せて、常へさすりつ、竹へ泣きつ聲をあげ、常へ譯も、竹へ性根も、へなかりけり。

ト文句の内口紅の長文をつかひよろしくある。踊り地バタ〳〵になり、奥より喜左衛門おやま仲居皆々出て來り、

やま　モウシ〳〵お二人樣、お悦びなされませ。阿波の大盡樣と申しまするは、あなたの御家來忠七樣と申す方にて、あなたのお家の首尾も直り、追つけこれへ打揃うてお迎ひにお出でなさるとて、裏口よりお歸りなされましたわいなア。

伊左　何と言やる、そんなら内の首尾が直つたと言やるか。

喜左　何に致せ、このやうなお目出たい事はござりませぬ。

ト向うを見て、

と申す内、もう其處へ。オ、イ〳〵。

ト呼ぶ。早渡りになり、幕あきの若衆十人千兩箱を銘々持ち、後より着流しの若衆も出て來り。

皆々　エツサツサ〳〵、

ト舞臺へ來り、よき所へ積上げる。トこの内におやま奥より、祝儀包みを澤山亂れ箱に載せ、持ち出て來る。

やま　サア〳〵皆の衆、御祝儀が出たゆゑに、御禮申したがようござんす。

ト皆々へやる事。

皆々　これは有難うござりまする。

伊左　オヽ目出たい〳〵。延喜に一つメめてたも。

ト皆々手を打つ事よろしくあつて、

皆々　お目出たうござりまする。

〽家内が勇む勢に、つれて本腹伊左衛門、悦びの眉を開くや扇屋夕霧、名を萬代の春の花、見る人袖をぞつらねける。

ト踊り地を冠せ皆々こなしよろしく、

幕

廓文章（終り）

春景色梅由兵衛

（はるげしきうめのよしべゑ）

春景色梅由兵衛（梅の由兵衛――四幕）

序幕

三圍土手の場
大七座敷の場

役名　梅の由兵衛、源兵衛、伴五郎、十平次、醫者久庵、惡者二人、仲間一人、亭主才兵衛、信樂勘十郎、金谷金五郎、女房小梅、額の小三、小糸、お筆等。

三圍土手の場。　本舞臺向う一面の草土、手出茶屋、床几を並べ、すべて三圍土手の體、流行唄通り神樂にて幕あく。

□　なんと此の土手は、いつも〳〵賑かな事ぢやねえか。

○　さあ今日は正月二十日の恵子講だが、来月の初午は猶賑かであらう。

△　これから秋葉様へ参つて、白鬚の方へ行かうか。

□　それもよからうが、亀井戸へ廻らうぢやないか。

○　成程亀井戸へ行つて、梅屋敷ももうよからうな。

△　この頃は亀井戸には四季の花があるので、大分賑かになつたの。

□　それぢやあそろ〳〵出かけようか。

○　そんなら皆さん、御一緒に参りませう。

△　や、なんでも大勢程がようございます、そんなら皆さん。

皆々　さあ、参りませう。

ト矢張り右の鳴物にて皆々上手へはひる。と花道より信楽勘十郎拵羽織大小好みのなりにて、仲間を連れて出て来り、花道にて

仲間　もし〳〵お旦那、何れへお越しなされまする。

勘十　身共は白鬚へ参詣いたして、帰りにはまた梅堀邊にちと内用あれば、そちは先に宿所へ立帰り、今暫らく手間がとれやうと申し置け。

仲間　左様なればお邸へ。
勘十　苦しうない、早う参れ。
仲間　畏りました。（ト仲間引返してはひる。勘十郎こなしあつて、）
勘十　蔵前の伯父吉人へ御無心申した金子、どうぞ由兵衛に。イヤ先づ、参詣いたして参らうか。

ト矢張右の鳴物にて上手へはひる、花道より額の小三好みのなり、小糸お筆矢張り藝者のなり、若い衆二人附添し、後より亭主才兵衛羽織着流し白足袋雪踏にて出來り、

小三　ほんに三囲の稲荷様は、いつも賑かな事ではござんせぬか。
小糸　小三さんはまだ出やしゃんしてから間もなければ、勝手を知らしやんすまいが、花の頃は此の土手は又格別ぢやなあ。
小三　サア今日この向島の大黒屋へ來る事を知らせてあれば、私はあのお方に早う。
ふで　えゝ、そりやお前の深間金谷の。
亭主　や、なに金谷とは。
小三　いゝえいなあ、こゝらに関屋といふ所がござんすかえ。
亭主　おゝ関屋の里、汐入の五百崎、みな隅田川八景の内ぢや。

小糸　八景と言へば、慥か今門前で逢うたは、久庵さんでござんしたな。

亭主　あの久庵殿は人相見やら、醫者様やらとんと譯が分らぬ。

ト この内花道より久庵好みのなりにてつか／＼と出來り、

久庵　これは君達、最前門前でちらと見たによつて、呼びかけたところを聞いた風といふはあれど、聞かぬ風でずいにげとは如何なこと。

小三　久庵さん、今お前の噂して居たところぢやわいなア。

久庵　どうで碌な噂さではあるまい、常からわれを悔れどお醫の典藥、夫より江戸へ來てだん／＼引下つて三里の久庵、餘り醫者もはやらぬによつて、これ／＼。

ト懐中より誂への天眼鏡を出して、

久庵　この本玉の天眼鏡ぢや、源兵衛先生に頼んで買うて貰うた。（トこれを皆々へ見せる。亭主見て、）

亭主　こりや餘程よささうに見えまするな。

久庵　こやつをかまへて相を見るのぢや。

小糸　私の相はどうでござんすえ。

久庵　ヨシ／＼、まづ天中天帝ひらき保寿窪高く北角丸くなし、情の道が疎いわえ。

小糸　情の道が疎いとはえ。

亭主　はて色事が嫌ひぢやと言ふ事ぢや。

小三　久庵さん、私のを見て下さんせ。

久庵　藝者のお職は又違うたものだ、ム、成程、コリヤ伴五郎殿がどのやうに口説いても靡かぬ筈ぢや、一日四詰めた男を離れぬといふは、ハ、ア貞女かな賢女かな、操正しき女郎、藝者に稀なる相ぢやわえ。

小三　なにを言はしやんすやら、久庵さん様子を知つて、嬲らしやんすのかいなあ。

久庵　なんの嬲るのではない眞實のことぢや、兎角藝者女郎は惡性なお方がよいぢや、この久庵もあまり女郎に振らるゝ故、それで思付いた人相見、昨晩も吉原へ行つて見世を張つてゐる女郎共を見歩き、中で惡性なやうな、よく勤める女郎を見立てゝ上つた所が、どう間違つたやら又振られたわえ。

皆々　ホヽヽヽ、ほんに馬鹿らしい久庵さん。

亭主　いやかうして居らうより、ちつとも早う大黒屋へ行つて小さんが身請けの相談、伴五郎様がお待ち兼ねでござらう。

久庵　さうして源兵衛先生も行かれたであらう、愚老参つて鯉の汁を吸はにやならぬ。
小三　小糸さん、お筆さん、わたしや大黒屋より梅若様の方へ行かうわいなあ。
小糸　さうでござんすわいな。
亭主　ア、滅相な、肝心の玉を手放して堪るものか。
小糸　大事ござんせぬ、私が呑込んでゐるわいなあ。
ふで　さあ小三さん、ござんせいなあ。
ト矢張り右の鳴物に、皆々上手へはひる。と花道より作五郎着流し、羽織大小、仲間紺看板にて、付いて出る。後より十平次、切つぎ非人のなりにて付いて出て、
十平　ハイ〳〵、最前からお願ひ申しまする、どうぞやつて下さりませ。
仲間　ハテ、此奴付くなといふに、しつこい非人め。
ト言ひながら舞臺へ来る。十平次矢張り付いて来る。
十平　ハテ結構な旦那、御人體にも似合ひませぬ、たつた一錢遣つて下さりませ。
作五　こりやこりや非人、持合せがあれば先程から遣はすが、折悪しく持合せがないによつての。
ト十平次を見て、

伴五　ヤアそちは。

十平　お前様は曾根、（ト言はうとするを、）

伴五　こりや一錢二錢の合力を願ふ非人、なあ。（ト仲間へ思入あつてのみこませまる。）ナニ家來、そちは大黑屋へ參つて、源兵衞堀の源兵衞が參つたか尋ねて參れ、さあ早く行け〳〵。

仲間　畏りました。（ト上手へはひる。後見送りこなしあつて、）

伴五　そちや家來の十平次、はて變つた姿になつたなあ。

十平　なつたどころではござりませぬ、伴五郎樣お前樣に賴まれ國を出奔、この江戸へ參つてお前樣に貰うた金も遣ひなくしてこのざま。

伴五　身共もそちが行衞を尋ねてをつたが、かの申合せし千葉の御家の重寶、菅家手向山の色紙はそちに。

十平　さあ、首尾よく盜んだ手向山の色紙の流通口も指圖通り、これ。

ト懷中より一札を取出して、

この通り。（ト見せる伴五郎取つて開き見て、）

伴五　何々、菅家手向山の色紙請取申候所實證也、然る上は兼ねて御賴みの通り此方にて竊かに賣

り拂ひ、金子は後より遣はし申可候、爲念色紙請取候一札仍如件　源印判伴印殿へ。

十平　色紙の金をせしめたく、お目に懸りたくをりました。

伴五　イヤ氣遣ひいたすな、此上は源兵衞と相談して褒美の金はずつしり、まづ此の一札は其方所持いたしてをれ。(ト件の一札を十平次へ渡す。)

十平　そりや有難い、しかしそれまでの凌ぎ、斯樣な、なりなれば。

伴五　それ當座の貢。

十平　こりや僅少二兩かえ。

伴五　ハテまた後から遣はすわえ。

十平　間違はぬやうにお頼み申しまする。

伴五　それにつけてもあの金五郎めが、この江戸にて身が執心の藝者の小三に。

十平　金五郎の事は源兵衞殿の子分の者に言付け、見付け次第に仕舞うてとる此方の魂膽さ、それゆゑに源兵衞親方に話したこともあるが、なにを言ふにもこゝは往來。

伴五　ぢやと言うてそのなりでは、身共も同道とも言はれまい。

十平　お氣遣ひなされまするな、今の間になりをつくつて見せませう。

作五　然らば後に大黑屋にて。

十平　左樣なれば伴五郎樣。

作五　十平次、ちつとも早うなりこしらへ。

十平　へい御尋ね申しまする。どれ男振りを仕立てこようか。

ト右の鳴物にて十平次は下手伴五郎は上手へはひる。ト花道よりバタ〳〵になり揚幕より惡者○を見事に投げて金谷金五郎着流し、町人のなりにて惡者△の手を捩ぢ上げ花道にて、

△　あいたあいた、緩めてくれろ〳〵。

金五　大川端で皆知つた顏だ、通りすがりに喧嘩をしかけ、常談も人によるわえ。

ト投げのけ、言ひながら舞臺へ來る。

○　いやとんだ强氣なものだわえ。

△　顏に似合はぬ兵法柔術、なんぞの役に立たうかしら。

○　ちつと稽古をして貰はうか。

金五　なんの兵法の柔術のと高が町人、そんなことを知つてよいものか。

△　いや知らぬと言はれまい、以前は下總千葉の藩中。

○　今では町人金五郎、額の小三と深い仲、それゆゑおいらも。
兩人　肖りてえのだ。
金五　成程、それで樣子がさつぱり知れた、コリヤ行き合ひの喧嘩から持ち込んで、かう〳〵しろと頼みでがあるのだな。
兩人　マア、そんなものよ。
○　あの小三を、おいら達の仲間へ貰ふのだ。
金五　ハヽヽヽヽ、くれいの貰ふのと小三は藝者親方の抱へ、金五郎が自由にはならぬ、よし又自由になればとて、遣るめえというたらどうするのだ。
兩人　おゝ、かうして貰ふのだわ。(ト兩人金五郎にかゝる。)
金五　はてしつこい、なにをするのだ。

ト是より誂への鳴物になり兩人を相手に立廻りになる。此内花道より梅の由兵衛着流し、男達好みのなり一本ざし、誂への頭巾を冠り出て、花道より舞臺を見て思入あつて舞臺へ來る。此の時上手より伴五郎窺ひ出て金五郎を切らんと立寄るを、由兵衛伴五郎を突廻し見事に投げる。伴五郎起上り由兵衛を見、逃げてはひる。金五郎はこれを知らず立廻りよろしくあつて、トゞ兩人逃げてはひ

る。金五郎追ひ駈け行かうとするを由兵衞後より、

由兵　金五郎樣待つた。

金五　やあ。おゝ由兵衞殿か。

由兵　今の樣子を來かゝつてとつくりと見ましたが、なか〳〵天晴の働き、さすがはお侍の果程ある。

金五　ヤア。

由兵　下總千葉の御家中金谷金五衞門樣の御子息、金五郎樣のお身持でござりませうか、もしさうならこれへお掛けなされませ。（ト合方替つて、）改めて言ふには及ばねども、此の由兵衞も以前は千葉の御家中三島隼人樣の家來、若氣の過りにて、いやおれが身上は後の事、思ひがけなき故主の娘御小三樣、お前樣と言ひかはし、國を駈落ち其騷動に隼人樣の預つて御座る御家の重寶、手向山の色紙紛失、夫故に小三樣の親御隼人樣にはお國での御難儀、段々樣子を聞きまするに、小三樣の今の身上は人に欺され吉原の藝者奉公、お前樣は神田邊の知る邊の方にござると、始終の樣子聞き捨てならぬ故主の事、大恩受けた由兵衞が、及ばずながらお世話申すお二人樣は、お國へ歸參の色紙の詮議。

金五　サア小三が縁によつて、色々世話になる金五郎が身の上、ほんに仇には思ひませぬ。
由兵　さう思うてなら、必ずともに今のやうな事は。
金五　小三が事から以前朋輩のあの伴五郎が、頼みと見えて二人の悪者。
由兵　さ、兎角お身が大事でござる、もう達引き事はよしになされませ。さうしてお前様は何方へ。
金五　けふは大黒屋へ小三が来てゐると知らせたゆゑ。
由兵　左様でござりますか、わしも大黒屋へ行かねばならぬが一緒に行くもなんとやら、まあお前様は先へござつて。
金五　そんなら梅の由兵衛殿。
由兵　金五郎様、それ大黒屋には小座敷もあれば、随分密かに小三様と、
金五　エ、。
由兵　ハテ、どうなりとなされませ。
ト流行唄になり金五郎由兵衛こなしあつて上手へはひる。由兵衛後を見送つて思入、此の内勘十郎下手より出て、
勘十　それにゐるは梅堀の由兵衛ではないか。

由兵　さうおつしやるは。
勘十　信楽勘十郎でござる。
由兵　誠にあなたは勘十郎様。（ト頭巾を取らうとする。）
勘十　イヤ由兵衛、そちが頭巾の様子。承はつてをれば、取らずと其の儘〳〵。
由兵　左様なれば、御免なされて下さりませ。
勘十　人は其の以前を忘れぬを専一と存ずれど、えて忘れるものなるに由兵衛は格別舊恩を思ひ、夏は笠を頂き冬は其の儘頭巾の内に。
由兵　故主隼人様の手蹟にて、私へ御意見の狂歌、堪忍のなる堪忍が堪忍かならぬ堪忍するが堪忍。
勘十　なる堪忍は誰れもすれど、堪忍のなりにくいところを堪忍するとは、流石三島隼人殿のお教を守る、結構なる心掛。
由兵　御存じの通りお國元の御城下にて御供先の大喧嘩、相手の三人を仕止めた拙者、直にお仕置きにもなるところを、御主人のお情けにて不思議に命を助かりお國を追放、その砌りに此の歌をそちが守りにせよと下された今の狂歌を頭に戴いた御主人の大恩、達摩ではなけれども、誰方に逢うても滅多に取らぬ此の頭巾。

勘十　イヤ神妙なる志、それにつけても隼人殿は、この勘十郎が爲めには幼少よりお世話に預りし劍術軍學手跡の師匠、下總に育つたれど今は親許江戸表へ立歸り、金杉の御家に勤めるもこれ皆隼人殿のお蔭、身共もそちに習うて舊恩を忘れぬ心、由兵衞、役に立てゝくりやれ。

ト袱紗包みの金を出す。由兵衞取つて、

由兵　こりやこれ慥に金子、役に立てろとおつしやるは。

勘十　樣子は聞いた御息女の身の上、思ひがけなき吉原の藝者とやら、身請けとやらをそちが心遣ひ、僅かなれども身共が寸志。

由兵　師弟のよしみに勘十郎樣が。

勘十　みつぐではない、由兵衞殿へ。

由兵　いやそれは。

勘十　ハテ役に立てば身が悦び、此の後とても遠慮に及ばぬ。

由兵　有難う存じまする。

勘十　梅堀の宅へ尋ねて行かうと思ひしに、こゝで逢うたは時の幸ひ、身共は屋敷へ。

由兵　左樣なれば勘十郎樣。

勘十　いやなに、隼人殿の狂歌は何んとやら言うたなう。

田兵　堪忍のなる堪忍が堪忍か、ならぬ堪忍するが堪忍。

ト頭巾へこなし、勘十郎思入あつて、

勘十　おゝ、その通り。

ト唄になり思入あつて勘十郎花道へはひる。由兵衛後を見送り金を頂き思入あつて上手へはひる。後流行唄、通り神樂になり、花道より小梅、世話女房好みのなりにて出る。後より源兵衛着流し竹繖なりにて出て來る。

源兵　ヲヽイ、モシ〳〵梅堀のお内儀〳〵。（ト呼びながら出で、）

小梅　私のことでござんすかえ。（ト振り返り、）おや、誰かと思うたら、お前は源兵衛さん。

源兵　小梅坊久しく逢はなんだた。

小梅　久しうお目にかゝりませぬが、お前もいつもお替りなうて。（ト云ひながら舞臺へ來る。）

源兵　まあ〳〵、爰へかけたがよい。

小梅　いえ、私やちと心も急けば。

源兵　お前も今日は三圍の稲荷様へお參りか。

小梅　稲荷様へお參りの序に、一寸大黒屋へ行かねばならぬ。

源兵　それは丁度いゝ、おれも大黒屋へ行かにやならぬ、まあ爰へかけたがよいが、さうしてなにぞ用か。

小梅　アイ、こちの人に用事があつて。

源兵　やあ。

小梅　サア由兵衛殿に、モシ私や前の藝者と逢ひ三年後に嫁入して、今では梅堀の梅の由兵衛が女房小梅でござんすわいなあ。

源兵　はて梅盡し面白い、おれも源兵衛堀の源兵衛と言はれては、ちつとは男も賣つたもの、藝者の時から惚れ抜いてゐる小梅、いや由兵衛が女房になつたとて、さう素氣なくせずと、まあ一服のんでもあんまり罰も當るめえぞ。

小梅　エヽ、有難うござんすが、お前も粹のやうにもない、附けて下さんせいな、昔からぬ煙草といひ煙管迄。

源兵　なんの煙草は薄舞、煙管は村田よ。

小梅　お前は矢張吉原へお通ひであらうな。

源兵　今ぢや世界が下つて前のやうにはねえのよ。（ト此の内小梅煙草を付け、源兵衛へ遣る。）これさ野暮め、拭かいでもいゝ事に。

小梅　源兵衛さん、ゆるりとこれに。（ト行かうとするを引きとめて、）

源兵　これさ、その樣に急かずともいゝぢやねえか。

小梅　いえ、こちの人に急に逢はねばならぬ。

源兵　ハテ、男の頼んで居る所へ、女房の行くもまづいものぢや。

小梅　エヽ。

源兵　おれと違つて由兵衛は男がいゝ故、藝者が惚れるわさ、今日も大黒屋での、其の藝者を連れて樂しんでゐるであらうよ。

小梅　ムヽ、そんなら此方の人は、情婦がござんすかえ。

源兵　こなさんは知るめえが、額の小三と云ふ美しいまだ新米の藝者、吉原中へ浮名が立つてゐる、それを知らぬとは、ハヽヽヽヽ、とんだ事だ。

小梅　まあ〳〵待つて下さんせ、なんと云はしやんす、此方の人由兵衛殿が、あの藝者の小三とやらに。

源兵　はて、町内で知らぬは亭主ばかりなりサ。

小梅　ム、それで解めた、小三と云ふ文の來るは此方の人が。」

ト こなしあつて云ふ。源兵衛煙草をのみながら、

源兵　梅の由兵衛に二人の女房、小三小梅と悋氣の炎焔。

小梅　えゝ、さういふ事とは今まで知らず。

源兵　梅の由兵衛に二人の女房。（ト源兵衛小梅と顔見合せ。）

小梅　ホヽヽヽ、私とした事が、源兵衛さんに水を向けられ思はず知らず。

源兵　これさ眞實の事だ、是が嘘なら此源兵衛二度と廓へへひるめえ。

小梅　イエ〳〵、それでも。

源兵　おれが此方に惚れてゐる故、由兵衛の仲を割かうと小三が事言ふと思ふも、こりや尤も、女の心で嘘と思ふは無理はねえが、源兵衛がいふ事嘘か實か、是から大黒屋へ行つて、とつくり樣子を見たがよい。

小梅　アイ〳〵、こりやさうしませうわいなあ。

源兵　たとひ行つても、小三が樣子を糺すまでは隱れてゐやれ。

小梅　そんなら源兵衛さん。

源兵　小梅おれと一緒に。

小梅　合點でござんす。

源兵　さあ、から來やれ。

ト小梅帶をしめ上げる。源兵衛立ちかゝるをよろしく知らせにて、通り神樂、流行唄にて此の道具ぶんまはす。

大七座敷の場。本舞臺見附暖簾、上の方折廻し障子屋體、いつもの所へ枝折木戸を出し、すべて向島大七の模樣、賑かなる流行唄にて道具納まる。と奥より小三金五郎の胸倉を取り、

小三　まあなんぢやあらうと、ちよつと來て下さんせいな。（ト言ひながら出る。）

金五　小三、見苦しい男の胸づくしをとつて、まあこゝを放せ。

小三　金五郎さん、お前口説どころぢやござんせぬ、奥へ來てゐる伴五郎が私を身請けすると言うて、源兵衛諸共親方さんと相談、此の間から私が氣を揉んでゐるゆゑ、最前由兵衛に逢うたゆゑ此の事とは思へども、いろ〳〵と世話になる上、また身請けとは何うも云はれず此の事をお

前から。

金五　それぢやというて氣の毒な、せめて手附なりと、おれが調へてと思ふが、昔と違ふ今の身の上、僅かの金にさへ手閊える。

小三　身請けの高は二百兩とやら。

金五　せめて百兩、あゝ誰ぞ、

小三　貸してくれる人はないかいなあ。

ト兩人當惑のこなし、此の内花道より十平次着流し浪人者のなりにて出で、門口に窺ひゐて、此の時ずつとはひり、

十平　其の金身共が用達て申さう。

二人　ヱヽ。（トびつくりこなしある。）

十平　あいや其方には御存じあるまい、なれど手前は能く存じて居る、金谷金五郎殿、僅な金子に差支へ當惑の樣子、幸ひ拙者持合はせし金子二百兩。

ト金包を出す。兩人見て不審さうに、

小三　アノ、此の金を金五郎さんへ。

十平　心置きなく遣ひめされ。

金五　無ければならぬ金の手詰め、貸さうとおつしやるは忝いが、ついにお目にかゝり申さぬ、近附でもない私へ。

十平　用達て申すは淺からぬ二人が戀仲、感心いたした拙者も浪人なれども、以前は武士、と申すも表向き、有樣は是が今の渡世でござる。

金五　ヱ、。

十平　いやさ、少々の金子を取引いたして世を渡る浪人者ゆゑ、それ故吉原へ入込み大盡金、又は太夫金を貸して、口錢をとる口入れでござる。

金五　ム、、すりや聞傳へて居る金の世話役、口入とやら。

十平　それゆゑ近附でなくとも、貸附けるのでござる。

金五　えゝ忝い、そんなら小三。

小三　まあ、その金を。

金五　お借り申しまする。

十平　お待ちなされ、お望みなら貸して進ぜるが、金利と拙者が筆墨代の極めは先へ引かねばならぬ

が、始めての得意金五郎殿だけ後での差引、慥かに思へば苦しうござらぬ、まづ一札を書いて遣はされい。

金五　その一札と申すは。

十平　知れた證文、此の通り認め下され。

ト金五郎心得て、硯箱を出して十平次の前へ置く。十平次書きて、

ト十平書を金五郎へ渡す。金五郎その通りをさら／＼と書いて、

金五　して此方様のお名前は。

十平　土手のどぶいや泥地屋六右衛門。

金五　六右衛門とな。（ト書くうちに、）

十次　六右衛門殿へ、金谷金五郎自筆なれば書判でも爪印でも大事ない。

云ふ通りを認め渡し。

金五　是にてよろしうござりまするか。

十平　どれ、よろしうござる、然らば百兩。（ト金を渡す。）

金五　エヽ、忝い、思ひがけない、これ小三。

小三　こんな嬉しい事はござんせぬわいなあ。
金五　時に肝腎のお前様の所はえ。
十平　返さつしやる時分には、此方から受取りに來る。
金五　そんなら其時。
小三　御浪人樣。
十平　お二人、いづれ又お目にかゝらう。
ト唄になり、十平次こなしあつて奥へはひる。小三金五郎思入あつて、
金五　これ小三、思ひがけない此の金が出來たからは、身請けは此の金五郎、なんと嬉しいか〳〵。
小三　こんな嬉しい事はござんせぬ、ほんに思へばあのお方は、二人が仲を結ぶの神さん。
金五　此の悦びにそんなら一寸。
トこなしあつて引寄せる。此前より小梅奥より出かけ樣子を見て、此の時さてはと思入あつて前へ出で、
小梅　ちとお尋ね申しまする。（ト是にて兩人びつくりして）
小三　ハイ、してお前さんは。

小梅　額の小三樣といふ藝者衆は　お前樣でござりまするか。
小三　小三は私でござんす。（ト金五郎の方へ向ひ）
小梅　お前樣はいよ〳〵此の小三さんと。
金五　サア恥かしながら言交はした金五郎、それがどうしましたな。
小梅　今の樣子でお二人ともに、つい一通りの交情ではござんせぬなあ。
小三　アイ恥かしい事ながら、お國で深ういひかはし、此の江戸へ來ても矢張りかはらず。
金五　追附け小三を身請けして、わしが女房。
小梅　そりやこそ私を欺しくさつた。
金五　これ〳〵女中、最前からの樣子といひ、二人が事を委しう聞く此方さんは、
小三　まあ誰方でござんすぞえ。
小梅　はい、これは御免なされませ、私とした事が不作法な、私は梅の由兵衛が女房小梅と申しまするもの。
小三　そんなら聞き傳へた、梅堀の由兵衛殿のお內儀かえ。
小梅　してお前さんは此方の由兵衛殿に、近附きでござんすか。

小三　アイ、不思議に廻り逢うた以前の家來、段々との由兵衞が世話。

金五　小三が緣にて、此の金五郎まで。

小梅　エヽ、そんなら此方の人の以前の御主人、三島隼人樣とやらのお娘御でござんしたかいなあ。

金五　此の江戸へ來て人に欺され藝者の勤め。

小梅　さうとは知らず、アタ憎らしい源兵衞づらめが。（ト奥へ思入、）

金五　外ならぬ由兵衞どのゝお内儀の、

小三　小梅さん、此の上ながら、

兩人　お頼み申しまするぞえ。

小梅　これは〳〵御挨拶痛み入ります、こちの人の大事の御主人なれば、私も及ばずながら。それはさうと由兵衞殿は。

小三　奥の座敷でお前と一所に、私もちよつと。

小梅　そんならお慮外ながら。

金五　わしは親方に逢うて、今の金を身請けの手附に。

小三　さうして下さんせ。（ト小梅思入あつて、）

小梅　ほんに思へば源兵衛づらに誑かされたが腹が立つ、がようまあ此方の人に先へ逢はなんだなあ。

小三　エヽ。

小梅　いえ、どれ由兵衛殿に。

ト道行目になり、小梅小三金五郎奥へはひる。後へ源兵衛伴五郎久庵十平次出て來り、

源兵　どうにか目算通りに、

十平　まんまと首尾よう、金五郎にあの百兩。

源兵　彼奴が來れゝば、皆ふてう分ぢやや。

久庵　そりや忝い、金が出來たら天眼鏡を買はねばならぬ。（ト天眼鏡を出して見せる。）

伴五　時に源兵衛、先達て預けて置いたあの手向山の色紙、急に賣拂うて小三が身請の。

源兵　はて氣遣ひさつしやるな、わしが預つてゐる色紙は千葉家の重寶、野暮な盗みもの、滅多に世間へ出されぬ品、それぢやによつて手を廻して賣拂ひ、金さへこしらへたら小三が身請けもわしが呑込んでをりまする。

伴五　それがどうぞ今日の内に。

源兵　たとひ金がなくても源兵衛堀の源兵衛親分を捉へて、鐵壁押しに押付けても身請けはお前様にさせますするわいなう。

久庵　まあ先生に任せて作五郎様。

作五　さう行けば忝い。

トバタ〜〜にて、奥より亭主小三を引立て出る。

小三　親分さん、こりやお前何をさしやんすぞいなう。

亭主　何をするとはこれ金五郎様、お前は〜大それた人ぢやの。

金五　親分今奥で渡した身請けの金、なんでおれが大それた事をした。

亭主　その受取金は是此通りの、い、い、い、みんなどうみやく小判、こりや贋金ぢやわえ。（ト金を出して金五郎に見せる。）

金五　なに、その金が。（ト取って改め見て、）やゝこりや是贋金、ムゝ。（トびつくりこなし、）

小三　えゝ、そんならそのお金は。

金五　ムゝ、いやなに御浪人、ちよつとお目にかゝります。

十平　身共になんぞ用かな。

金五　近頃卒爾ながら、最前お借り申した百兩の金は、これ此の通り。（ト金を十平次に見せる。）さあよもや此の贋金をお借しなされう筈はございませぬが、こりや何んぞの間違ひで。

十平　これ〳〵金五郎、成程金子御用達申したが、身共の貸したは正眞正銘の實の小判。

金五　それにまた、此の金は。

十平　どれ見せやれ。（ト取って見て慮とびつくりなし、）ヤヽヽヽ、ほんとにこりや贋金小判ぢや、これ金五郎、わりや顏に似合はぬ恐ろしい事をするなう。

金五　なんと言はつしやる。

十平　いやさ、身共より借りた正眞の小判を其方ですりかへ、その言ひ譯けで返へさぬのか、こりや慥かな一札書いて、砂にする氣かそりやならぬ。

亭主　これ金五郎樣、此の小三が身請けはどうするのぢや。

金五　えゝこれ。（ト十平次を見てこなし、伴五郎出て、）

伴五　こりや〳〵、親分小三が身請けは身共がいたすぞ。

亭主　さやうなれば其の金子を。

伴五　いやさ、その金は。（ト源兵衞の顏を見る。）

源兵　身請の金はおれが渡す、此の源兵衛が渡す、親分言ひ分はあるまいな。

小三　いゝえ私の身請けは、矢張金五郎さんでござんすぞえ。

亭主　でも、そのやうな金では。

金五　いやそれは。（ト十平次にきつとこなしあつて、）親切らしう金を貸して、こりやおれをば。

十平　盗人猛々しいと、吐をひろぐ金五郎、いつその事。

ト引付けようとするを振拂ふ。小三止めてちよつと立廻りにて十平次兩肌脱ぐ、下に襤褸を着てゐる。金五郎小三見てびつくり、

金五　やゝ、そのなりは。

十平　何を隠さう、おりや此通りの乞食非人ぢや。

小三　そんならその非人が。

十平　金谷金五郎様、見るかげもない乞食非人の金を借りて返さずには置かれまい、さあ貸した金をどうぞ御慈悲に返して下されい。

金五　さあそれは。

源兵　金五郎、こりや乞食の金を借りたに違ひはないか。

十平　何んの逢ひがあるものか、慥かな一札。
金五　見す〳〵こりや、うぬ。
十平　贋か眞正かなぜその時に改めぬ。
金五　さあそれは。
十平　金を返すか。
二人　さあ、
三人　さあ〳〵〳〵、
十平　どうするのだ。
　　トセリフいろ〳〵ある。此の時一間の障子を引きぬき、内より由兵衞煙草盆を控へ、煙草を喫みながら。
由兵　それ百兩。（ト前へ投出す。皆々見て。）
皆々　や、梅の由兵衞。
金五　やあこれは由兵衞殿。
由兵　はて、何んにも言はずと、その金濟まして仕舞はつしやりませ。

小三　さうぢや。（ト金を取上げ、）これ金五郎様、此金ちやつと。

金五　いや／＼、此の金遣うては。

小三　大事ござんせぬ、由兵衛が志、早う濟して下さんせいなあ。

金五　それぢやというて。（ト由兵衛が顔を見る。由兵衛返せとこなし、）えゝ忝い。（ト金を取上げる。此の内源兵衛、）

源兵　流石の由兵衛、梅堀の通り者程あつて切れるわえ。

久庵　おゝ切れる／＼、追付け小三と金五郎が仲も首尾よく切れるであらう。

小三　えゝ。（トこなし。金五郎十平次が傍へ寄つて、）

金五　騙りと知つて騙り取られる百兩、さあ受取れ。（ト突き附ける、十平次こなしあつて、）

十平　おゝ受取らう、貸したものを受取るのに、不思議はねえわえ。

ト金を受取り衣裳の袖をとつて小判を改め、包んで懐中へ入れる。

小三　金受取らしやんしたら、最前の一札を取らしやんせ。

十平　一札とは。

金五　おゝさうぢや、おれが書いた預り手形を。

十平　そりやこゝにある。それ證文。(ト金五郎に渡す。開き見て、)

金五　菅家手向山の色紙慥かに受取り申候處實正也、然る上は御頼みの通り此方にて密かに賣拂ひ、金子は後より遣はし申可候、念の爲め色紙受取一札仍如件。

皆々　やあ、それは。

十平　南無三違つた。

　ト取りにかゝる。金五郎は付廻す。小三隔てる。

金五　違うても此方の事。

十平　でも。

　ト小三を引き退ける内、由兵衛一間よりつか〳〵と出て、一札を取つて、

由兵　菅家手向山の色紙慥かに受取申候處實正也、然る上は兼ねて御頼みの通り密かに賣り拂ひ申可候、金子は後より遣はし申可候、念の爲色紙受取一札仍而如件、件印殿へ源印判。

十平　それ讀まれては。(ト左右よりかゝるを突き退け、)

由兵　ハテ、百兩にはよい掘出し物。

兩人　いや、それは。(ト又かゝるを立廻り、兩人を見事に投げる。)

ト頭巾を取り尻をからげる。源兵衛つか〳〵と出てちよつと拔きかけるを由兵衛付け廻して、伴五郎久庵かゝるを立廻つて投退け、十平次逃げるを襟上捉へて引付けきつとなる。金五郎小三は久庵伴五郎を隔てる。由兵衛十平次を引付け、

由兵　今を始めの旅衣、よいやまかせとな。

由兵　ヤイどぶ乞食め、合點の行かぬ此のざまで、千葉のお家の重寶の手向山の色紙をば渡した受取り、此の一札の伴印源印の本名を、うぬが口からほざかせずば、慥かにそれと知れてはあれど盜賊の證據、さあどうだ。

十平　いやさ、それは。

由兵　ぬかさにや、うぬからして。

ト一札を持つて十平次を色々と責める。此の内源兵衛思入あつて、久庵の天眼鏡を取つて一札の上へ翳し日をうつす思入にて、一札を燒き捨てる。皆々びつくりして、

小三　それ〳〵、大事な一札を。

金五　なぜ燒捨てた源兵衛殿。

源兵　ホイ、思はぬ粗相。

由兵　大方知れた色紙の行衛、もう此の上は。

ト立上りきつとなる。此の時奥より以前の小梅つか〱と出て、頭巾を取上げ由兵衛へ見せて

小梅　これ此方の人、お前は此の頭巾を忘れさしやんしたかえ。

由兵　ヤ。

小梅　サア、此の頭巾は一生の守り、此の内には。（ト差付ける。由兵衛思入あつて、）

由兵　ム、、此の場の仕宜のならぬ堪忍するが堪忍。

小梅　心一つにとり納めて、

由兵　これといひ、場所というても大切な。

小梅　サア、よもや唐天竺へも渡ろまい、サアなん時でも。

由兵　おゝ、さうぢやなう。

ト尻からげを下す。小梅こなしあつて。

十平　嬉しやおれが身の上は。（ト立ちかゝるを、由兵衛手早く有り合ふ縄にて引括りて、）

由兵　大事の代物、金五郎様。

金五　おゝ合點ぢや。（ト引摺ゑる、源兵衛皆々顔を見合はせ、）

源兵　ムヽウ。（ト落付けるこなし。亭主前へ出て、）
亭主　最前からこゝに待つて居りましたが、小三が身請けは。
小三　親方さん、外へ行けばわしや生きてはゐぬぞえ。
小梅　滅多に死なさぬ、身請けは此方へ。ナア此方の人。
伴五　イヤ此の伴五郎が、ナア源兵衛。
源兵　ハテ彼方の分り次第。
亭主　何方でも、兎角お金の早い方へ。
皆々　さあ、その金は。（ト由兵衛思入あつて、）
由兵　女房、その頭巾を。
小梅　アイ。（ト渡す。由兵衛取つて、）
由兵　金五郎様お案じなさるな、小三殿の身請けはいたしまする、いやなに親方、ちつと顔を貸して下され。
亭主　あの、私にか。
　　　トこれを合方になつて、由兵衛右の頭巾を取つて思入あつて、

由兵　才兵衛どの、此の頭巾はちつと樣子あつて由兵衛が爲めには一生の守り、それで不斷は滅多に脫がねども、金の手詰めに脫いだ頭巾、幸ひあり合ふ錠前ぴんと卸した此の頭巾は、身請けの手附け調へて引替へるまで、預つてくれまいか。

亭主　成程、今江戶中で顏の知れた梅の由兵衛殿、こりや面白い、金の代りに預りませうか、して何時頃まで。

由兵　明々後日まで。（ト此の內小梅思入あつて、）

小梅　今日は正月の二十日、明々後日は二十三日の晚まで。

由兵　屹度百兩の金調へて、頭巾を此方へ取戾す。

亭主　ようございます、吞込みました。

由兵　店へ屹度預けましたぞや。

亭主　畏りました。

久庵　これ〳〵源兵衛先生、彼方へ頭巾で身請けが出來たら、此方はこりや足袋でなと小三が身請けを、ナア伴五郎樣。

伴五　おゝさ、足袋でならずば、パツチでも大事ない。

源兵　はて無駄を言はずと默つてござれ、掛合はずとこけて來る小三が身請け、二十三日の晩まで
ぢや、これ後へ廻つて思案があるわえ。
小梅　こちの人、あれまた。（ト源兵衞へこなし、）
由兵　はて、彼方に思案があれば此方にも證據の一札、假令燒いても後日に屹度。
源兵　すりや何時なりとも。
由兵　源兵衞堀と、
源兵　梅堀と、
伴五 久庵　由兵衞。
金五　源兵衞。
由兵 源兵　ム、。
小梅　これ。（ト立寄り、思入ある中へ小梅はひる。）
由兵 源兵　かさねて逢はう。
ト唄になり皆々思入、由兵衞小梅小三金五郎十平次を引立て奧へはひる。源兵衞伴五郎久庵殘り。
伴五　源兵衞、其方が働きで一札は燒捨てたれど、盜賊は十平次、われ〳〵が所持するといふ事を。

久庵　さうぢや、由兵衛めがかんづいた様子。

源兵　はて大事ない、色紙の事はしらばツくれて覺えないと言ひぬく、又小三が身請けも頭巾を預ける程の仕宜、三日の内には金は出來ぬ。

伴五　然らば半時も早く彼の色紙を。

源兵　さあ待つてはをられぬ、これから直ぐにこなたも同道で色紙のせいらく、久庵は後に殘つてどぶ六めにふけつて來いと、ナア。

久庵　それも合點。

源兵　伴五郎樣はわしと一緒に。

伴五　いや、まア一度ちよつと小三に。

源兵　ハテまあござれといふに。

ト唄になり皆々はひる。知らせにて此の道具ぶん廻す。

大七裏かゞりの場。本舞臺向う一面の板塀、よき所へ切戸口、屋根付きの枝折門、すべて大七裏かゞりの體。時の鐘、仕方にて道具納まる。と枝折の内にて、

小梅　もうそれには及びませぬ、よしにして下しやんせ。

ト言ひながら出る　後より男ぶら提灯を提げて出で、

男　もう日が暮れました、是非土手から吾妻橋まで送りませう。

小梅　忙しいのに大事ござんせぬわいなあ。

男　イエ〱、由兵衛様に言譯けが濟みませぬ。

小梅　そんならお前送つて下さんすなら、とてもの御苦労ついで、吾妻橋を渡つてこの文を。（ト男へ渡す。）

男　弟淺次郎殿へ、姉小梅より。

小梅　サアわしが弟が藏前に奉公してゐまする、そこへ其の文を届けて下さんせ、委しい樣子は道話しませう。どうぞ行つて下しやんせ。

ト流行唄になり、小梅男を連れて花道へはひる。あとバタ〱になり十平次久庵出て來り、

十平　久庵、源兵衛親方の方へか。

久庵　さうぢや、その縄を。

十平　おい解いてくれや。

ト後ろを向く。繩を解くところへ金五郎出で、

金五　座敷をふけつた乞食め、働きやがるな。

十平　やあ、わりや金五郎か。

久庵　邪魔な二才め。

十平　やつてしまへ。

ト兩人金五郎へ懸るをちよつと立廻つて、見得より跳への鳴物になり、いろ〳〵立廻りあつてトド金五郎十平次を追ひかけて花道へはひる。久庵此前より立廻りの内うろ〳〵して上手の松の木へ登り、窺ひ居て此の時降りようとする　又足音するゆゑ降り兼ねるところへ、内より小三小糸お筆出て、

小糸
お筆　小三さん、どのやうに尋ねても金五郎さんは、ゐやしやんせぬわいなあ。

小三　さうして惡者共も見えず、こりや由兵衛に言はねばならぬ。

ト此の内小糸上手の立木へ目をつけ久庵を見て、

小糸　あれ〳〵、松の木に誰やら居るぞえ。

トこれにて久庵袖にて顏を隱す。

小糸
お筆　ほんに、あれは慥かに。

小糸　それ〳〵、猿であらうわいなあ。（ト松の木の上にて。）

久庵　キヤツキヤツ〳〵。（ト猿の眞似をする、三人思入あつて、）

小三　いや猿ぢやござんせぬ。ありや烏ぢや〳〵、なあ、お筆さん小糸さん。

小糸　おゝ、ほんにありや烏ぢやさうなわいな。

久庵　カア〳〵カア。（ト烏の眞似をする。）

お筆　いや烏ぢやござんせぬ、鳶ぢやわいな。

久庵　ピイヒヨロ〳〵〳〵。（ト又鳶の眞似をする。）

小三　いえ〳〵、ありや鳶ぢやない、見やしやんせ、頭の圓い所は鮹ぢやわいなあ。

小糸　ほんに、鮹ぢやわいなあ。

小三　ありや鮹ぢや〳〵、河岸で見せる鮹男ぢやわいな。

ト久庵見世物の眞似をしようとしてゐる。

三人　よう〳〵、鮹樣々々。

小糸　鮹男も慥に鳴くであらうわいなあ。

久庵鮹に困り詮方なしに、

久庵　たこ〳〵。（ト皆々笑ふを三人囀く。）
小糸
お筆　そんなら由兵衛さんに、さうぢや。（ト奥へはひる。久庵びつくりして落ちる。）
小三　やあ、お前は久庵さんか。
久庵　小三坊か。
　　　トかゝるを両人立廻つてゐるところへ、由兵衛提灯を提げつか〳〵と出て、久庵を突廻す。
久庵　やあ由兵衛、われを。（トかゝるをちよつと立廻つて、下手の井戸へ打込むを木の頭にて）
小三　それでは。
由兵　構はずござりませ。
　　　ト小三の手を取つて由兵衛花道へはひるを、よろしく、
　　　ひやうし　幕

二幕目

米屋の場
同返し塀外の場

役名　丁稚長吉、信樂勘十郎、角力長五郎、米屋佐兵衞、女房小梅、手代喜介、同權七、娘お君、下女お竹等。

藏前米屋の場。本舞臺三間の間常足二重、向う眞中暖簾口、上手上下戸棚、しも手茶壁、上の方一間折廻し障子屋體、下手帳場格子、帳簿、いつものところに門口、此外大格子、すべて藏前米屋の體、爰に權七帳面を控へ居る。喜助十露盤を置いてゐる。平舞臺に長五郎田舍角力の前髮にて俵を差上げてゐる。稽古唄角兵衞にて幕あく。

喜助　八百七十目。

權七　八百七十目。

喜助　二百三十目。

權七　二百三十目。

長五　こりや〳〵どつこい。（ト俵を差上げ投出す。）よいやさ。（ト相撲に勝つた見得をする。）

喜助　これは情ない、長五郎さんの力持で大事の帳合ひをあへられてしまつた。

權七　なんぼ稽古をしても、雷電や谷風のやうな角力には、生れかはつてもなれまい。

兩人　ハヽヽヽヽ（ト笑ふ。長五郎これを聞きて、）

長五　ヤイ〳〵、權七喜助そりやなにを言ふのぢや、おれが好んで角力取にならうと思つてゐる此長五郎、名乘はのべ紙と付いてある、此の秋の相撲から番附へ入れて貰つて土俵へ上つて見せる、夫故凝つて稽古をしてゐるを、何んでそんな事を言うて笑ふのだ。

權七　いや笑ふのではないが、所詮かたはぬ事ぢや、よしにしたらよからう、たう喜助。

喜助　ヲヽ、さうぢや、長五郎さん、お前江戸の角力へ出ようより、ちつと違いが小人島の關取にならつしやれ。

長五　うぬが〳〵、主同然のおれを澤山さうに吐かすが、在所にゐた時分から下地のある長五郎、追付け關取になつて見せう、喜助でも權七でも相手は嫌はぬ、一番揉んでやらう、來い〳〵。

喜助　こりや面白い、米屋に奉公するものが、まんざら無手ではない、權七行け〳〵。

權七　一番揉んで見ようかい。

長五　大地へ埋めでやらう、用心して、さあ來い〳〵。

ト長五郎しこを踏む。權七を相手に角力をとる。喜助行事のやうになり、長五郎權七兩人いろ〳〵あつて、トヾ權七長五郎を見事に投げる。喜助權七わつと笑ふ、長五郎むつとして、

長五　なんぢや／＼、今のは怪我の張合、誠におれや此の間からちつと色事に凝つてゐる故、それで今のやうに、はて爭はれぬものぢやなあ。

兩人　それがほんの負惜しみぢや、ハヽヽヽヽ。（ト兩人笑ふ。此聲にて奥より主人佐兵衞親仁のこしらへにて出て。）

佐兵　なんぢや店先がざわつくが、喜助權七、言付けて置いた勘定はどうぢや、よいか。

兩人　大概片附いてしまひました。

佐兵　そりや早かつた。いや長五郎、慥か娘が奥で尋ねてゐたぞや。

長五　それは大方。（ト思入あつて主人を見て）ハテなんの用ぢや知らぬ。

ト俄かに髮をかき上げる。

權七　これさ長五郎さん、角力取より色取の方がよからう。

喜助　それ／＼滅多無性に此中から。

長五　はて思ひ内にあれば面皰顔に顯はれるぢやなあ。

佐五　なんのことぢや。

ト矢張稽古唄になり、花道より前幕の信樂勘十郎中間を連れ出て來る。後より丁稚長吉、若衆臺丁

稚のなりにて出て來り花道にて、

長吉　勘十郎樣には思ひがけないところで、お目にかゝりましてござります。

勘十　されば〳〵、長吉其方もこりや淺草へでも參詣したか。

長吉　イエ〳〵、下谷の方から廣德寺前の花主場廻りでござりまする。

勘十　身共は又觀音へ參詣の次手、伯父者人をお見舞ひ申さうと。

長吉　それはようお出でござりまする。

勘十　サア同道いたさう、長吉來やれ〳〵。

ト兩人門口へ來り、長吉門口を開ける。佐兵衛見て、

佐兵　おゝ長吉、今戻つたか。

長吉　はい左樣でござります、勘十郎樣がお出でなされました。

佐兵　なんぢや、甥の勘十郎が參つた。

勘十　左樣にござりまする。（ト此の内勘十郎内へはひる。）

佐兵　やれようこそ〳〵、さゝこれへ〳〵。

勘十　然らば御免下されませ。（ト二重へ住ふ。）

長五　勘十郎樣、ようお出なされました。

勘十　長五郎變る事もないか。

長五　まあ〱あれへ。(ト喜助徳七茶煙草盆を持ち行く。)

佐兵　勘十郎はおれが甥、あの長五郎は死んだ婆めが甥、在所にゐたれど去年から此方の內へ來てゐるも、角力になりたき望み、今世話するも婆が遺言、どうぞ關取に。

長五　いやもう親仁樣のきついお世話になりまする、勘十郎樣よろしうお禮を。

勘十　はてつながる緣なれば、假令なにゝなつても隨分出精が肝要ぢや。

佐兵　おれが商賣の米屋、その內に長吉といふ丁稚と長五郎といふ角力、曲輪日記の淨瑠璃のやうなとの噂ぢや、ハヽヽヽ。

喜助　ほんに長吉、花主先の米はどうぢや。

長吉　皆後からいうてやらうと。

長五　長吉、わが身をお君さんが尋ねてゐたぞや。

長吉　なに、それはお前樣の事でござりませう。

長五　へゝ、こいつはちつとちん〱ぢやな。(トこなし。)

佐兵　時に勘十郎、なんと思うて參られた。

勘十　今日は觀音へ參詣ながら伯父者人、（ト懷中より紙包の金を出し）金子百兩先日急に入用あつて借用申しましたなれども、今日御返濟申上げまする、御受取下さりませう。

佐兵　はて伯父甥の仲義理がたい、さう無うても大事ないわさ。

勘十　イヤ〳〵、又御無心申上げまする儀もござれば、先お受取り下さりませう。

佐兵　そんなら慥かに受取りました。此帳箪笥の抽斗へ入れて置きませう。

ト右の金を帳箪笥の抽斗へ入れ、錠前をおろし、長五郎これを見てゐる。勘十郎こなしあつて、

勘十　百兩の金御返濟申した上は、拙者は最早お暇申さう。

佐兵　それは餘り早々、せめて奥へ御座つて酒一つ。

佐兵
喜助
權七　左樣なら奥へ勘十郎樣。

勘十　然らば。如何やうとも、さあ長五郎も一緒に來やれ。

ト唄になり、勘十郎佐兵衞先に皆々奥へはひる、引きちがへてお竹下女のなりにて出て、

お竹　長吉どん〳〵。（ト呼びながら出てあたりを見て、）今聲のしたは慥かに長吉どん、何處へ行かしやんしたやら。

お君　お竹〳〵。（ト呼びながらお君世話娘の振袖なりにて出て、）こゝにゐやるか、最前より尋ねてゐたわいなあ。
お竹　お君さん、なんで御用でござりまするか。
お君　お竹や、昨夜頼んだ物を、かの人に渡してたもつたかや。
お竹　まあ長五郎さんには渡しましたが、肝心の長吉殿には昨晩から間が悪うてまだ渡しませぬ、けさから花主廻りで留守でござりましたが、今聲がいたしましたから、渡さうと思うてそれで尋ねてをりますわいなあ。
お君　エゝモ長五郎さんは大事ないが、早く長吉に渡してたもいなう。
お竹　ハイ〳〵合點でござります、そんなら奥で間を見合はせて渡しませう。

ト言ひながら奥へはひる。お君こなしあつて、

お君　どうぞ私が思ふやうに、南無觀音様々々々。〳〵

ト手を合はせ拜むこなし。此の内奥より出て來り、

長五　お君さん。（ト恥かしきこなしにて言ふ）
お君　エゝ。（トびつくりこなしあつて）長五郎さんかえ。

長五　アイ。

お君　ようお出なさんしたな。（トこなし。）

長五　お出ぢやがどうだえ。

お君　長五郎さん、昨夜竹に渡したものが屆いたかえ。

長五　そりやあの、長たらしい此の文かえ。（ト懐中より出して見せる。）

お君　あいなあ。（ト恥かしさうに顏を隱す。）

長五　なんの、恥かしい事があるものか。

お君　それでもお前、あのやうな文をお前讀んでかえ。（ト長五郎無筆のこなしにて、）

長五　讀めまいか、おりや在所にゐる折寺屋へ五年も行つた者ぢや。

お君　さあ讀んで下さんしたら、誰にもいうてお呉れなえ。

長五　誰にいふもので。

お君　そんならあの通りぢやぞえ。

長五　まあゝの通りぢや、あの通りはあの通りぢやが、なんとあの通りを口で一遍で言うて聞かさんせ。

お君　え丶もあのやうな事を恥かしい、口でどうまあ言はれるものぞいなあ。
長五　なんの言はれぬ事があるもので、どうでそりや長吉のやうにはあるまいが。
お君　又そんな事を長五郎さん、見やしやんせいなあ。

ト疊へ指で書いて見せる。長五郎讀めぬ故いろ〳〵とこなしある。

お君　ぢやわいなあ。
長五　ぢやわいなあで解るものかいなあ。
お君　え丶、どう讀んでぢやわいなあ。（ト又疊へ書いて、）さうしてからうぢやわいなあ。
長五　さあ、それでも。
お君　これいなあ。（ト又書からとするを、）
長五　エ丶もう書くまい〳〵、女子のものを書く程面倒なものはない、よう喋る口を持つてゐて、滅多無性に書きたがる女ぢやなあ。
お君　それでも人が聞くわいな。
長五　聞いたらどうぢやえ、誰がなんと言うてか。
お君　い丶え。

長五　そんならぐづ〳〵した筆先より、一挺とぼすが近道ぢや、さあちよつと。
お君　えゝもう、知らぬわいなあ。
長五　得心ぢやないか。（ト傍へ寄る。）
お君　それでもあれ、誰やらが。
ト擦り抜けようとするを捉へて、彼方此方と二三度追廻す。此の時内より權七出て來る。長五郎夢中にて權七を捉へる。
權七　こりや何をするのぢや。
長五　えゝ（ト顔を見て、）
長五　やあ、權七か。
權七　こゝな長五郎さん、勘十郎様が呼んでぢや、さあござりませ。
長五　いや、おりやこゝでお君さんと、地取りをしかけてゐるのぢや。
權七　まあ、ござりませ。（ト無理に長五郎を奥へ連れてはひる。お君思入あつて、）
お君　なんぼこちの爲めぢやとて、あの憎らしい長五郎づらに、えゝも、どうしようぞいなあ。
トぢつと思入、なまめきやうの合方になりて、奥より長吉芝居の番附を見ながら出て來る。お君長

吉を見て、

お君　やあ長吉か。(ト傍へ寄るのを、素知らぬ振にて、)

長吉　ハイお君樣。(ト矢張り番附を見てゐる。)

お君　そりやなんぢやいな。

長吉　奧の硯箱にござりました故、見てをりますするわいな。

お君　わしにも見せやいなう。(ト番附を取り見て、)ほんに此の狂言の時、父さんやわがみと一緒に見に行つたなう。

長吉　ハイ、見に行つたさうでござりまする。

お君　此狂言は面白かつたぢやないかいなう。

長吉　お前樣は面白うござりませうが、私は氣が揉めてござりまする。

お君　ざあ、其方の氣の揉める事故に。

長吉　お君さん、お前をお賴み申しました事、聞えてござりまするか。

お君　そりや一昨日のことであらうがな。

長吉　サア、それぢやによつて私はな。

ト言ふ内、奥よりお竹出て思入あつて、

お竹　おゝ嬉しや、長吉どんこゝにかや、お君様も一緒に。

お君　よい所へお竹、昨夜頼んだ文はどうしやつた。

お竹　矢張爰に。（ト懐中より出す。お君取つて、）

お君　これ長吉、どうも口では言はれぬ此文、とつくり讀んでたも。

ト長吉の前へ置く。長吉取つて、

長吉　そんなら此の文。

お君　お竹おぢやゝ、（トお竹を連れて奥へはひる。長吉こなしあつて、）

長吉　口で言はれぬ此文。長様まゐる君より。（ト封を切つて、）今更文とは人間の関も恥しながら、不束な我身事を是までとやかく御申し下され候へども、人目の関に隔てられ、態と御返事もいたし不申候、誠に長吉と訳あるやうに御申し被成候へども、恋に上下の隔ないとは申せども長吉は奉公人の事なり、私はさら／＼左様の事にはござなく候、必ず／＼長吉事を御念におかけ下されまじく候、此上はそもじ様と二世も三世も替らぬ女夫と存候へば、そもじ様にも御心の程御替らせなきやうに頼み上まゐらせ候、また／＼首尾を見合せ御目もじの上、ちと／＼御

猶申上度事御座候へばあひたく候、目出度かしこ、長五郎様まゐる君より。

ト讀む内いろ〳〵こなしあつて、又繰返し讀むことあつて、

ム、、そんなら書出しの長様まゐるは長五郎の樣か、偖てはお竹が粗相に長五郎へやる文を間違へて、大方わしへは切文でがなあらう、さうとは知らずこれまで互に言ひ替し、親切らしい事も皆空言か、わしを欺して殊に又姉者人の據ない無心、その事を頼んでおくに長五郎へ共樣に、えゝ腹が立つ〳〵、思ひかへられたより姉者人の頼み、百兩の金が今宵中に。こりやまあ、どうせうぞ。

ト右の文を繰返し見て、いろ〳〵思入あつて、

さうぢや所詮金の出來ぬ時は、姉者人に言ひ譯けなし、いひかはしたお君樣と。さうぢや。

ト思入あつて奥へ行かうとする。勘十郎、ずつと出て、

勘十　長吉どうしやつた。

長吉　えゝ勘十郎樣。

勘十　伯父者人の平強ひにて相頼まうと思つたに、長吉は逃げをつたな、ハ、、、、いやもう甚だ酩酊、まあこれへ來やれ。

長吉　私は奥へちつと用が。

勘十　ハテ苦しうない矢張是にて。

長吉　デモ私は。

勘十　ハテマア、下にゐやれと申すに。

ト勘十郎酒に醉ひたるこなしにて、無理に長吉を引きすゑる。

勘十　それにあるは何ぢや。（ト以前の番附を取つて、）こりや芝居の番附ぢやな、こりや長吉。

ト呼べどもうつとり奥を見てゐるゆゑ、

勘十　これさ長吉。（ト大きく言ふ。これにて長吉心付き、）

長吉　ハイ。

勘十　此の芝居と申すものは、凡て世間の流行事をとり仕組み狂言にする、中にもお染久松八百屋お七、古手屋八郎兵衛又は油屋の十人切、皆根が色よりその身を果し、恥をさらし、親兄弟に難儀をかけるも、いかに若いとて芝居をつい慰みとばかり見るは無駄といふもの、勸善懲惡それぞれに理非を分つて見るはこれ萬代不易、太平の道具四書五經よりその合點のゆく近道の學問、其の身に引較べて、兎角謹むが肝要、それをうか／＼後先の辨へなく、腹立ちまぎれ欺さ

れての無分別に切り、サヽ切狂言にはつゞまる所は惡人亡び、善人世に出る六段目の思案が大事であらうがな。

長吉　思ひませば此の身にも、端折りかゞみの兄弟は、たつた一人の姉者人。

勘十　梅若を尋ねて班女が物狂ひ、哀れな面白い淨瑠璃ではないか。

　　ト長吉にのみこませる。これにて合點の行きしこなしにて、

長吉　勘十郎樣の今の御異見有難うござりまする。芝居の話に長吉もよう合點いたしましてござりまする。

勘十　合點が行つたか夫は重疊、なにを言ふやら醉ひまぎれ、必ず氣にかけやるな。

長吉　ア勿體ない貴方のお志、有難う存じまする。

勘十　これも外ならぬ伯父の家、その奉公人の長吉、奉公大事に辛抱すれば育ちと言ひ人柄と言ひ、好み合うた仲なら末々はお君が聟、いやさ向ふ獅子には矢も立たず逢うて語らば心も解けん、戀はわびしさにあり、又これからはとつくりと俳諧の話、神祇、釋經、戀の句の合點の行くやう奧にて語らん、長吉來やれ。

長吉　はゝい。

勘十　はて來やれといふに。

ト雨ノ思入にて唄になり奥へはひる。後合方になり以前の權七喜助長五郎三人出て來り、

喜助　長五郎、なんぼお前さんが味噌をあげても、あの娘が得心してたまるものか。

權七　まだ長吉なら不斷の樣子と言ひ、どうか知れぬがお前とは合點が行かぬ。

長五　合點が行くか行かぬか、こりや昨晩、かういふものを持たしてよこした。

ト懷中より文を出して、

長五　その時の言傳で、必ず誰れにもいうてくれぬなというてよこした。

喜助　成程こりや文ぢや〳〵。

權七　どれお見せなせえ。

長五　何を古の押覗きな、分りもせぬ癖にわいらが見たとて胡椒の丸呑み、讀めやせまいがな。

喜助　米屋の手代を勤めるものが、女の文ぐらゐ讀めねえでどうするものか。

長五　そんなら本當に讀めるかよ、あのお娘は大抵の者ぢやないぞよ、それに所々に笠のない虚無僧のやうな譯や、總の方には釣針のやうなものが出てあるが、それでも讀めるか。

權七　はて讀めねえでどうするものか、二人して讀んでやらう。

長五　口の内でぼちや／＼讀みはならねえぞ、聞えるやうに讀んで聞かせろよ。

喜助　どれ／＼。（ト取りに行くを長五郎こなしあつて、）

長五　どつこい、澤山ざうに罰が當るわ。二人共肖るやうに戴いたり／＼。

ト兩人の頭の上を撫でる事あつて、

長五　そりや讀んだり／＼。（ト兩人へ件の文を披げて見せる。）

兩人　えゝそれでは倒ぢや。

長五　はて倒にも讀むくらゐでなけりや讀む内ぢやない。

喜助　そこもあるてな。

ト權七文を取つて見て、

權七　なんだか大層濡れてゐる文ぢやねえか。

喜助　これが大方濡文といふのであらうよ。

長五　その筈よ、昨晩から肌身を放さず、臍の上へひつたり付けて置いたもの。

權七　道理こそ、訝な臭ひがすると思つた。

喜助　何々一筆しめし、

長五　そりや笠のない虚無僧だ。

權七　こゝこれはまゐらせ候ぢや。

長五　おゝさうぢや〳〵、たか〳〵感心々々。

權七　誠に昨日は氣の毒な事を聞きまして、癪がおこり案じまゐらせ候。

喜助　長五郎さん〳〵、案じて癪がおこつたとさ。

長五　ハヽア何んの事だ、おれが力持の石で一寸擦りむいた事をそれ程迄に思つてくれるか忝い。

ト長五郎悦ぶこなし。

喜助　どうぞお頼みの事よろしく都合いたしたく、

長五　なにも頼んだ覺えはないが。

權七　まあ〳〵、默つて聞いたり〳〵。

喜助　ほんにこれまで惚れた〳〵と、あたいやらしい色々に口說き候を、幸に厭ながらも長五郎づら。

權七　やあ、おつた事が書いてあるな。

長五　づらぢやたい、長五郎さんぢやねえか、しつかり讀んだり〳〵。

喜助　でも長五郎づら、め、まだめと書いてある。

權七　どれ／＼、後はおれが讀まう、厭ながらも長五郎づらめに態々打解けたやうに見せ、右の事を拵へ度くと存じ、それ故いやらしき文を遣はしまゐらせ候、必ず／＼御心惡しく思召下されまじく候、ヤア長五郎さん、どうやら風が惡くなつて來ましたぜ。

喜助　此の文を昨晩から臍の上に載せて居たとは。

權七　よく臍が宿替せなんだの、序に後を讀まう、根が在所育ちの馬鹿者の長五郎なれば、口先で色色騙し、そもじ樣のお望みをかなへ度思ひまゐらせ候。

喜助　ても酷い書き方ぢやの。

長五　大方からうであらうと思つた、もう後は讀むに及ばぬ、宛名を讀んだり／＼。

兩人　長吉樣まゐる、君より。

長五　やあ／＼、そんなら矢張長吉めであつたか。（トどうとなりぢつとこなし。）

喜助　道理で話が旨過ぎると思つた。

權七　根が在所育ちの馬鹿者とは。（ト兩人長五郎へ指をさし、）

兩人　馬鹿者とは、ハヽヽヽヽ。

ト兩人笑ひながら奥へはひる。長五郎悔しきこなしにて右の文を取上げ見ても讀めぬ故、いろ〳〵こなしあつて、以前の金に心附き、

長五　勘十郎が持つて來た百兩を此の腹癒せに。

ト煙草箱の抽斗の錠前を煙管にてこじあけ、金を出し中へ此文を入れかへ金を懷中に入れて、

長五　あの文で二人のやつを旨い〳〵。（ト此の時奥にて、）

佐兵　はてまあ、もそつとゆるりとして行きやれ。

ト以前の勘十郎先きに佐兵衛お君長吉附いて奥より出て來り、

勘十　いや段々と御馳走忝うござる。

長五　是は〳〵勘十郎樣、お歸りでござりますろか。

長吉　あまりお粗相にござりまする。

勘十　いや又來るであらう、お君隨分無事で。

お君　もそつとお話しなされませいなア。

ト此の内佐兵衛煙草箱を見て、

佐兵　ヤア、こりや煙草箱の錠がこぢ離して中の金が、ヤ、、、、。

ト びつくりする。長五郎わざとびつくりする。勘十郎立歸り、

勘十　こりや滅多には歸られぬわえ。

佐兵　イヤ〳〵、勘十郎は大事ない、主人持ぢや、早う屋敷へ。

勘十　先刻持參の金子紛失とあつては、どうも聞捨てにはなりませぬ。

長五　左樣でござりまする、手前をこぢ離し抽斗の金がないとは大それた泥棒だ、こりや面々吟味を、まあ抽斗を。（トつか〳〵と行き、抽斗を取つて來て中の文を取出し、）ヤ、何やら書いたものが入れてある、おれや恥かしながら無筆ぢや、長吉こゝへ來て讀んで聞かせい。

長吉　はい、そんならそれを私に。

長五　さあ何か知らねど詮議の種になるまいものでもない、なあ親父樣。

佐兵　さうぢや〳〵、長吉ちやつと讀みや〳〵。

長吉　ハイ〳〵。（ト何心なく取つて聞き、）一筆しめし參らせ候、誠に昨日は氣の毒な事聞きまして案じ參らせ候、どうぞ〳〵お賴みのことよろしく都合いたしたく、ほんにこれまで惚れた惚れたとあたいやらしい。（ト讀む內お君びつくりして、つか〳〵と長吉が傍へ來り、）

お君　これ〳〵長吉、滅多に此の文讀んでたもるな。（トこれを長五郎立入りお君を引退け、）

長五　お君さん、お前の構うた事ではない、引込んでござれ。
お君　でも、その文は。
長五　はてまあ、退いておいでなあ。（ト此の内長吉口の内にて文を讀んで）
長吉　ヤヽ、そんならお君様、あのこれを。
お君　長吉合點が行つたかや。
長吉　さうとは知らず最前の。（ト勘十郎を見る。勘十郎咳拂ひする思入。）
長五　エヽ、讀まぬか、長吉後を讀まぬは合點が行かぬ。（ト文を取つて佐兵衛の前へ持ち行く。佐兵衛取つて。）
佐兵　なんぢや、長吉様參る君より。（トこれにて兩人はつとこなし、）そんなら娘と長吉は。
長五　疾からちゝくり合つてをる其の濡文、これが此の抽斗に入れてあるとは泥坊の證據、不義盜人の此二人。（ト長吉を引立てる。勘十郎つか〳〵と寄つて、長五郎を引退け二人　庇ひ、）
勘十　長五郎待つた。
長五　勘十郎様、なぜ止めさつしやりまする。
勘十　此文には何んと書いてあるな。

長五　おれは無筆ぢやによつて讀めぬが、宛名は慥かに長吉樣參る、君より、それが慥かな不義盜人の。

勘十　いや、證據にはなるまい。

長五　とは又何故に。

勘十　もつとも長吉樣參る君よりとあれば、則ちお君より長吉へ送つた文なれど、こりや證據には相成らぬ。

長五　そりや又何うして。

勘十　されば兩人が金を盜みしにせよ。我が名の書いた文をば後日の證據に、これにて詮議いたせよと入置くやうなる馬鹿者があらうか。

長五　でも盜賊の疑ひかゝれば。

勘十　こりや盜人は外にござる。見す〳〵知れた古手な仕組み。

長五　ムヽ、でも二人は不義者、その文を。（ト取りにかゝる、勘十郎長五郎をぽんとかへす。）あいたゝゝたゝゝ、こりや勘十郎樣、なんでわしを投げたのぢや。

勘十　兩人が不義なら、長五郎そちも不義者ぢやぞ。

長五　ナニ、此の長五郎が不義とは、してその證據は。

勘十　外でもない矢張此狀。（ト文を見せ、）ほんにこれ迄惚れた〳〵とあたいやらしく口說き候を誓ひに、厭ながらも長五郎づらにとあれば、長五郎そちもこれまでお君に不義を言ひかけたでさうがな。

長五　いやさ、それは。

お君　これまで私を捉へて、色々とそれは〳〵。

長五　これ〳〵お君さん、お前顏に似合はぬ酷い人ぢやな。

佐兵　こりや長五郎、おのれも娘を。

長五　さあそれは惚れたが、矢張不義は長吉めだ。（ト長吉を引立てるを勘十郎さゝへて、）

勘十　こりや、其不義を糺せば其方も同罪。

長五　そんならこれも、ホイ。

佐兵　さうとは知らず娘が淫奔。

勘十　凡て色よき花には蟲を結び、折取る者禁制と札を立てゝも手折るは世界の習ひ、まして主たき娘のお君。

長吉　いや私が過失、此上は如何樣とも。

お君　これ〳〵長吉、そなたに科はない、皆私が。

勘十　ハテ、何事も穩便に、金の行衞は追つての詮議。

佐兵　成程、おれが思案もあれば、長吉は表の二階へ、娘は奧へ。

兩人　はあ。（ト兩人共こなしある。）

長五　さあこれで二人はお引分けだが、二階住居の丁稚め、又お君さんが忍び込んで行くまいものでもない、張番は此長五郎。

佐兵　いやおのれも不義者、憎い奴なれど、何んにもいはぬは死んだ母が頼み故。

勘十　此の家の內を放飼。

長五　おれを鳥ぢやと思うてゐる。いや鳥もとりも角力とりぢや。

勘十　最早幕合、拙者も暫く。

佐兵　二人が納り、勘十郞には奧へござつて。

長五　思へば〳〵。（ト長吉へかゝるを勘十郞突退けて、長五郞をぽんと投げる。）

勘十　實に戀は曲者ぢやよなあ。

ト唄になり、勘十郎佐兵衞思入あつて長吉お君兩人の手をとつて奥へはひる。と暮六ツの鐘鳴る。

奥より以前の權七喜助行燈を灯し出て、長五郎を見て、

權七　ヤア長五郎さんがどうかしてゐるわ。

喜助　ほんに長五郎さん／＼。（ト兩人長五郎を介抱する。長五郎心附いて、）

長五　うぬ勘十郎め。（ト兩人を見て、）喜助か、權七か。

喜助　これ樣子は聞いた長五郎さん。

權七　お前さん、此儘ではおかれまいぞえ。

長五　二人が手前面目ない、これからは破れかぶれお君を引攫ひ、今宵の中に此家を駈落ち、夫に付けても二人に頼むは、まあ中宿の工面、三味線堀のおくま婆がところへ。

兩人　ム、、すりや婆が所へ。

長五　合點か、こりや。（と長五郎兩人へ囁く。）

兩人　ハテそんなら奥の。

長五　ハテ、二人ともにおれが幕内。

兩人　首尾よく行けば、

長五　金はヅッしり。

兩人　そんなら裏へ。

長五　こりやゝ（ト長五郎こなし兩人をおさへる。是を知らせにて此の道具ぶんまはす。）

米屋塀外の場　本舞臺一面の黑塀、よき所に切戶、用水桶、塀の內へ米倉の二階を見せ、障子閉切りある。すべて夜の模樣よろしく時の鐘にて道具納る。ト誂への獨吟にて花道より小梅好みのこしらへにて頭巾小提灯を提げ、お竹を連れて出て來り、

小梅　お竹さんとやら、お前のいかいお世話でござりますた。

お竹　なんの朋輩のこと、長吉どんには樣子あつてあれあの二階に、折角逢ひにござんした姉樣、內から連れて行くと目に立つ故、こゝへ連れて廻りました、私がさう言ふ程にこゝに待つて長吉どんに逢はしやんせ。

小梅　ハイ〳〵忝うござんす、是非とも弟に逢はねばならぬ大事の用、もう日は暮れて參りまする、うちに居ても心ならず、夫でこちの人に隱れてそつと淺次郞に。

お竹　淺次郞とはえ。

小梅　長吉がことでござんす、家では淺次郎と言ひました、此のお家へ參つて名が替りました故。

お竹　矢張長吉殿のことでござんすか。

小梅　左樣にござりまする。

お竹　どれ私は切戸からはひつて、長吉殿にお前さんのござんした事知らせて上げませう。

ト切戸の口へはひる。

小梅　よろしうお頼み申しまする。朋輩の好みとて今の女中さん、どうぞ早う弟に逢ひたいものぢや。

ト此時切戸より喜助出て來る、小梅提灯を袖にて隱し、用水桶の蔭へ隱れる。

喜助　長五郎さんの留に三味線堀のおくま婆が所へ行つて萬事の事を。さうぢや／＼。

ト花道へはひる。此の時二階の障子を開けて長吉顏を出し、

長吉　姉者人々々。

ト下を見下し尋ねる。小梅用水桶の蔭より出る。

小梅　弟淺次郎か、こゝに居るわいな。（ト裏向に二階を見上げる。）

長吉　もしお前の見えたは、金の事でござんすかえ。

小梅　サア一昨日文で委しく頼んでよこした通り。

長吉　今宵のうちに要るとある百兩の金、これ〳〵氣遣ひなさんすな、金出來ました。

小梅　そんならその金が、忝い。

長吉　サアこれまで顏は知らねども、由兵衛殿やお前の命づくとある故、やう〳〵百兩の金をこしらへたが、私が方へ受取らぬが、これ必ず案じる事ではござんせぬ、たとひ夜が更けても受取り次第私が持つて行くわいな。

小梅　エヽ、忝い、兄弟なれば顏も得知らぬこちの人の爲めに、我身までが其樣に忘れはせぬぞや。

ト拜む。

長吉　勿體ないこれ姉さん、えゝ何んというても二階と下、お前顏を一寸。

ト小梅提灯を上げて顏を見せる。二階にて長吉思入あつて、

長吉　金は追付け持つて行く程に、人目に立つては惡い、お前は早う。

小梅　そんなら待つてゐるぞえ。

長吉　はて、後までにきつと持つて行きますぞえ。

ト障子をぴつしやりと閉める。此内花道より喜助戻つて來る。切戸より權七出る。小梅以前の用水

桶の蔭へはひる。

権七　どうぢや〳〵、喜助中宿はどうだ。

喜助　その事に付いて長五郎さんに言はねばならぬ、権七われも來い。

権七　そんなら奥で、合點だ。（ト兩人切戸へはひり、小梅出て。）

小梅　アヽ嬉しや、兄弟は持つべきものと何やらの淨瑠璃にある通り、弟が今の様にいうてたもつたので、胸が開けて癪が下つた、ちやつと此様子を由兵衛殿に、いや〳〵、物がたいこちの人、奉公してゐる者に無心言うたというては又日頃の氣性、いや〳〵こりや矢張、默つて渡しませう。ぢやというて今頃は氣を揉んでゐやしやんせう、さうぢや。（ト行きかけて立止り、）たとひ言うても金さへ出來たら、萬更悪うも思ふまい、いつそこちの人へ、どれ長吉の來るのを待ちませうか。（トよろしく知らせに付き此道具ぶんまはす。）

本舞臺三間の間常足の二重、見付正面襖、上の方一間の床の間、上手一間二階折廻し、障子閉切り、いつもの所に枝折木戸、よき所へ石の手水鉢を置き、すべて奥座敷の體にて道具留る。と蔭にて、

皆々　今宵は二十三夜待、約定の淨瑠璃盛衰記梅ケ枝無間の鐘が所望ぢや〳〵。

トこれより床の淨瑠璃になる。

〽あと見送りて梅ケ枝はしばし涙に暮れけるが、必ず氣遣ひなさるゝな、え　えわしが心當りのあるというたは皆嘘、お前の命が助けたいばつかりぢや　わいなあ。

長吉　今姉さんに逢うて、氣遣ひさつしやるな後に持つて行かうと言うたは、お前に力を落さすまいため、今のわしが身の上、どうなる事やらお君樣のお返事も、最前の仕宜では、どうならうぞいの。

〽金ならたつた三百兩。

此方はたつた百兩、由兵衞殿や姉さんの難儀。

〽可愛い男を移すのか。

こりやどうせうぞいなう。

〽えゝ金が欲しいなあ、二八十六で文付けられて二九の十八でついその心、

四五の二十なら一期に一度、わしや帶解かぬ。

え丶面白さうに降りには、二十三夜の月待の淨瑠璃、あれに付けても此家へ、奉公に來てお君樣と言ひかはし、末は女夫にならうと思ひ思はれた、お君樣を賴んで拵へる金の工面、出來ねば現在の姉樣、さめ〴〵、こりやどうせうなあ。

ヘあ丶どうせうなあ、最早日本國に此の梅ケ枝か、祈る神も佛もないか。

最前から心も留めず聞いてゐた、あの淨瑠璃は無間の鐘、それ故に梅ケ枝が。

ト手水鉢へ思入あつて、

わしは又姉さんへの孝行、一心をもつて今宵の手詰め百兩の金。（トきつと手水鉢を見る。）

ヘお丶それよ、夫ゆゑには石になつたる女もあり、我は賤しき流れの身なれど、一念は誰に劣らん、巖となれる手水鉢、水掬ひ上げ口漱ぎ伏拜み〳〵人に知らせじ聞かせじと、昔物むつとり傳へ聞く、無間の鐘を撞けば有德自在は心の儘、これより小夜の中山へ、遙かの道は隔つれど、思ひつめたる我念力、此の手水鉢を鐘に擬へ。

今宵の手詰、何うぞ百兩の金の出來ますやうに觀音樣々々。（ト柄杓を把り片手にて拜む。）

〽石にもせよ金にもせよ、志すところは無間の鐘、此世は蛭にせめられ未來永々無間地獄の業を受くとも、だんない〳〵大事ない。

姉さん故には、此の長吉。

ト柄杓にて手水鉢を打つ。途端に寺の鐘鳴る、長吉びつくりして、

ヤア〳〵、今のは慥かに鐘の音、そんなら一心屆いて無間の鐘は。

ト空を見上げてよろしくある。此内鐘鳴る。

はて不思議や無間に擬らへ打つ度に、一イ二ウ三イ四ウ五ツを聞きしは鐘の音。（ト思入あつて、）ム、、さては今のは無間の鐘ではなうて、上野淺草の時の鐘、撞く響きをばそれぞと思ひ、迷ひしなるか、段々夜も更け早や今宵も五つ、金が出來ねば姉さん夫婦、此の長吉も次第に縮む命に居所の羊、もう戌の刻、こりやたんとせうぞいなあ。

〽面色忽ち紅葉の、花もちり〳〵心も髪も、逆立ち上り柄杓持つ手も身も慄るはれ、すでに打たんと振り上ぐる、二階の障子の内よりも。

ト此内二階バタ〳〵にてお君長五郎立廻つて金を下へ投げる。

お君　長五郎さん、嘸惜からうが此金わしに。
長五　いや折角盗んだ此金、なんのおのれにうま〳〵と。
お君　いや、それでも。
長五　いや、ならぬ。
お君　いや、下さんせ。
〽その金こゝにと三百兩、ばらり〳〵と投出す、深山おろしに山吹の、花咲
かこちらす、
長吉　こりやこれ金、思ひがけない。
〽如くにて、こゝに三兩彼處に五兩、是は夢かや現かや、誰方か知らぬが此
の御恩、死んでも忘れぬ〳〵と、嬉しいやら怖いやら、拾集める心もそゞ
ろ。
長吉　どうぞ百兩。
お君　長吉、そなたの賴みの百兩。

長吉　やあお君様。

長五　さてこそ。（ト飛下りかゝるを勘十郎出て、長五郎を引附け）

勘十　越度ある奉公人、親元へ預けるは大法。

長吉　段々とのお情け。

勘十　所は本所梅堀の、

お君　それ、そなたの此の文。

ト投げてやる。長吉取上げる。長五郎それをとかゝる。

〽包むに餘る悦び涙、鎧代りの此の金と、おし戴き〳〵。

長吉　おさらば。

勘十　早く行け。

〽勇みいさんで。

ト三重にて長吉は花道へ、舞臺はよろしく此の仕組み、双方見合ふを木の頭にて、幕引付ける。と直ぐに時の鐘、浪の音にてツナギ、大川端となる。

三幕目　大川端長吉殺しの場

役名　梅の由兵衛、源兵衛堀の源兵衛　丁稚長吉、手代喜助、同權七等。

大川端の場。本舞臺向う正面大川端、淺草の方の夜の町家遠見、此前へ浪手摺、すべて大川端の體よろしく、此前へ淺黃幕をかけ、上手葭簀張りの茶店を片付けし心にて、莚簀を卷き床几を重ねある。浪の音時の鐘にて幕あく。

ト仕出し皆々思ひ〳〵の事あつてはひる。と後流行唄やうの合方になり、花道より、由兵衛肩流し一本差し頰冠りにて出て來り花道にて、

由兵　もう大方五つ過ぎ、四つ前でもあらうが向島にて請合うた小三樣の身請けの金、代りに渡した頭巾取返す日限も、今宵の今となつて其金が出來ぬとは、これまで立てた由兵衛が男の廢るは厭はねど、金五郎樣に萬一の事があつては、大恩受けた隼人樣へ。（ト思入あつて、）あゝ世間のよい衆は命がないと、醫者の手をあげた病人を、多くの金を出し人參を盛つて見るが、しかし

これは金さへあれば助かる命、助かるも金殺すも金、なぜに寳と世に稱へるぞ。

トしを/\と舞臺へ來る。此の時上手バタ/\にて權七喜助長吉を引立て出て來る。由兵衛これにて小蔭へ身を隱す。

權七　さあ長吉、われがもつてゐる百兩の金、こつちへ渡せ。

長吉　滅相な、わしや金はもつてはゐぬ、覺えはござんせぬ。

喜助　覺えないとは野太い奴め、長五郎さんに賴まれて、われが後を追つかけて來た、さあその金渡せ。

ト兩方よりかゝる。

長吉　長吉は骨になつても、滅多に渡さぬ大事の金。

兩人　否でも應でも取らにや置かぬわ。（ト兩人して長吉を打擲する。）

長吉　アレイ/\。

ト言ひながら逃げるを、兩人やらぬとかゝる。よき程に由兵衛兩人を見事にとつて投げ長吉をかこひる。兩人起上り由兵衛を見て、

兩人　ヤアうぬはどいつぢや、なんで邪魔をひろぐのだ。

由兵　おりや往來の者、通りかゝりて今の樣子、さてはわいらは物取りだな。
兩人　邪魔するわれから先へ。（ト由兵衞にかゝるを一寸立廻つて兩人を追込む。）
由兵　えゝ憎い奴め。（ト立戻り長吉を見て、）これ〳〵、見ればまだ若衆さうなが、はて悲哀な目に逢うた、怪我はせぬかや。
長吉　いえ〳〵怪我はいたしませぬ、よい所へあなたがお出なされて下さりまして、私が仕合せでござります、有難う存じまする。
由兵　なんの禮には及びませぬ、聞けば金をもつて居るさうなが違ひ無いか。
長吉　ハイ〳〵。大事にかけて持つてをりまする。
由兵　油斷せぬやうにしつかりと持つてゐやしやれ。さうしてこなさんは、何所まで行かつしやるのぢや。
長吉　はい、此の先の駒留橋まで參りまする。
由兵　そりやあまだ餘程ある、とてもの事におれが送つてやらう。
長吉　イエ〳〵それには及びませぬ。
由兵　ハテ金もつて夜の道、またあのやうな奴がゐやうも知れぬ、おれもどうで歸路、遠慮に及ば

ぬ、サア〳〵行かんせ〳〵。

ト これより誂への合方になり、長吉先へ由兵衛後よりそろ〳〵と花道へ行く。

長吉　お前様、いかいお世話様でござりまする。

由兵　なんのおれも行くついで、さうしてこなさんの名は長吉殿と言ひますか。

長吉　ハイ、よう御存じでござりまするな。

由兵　今の野郎が言ひをつた故。

ト 言ひながら兩人花道へ行きかゝる内、由兵衛ふと思入あつて後ろより切らうとする。長吉ちよつとこなしあつて、

長吉　モシ、此道は歩みにくうござりまするな。

由兵　いや常に通りますると、そのやうにもない。（ト又行きかける、由兵衛柄へちよつと手をかける。）

長吉　闇なれど星明りで、ようござりまするな。

由兵　さあ〳〵、今宵は二十三夜、もう追付け月代が出るであらうよ。

ト いろ〳〵捨ぜりふにて花道大あゆみへ廻る内、知らせにて舞臺の黒幕を切つて落す、瓦家遠見、舞臺へ戻つて由兵衛思ひ切つて長吉の懐中へ手をずつと入れる。

長吉　ヤアお前も此金を。

由兵　さあ貸して下され。

長吉　いや／＼ならぬ。（ト由兵衞を突き退け。）めつさうな、人を送つてやらうの何のと正直さうに見せかけ、何んぼ前髪でも無體な事をしやつては爲めにならぬぞえ。

由兵　ヤ何も案じる事はない、こゝまで來たりやもう僥倖ぢや、わしはもうこゝで別れませう、氣をつけて行かしやれや。

ト由兵衞は上手長吉は花道へ行きかける。由兵衞思入あつて、

由兵　ヤ長吉殿とやら、一寸待つた。

長吉　えゝ。（トびつくりする。）

由兵　何もびつくりせずと、一寸こなさんに用がある、こゝまで戻つて下され。

長吉　ハイ。

由兵　手間はとらせぬ、一寸歸つて下され。

トこれにて長吉舞臺へ戻る、由兵衞あたりへこなしあつて、長吉の傍へ行きこなしあつて、

由兵　これ、おれは今宵に限つてなければならぬ百兩の金、出來ぬ時は命づく、思ひがけなき長吉殿、

どうぞ其の金二三日貸して下され。

長吉　いえ〳〵なりませぬ、そつちも命づくならこつちも命づく、どうぞこれは堪忍して下され。

由兵　すりや、どのやうにいうてもその金を。

長吉　サア何を隠さう此の金は、今宵中になければわしが大事の〳〵、たつた一人の姉さんが配偶が命がない、それでやう〳〵拵えた此金、それぢやによつてこればつかりは、どうぞ許して下さりませ。

由兵　こなたの言ふのは尤ぢや、見ず知らずの人に貸してくれとはわしが無理、さりながら今宵につゞまる百兩の金、無理と知つてこなたへ無心、どうぞ貸して下されえ、これ頼む〳〵。

長吉　私も頼む、どうぞ許して下され。

由兵　さあ無理であらう、無理であらうがこれも矢張お主の爲、これ長吉殿、これ拜むわいの。

長吉　いえ〳〵わしが拜みまする。

由兵　どうぞ貸して下され。

長吉　どうぞ堪忍して。

兩人　下さりませ。

ト兩人拜み合ふこなしある。長吉よろしくあつて逃げようとする。由兵衛逃がさじと爭ひちよつと立廻つて由兵衛是非なく一ト刀切る。これにて長吉あつと言つてどうとなり、

長吉　エヽ胴慾な、こなたはわしを殺すのか。

由兵　さあ殺したうはないけれどもよんどころないお主の爲め、知らぬこなたを殺すは小の蟲と大の蟲、見かへられぬこつちの手詰め、不便ながらも金が欲しさに。

長吉　えゝ死にともない、今夜一と夜さ死にともない、これわしが命はやらうが金はやらぬ、此金の無い時は、姉さんの配偶に内事あやまちがあつたならなんとせう、どうぞ助けて其金を。

由兵　命を助け金をやる程なら可愛さうにかうは切らぬ、二三日の內には金拵えて戾しに行かうが、こなたの名どころはなんと言はつしやる。

長吉　いや〳〵名どころを言うたとて、人を殺して金を取る程のこなたゞやもの。

ト又取り付くを一寸立廻つて

長吉　助けて下され、死にともない〳〵。

由兵　エヽ了簡して死んで下せえ。

ト由兵衛聲立てさせじとして口へ手を當てるはづみに小指を喰切り、トヾ由兵衛乘りかゝつてとゞ

めをさす。此の時月出る。由兵衞脇差の血を拭うて鞘へ納め、以前の金を取上げる。此時前幕の手紙落ちてあるをこなしあつて手に取り、長吉の顏を月明りに見て、

由兵　女房小梅に生寫し。（ト思入あつて手紙を披き、月代に透し讀む思入あつて。）淺次郎殿へ姉小梅より。

ト讀み終つてびつくり、死骸を抱き上げ顏をきつと見る。此の時時の鐘、忍び三重になる、前幕の源兵衞出て窺ひゐる、由兵衞思入あつて長吉の死骸を川へ流し手を合はせて拜みつか〳〵と行かうとする。源兵衞支へるを引退ける、ちよつとだんまり模樣になり、トヾ源兵衞由兵衞の腰へ取附く、これを振切る、此の時由兵衞の腰の煙草入を引取り、たぢ〳〵と後へ下りどうとなる。

源兵　盜人め。

由兵　えゝ。

ト礫を打つを木の頭にて、由兵衞は花道へはひる。源兵衞煙草入を透し見る。此仕組よろしく、時の鐘、早き合方にて

ひやうし幕

大詰

梅堀由兵衛内の場
同 仕返しの場

役名　親方才兵衛、下男與太郎、女房小梅、小三、金五郎、醫者久庵、梅の由兵衛、米屋の娘お若、手代長九郎、同喜助、同權七、金谷金兵衛、源兵衛堀の源兵衛、等。

梅の由兵衛内の場。本舞臺三間の間常足の二重、正面押入納戸口、よき所に佛壇、上の方中二階。下の方門口、二重へ本疊を敷きすびつより人のではひり、すべて世話場の模様、こゝに前幕の親方才兵衛男二三人連れ奥へ踏込まうとしてゐる。下男與太郎馬鹿のこしらへにて、鉢卷片肌脱ぎ、棕櫚箒をしやに構へてこれを止めてゐる。

與太　イヤ／＼滅多にやることはならぬ。與太郎が止めた、一番待つて貰はう。

才兵　イヤ面倒な、馬鹿者に構はずと、さあ男共來い／＼。

トバタ／＼にて右の男共奥へ行くを、與太郎馬鹿な立廻りにて色々止めて、

與太　ヤイ親方、此の與太郎がかう止めかけては、假令りんびやうになつても滅多にやらぬぞ。

才兵　いやこちの奉公人小三が昨晩から走つて行衛が知れぬ、隠所は大方こゝな内、それで家捜しするのぢや。

與太　こいつ家捜しの店捜しのと、いやらしい奴等ぢやわい。

才兵　あんでもあの押入が氣ぶさいな。そりや男共。

男　合點ぢや。

ト行かうとする　與太郎止める立廻り、よき處へ小梅襷前垂にて出で、皆々を引分け、

小梅　これはしたり、最前から騒々しいと思うてゐたら、與太郎こりや何事ぢや。

與太　小三樣が此方の内に引込んであると、狼のやうに暴れをるわい。

小梅　そんなら身請けの手附日限は昨晩、それで。

才兵　いやその手附に預つてゐる頭巾は昨晩引替へに由兵衛殿が、金を持つて來て取替へて手附は濟んだれど、まだ後金の催促、それも前に肝心の小三が走つた故、隠所は大方こゝの家、小三を尋ねにやどちらへもおれが物も言はれぬ。（ト小梅こなしあつて、）

小梅　ム、、何んと言はしやんす親方さん、こちの人が昨晩手附の金、を持つて行かしやんしたかえ。

才兵　しかも夜更けて。

小梅　はてなあ。（ト思入ある。）

與太　あれ父店捜しを吐かし居る。」

才兵　でも。

小梅　待たしやんせ親方さん、よう思うても見やしやんせ、出來難い金を調へて持つて行く程の此方の人、是非に小三樣は身請けせねばならぬ仕宜、其の小三樣をこちの家に。

才兵　いや〳〵近來は走らせて親元から手を廻して、日割勘定へ立金などゝ、金の山をめつしてゐるせりが流行る故。

小梅　置かしやんせ、かう言うても梅の由兵衛の妻、さういふ賤しい身請けはしませぬ、殊に小三樣も此方の内にゐやしやんせぬわいなあ。

才兵　そんなら由兵衛殿は留守でござりますかえ。

小梅　留守でござんす、追附主が歸らしやんしたら、何もかも譯が知れませう、それ迄お前も。

才兵　成程、どうで由兵衛殿に逢はねばならぬ後金のせいらく、其間に行衛の知れぬ小三、わきを尋ねて見ようか。

小梅　それがようござんす、何事もまあ後に。

才兵　そんならお内儀。

小梅　親方さん。

才兵　必ず後に、さあ男共。

小梅　ようござんしたなあ。

ト唄になり、才兵衞男共を連れて花道へはひる。小梅こなしある。

與太　天晴通り者のお内儀さんぢやなあ、おれが最前から色々に力んで脅しても歸らぬ親方、それをお前が出て今の一言で歸るとは、雀の千聲より鶴の一聲ぢやなあ。

小梅　これそんな事を言はずとも與太郎ちやつと奥へ行て、茶を焚付けておきや、追附こちの人が戻らしやんすであろ。

與太　由兵衞さんよりおれの腹がきた山櫻、さらば。

ト合方になり與太郎奥へはひる。梅四方を見廻し押入を開け、内より小三出で、

小三　小梅さん、大事ないかえ。

小梅　氣遣ひさしやんすな、今親方は歸したが合點の行かぬこちの人、昨晩遲う手附の金持つて行か

しやんしたといなあ。

小三　サア、さういふ事とは知らず手附の日限は切れるし、伴五郎方へ身請けされては生きてはゐぬ覺悟、それで廓を駈落して金五郎さんに逢はうと來る道で、お前に逢ふと。

小梅　無理に連れて戻つて、あの押入の内へ忍ばせて置きましたが、もう此の上は隱れる事はござんすまい。

小三　でも其方が後に來ふといふたは、後金の催促。

小梅　手附に済んで一つ方へは又一つ、これに付けても弟は今に。三ツ四ツ五ツあゝ難しい浮世ぢやなあ。

ト思入あるト此の内始終合方にて金五郎花道より頬被りにて、つか〳〵と出てずつと内へはひり門の戸をぴつしやり閉める。

小三　やあ金五郎さんか。

金五　小三、小梅殿。（ト頬被りをとる。）

小梅　思ひがけなき金五郎樣。

小三　私しや昨晩からお前に逢ひたかつたわいなあ。（ト取付く。金五郎こなしあつて、）

金五　さあ心にかけてある身請けの日限、由兵衛殿に様子を聞かうと思ふ内、勘十郎樣の御内意に此の金五郎を召捕の役人此江戶へ。

小三　えゝ、そりやどういふ仔細で。

金五　ハテそなたと言替し國を立退いた其後にて、彼の色紙の紛失、これ金五郎が仕業盜賊と評議極つたれども、又詮議の日限が切れたとやら、譯は知れねど國許より、何んでも召捕の役人が來てゐるとの事。

小三　さう言ふ事なれば、私が身の上も兼てお前に言ひ合せた通り。

金五　死ぬる覺悟、小三おぢや。（ト手を取つて行かうとする。小梅向うへ廻り、）

小梅　待たしやんせ、お二人さん。

兩人　ヤア。

小梅　そりやまあ何んの事でござんすえ、假令身請けが出來まいが、お國許から召捕が來ようが、こちの人に此の樣子も言はずに、言ひ合はしたの死ぬる覺悟のと、二人連れにてこりや何處へござんすのぢやえ。

兩人　さあそれは。

小梅　お二人故様々と心を盡してゐやしやんすこちの人、ちつとまあ思遣つても御覧じませ。

金五　さあ小三が縁につれて、由兵衛殿がこれまでの志、どうも氣の毒で。

小梅　はてそこがお主なり家來なり、それに連添ふ私、なにも氣遣ひに及びませぬ、なんに依らずこちの人が引請けてゐやしやんすれば、小三さんも其樣に二言めには覺悟を極めたと言はずに。

小三　それでも今聞いた金五郎さんの身の上。

金五　國元の噂、捕手の役人。

小梅　そりや又こちの人が、（トこなしあつて、）さういふ事たらかういふ所を若しまた。（と思入）幸ひ小三樣と引分けて置いて、人目に立たぬやう暫くのうち、此の疊の下に、まあ〳〵。

　ト疊を上げる。兩人共手傳ふ。小梅すびつの蓋を取り、下より着物を出し、

小梅　面妖な、すびつの穴に此着物。

　ト擴げて見せる。兩人見て、

小三　しかも男の着物。

金五　それ〳〵、血だらけになつてあるわ。

小梅　こりや慥かにこちの人の、昨日から着てゐやしやんした。

ト思入、此内花道より久庵つか〳〵と出て、ずつと内へはひる。

久庵　小三こゝにゐたか、さあ來い〳〵（ト小三を引立てる。金五郎立廻りに引廻し、）

金五　わりや醫者の久庵。

小三　ほんにそなたは。

久庵　こりや伴五郎に頼まれて、かぎ出しに歩く小三が身の上、これから直ぐに。

ト小三にかゝる、金五郎立廻り小三も手傳ひをかし味の仕組み、此の内小梅右の着物を矢張すびつの下へ入れ、程よく久庵を右の穴へ突墳め疊を敷き、その上へしやんとなほる。

金五　それは。

小梅　邪魔な所へ此久庵、かうして置けば極樂落し。

金五　そんなら此の金五郎や。

小三　私が身の上。

小梅　奧でとつくり相談いたしませう、お二人共さあお出なさんせいなあ。

ト唄になり、小梅こなしあつて小三と金五郎を連れて奧へはひる。彈きながし合方にて花道より、由兵衞椿の花を携へ内へ入り門の戸を閉し、奧を窺ひこなしあつて、佛壇の戸を開き花挿しを取

　　出し、右の樒を立てかへ懷中より前幕の狀を出し。

由兵　淺次郎殿へ姉小梅より、此狀が則ち位牌がはり。

　　ト狀を佛壇へ入れ、右の花挿を直し下にゐて合掌し回向をする。此の內合方、よき所にて奧より

小梅　それ與太郞、必ず氣を付けてくれよ。

　　ト言ひ〳〵出る。由兵衞びつくりすることなしあつて、佛壇の戶を引立てる。小梅もこなしあつて。

　　おゝこちの人、お前今戾らしやんしたかえ。

由兵　おいたつた今。

小梅　見ればついにないお前、佛壇を開けてなにしやしやんすえ。

由兵　やあ、さ今日はちつと志の日ぢやによつて看經を。

小梅　そんなら佛壇は掃除せずにある、わしが掃除をして、御燈を上げようわいなあ。

由兵　いやもう看經はもう仕舞ひぢや、さらば是から一服喫まう、小梅煙草盆を。

小梅　あい〳〵。（ト煙草盆を持ち來る。此の內由兵衞の胴卷を隱し。）

由兵　ほんに昨晚落して來た胴亂、あるかと思つて矢張腰を、あゝ惜しい事をしたわい。

　　ト常の煙管に煙草をついで喫む。

小梅　こちの人、お前昨晩よう金が出來たなあ。

由兵　いやさ、その金故に。（ト小梅が顔を見て）いや大事の胴亂を、つい落して來たわいなう。

小梅　わしや合點が行かぬ、どうしてその金が。

由兵　これ案じるより産むが易いと、思ひがけない以前の近附に逢うて、てんぽの皮と無心言うたらつい百両貸してくれた、それで小三の手附は濟んだ、これから又後金を。

小梅　さうとは知らず此の間から、屈托になつてお前が叱らしやんせうか知らねども、向島からぢきに弟の淺次郎が方へ行き是非と頼んで置いたが、堅く昨晩持つておじやる筈、それに今になんの沙汰もないが、こちの人どうしたものであらうぞいなあ。

由兵　はて、こなたの頼み淺次郎になんの如在があらう。可愛さうに奉公の身の上、何の言うてやらいでもよい事を、ア思へば。

小梅　え。

由兵　いや、それで大方苦勞をしてゐるであらう。

小梅　さあ私もさう思うてゐたれど、お前の男づくなり又命づく、大事ござんせぬ、たとひ昨夜の間に合はいでも、是非今日は持つておじやるであらう、それを又後金に。なおもし。

由兵　さ、あそれは。（ト脇見して背を食ひしめる思入。バタ〳〵にてお君走り出で戸を叩き、）

お君　もし〳〵、ちやつと開けて下さんせいなあ〳〵。

小梅　これは周章しい、誰ぢややぞいなあ。

ト言ひ〳〵戸を開ける。お君内へはひり、うんと目を廻す。由兵衛小梅びつくりして、

え丶滅相な、人の内へ目を廻しにはひるといふ事があるものかいなあ。（ト由兵衛立寄り。）

由兵　これ〳〵。ト顔を見て）小梅此娘を見知つてゐやるか。

小梅　いえ〳〵、近附きではござんせぬ。

由兵　まあ〳〵、水々。

小梅　アイ。（ト茶碗に水を汲んで來る。兩人色々介抱して、）名も知らねば、なんと呼ばうぞいなあ。

由兵　はてまあ、この餘所の娘御イなう。

小梅　知らぬお娘御様いなう。（ト兩人よろしくお君心附く。）

由兵　どうぢや、氣が付いたか〳〵。

小梅　あい〳〵、氣が付きましたわいなあ。（トお君立上る。）まあ嬉しや、びつくりしたわいなあ。

お君　段々お前方のお世話忝うござんす、こゝへ來る道でちつと惡者に出逢ひ、見附けられまいと

小梅　知らぬ道筋を走つて來て、思はず氣を失うたさうなわいなあ。
お君　さうしてお前は何處の娘御樣で、どこへ行かしやんすのぢやえ。
小梅　あい、此の梅堀の由兵衞さんのお内儀さんに逢ひに。
お君　エヽ。（トこなしある。）
小梅　さあ、そこにこちの人長吉が行つてゐやるによつて。
お君　もし〳〵、そんならお前はお藏前の、米屋のお娘御さんでござんすかえ。
小梅　思ひがけない、これはしたり。
お君　さうして長吉は何處へゐやるえ、奧にか、但しは二階にゐやるかいなあ。
由兵　女房共〳〵、そりや其方の弟が奉公してゐる所のお娘御か。
ト言ひ〳〵行かうとする、小梅止める。
小梅　これ、もし〳〵私も待つて居りますが。長吉はまだこちの家へは來ませぬわいなあ。
お君　なんのまあ昨晚四ツ過ぎに家を出やつた長吉、慥かにこゝへ來てゐやるに違ひはない、隱さずどうぞ逢はせて下さんせいなあ。
トいろ〳〵頼む。此内始終由兵衞思入。小梅となし。

小梅　現在姉弟の事、なんの隠しませうぞ、眞實今におじやらぬ弟、わしもどうやら心ならぬ、お娘御さん、こりやまあどういふ事であらうなあ。

お君　はて面妖な、昨晩中にお前に渡さねばならぬ金と私への頼み、やう〳〵調へてやつたれば、悦び勇んで其金持つて、直ぐにおぢやつたが、何處へ行つてゐやるぞいなあ。

小梅　そんなら百兩の金をお前が。

お君　さあ、互に言挿した交情、末は女夫ぢやもの。

小梅　あの弟とお前は。

お君　おゝ恥しい。（ト袖にて顏を隠す。）

由兵　アヽ南無阿彌陀佛。

小梅　えゝ思ひがけない念佛を。

由兵　いやこりや看經の餘りぢや。（ト思入あつて、）ハヽヽヽヽ、また近づきにならぬ女房の弟と、懇ろにしてござる親方のお娘御、よう頃合ひし色事で思はず知らず、殊に金拵えての眞實、女房の案じ、いや氣遣ひない、昨晩から出てゐる長吉、何處へ行くものだ、こちの内へ来にやならぬ。来たら幸ひお娘御と一緒に祝言ぢや〳〵、おれも近附きになつて共々に取持にやならぬ。

小梅　ほんに自慢ぢやないが生れ附いて正直な弟、滅多に外へは行きませぬ。それに此様に暇の入るは。

お君　長吉に片時も離れて居ともない故、わざ／＼こゝへ尋ねて來ましたわいなあ。

小梅　それは猶のこと。

お君　是非長吉に。

由兵　さ、來るといふにも、此の七月盂蘭盆に。

兩人　エヽ。

由兵　いや裏の離座敷を掃除させうぞ、そこで待たんせ。

お君　あい／＼。

由兵　おれが案内、さあ此方へ。

兩人　ハイ／＼。

ト合方になり、由兵衛こなしあつて、お君を連れてはひる。後に小梅殘り、

小梅　どうも合點の行かぬ弟の身の上、金を持つて出やつたのに今に見えず、それに不思議な畳の下のこちの人の着物。（トこなしある、）こりや怪しからぬ、胸騒ぎがして來たわいなあ。

ト思入ある。ところへ花道より長九郎、喜助、權七を連れて出て來り内へはひる。

長九　これ〱、こゝが梅の由兵衛が家で、こなさんが内儀の小梅殿か。

小梅　あい小梅でござんすが、つい見たこともないお前方は。

權七
喜助　おいらは藏前の米屋の者だ。

小梅　エヽ。

兩人　急にこなさんに見せにやならぬものがある。連れ立つてちやつと見せたら肝を潰さう、さあござんせ。（ト兩人して小梅を引立てる。）

小梅　なんぢや知らねど、まあ樣子を。

長九　見せたら樣子が知れる、遲うなつては檢視が喧しいわい、早う。

權七　合點ぢや。（ト引立てる。）さあごんせ〱。

ト兩人して無理に小梅を引立て花道へ連れてはひる。長九郎後に殘り、

長九　これからこゝな内、合點の行かぬ由兵衛め。

ト奥へ行かうとして、ちよつと思入あつて臆病口の方へそろ〱忍び込む。花道より金谷金兵衛、羽織袴お國侍のこしらへにて家來一人連れて出て來り、

金兵　慥かに此の家とある、それ案内いたせ。
家來　ハツ。（ト門口へ來て、）頼みませう〳〵、此家は由兵衛宅かな。

ト奥より與太郎出て、

與太　ヲイ〳〵、梅の由兵衛宅ぢや、これ内ぢやわいの。
金兵　然らば由兵衛殿は在宿かな。
與太　在宿とはたんの事ぢやの、これ〳〵旦那さん〳〵、何所やらから侍が來たぞえ。

ト奥より由兵衛出て、

由兵　ヤイ〳〵、何を吐かすのぢや、おのれはちやつと奥へ失せう。
與太　おつとしよ。（ト奥へはひる。）
金兵　御免下され。（ト内へはひる。）
由兵　やあ、あなたは慥か。
金兵　下總の國千葉の家中金谷金兵衛。
由兵　すりや金五郎樣の御舍兄樣。
金兵　如何にも此方金五郎奴が儀に就き、由兵衛ちとお手前に談じ度き事あつてわざ〳〵參つた。

ト下にゐる。由兵衛煙草盆を持って出て、

由兵　これは〳〵見苦しい處へ思ひがけないお入り、憚りながら私に談じ度き儀とはな。

金兵　出してくりやれ。

由兵　え、出してとは。

金兵　いやさ金五郎を。

由兵　何んと仰せられまする。

金兵　以前は同家中三島隼人殿の家來、今は町人の梅の由兵衛、天晴の心底感に男一疋、それには引代へ人非人の弟金五郎め、武士の身にあるまじき隼人殿の息女と不義密通、剰へお國を出奔、今此の江戸に流浪ひ居て略様子を聞けば、由兵衛、お手前の蔭から世話身共が爲めには現在の弟、忝いと一禮を言ふに言はれぬ彼奴が不屆、國を立退く砌り三島樣に預りのお家の重寶、菅家手向山の色紙紛失の詮議の日延べも早や今明日に迫り、若し色紙出でざる時は隼人殿には御切腹、兼ねて覺悟を見るに忍びず、殊に立退きし小三金五郎に疑ひかゝり、捕手の役人を差越すべき相談區々、彼といひ是といひ聞捨てならぬ此金兵衛が密に當國へ立越えしは、人手にかけうより金五郎に縄かけて、不義の越度の言譯縛首にさすれば隼人殿が明りも立

ち、また色紙の詮議日延べの願ひ、此金兵衛が弟故三島の家滅亡させては、親友の義理といひ武士が立たぬ、それ故お手前に。

由兵　いや〳〵、もし金兵衛様、それではどうやら片手打、金五郎様に不義の科あれば則ち小三様にも隼人様が。

金兵　いやさうでない、凡て四海の掟男女同日の論に非ず、女は輕く男は重し、それ故にこそ女兒童と唱へるではないか。

由兵　でも金五郎様を私が。

金兵　匿まはぬとは、そりや一通り有の入り譯けをとつくりと申し聞かすに、由兵衛お手前に似合はぬ一言、弟に繩かけて召連れねば隼人殿のお身上、打捨て置かれぬ色紙の日延、こゝを篤と承知いたして何分弟金五郎を。

由兵　はて、なんともはや。

と兩手を組んで思案する。花道より源兵衛出て來りずつと內へ入り、

源兵　おゝ由兵衛內にか。

由兵　これは源兵衛、なんと思うて。

源兵　ちと貴様に見せる物があつて。
由兵　おれもちつと逢ひたいと思うてゐた。それは幸ひ、してまた見せる物とは。
源兵　外の物でもない、これぢや。（ト胴亂を出して見せる。）
由兵　やあ、そりやおれが胴亂。（トびつくりする。）
源兵　金物は鈌菊の定紋、煙管も象眼同じく鈌菊、こりやこれ梅の由兵衛が提物と、誰知らぬ者もない此の胴亂。
由兵　ム、、それがどうして。
源兵　昨晩拾うた。
由兵　ヤ。
源兵　しかも大川端の屋敷の前二十三夜の月明り、ふつと見附けた此胴亂。さし汐に流して仕舞へば人は知らぬと思へども、此源兵衛はな、はて變つた所で此胴亂拾うたぢやないか。
由兵　すりや胴亂を、源兵衛貴様が。
源兵　賣らうと思うて。
由兵　なんと。

源兵　梅の由兵衞が定紋、慥な、いやさ慥に持主の知れてある此の胴亂。外へ賣つたらきつと大金になれどそりや不實、源兵衞は男を立てる氣性、さ恨をうけた此胴亂、由兵衞、貴樣に賣らうと思うて持つて來た。

由兵　そりや忝い、昨晩吉原へ急いで行つた道筋大川端で落したその胴亂、惜しい事ぢやと思うてゐたが幸ひ拾ひては源兵衞、氣に入つた、成程買はうがその價ひは。

金兵　千兩。

由兵　ヤ。

源兵　萬兩々々〳〵萬々兩、惠美壽講ではないけれども、此の二十日向島の出合は大黑屋、その時の達引に大人しく事を濟した由兵衞、貴樣へ返禮いよ〳〵此胴亂買ふ心か、むゝはてなあ。（ト思入ある。）

金兵　どうやら仔細ありげな其胴亂、賣買に鈂菊の金具價の手づかひ由兵衞が當惑、此の場に有合はす金兵衞、其胴亂を求めてくれうか。

由兵　いや〳〵あなたはお侍、下作な代物お求めは御無用。

源兵　でも此品の價がなくば、外へ賣らうが。

由兵　いや滅多に外へは賣らさぬ。

金兵　そんなら價を。

由兵　さあそれは。

金兵　此場の樣子由兵衞が難儀、推察すれば憔にもとは。(ト奥を見て、)これは大方弟め。

ト揃を出し立上り、奥へ行かうとするを止めて、

由兵　待つた金兵衞樣、すりやあなたには。

金兵　奥へ踏込み金五郎に細打ち、その元を糺せばその方が難儀も免がるゝ。

ト行かうとするを立廻りて、

由兵　いや由兵衞、少しも難儀仕りませぬ。

源兵　難儀なければこの胴亂を。(ト外へ行かうとするを、)

由兵　はて、おれが胴亂、滅多に外へは賣らせぬぞ。

源兵　そんなら價を。

金兵　ぢやによつて弟めを。(ト又奥へ行かうとする。)

由兵　待つた。(ト止める、)

源兵　是非外へ。

由兵　これ、

金兵　でも。

由兵　サア、

源兵
金兵　サア〳〵。

ト金兵衞奥へ、源兵衞は外へ、兩方へ行けば由兵衞よろしく立廻り疊を蹴上げる。下より久庵最前の着物を持つて出る。

源兵　やあ久庵。

久庵　此の由兵衞は長吉殺し、證據は此の着物。

金兵
源兵　誠にその通り。

ト立寄るところを由兵衞拔討に一刀切る。久庵傷を負ひ倒れる。

源兵　やあ、それは。（ト立ちかゝるを、由兵衞拔身をひらりと見せる。）

由兵　長吉は殺さぬ、久庵を手にかけた此の血汐。

金兵　はゝあ見事、驚き入つた、由兵衞が手の内よりは心の內、身共は今の詞の內弟故に人を手にかけさせしと察せし故、金五郎に繩打つてなにもかも彼奴を科人と思ひの外、承知いたしてコレ此の如く、

由兵　目前手を負はせしに矢張金五郎を庇ふ心底、はて頼母しいさりとては。(ト奥へこなし、)いや惜しい性根を町人と呼ばせる事ぢやなあ。

源兵　いや行きがけの駄賃、久庵に傷を負はせし由兵衛、胴亂の價に命の安賣、掛賣にせぬ源兵衛、こちの利分であらうが。

由兵　いや負けてやらう。

源兵　なんと。

由兵　それ。(ト胴亂を投出し、)外へ賣つたら大金になる品なれど、持主の由兵衛に戻してやるもこつちの商ひ、樂の種を蒔く互に損徳なしのもと〳〵ぢやないか。

源兵　こりや思ひの外折合うて出たわ。

由兵　この鞘に拔身を入れ。

源兵　帳合濟ませば。

ト拔身を鞘へしやんと納める。金兵衛こなしあつて、

金兵　いや、まだ身共が注文。(ト捕繩を投出す。由兵衛取つて、)

由兵　これは。

金兵　縁に柵む義理の捕繩、由兵衞そちが思案で染上げる、彼の紛失の色紙さへ手に入る吟味は商賣
がら。

由兵　梅はしぶくも梅の由兵衞、色紙の染上げあら立られぬ手業が大分、慥かにそれと知れてはあれど、かきさがししんしぎれのきず附けてせんなき事、そこを無事に疵を付けずにすつぱりとめうばんぢや、明ばん澁染の。

金兵　それを望みに、身共が誂へ。

由兵　とくと承知でござりまする。

久庵　やい由兵衞、おれを此樣に切つたな、その返報にわれが訴人する、待つてをれ。

ト駈出さうとする。由兵衞上手へ引廻す。金兵衞襟じめにして久庵が額を見て、

金兵　うぬはお國の手醫者なれば、件五郎と馴合つて御家老に毒を盛損うた大罪人、それ故見附次第に切捨てよとの仰せ。

久庵　南無三、それでは。

ト振切り逃げるを、ちよつと上へ廻り引据え手早く繩打つ。

久庵　なんの事ぢや、由兵衞をしまひ付けうと思つておれがしまひ付けられた、乃木伊とりが乃木伊

になる、これがほんの毛を吹いて、アイタ、、、、疵がついたぞ。

由兵　すりや私は。

金兵　切り徳く。

源兵　はてよい手つがひ、由兵衞われが身の上。

由兵　源兵衞、貴樣にもまたとつくりと。

金兵　身共は旅宿へ、必ず共にその捕縛の。

由兵　縺れ解いて見せませうが、幾重にも。

金兵　七度結びに兄となる、碌では果てぬ弟が身の上は無事に。心勞ながら由兵衞さらば、家來共奴を引立てい。

ト唄になり、金兵衞思入あつて、家來に久庇を引立てさせ、花道へついとはひる。後に由兵衞こなしあつて、

源兵　さあこれから由兵衞、誰も遠慮はない、たんと打明けて。

由兵　不思議に返つた此胴亂、馴染の煙管で一服喫まうか。

ト煙草盆を引寄せ煙草を喫む。源兵衞は何やら言ひ兼ねるこなし、これも煙草を喫む。外から、

才兵　嬉しや由兵衛、戻つてか。

由兵　親方、こりや後金の催促か。

才兵　さあ此の間の手附はやう／＼昨晩済んだれど、モウ百兩都合二百兩の身請け、さあ由兵衛受取ませうか。

由兵　渡すに違はぬ小三の身請け、源兵衛もこゝにゐる、才兵衛粹に似合はぬ金の催促。

才兵　いや／＼、此源兵衛殿の方へちやんと手渡しして、お前の方へ相談した身請け、後金が今戻らずば昨晩の手附も戻して、小三は矢張こつちの奉公人。

由兵　昨晩うつたは手附でないか。ありや半金、それを流すとは無法者馬鹿盡すな。

才兵　いや／＼由兵衛殿、そのやうにけん／＼してもの言はつしやりますな、向島で頭巾をのみこんで二十日の日、二十日に取つた同然の手附、すりや三日過ぎるぞえ。こりや道具屋の書附にも御手附三日限りとしてあれば、流さうといふおれが無理でえすか。

由兵　ぢやと言うて今、後金の百兩。

才兵　なければおれがいふ通り、

由兵　えゝうぬ、此奴も行掛けの駄賃に。（トきつとなる。源兵衛止めて、）

源兵　由兵衛それ百兩。（ト前幕の金を投出す。）
由兵　やあ此金は。
源兵　向島でどぶ六めが騙つた百兩一兩も違ひはない、そつちに覺えの通り。
由兵　すりや此の金を。
源兵　貸すのではない、戻すのぢや。親方に渡して小三が身請け、さつぱりと譯立てゝしまやれ。
由兵　ム、、これまでの源兵衛と打つて代つた志、まあ何事も後へ廻して手詰の後金。
源兵　時の用には離れのよい男であらうが。
由兵　忝い、それ親方後金の百兩。（ト才兵衛へ渡す。）
才兵　忝い、それで言分はございませぬ、小三さんが年期證文。

ト證文を渡す。由兵衛取つて懷中へ入れる。

源兵　金受取つたら言分はあるまい。
才兵　なんのござりませう、これといふも源兵衛樣の達引。
源兵　こりや、無駄をいふな。（ト目配せする。才兵衛のみこみ、）
才兵　さらばお暇をします、男共來い〳〵。

ト男共を連れ花道へはひる。由兵衛こなしあつて、

由兵　胴亂といひ今の金、美しづくにしかける源兵衛、こりや此の由兵衛になんぞ折入つて、

源兵　おゝ頼みがある。

由兵　ムゝ。（ト合方になり、由兵衛源兵衛こなしあつて前へ出で下にゐて、）その頼みとはおれも承知、また由兵衛も、貴様にちつと折入つて。

源兵　その頼みといふは、おれも承知ぢや。

由兵　事によつたら、やらう。

源兵　そりや何を。

由兵　女房小梅を。

源兵　ムゝ、おれもやらう。

由兵　そりや何を。

源兵　手向山の色紙。

由兵　ヤ。

源兵　なんと違ひはあるまいがな、ハヽヽヽヽ、由兵衛こつぱづかしい事なれど此源兵衛、成程小梅を

貰ひたい、どういふ因果か藝者の内から惚れて〳〵惚れぬいてゐる、ぢやによつてこの胴乱。今の金まだ此の上に望みの色紙、伴五郎様の頼みも放擲つて、たとひ人が笑はうが謗らうが、小梅さへ女房に持ちや、おれが本望我身ながら恥かしい。どうしてあれに此様に惚れた事ぢや知らぬ、由兵衞必ず腹立てゝたもるなや。

由兵　鬼をあざむく源兵衞、色ゆゑなればこそ、はて心の外ぢやなあ。

源兵　外か内か知らぬが、どうぞわりない無心なれど。

由兵　現在の女房、源兵衞にかう〳〵しろというて、取持ちはせぬが縁を切つてやらう、はてその上で抱いて寝ろのはそつちの手際、去状附けて縁切つたらよいではないか。

源兵　成程、男の口から取持ちもなるまい。すりやいよ〳〵小梅を縁切つてくれるか。

由兵　さつぱりと去つてしまふが、今いうた當家の色紙、盗賊はどぶ六なれど、持主は源兵衞と慥かに知れてあれど、表だつて詮議もならぬ筋合ひなれば、それで折入つて由兵衞が頼み。

源兵　根が盗み物ゆゑ密に賣拂うてくれと頼まれて、肌身放さぬ此の色紙。

ト懐中より色紙の箱を出して見せる。

由兵　それを。（ト取りにかゝるをちやつと持ちかへ。）

源兵　いやこればかりは滅多に渡されい、去狀書いた其の上で。

由兵　すりや去狀を見て、その色紙を。

源兵　小梅と引きかへに違ひない、併し由兵衞おれをいかさまにかけると、此色紙をべり〳〵と引き破つてしまへば、小三は元より金五郎始め、幾人死人が出來ようやら知れまい〳〵。

由兵　ぢやによつて小梅をきつと。

源兵　約束が違へば、長吉殺しの訴人はおれが。

由兵　いや命は惜しまぬ、色紙が欲しい。

源兵　そんなら由兵衞。

由兵　源兵衞とくと。

源兵　樣子を見ようわい。

由兵　ム丶。（ト獨吟になり、兩人こなしあつて源兵衞中二階へはひる。由兵衞思入ある。）

〽春の夜の、闇はあやなしそれかとよ、香やはかくる丶梅の花、散れど薫り
はなほ高く、袂に伽羅の煙り草、きつうをしめどそのかひも、なき玉ごろ
もほんにまあ、柳は緑、紅の、花を見すて丶歸る雁。

ト此の唄の内由兵衞色々思案する。花道より小梅涙にしほれて花道の角にて躓きこけて、起き上り、門口へ來て思入。こなしあつて涙を拭き、なりをつくりずつと内へはひる。唄の切、彈きながしの合方、由兵衞と顏見合せ。

由兵　小梅、最前から何處へ行つた。

小梅　あい、隅田川の渡場へ。

由兵　はて、かはつた所へ何しに。

小梅　さあそれは。（ト言兼ねる。由兵衞こなしあつて、）

由兵　おれに隱して遠歩き、どうでろくな事ぢやあるまい。

小梅　なんのいなあ、言ふに言はれぬ、それは〳〵。

ト悲しさを隱す思入。此の内中二階の障子を開き源兵衞樣子を見てゐる。由兵衞源兵衞ちよつと見てわざと腹の立つこなしあつて、

由兵　いま〳〵しうてならぬわえ。（ト灰吹を煙管にて叩く。小梅こなしあつて、）

小梅　もしこちの人、そりや何事でござんすぞいなあ、お前に隱して私が行つたはちつと譯のある事、その樣子を言ひたいけれども、どうも言はれぬ、何事も堪忍して機嫌直して下さんせ、私

が身の上はな。

由兵　イヤそちよりはおれが身の上、割つて言はねど追附。

小梅　ヱ、。

由兵　いやさ追附男の効驗、存分にせにやならぬ。（ト源兵衞が方へかけて言ふ。）

小梅　それ〳〵矢張りその樣に腹立てゝゐやしやんす、機嫌直して下さんせえ。これ申し一生の、いやさ、頼みぢやわいなあ。

由兵　や、何んぢや、わりや泣くか、なんの悲しうもない事を。

小梅　あい、何んの悲しうもない事、泣きやしませぬ此樣に笑うてゐますわいなあ。（ト由兵衞思入。小梅顏をちつと見て、）こちの人、由兵衞殿、私よりお前が、なんで泣かしやんすぞいなあ。

由兵　なにが悲しくて、おれが。

小梅　イヱ〳〵、それお前の兩の目に、淚が一杯たまつてあるわいなあ。

由兵　いや、こりや春先で逆上るのぢや。（トこなしあつて拭ふ。）

小梅　こりやもうこたへられぬわいなあ。（ト悲しさを隱す心にて、チロリと茶碗を取つて來て手酌にて酒を飲む。）

由兵　こりやいつにない、様々な藝が上つたな。

小梅　アイ上つたわいな。（ト一口飲んで由兵衛に助けてくれと出す。由兵衛顔をそむける。）術ないかえ。

由兵　おりや酒どころぢやないわい。（トぐつと飲んで顔を顰める。）

小梅　術ないかえ。

由兵　熱燗を飲む思ひぢや。

小梅　ほんに由兵衛殿、藝者の時からふつとお前と言替はして今此様に女夫になつて暮すのは、これが天上の榮華とやら、私やこんな嬉しい事はござんせぬわいなあ。

由兵　それも逢ふは別れ、生は死の元といふ事あれば、いつ別れようやら知れぬ。兼ねてその心で。

小梅　いえ／＼私や別れはせぬぞえ、あの金輪奈落の底までもお前と離れはせぬぞえ、それで此様に。

トまた酒をついで飲まうとするを、由兵衛左の手にてその手を持つて、

由兵　もう大概に飲んだがよい。

ト此時小梅由兵衛が止めてゐる左の手の小指をぢつと見て、

小梅　こちの人、お前の此の小指は、どうさしやんしたえ。

由兵　ヤ。（トちやつと引く、小梅思入。）

小梅　えゝ大方髭剃る折剃刀でちよいと。（ト言ひつゝまた手をとりて、）但し深爪か棘でもたつたかいなあ。（トとつくりと見て）いや〳〵、こりや深爪でも棘でもござんせぬ。

由兵　おゝ切つてやつた。

小梅　そりや誰に。

由兵　さあ、餘所の女子に。

小梅　あのお前が。

由兵　心中に切つてやつた此の小指。

小梅　そりや信實に。（トとりつくをとつて突退け、源兵衛が方を見て、）

由兵　小梅、いやになつた。

小梅　えゝ。

由兵　とんと倦きが來たぞ、傍へ寄るな胸が惡いぞ。

小梅　こちの人、そりやまあなにを言うて下んすぞいなあ、その指は慥かに。さあたとひ心中に餘所の女子に切つてやらしやんしても、もう〳〵私や何にも言やしませぬ、悋氣どころかお前に追ひ

出されて、なんとせうぞいなあ。

由兵　互に心底見抜いた上の女夫、今の樣に言うてさへその通り、此の上また聞いたらびつくりする。

小梅　えゝびつくりするとは。

由兵　おゝびつくりさす。（ト源兵衞の方へかけて硯を取りさら／＼と去狀を書いて、）そりや。（ト去狀を投付けわきみする。小梅取つて、）

小梅　去狀の事、そんなら私を。

由兵　緣切つた暇やつた、その去狀をきり／＼持つて出てゆけ。

小梅　此の去狀を、私に此の去狀。

トうち／＼して由兵衞にとりつく。由兵衞こらへかね、

由兵　なんにも知らずに。（ト背を摩らうとして源兵衞を見て、小梅を突放し。）緣切つたといふ證據の去狀、ナ去狀ぢや。

トわざと源兵衞へ聞かす。

小梅　これお前、此樣な胴慾な心ぢやなかつたに。

由兵　飛鳥川の淵は瀬と、夜の間に變る男の心。

小梅　さあ私が心も。

由兵　なんにも言ふな、聞く耳持たぬ。

小梅　エヽ私が心、竹なら割つてお前に見せたいわいなあ。

由兵　そりや此の由兵衞も。いや未練な奴ぢや。

小梅　さうぢや。（ト由兵衞が脇差にて左の小指を切る。）

由兵　やあ〳〵、なんでこりや指切つた。

小梅　心中に。

由兵　や。

小梅　サア、お前に去られた上は是非がない、これから私も面當、藝者の時から心をかけて色々と口說いて下さんした源兵衞さん、今更女房に持つてと口で言うても得心して下さんすまい、それで心中に切つた此の指、源兵衞さんに見せて女夫になりまする。

由兵　すりや源兵衞に眞實の。

小梅　此の緣お前の構ひにやならぬ、此の去狀。

由兵　心中に指といひ。

小梅　よう縁切つて下さんした、惨い心の由兵衛殿ぢやもの、此の世ではお前の顔を見ませぬぞいなあ。

由兵　なんと。

小梅　私や源兵衛さんと、末長う添ひとげまする。

ト小梅去状をもつて花道へ走りはひる。由兵衛見てつか／＼と出で門口の柱によりつき向うをきつとながめほろりと泣く。此の内二階より源兵衛悦び勇みて下り来り、

源兵　えゝ辱い／＼、これ／＼由兵衛殿、今のを見ておりやほんに得心ぢや、こゝな結ぶの神の、南無由兵衛大明神さま／＼。

ト外へ出ようとする。

由兵　源兵衛、男づくの約束、去状やつた上はこちの望みの。

源兵　色紙か、小梅故なら色紙も身上も置いて行く。（ト色紙の箱を由兵衛に渡し、）おれはこゝにをるに、可愛やうろ／＼尋ねて居やう、小梅ばうおゝい／＼。

トらつゝぬ様になつて花道へ走りはひる。奥バタ／＼にて小三金五郎出て来り

金五　これ〳〵由兵衛殿、様子を聞いたが思ひがけない。

小三　小梅殿をなんでそなたは。

由兵　ハテ女房の事はうつちやつて置かつしやりませ。それよりお悦びなされませ、小三様お前の身請けもすつぱり濟んで年季の證文。（ト懐中より最前の證文を出し小三に渡す）金五郎様、色紙はやう〳〵無難に取返しました。

金五　えゝ忝い、小三が身請けといひ、此の色紙。

小三　皆由兵衛が志、なんと禮を言はうやら。

由兵　さういふ間に時がうつる、お二人共に其品を勘十郎様へ御持參あつて金兵衛様へ御執成、さすれば御身の言ひ譯け。

金五　そんなら此の色紙を一時も早う。

小三　勘十郎様や金兵衛様へ。

金五　由兵衛殿には。

由兵　後から參ります、さあお二人共。

金五　さうぢや、小三おぢや。

ト唄になり、金五郎小三を連れ色紙を持つて花道へ走りはひる。由兵衛後にてこなしあり、

由兵　あれでお二人の身の上、目出度く納まる上は。

と思入ある。此のところへ奥よりお君出で、

お君　由兵衛殿、まだ長吉はおじやらぬかいなあ。

由兵　打明けて得心さそうか。いや〳〵それではかへつて。

お君　まあ何所へ行きやつたのかいなあ、えゝ長吉もわしが此の様に案じてゐるのに、ちつとまあ顔見せてたもつたがよいに。

由兵　なんぼ待つても長吉はな。

お君　まだ暇が要るかいなあ。

由兵　こりやもういつそおれが尋ねて来よう、むゝさうぢや。

ト身拵へする。此の内お君悦びいそ〳〵捨ゼリフの内納戸より小梅つか〳〵と出で、門の戸をぴつしやり閉めると、これより胡弓入りの合方になり、小梅後ろにて戸を押へ、由兵衛こなし、お君思ひがけなく。

お君　小梅殿。

由兵　去つた女房立戻つて來たは。
小梅　由兵衛殿、名乘つて出やしやんすには及びませぬ。
由兵　なんと。
小梅　隅田川の渡場へ流れよつた弟の死骸。
お君　ヱヽ。（トびつくり）
由兵　その死骸の口に喰切りある小指、殺者の證據、これ。（ト左の小指を見せる。）
小梅　いえ、これ。（ト同じく左の小指を見せる。その手を取つて。）
由兵　さては最前切つた、そちが小指。
小梅　お前の替りに。
由兵　ヤ。（ト小梅を突放し、下手人は此の由兵衛。

ト此の内お君由兵衛が顏を見てゐる。

お君　そんならあの長吉は。
由兵　大川端の屋敷前で、昨晩手にかけ殺して仕舞つた。」
お君　ヱヽ。（トびつくり、）

小梅　ハヽア。（トとりみだし大泣き。此の内始終合方、由兵衞佛壇より以前の手紙を取って來て、）

由兵　淺次郞殿へ、姉小梅より。

兩人　えゝ、その文は。

由兵　金と一緒に持つてゐた。（トさつと開き下にゐて。）これ現在連れ添ふ女房の弟、淺次郞と聞いてはをれどまだ逢はぬのが因果、昨晚手詰の金の工面に詮方なく思案工風も暗まぎれ、百兩所持する丁稚長吉、惡者共が手込めにするを片つぱしから追ひまくり、送つてやらうと先へ立ちお主の爲めの出來心、非道と知つて無理やりに貸さぬを酷う、死ぬる際まで此金は命づくといふたは矢張り此の由兵衞へ、姉の頼み、これ此狀を取上げて知らぬ事とて胴慾に、二十三夜の月夜に死顏見れば小梅に生寫し、落ち散りし此の狀を拾うてびつくり、さては長吉といふたは、であつたかと、思へば後の死骸の片付け、さし汐なれば大川へ心で水葬、せめて名乘つて出る淺次郞は、こりやなげきの言譯、殊にお君樣の心底最前二人が樣子、此の由兵衞は人殺しの仕置にあはぬその先に、心は死んでをるわいやい。

お君　小梅さん、由兵衞さんが長吉を殺したといなあ〳〵、わしやどうせう、長吉が死にやつたらなんとせう、これお前も弟の事ぢやないかいなあ、えゝ。

トこなしあつて由兵衞にとりつき、

お君　なんでお前は長吉を殺さしやんした、可愛さうに、まあ矢張此家へ來てゐるであらうと思うて知らぬ道を驅出して尋ねて來たも、逢ひたさ見たさ、それ殺したとはこちや厭ぢや〳〵、長吉に逢ひたい顏見たい、元のやうに長吉を賠うて返しや〳〵。

ト振袖にて由兵衞を叩き、又打伏して泣く。小梅こなしあつて、

小梅　お君様、眞心の一筋に道理ぢや、道理でござんすわいなあ。あこれこちの人、覺悟を極めて死ぬるまで、お前に恨みを言ふまいと思うてゐたがたつた一言、えゝ聞えませぬわいなあ。

由兵　こりや何事も、金が敵とあきらめてくれ。

小梅　お主の爲めに弟一人、見かへはせねど恨みはこれまで、お前が弟に逢うてやつて下さんせぬ故互に顏を知らぬとて、さういふ事とは思はず袂の下から出た血まぶれなお前の小袖、こりや喧嘩さんしたかと外の案じに思はずも、隅田川の渡場より米屋の男が呼びに來て、行つて見てびつくり弟が死骸、その時私も氣を失うたわいなあ、あたりの人に世話になり心を靜めて死骸を見れば、口にくはへた小指の證據、殺者の詮議と泣き〳〵戻つて此の事を、言ふに言はれぬ着物の血潮、よもやと思へどお前の素振、酒にまぎらし試して見れば、左の小指切つてや

つたは色事と聞いて嬉しさ、さは言へ矢張疑うて、去状とつて思案をきはめ、わしや弟の下手人と覺悟極めてお前の樣子を。

ト取りつき泣くこなしあつて、

由兵　よい女房共お君樣、何をいうても詮ない繰言、此の上は後弔ふが肝心、その序に由兵衛も。

ト立上る。兩人兩方よりとりつく。由兵衛思入ある。

お君　そんならお前は。

由兵　由兵衛が嘸憎からう。

兩人　いえ、諦めてゐるわいなあ。

由兵　思へばまだ蕾の花の長吉を。

お君　殺す刃もお主の爲め、

由兵　夫思ひの、（ト兩人を引寄せ。）

三人　心を察して、空に春雨。

ト手をとりかはし泣く。此の内奥塀より長五郎窺ひ出て、

長五　長吉殺したは、いよ〳〵由兵衛、われを。（ト立廻り。）

お君　やあ悪者長五郎。

長五　最前のお君、おれが戀人。

ト　お君を引立てる。此内花道バタ〳〵、金五郎色紙を持つて走り出で、

金五　コレ〳〵由兵衛、最前受取つた色紙は此通りの僞物、夫故勘十郎樣には以ての外のお腹立。

由兵　ヤヽヽヽ、（ト取つて見て、）誠に是は襖のまくり、さては源兵衛めが。

金五　それ計りぢやない、小三が身の上、道で待伏して伴五郎や源兵衛が、年季證文共にあちらへ奪はれた。

由兵　すりや證文も小三樣も。

小梅　こちの人、お前の身の上より誠の色紙。

金五　小三が事も。

由兵　それ。（ト行かうとする。長五郎又かゝる。小梅金五郎立廻り、この内お君思入あつて、）

お君　南無阿彌阿佛々々。（ト自害する。）

皆々　ヤヽこれは。

お君　未來へ行つて長吉に。

皆々　それ程迄に。

長五　うぬを。（ト立廻りよろしく。）

小梅　これなう。（ト長五郎を押へる。）

由兵　なんでも源兵衛めを。

　ト花道へ走りはひる。これにてよろしく　幕

　本舞臺一面土手の模樣、幕の内より由兵衛伴五郎を踏附け、十平次が手をねぢ上げ、源兵衛刀を抜きかけ、是を留めてゐる見得よろしく、踊り三味線早幕に幕あく。

源兵　由兵衛、小三を戻したりや言分あるまいがな。

由兵　いや小三樣を受取つても、まだ誠の色紙をこゝへ出せ。

　ト突廻す。十平次捩切り、伴五郎起上り。

源兵　色紙とは何を、最前われに渡したではないか。

由兵　そりや僞のまくり紙、菅家御直筆の手向山の色紙は、源兵衛うぬを始め伴五郎どぶ六、骨をひ

しいでも、出させにやならぬ。

源兵　イヽヤ知らぬ、色紙よりうぬを。

由兵　命の濟んだ梅の由兵衞。

トかゝるを一寸立廻り。此内より長五郎走り出で、

長五　やあ、みんな爰にゐるか。

源兵　長五郎、われも一緒に由兵衞めをけしてしまへ。

皆々　合點だ。

由兵　相手は厭はぬ一くるめ、昔の商賣、さあ何處からでも。

皆々　こりや面白い。

ト四人を相手に面白き鳴物にて大立廻りになる。皆々寄つて由兵衞を舟へ打込む。起上り四人を泥の中へ打込む。源兵衞を引上げ懐中より色紙の箱を取出し。

由兵　これこそ誠の色紙、えゝ忝い。
まづ今日はこれぎり。

ト目出度く打出し

梅の由兵衛（終り）

敵討噂高松

かたきうちうはさのたかまつ

敵討高砂松（研辰――七幕）

志賀別莊の場
同城内門番所の場
同城門表先の場

序幕

役名　比良井市郎右衛門、唐崎九市郎、同才次郎、鳥實忠七實は結城左衛門尉友宗、若殿本太郎、小主水、足輕曾平太、門番甚助、田那上運平、中間鮒助、刑部宗勝、守山辰次。本田の姫夕照、侍女宮城野、腰元みどり、近習宅助、諸士運平、同雁平、其他諸士等。

本舞臺三間の二重、向ふ金襖、左右落間、後へ寄せて網代塀、一面の萩の盛り、總て本田家志賀別莊の體、二重に毯を敷き、夕照姫、下げ髮、裲襠にて住ひ、傍に腰元二人附添ひ居る、平舞臺に辰次、麻上下、大小にて控へ、鳥實忠七、やつし頭巾、袖なし羽織、手甲脚絆、鳥賣りの荷を擔いで居る、此見得早舞にて幕あく。

辰次　コリヤ、鳥賣何處迄通るのぢや。
忠七　ア、、モシ〳〵、其樣に仰せあらずとも、何卒商ひをさせて下さりませ。
辰次　聞きわけのない奴ぢや、ならぬと申すのに。
宮城　辰次樣、何やら賣物の樣にござりますが、何故おせり合ひなされまする。
辰次　イヤ、姫君を始め御家臣方お詰合居る處へ、鳥賣りの身として放し鳥をさせてくれいと、のほゝうづの願ひ、見苦しい、下りをらう。
忠七　イヤ、そのお叱りを遁り見ず、押して願ふも商賣づく、實は商ひがいたしたいのでござります。
夕照　あの者は鳥賣となゝあの樣に頼む故幸ひの放生會、諱めてやりたいなア。
宮城　畏りました。申し辰次樣、アノ鳥賣が姫君の御機嫌に叶ひました故、お引合せなされませいなア。
忠七　へイ〳〵、それは有難い仕合せにござります。お侍樣、そこをよろしう御願ひ申します。
辰次　コリヤヤイ鳥賣め、其方は仕合せな奴ぢや、今放生會をなされるとある故御前へ出やれ。
忠七　ハイ〳〵、御免なされて下さりませ。（ト揉手を仕ながら前へ出て）私は結城に住ひまする新米

の鳥賣、忠七と申しまして毎度京都へ參りまする。私が差上げまする雀は、堅田邊で捕りまする故、噂りが違ひます、モウ雀賣りの開山ぢやと評判に預り、瀬田の忠七と異名を取つた、名物男でござります。

ト此時、下手より侍三人、麻上下大小にて出で來り、

運平　ハア、姫君これにお渡りでござりまするか。一大事の儀が出來いたしました。

軍平　刑部樣にも取りあへず。

鳩平　只今これへお越しでござります。

辰次　何、一大事差し起り、取敢へず刑部樣にも。

宮城　これへお越しなさるゝとは。

夕照　みづからが身に取つて。

皆々　お氣遣ひな事ではござりませぬか。

辰次　シテ〳〵、刑部樣には、何れへお越しなさるゝのぢや。（ト此時下手より。）

刑部　イヤ、刑部宗勝たれへ乘つて夕照に對面せん。（ト序の舞になり、刑部、上下、大小にて出て來る。）

忠七　コリヤ怪しからぬ御取込み。ドレ、何れも片附て控へませう。（ト荷を隅の方へ片附ける。）

辰次　是は／＼刑部樣には火急のお越し。

皆々　先づ／＼これへ。

刑部　罷り通る、（ト二重へ上りあたりを見廻して）何は格別、夕照が身に取つての一大事故、取る物も取敢へずわざ／＼これ迄伺候いたした。

宮城　シテ、一大事と仰せられまするは、如何樣の儀にござりまする。

刑部　ヲヽ、その儀は兼て武將家より、御媒介下されし儀に就き、高丸家より火急に館へ使者到着、先づ一旦は夕照病氣の願ひに寄り、今日迄輿入延引いたせしも、姬の病氣は虛病との取沙汰、是に依て先達て結納の代りに送り遣はしたる、鈴虫の香爐受取りあるべし、然らば急ぎ輿入れいたしてよからうと火急の使者、夕照返事はなんと／＼。

夕照　自らは大切なる、願望のある身なれば故。

刑部　いやなれば猶の事、一刻半時も猶豫はならず、早々結納の印し高丸家へ返すより、外に思案はよもあるまじ、サア返答は、どうぢや、どうぢや。

夕照　たとひどの樣にあらうとも、父上樣のお國入り迄はなんと返事の仕樣もなし、是非に及ばぬ此場の仕儀、これ宮城野、結納の香爐返してたも。

宮城　畏りました。（ト上座より箱を取り出し）ハヽア、左樣なれば結納の香爐御返上申しまする。
刑部　イヤ、大切なる品故に、一寸改めて。
宮城　御尤、姫君樣、憚りながら。（ト宮城野、箱を出し、姫君あけて見て。）
夕照　ヤア、コリヤ大切な。（トびつくりする、刑部是に目を附け。）
刑部　香爐が如何いたした。
夕照　サア。
宮城　どうあそばしたぞ。
夕照　コリヤ、此中には。
刑部　何にもせよ。（ト見てびつくりなし。）誠にこりやいつの間にか、紛失いたした。
辰次　鈴虫の香爐は高丸家の重寶、紛失したとばかりでは事はすまぬ、ハテ笑止千萬。
刑部　何にもせよ、合點のゆかぬ寶の紛失、さつする處某が領分を徘徊なす、品田藤藏といへる盜賊の仕業にてはあらざるか。（ト姫こなしあつて。）
夕照　さうぢや。（ト懷劍にて死なうとする。）
宮城　コリヤ、何故の御生害。

夕照　何故とは、大切なる香爐を失ひしも皆自が誤り故。

宮城　エヽ、御短氣な姫君様、妾にお任せなされませ。

夕照　それぢやといふて。

皆々　マア〳〵、お待ちなされませ。（ト留める、此時奥にて。）

本太　ヤア、卑怯な、放せ〳〵。

皆々　先づ〳〵、お待ちあそばしませ。

ト早舞にて、奥より小主水、鞘上下、眉間に疵を受け逃げ出る、諸士留めながら出る、若殿本太郎、袴ばかりにて脇差を引提げ、小主水を追ひながら出る、後から諸士、○△□の三人、麻上下、大小にて附添ひ、止めながら出る。

本太　憎い小主水、ウヌ眞二ツ。

皆々　先づ〳〵、お留りあられませう。

トいろ〳〵留めるのを振拂ひ、花道へ追つて行く。此時、花道より、唐崎九市郎、上下、大小にて出で來り、能き所にて本太郎をきつと留め、

九市　殿、恐れ乍ら、先〳〵。（ト留る、若殿きつとなつて九市郎を見て。）

本太　ムヽ。そちや唐崎九市郎、予に向つて無禮の留立て、過言の小主水打ち放す、そこ退け〳〵。

九市　イヤ／＼、お留めは申されど、御手づから御佩刀を抜き放し、御手討ちとは餘りの一興、小主水が過言の罪科、逐一九市郎承り、事を糺すは身不肖なれ共家來の役目、先づ／＼お待ちなされませ。

ト本舞臺へ押戻す、若殿きつとなつて、

本太　主從の禮を輕んじ慮外の諫言、それぢやに依て。

九市　スリヤ、君に向つて慮外の御諫言申せし故に。

本太　手討にする、爰放せ／＼。

九市　イヤ、先づお待ちなされませ、小主水が罪の次第、何卒拙者めに、御聞かせ下さりませ。

本太　ヲヽ、如何にも申し聞かさう、予が思ひ立つたる當所唐崎の明神の社頭殘らず取拂ひ、一本松を庭木に取寄せる樣申附けたる、奉行の役目を承引せざるのみならず、予に詞を返す不屆者。

小主　ハツ、一旦の御諚、返し奉るには恐れながら當所唐崎明神は、お國名譽の靈地。殊更松は日本の名木、もしや御家にお祟りもあらんかと、夫故若輩の拙者なれども、此儀をもつての御諫言。

本太　ヤア、たとひ靈地明神たりとも予は當國の主人、一旦申出せし予が詞、此の儘にさしおかば政

九市　道の表面白からず。それ故討放す、九市郎、そこ退け〳〵。
御諫言を奉るは御家の爲、良薬は口に苦し、御用ひなく御手討にあはゞ武士の面目兼ての覺悟、一命惜む小主水でもござるまい、此上は拙者も御手討の御相伴に預りませう。サア、すつぱりとあそばせ〳〵。(ト前へ出る。)

本太　ヤア、不敵の一言、その方も手討にいたす、覺悟いたせ。

夕照　兄上には。

皆々　お待ちあそばされませう。(ト女形皆々、本太郎を留める、諸士は小主水をかばうて。)

諸士　お逃げなされい〳〵。

ト立役、皆々本太郎を隔てる。敵役は小主水をわざと本太郎の方へ突きやる。此立廻りの中にて太郎はいらつて斬つて行く　此とたん下手にある鳥籠を斬る、小雀澤山飛び出す、皆々びつくりなし。

皆々　これは。(ト空を見上げる。九市郎きつと見て)

九市　天晴。

本太　ム、。

九市　本太郎様の御手にかゝり、籠中を遁れし數多の小鳥、御手討よりは放生會、實に大度の御計ひ、

有難う存じまする。

本太　命冥加な籠の鳥、羽交ひ伸して、飛び去りをらう。

九市　ハア、有難うお受け召され。

小主　ハア、有難う存じ奉りまする。（ト平伏する、忠七、思入あつて向うへ出て。）

忠七　ヤレ／＼、恐ろしや／＼、すんでの事に、オヽ恐や。（ト身震ひをする。）

運平　ヤイ／＼、うぬは最前の鳥賣め、まだそれにおつたか。

忠七　おつたかとは胴慾な、商ひを仕かけた處が、方々ともめが出來、片隅へ寄つて居たが、納りがつきまして、御目出たう存じまする、つまらぬのはこつちでござります、籠には逃げられ籠はくだかれ、併し放生會の代物は貰いて歸りたうござります。

九市　ムヽ、スリヤ只今放せし小鳥はその方が代物とな。

忠七　ハイ／＼、私のでござります。

九市　シテ／＼、代物は何程ぢや。

忠七　イヤ、何程と申しますより私は、若殿樣よりお受取申したいものがござります。

本太　何、町人、予が手から受取りたきものがあるとな。

忠七　へイ／＼、それ、あなたのお首が申し受たうござります。

本太　ヤ、なんと。

忠七　只今も一寸聞いてをりますれば、なんぼ神樣は見遁しでも、ものおつしやらんと申しましても、無法の我儘、異見する者は手討にすると、なんぼ下の者ぢやとて、輕々しう瓜か茄子見る樣に、御成敗にもなりますまい、商ひの代物もそつちの手から籠をくだき、放しておしまひなされしからは、取り返しがなりませぬ、それぢやに依て代物代りに貰うて歸るあなたのお首、無理か尤か、よもや無理ではござりますまい。

ト一々本太郎に當て付けて言ふ、九市郎感心なせし體、本太郎は理に詰り。

本太　ム、。

刑部　ヤイ／＼、ウヌ素町人め、本太郎殿に向ひ樣々との世迷ひ言、扨はウヌも品田藤藏が同類の者よな。

辰次　ソレ何れも、繩打ち召され。

運平
鷹平　心得ました。腕まはせ。

忠七　コリヤまたあんまりな。（ト立廻つて兩人忠七をねぢ上る、忠七きつとなつて。）上使。

皆々　何と。

忠七　上使へ手向ひ、慮外であらうぞ。（ト兩人を投げ退けてきつとなる、九市郎こなしあつて。）

九市　ハテ、存ぜぬ事とて種々の無禮、眞平御高免下されませう、何は格別御上使とあれば。

皆々　先づ〳〵是へ。

忠七　役目の儀なれば罷り通る。（ト二重の上手へ行く。）

九市　思ひがけなきこの別莊へ御入來、シテ、あなた樣は何れよりの御上使。

忠七　鎌倉武將より直の嚴命。

九市　スリヤ、武將より直の御上使とな。

忠七　此場の一件、逐一見聞きいたしたれば、改めて上意を述ぶるに及ばず、粟津高丸とも長き囚みにて、上意をもつて娘が緣邊、今に輿入延引の沙汰といひ、此返答が承りたい。

九市　ハア、その儀に就ては。

刑部　アイヤ九市郎、疎略の返答無用に召され、町人の分際で此場で聞きし口寫し、かたりの正體、何と不敵の者ぢやござらぬか。

辰次　御上使入來の式作法は、夫れ〳〵禮儀のあるもの、衣類は元より一刀も帶せず、ましてや本城

へ参るべきを、却て此別莊へ來りしはかたりの正銘。

運平　いかさま、先觸れの案內もせず。

辰次　イヤ〳〵御兩所、その性名は拙者最前承り居るが、確か雀の忠七とやら。

運平　何、御上使の性名が。

鴈平　あの雀の。

軍平　忠七とナ。

辰次　イヤモウ、舌を斬られて飛びさうな名前ではござらぬか。

運平　なか〳〵左樣でござる。

皆々　ハヽヽヽヽ。

本太　ヤア、皆の者まだるい穿鑿、此本太郎を賺かんと不敵の曲者下れ〳〵、ヱヽ、此座を早く下りおらう。

忠七　ムヽ、スリヤ忠七を。

本太　ウヌ、下賤の身を以て、同席恐れぬうづ虫め、本太郎が手の內、骨身にきつとこたへたか。

ト扇にて打つてかゝるを突廻し、二重に腰をかけ。

忠七　斯く姿を變へて來りしは當初の實否を探らん爲、穩密の役目、疑はしくば此奉書、愼んで拜見召され。

九市　何、御奉書とナ。（ト立寄るを本太郎、二重より奉書を引ったくり、引き裂く。）

本太　僞筆の奉書持つて歸れ。（ト平舞臺へ投る、辰次こなしあつて。）

辰次　ふて／＼しいかたりの上使、ソレ何れも門前よりたゝき出さつしやれ。

運平　心得ました、かたりの鳥賣り、キリ／＼此場を。

皆々　立つて失せう。

忠七　歸つてよくば此方より。

皆々　キリ／＼失せう。

忠七　ム、。（トこなしあつて、花道へそろ／＼行きかける。此内九市郎奉書の破れを引寄せ、びつくりして、忠七へ目を付け。）

九市　御上使待つた。（ト忠七聞かぬふりをして行きかける。）イヤサ、鎌倉武將の嚴命に依て、御法度ありし誠の上使。

忠七　ヤ、何と。

九市　結城左衛門尉友宗には上使の御役目、御苦勞千萬に存じまする。

忠七　ムヽ、さすがは忠臣。（ト正面を向き引抜く、是にて、麻上下になり、荷の中より大小を出し。）友宗が家來、早まゐれ。（ト是にて家來花道より出る。）

本太　スリヤ、匹夫下郎と思ひの外。

刑部　當時鎌倉武將の直參。

辰次　結城左衛門友宗樣とは。

敵役
皆々　アノ、雀の忠七か。

九市　御先君、忠勝公の郎等、結城三郎殿の末葉。

辰次　何は格別、御上使樣には。

九市　先づ〳〵、是へ。

皆々　御通りあられませう。

忠七　役目の表、上座許しめされい。（ト太鼓、合になり、静々と二重に上り。）當家へ對して舊縁の某此度の役目を受け、姿を變へて來りしは事穩便に計らはんが爲。

刑部　ソレ御上使へ御詫び〳〵。

辰次　ハア、思ひも寄らぬ御入來故、殿を初め我々一同疎略の段、眞平御免下さりませうなれば。

皆々　有難う存じまする。

忠七　詫びて返らぬ此場の災難、武將の嚴命役目の表、先づ差當つての不調法は君の御手づから御判をすへて、御認めありし大切の御奉書を、引裂き捨てしは本太郎殿一生の不覺。

九市　アイヤ、その儀に就きましては、憚りながら眼前御上使樣へ此身一つを。イヤサ若殿、此身一つに此事の次第、何卒御任せつけて下さりませうなれば、有難う存じまする。

本太　ム、、九市郎、承知いたした。

九市　スリヤ御承知下されしとナ。

本太　今こそ汝がすゝめに任せん。

九市　左樣ござれば。

本太　此場の一件、よきに計らへ。（ト本太郎は、近習共を引連れ、奥へはひる。）

九市　アイヤ、殿、御退座下されては。（ト立上るを、忠七隔てゝ。）

忠七　イヤ待て九市郎、聞きしに增る亂法狼藉、此儘武將の御前へ。評議の上にて後日の沙汰、其方きつと承知であらう。

九市　スリヤ、遥々と御到着ありし、御役目も思はずに。
刑部　武將の御前へあからさまに言上あれば。
辰次　悔んで返らぬ木太郎様、御上使様の御情にて。
三人　返答の御猶豫を。
皆々　願はしう存じまする。
忠七　上意の次第は格別、君の御奉書引裂き捨てし即座の返答。
九市　その申譯こそ御願ひ申せし拙者が身の上、一旦失ひし寶なれど詮議仕出し差し上げませう。
忠七　スリヤ其方が寶の詮議を。
九市　及ばずながら拙者めが、思ふ仔細もござりますれば。
忠七　然らば即刻此座を去らず。
九市　糺して御目をかけませう。
刑部　九市郎、スリヤ寶の在所を。
九市　只今糺して御目にかけませう。御上使御免。イヤ何、守山辰次殿。
辰次　何でござる。

九市　田那上運平殿。

運平　御用かな。

九市　御兩所共一寸是へ。

辰次　スリヤ身共に。

運平　アノ、手前も。

九市　如何にも。（ト合方になり、九市郎は眞中に、辰次上手に、運平下手に座し。）

辰次　唐崎九市郎、呼び出し召されたは、

運平　用ばし、

兩人　ござつてかな。

九市　サア、御兩所共高丸家の重寶鈴虫の香爐、紛失なしたるその行衞、眞直ぐに白狀めされ。

辰次　ヤア默りをらう九市郎、御手前は何を見つけ何を證據に身共等へ對し餘りの過言、寶の行衞白狀とは何のたは言、氣でも違うたか、結納の寶紛失せしは姫君の誤り、身共は知らぬ、それに盜んだとは、何ぞ慥かな證據があるか。（トきつと言ふ。）

刑部　九市郎殿、辰次を名ざして盜賊呼はり、其身の明りを立てようとは、コリヤちと卑怯であらう

ぞ。

九市　アイヤ刑部様、明りが立たうが立つまいが、理非明白に糺さんとする九市郎が此場の詮議、其許様にはおかまひなく、暫時お控へ下されい。

刑部　然らば、控へて見物いたさう。（ト九市郎、小さき六角の箱を出し、文を添へて前に置き、箱の蓋を開き。）

九市　サア兩人、此品能く存じて居ようが。

辰次
運平　ヤアそれは。

九市　よも知らぬとは言はれまい、斯ういふ事に心を砕きし甲斐あつて、昨日多賀領見物の歸るさに、不思議に手に入る此一品、若殿本太郎様を調伏なし、御短慮の御病氣募らせんとの空恐ろしき企みの段々、家の寶を破却させその虚に乗じてお家をば、横領成就の上は、大金を出だすと雷獣へ約諾の此一書、一々記せし姓名を此處にて讀み上げようか。

辰次
運平　サア、それは。

九市　言譯あるか。

辰次
運平　サア〳〵。

九市　何と動きはとれまいがな。（トきつと言ふ、兩人顔見合せて。）

辰次 運平　ム、。モウ是非に及ばぬ。（ト兩人して斬つてかゝる。九市郎留めて見得。）

運平 軍平　コリヤ、我々も。（ト其中へ斬込む。辰次上手へヒヨロ〳〵となり、倒れる。）

刑部　ヱ、。（ト九市郎を目がけ手裏劍を打つ。九市郎は軍平を引廻して受留める、軍平アツト言つて倒れる、刑部思はず刀を引提げ立上る。忠七是れをよろしく留める。九市郎兩人と立廻り。）

九市　ソレ、小主水。

小主　心得ました。（ト押へる。九市郎三人を下緒にてくゝる。三方一時になり。）

九市　御上使御檢分あられしか、詮議のつるを得ましたれば暫時の御猶豫、是非共御上使のお情にて。

忠七　如何にも縁邊の儀は、寳が出づれば追て吉日良辰を選み、速かに事の納る道理、納め難きは本太郎殿、御奉書を破られし、此返答は如何いたす。

九市　その儀も後刻迄暫時の御容赦、召捕りし兩人は大切なる詮議のおとり、後方迄きつと糺明、御上使樣には奥殿へ、御入りあつて御休息。

忠七　詞に從ひ、兎も角も。

九市　女中方はおもてなしを。
忠七　然らば、各々。
九市　御上使様。
忠七　刑部殿。
刑部　先づ御入り、
皆々　あられませう。

ト目になり、忠七先に九市郎附添ひ、皆々奥へはひる。小主水は瀬平を、立役の侍一人は雁平を、双方引立てはひる、刑部奥を窺ひて平舞臺へ下りる。下手より曾平太出る。

曾平　刑部様。
刑部　コリヤ、曾平太今の様子を。
曾平　何も彼も、小蔭にてとつくりと。
刑部　先づ辰次から介抱を。
曾平　心得ました、エヽ、此様は見られた事かえ。（ト辰次を引起し、活を入れようとする。）
辰次　ヲツト曾平太、活には及ばぬ、モウよい、モウよい。

曾平　ム、、御安泰に渡らせ給ふか。
辰次　渡らせ給ふ處かい、當てられたと見せたは身共が奥の手、ずんと健に渡らせ給ふ、併しあの九市郎といふ奴は、油斷のならぬ小癪者。
刑部　生けて置いては後日の妨げ、いつそ一思ひと打かけし身共が小柄。
辰次　狙ひは逸れて軍八めが、無慚の最期。
刑部　彼奴も一味の端しくれなれば、せめて死骸を。
曾平　身共が馴染甲斐に葬つてくれよう。（ト軍平の傍へ寄る。軍平飛び起きる。）
軍平　ア、めつさうな、葬られてたまるものか。
辰次　ハア、是も奥の手をやりおつたな。
軍平　そこらはぬかつてよいものか。
刑部　シテ、彼の儀はどうぢや。
曾平　松倉卿の短刀、イザ、お受取り下され。（ト懷中より袋入の短刀を出し。）
辰次　目利は身共が御手のもの。
刑部　曾平太出かした、よく仕果せた。

曾平　イヤ、何に寄らず執念かけた上からは、いやでも應でも手取らにやおかぬ此曾平太。
刑部　時に曾平太、その手並を見込む上は、今一色申し付け度き一大事、使者の間にて何かの密談。
辰次　マア、それ迄は刑部樣。
曾平　何なり共、承りませう。
刑部　然らば、辰次。
辰次　先づござりませ。（ト唄になり、刑部初め皆々奥へはひる。引き違へて腰元みどり出る。）
みど　ほんにマア此頃は何やら御用が多いので、文認める間もない忙しさ、幸ひ爰は密かな所、ちやつとこの間に、さうぢや〳〵。
ト硯引き寄せ、文を書きはじめる。此時奥にて、人の足音する故、あわてゝ文を仕舞ひ
みど　斯うしてお届け申したら、よもや御返事のない事はあるまい、アノ胴慾な才次郎樣、エヽモウ辛氣な事ぢやわいなア。（ト此内奥より曾平太出て來て見て居る。）
曾平　我等とても御返事のない故に、テモマア、辛氣な事ぢやわいなア。（ト前へ出る、みどり見て。）
みど　ヲヽ、お前は曾平太樣かいなア。
曾平　曾平太樣かいなアとはどうしたものだ、餘り辛氣な御返事ぢやないか。

みど　ドレ私は奥へ。

曾平　オツトどつこい、手放してたまるものか。（ト振袖を引張る。）

みど　ヱヽ、又かいなア。

曾平　又かいなアとは胴慾な、コレみどり。みどり坊。一寸下に居なさんせいなア。

ト無理に引張り座らせる。介平太こなしあつて、なまめきたる合方になり。

曾平　今更言ふのも愚痴なれども、大抵色事師のお定りぢや、言はぬ事は聞えぬが、全體身共が御當家へ御奉公にありついたは何の為、三井寺へ御代参の時フツト見染しが悪縁にて、契り深しの橋渡しで、世話してくれたあの甚助、お前の親仁であらうとは夢にも知らぬ盗人の晝寢、ぐつたりやらかしてのらりくらりと門番の、家へ出かけて行つた時に、丁度お前がお宿下りして居たを見て、一倍思ひが増して来た、晝は幻、夜は夢、現にも忘られぬ思ひの種、胸の苦しさみどり殿、推量してくれたがよい。（トみどりはうるさいといふ思入。）

みど　ヱヽあたきらひな、あたすかん不作法な事、父さんに告げるぞえ。

曾平　イヤモウ、告げられても責められても、斯うなつたらいつその事、殺されたが本望ぢや、顔見てはどうもこたへられぬ。（トみどりに寄る。）

みど　アレ、悪い事して下さんすなア。

ト突退け逃げんとする。此内甚助、油さしを持つて出る　曾平太はみどりと取り違へ、甚助を捕へ。

曾平　イヤモウ、悪い事でも良い事でも、斯うなつたらやけくそぢや。

ト甚助を押倒す。此時、油さしを落す故、曾平太滑りべつたり座る。甚助も滑りかけて。

甚助　どつこい。（ト踏みこたへる、みどりは見て。

みど　お前は父さん、好い處へ。

曾平　ヤア、甚助か。（ト言はうとして。どつこいしよ。（トべつたり下に居る。）

甚助　ヲヽ甚助ぢや、コリヤ娘を捕へてどうさつしやる。

曾平　イヤ甚助殿、こなたの口からさう打割つてあらはにものを言ひかけりや、こつちも一番言はやならぬ。恥かしながらみどりに惚れた、改めて甚助殿、得心させて女房に貰ひたい。

ト甚助あきれしこなしあつて。

甚助　ヱヽあなたはまアあきれたものぢや、ようまアそんな事が言はれたものぢや、又娘も曾平太殿が斯ういふしだらと俺の耳に入れておけばよいものを。

みど　さいなア、外の事ならお耳にも入れまするが、あなたの無理な事故に、ツイ案じ過して言はな

んだわいな。

甚助　ム、、さうか〳〵。イヤ何事も俺が胸にあれば案じぬがよい、サア爰に居ては惡い故ちやつと奥へ行つて、御用を聞きや。

みど　ハイ〳〵、左樣なら此後其惡い事をしやさんせぬ樣、おつしやつて下さりませいなア。

甚助　サア、よいと申すに、早く行け。

みど　ドレ、私は奥へ。

曾平　ヤア。

みど　御用を聞きませうか。（ト唄になり、みどり奥へはひる、曾平太夫の立つこなし。）

曾平　サア、甚助どうだ、いよ〳〵娘を女房にくれるか、但しは不得心か。

甚助　マア、いやぢや。

曾平　何と。

甚助　咽元過ぐればあつさを忘るゝと、[illegible]を出さつしやるなう、親御様は斯う惡うは産み附けはさつしやるまい、[illegible]、こなたも元は[illegible]、惣左衛門様の御惣領に産れ、こなたに[illegible]此甚助が妹、こなたは大切な和子、成人する

に随ひ行りとあらゆる悪黨業、大津の追分で雲助と迄成り下り、御流浪なさるがおいとしさに、一昨年の冬仏がお組頭にお願ひ申して御奉公、それよりしても朋輩衆と喧嘩ばかり、それは私が後へ廻りお詫をすればこそよけれ、大抵の事ぢやござりませぬぞ、それを忘れて娘へ戀慕、此上無法を働けば、お組へ斷つて御門前からたゝき出さうか、以後はきつとたしなまつしやれ。

曾平　イヤ、ゑらいものぢや、甚助わりやアモウ言ふ事はないか、娘をくれずばくれぬでよいが、コレ大恩のある宗左衛門様の若旦那曾平太様ぢやぞ、手拜して娘をくれべきに、それを其樣に申すとは事の外なる其心底、是非共娘は俺が貰ふぞ。

トきつと言ふ、曾平太こなしあって。

甚助　イヤ、どの樣に言へばとてお家に仇なす悪人、殊に寶に望みをかける盗賊、何しに娘をやるるものか。（ト是にて、曾平太むつとせしこなし。）

曾平　ヤア、だまりやアがれ、御家に仇なす大悪人とは何の事だ、それに又盗賊呼はり、何を證據に申すのぢや。

甚助　ヲヽ、盗賊といふ證據は紅葉山にて、そちが懐中より落たる密書。（ト密書を出し。）

曾平　ヤア、それは。
甚助　何と曾平太、盜賊と云うたが此甚助の誤りか。
曾平　イヽヤ、身共その密書覺えはない。
甚助　其覺えなきものが、名宛に長濱曾平太殿とは何で書いてある。
曾平　サア、その名宛は。
甚助　是ぢやに依こ盜賊に、娘はやらぬと云うたのぢや、それが何とした。」
曾平　サア、それは。
甚助　お組頭へ持つて出ようか。
曾平　サア、それは。
甚助　御吟味を願はうか。
曾平
甚助　サア〳〵〳〵。
甚助　よもや言譯はあるまいがな。（トきつと言ふ、曾平太むつとして。）
曾平　ムヽ、その言譯は。（ト拔打に斬つてかゝる、甚助是を留め。）
甚助　どつこい、さう味くはさせぬぞ、手前達の一人や二人苦にするものか、一合取つても武士の端

くれ、あのこゝな恩知らずめが。（ト突き放し。）

曾平　ヱヽ、さうぬかしやア。（ト又斬りにかゝる。甚助刀をたたき落し、頭髮取つて、ぐつと引き附け。）

甚助　コリヤ、うぬがいくらじたばたしてもモウ叶はぬ、此惡黨故に見限つた、宗左衛門樣は御尤も、いがみくさつたその手の内では、めつたに人は斬れまい、及ばぬ事だ叶はぬ事だ。

（ト引き起し、拔身を引つたくりポンと當てゝ。）

甚助　人外めが。（トきつとこなし、曾平太はそのまゝどつさり、甚助は密書を見て。）此の密書の樣子では、大それた科人、併し此位ひに異見の杖加へたれば思案も附かう、御組頭に差出すべき此書面なれど、暫時樣子を見屆けて、無事に双方納まれば浪風立たぬ御家は萬歲、ドレ御番を仕よう。

（ト唄になり、甚助下手へはひる。後合方にて曾平太起上りいろ／＼こなし、此時、上手より鮒助、あわただしく走り出で、曾平太を見て。）

鮒助　曾平太樣ぢやござりませぬか。

曾平　そちや鮒助か、アイタヽヽヽ。（ト脇腹を押へ。）何ぞ用事か。

鮒助　イヤ外の事でもござりませぬが、代參戻りの御家老を待ち受けて討取る手筈、最早彼是時刻なれば。

會平　ヲヽ、そりや承知ぢや。

鮒助　承知なれば、早う御出なされませ。（ト手を、取りにかゝる。）

會平　アイタ、アイタ。（ト下に居る。）

鮒助　何だ、コリヤどうなされましたのぢや。

會平　イヤモウ、息がはづんでものが云へぬ。（ト鮒助を招く。鮒助心得て。）

鮒助　ヱヽ、耳かな。（ト是にて囁く。）スリヤ、門番の甚助を。

會平　コリヤ。（ト又囁く。）

鮒助　成程々々、コリヤ生かしては置かれぬ奴ぢや。

會平　ぢやに依て。

鮒助　血祭りに殺した上。（ト大聲にて言ふ。）

會平　コリヤ。（ト思はず押へて。）アイタヽヽヽ。（トぺつたり下に居る、鮒助口を押へる。道具廻る。）

本舞臺平舞臺、見付三間の間城門の心にて、丸家根の扉に小門有て出這入り、大門には閂を入れてあり、東西高石垣。土手の上は塀の裏門脇。上手に瓦家根、板びさしの番小屋、折廻し屋體、白張りの幕を張り、見附、唐紙襖、屋體に黒溜しの番所行燈、突棒、刺股、切手桶、六尺棒等あり、右二重に甚助、角行燈に火を燈し、板衝立の影にて、楊枝を削つてゐる。本釣鐘、合方にて道具留る

甚助　ドレ／＼一服仕ようか、只居ようより手を動せば今日の煙草代丈は取れる、氣兼なしに一服やらうか。（ト煙草を呑む、花道より倉平太先に、運平尻からげ頬冠りにて出て、後より鮒助出で、番小屋を窺ふ。）

鮒助　倉平太様。

運平　たしかにあれが甚助の。

倉平　コレ。（ト押へて。）何分身共が合圖する迄、けどられぬ様忍び寄つて、合點か。

運平　承知ぢやが、鮒助あわてゝぼろを出すな。

鮒助　何、お前様こそぼろを出さぬ様になされませ。

倉平　そんならわれ達は後から來やれ。

鮒助　氣遣はずとお出なされませ。

（ト是にて、倉平太本舞臺へ來り、尻からげを下して頬冠りを取る。此時、小門の外より、近習宅助合印の弓張を持ち、番所の前に來て。）

宅助　御門番殿、御大儀。

甚助　ヲヽ、宅助、歸りやつたか。

宅助　やう／＼、今歸りました。
茜助　さうかいの。

（ト言ひながら倉平太と入れ違ひ、花道へはひらうとする故、運平、鮒助、提灯を見て惡い／＼といふ思入あつて後しさりして小屋へはひる。宅助は何心なく花道へはひる。兩人は小屋の中にて行き違ひたる思入にて、出で來り窺ふ。倉平太、揉み手をしながら、

倉平　モシ／＼、茜助さま。（ト進み寄り傍へ行く。茜助、すかし見て。）
茜助　ヲヽ、こなたは倉平太殿。
倉平　ハイ、倉平太めにござります、先程はお有難う存じまする。
茜助　扨は性根に入りましたかの。
倉平　イヤモウ、こなたの段々との異見がたつた今合點が行きました、それ故お禮に出て來ました。
茜助　何もお禮を受けようとするのぢやござんせぬ、心さへ直つたら悦びます、マア／＼爰へかけさつしやれ。
倉平　左樣ならお許しなされて下さりまするか。（ト屋體の端に腰をかける。茜助こなしあつて。）
茜助　是はしたり、何ぼぢきに魂が入れ替つたとて、その樣に慇懃にせいでもよいぢやないか、マ

アこつちへ、上つたがよい。

曾平　ヘイ〳〵、今迄は大きに了簡違ひをやらかしました、ほんに私の様な者をお世話下されたのも忘れ、こなたの娘に戀を仕かけ悪い事を仕ましたが、モウ〳〵ふツつり思ひ切りました程に、御了簡して下さりませ。　ト言ひ乍ら、曾平太は、煙管を口にくはへ、様子を見てゐる。）

曾平　コレ、甚助殿、向後性根を入れかへる程に、何卒最前の物をば。

甚助　ム、、最前の物とは。

曾平　こちらへ戻して下されませぬか。

甚助　ハ、ア、最前の物とは大方。（ト以前の密書を出し。）此密書の事であらう。

曾平　左様々々、さつぱりと魂を入れ替へました故、それを戻して下さりませ。

甚助　成程、魂さへ入れ替へたら。イヤ〳〵あんまり早過る、受取り憎い、マアうかつには渡されぬ。

曾平　そんなら是程頼んでも。

甚助　お前の口から魂を入れ替へたと言はず、人から言はれる様にさんせ、その時には戻して進ぜう。

曾平　スリヤどうあつても今すぐには。

甚助　味い事を、言ふ人ぢやなア。（ト是にて曾平太、むつとせしこなし。）

曾平　ヱ、おきやアがれ、その密書をうぬに持せておいては、夜がゆつくり寢られぬ故、返さぬというて取らずにおかうか。（ト此時、運平、鮒助、よいかといふ思入、曾平太兩人に。）ソレ。

運平
鮒助　合點ぢや。（ト兩人甚助にかゝるを拂ひ退け。）

甚助　コリヤわいらは何とする。

曾平　こま言ぬかさず密書を渡せ。

ト是にて密書を引張り、いろ〳〵立廻りあつて、トド運平は鐵行燈を打ち返す。鮒助は番行燈を倒す。双方共消える。くらがりに成る。

甚助　南無三、燈火を。

ト曾平太拔いて甚助へ斬りかゝる。是にて甚助六尺棒を持て受ける。鮒助、運平、火鉢の灰をかぶる。曾平太鐵行燈の火袋の中へ首を突込み眞黑になり、双方見すかし、三方共一時の見得、忍び三重の合方にて此道具廻る。

本舞臺城門の裏手、東西石垣、高塀、本釣鐘にて道具留る。ト花道より小主水、着附上下、大小にて、提灯を持ち出で來り。

小主　最早あれは瀬田の御門、少しも早う、さうぢや、〳〵。

ト本舞臺へ來る。バタ〳〵にて小門の中より鮒助、運平拔身にて逃げ出る、提灯に行き當りびつくりしてたゝきおとさうとする。小主水きつとなり提灯にて顏を見ようとする。兩人は見せまいとする。トゞ鮒助提灯を切落す。運平斬込むを小主水扇にて打拂ひ、片手にて鮒助を引き付ける。此立廻りよき見得にて此道具廻る。

本舞臺元の道具に戻る。ト曾平太斬付けてゐ、茜助六尺棒にて留めてゐる。是よりくらがりの探り合ひいろ〳〵立廻つて、トド曾平太は茜助の肩先に斬付る。茜助へたる。曾平太たゝみかけて斬込まうとする。茜助六尺棒にてめつた打に打つ。此見得にて道具廻る

本舞臺元の裏門の道具になる。ト小主水鮒助運平を相手にくらがりの立廻り。トド扇にて鮒助の刀をたゝき落す。鮒助は上手へ逃げてはひる。運平斬つてかゝる。トド小門の處へ押しやられ、運平門の中にころげ込む。小主水續いてはひらうとするを、運平内より戸を押へて居る。此見得よろしく道具廻る。

本舞臺又元の道具になる。ト曾平太、茜助に乘りかゝり密書を取りとどめを刺してゐる。運平は小門のくらがりの内より扉を押へてゐる。茜助は苦む、是にて運平は「さては」といふ思入あつて扉の手を放す。小主水はひる。運平を捕へようとする。此物音に曾平太逃げようとする。小主水は曾平太と渡り合ふ。此時市郎右衞門ぶつさき野袴にて家來に提灯を持たせ入り來る。曾平太は提灯を

斬つて落す。市郎右衛門曾平太を捕へ、

市郎　曲者（くせもの）。（ト曾平太の小腕を取り、見事に投げるを木の頭。）とつた。

ト早縄をたぐる。家來は震へてゐる。小主水は運平を引付ける。此見得よろしく、早き合方、風の音にて、

ひやうし幕

二幕目　粟津本城の場

役名　比良井市郎右衛門、唐崎九市郎、同才次郎、若殿本太郎、結城左衛門尉友宗、足輕曾平太、守山辰次、刑部宗勝、中間鮒助、中間琵琶平、走井文吾、鼻之丞、市郎右衛門妹おらん、奥女中みどり、諸士軍平、同雁平、同三藏、同藤助、番人二人、近習二人等。

本舞臺平舞臺。黒幕、一面の石垣、土手通り矢切りを見せ、所々に蘆原の茂み。松の釣枝、立木、此後ろに土藏を見せ、すべて江州瀬田口の體、七ツの鐘、合方にて幕あく。ト花道より中間琵琶平

　柿の脚袢、[illegible]をして、小田原提灯を提げ出て來り、花道にて、

琵琶　あの鐘は七ツだな、コリヤひどく遲くなつたわえ。(ト言ひながら本舞臺へ來り。)ハヽア、爰は何處だ。(ト提灯にてあたりを[illegible]て)南無三、爰は[illegible]田口御寶藏前裏通り、コリヤ道をとつぱぐつてとんだ所へ、ハテ、コリヤ變だわえ、斯ういふ時には魂を臍の下へ落し附て、先づ一服煙草でも。(ト此時落ちてありし、鑑札に氣附き。)なんだ妙なものが。(ト袋を取り見て)コリヤ御門出入の鑑札だ。(ト鑑札を見て)守山辰次組下坂口部屋鮒助。扨は彼奴めが、夜鷹でも買ひに出かけて、落したものと見える、定めて難儀をして居よう、何卒返して、イヤ〳〵、人の事よりおらが鑑札。(ト探し見て、びつくりし)ヤア、コリヤないわ、ハア今朝屋敷を出かける時、ヲヽよいわ、幸ひ拾うた此鑑札、鮒助と名乗つて歸つてくれべえ。

　ト煙草入より煙管を出し火を附ける。此時、人の足音する故、提灯の火を消し眞中の蘆原の中へ忍ぶ。奴鮒助頬冠りして、番人金兵衛と斬り結びながら出る。此時辰次、着流し、大小、頬冠りにて下手の蘆原より出る。此中、鮒助　番人金兵衛を斬り倒し、とゞめを刺す。中間琵琶半、後より出て、様子を見てゐる。此時辰次前へ出て、

辰次　鮒助首尾は。

鮒助　まんまとしてやつた、轡。（ト轡を出して渡す。）

辰次　ヲヽ出かした、然し此死骸を捨て置いては後日の災ひ。

鮒助　イヤお氣遣ひなされまするな、かやうの事もあらんかと、琵琶平めが名前を記せし此鑑札、ちよろまかしておきましたれば。（ト袋入の鑑札を出し。）是を斯うして。

ト探り寄り、死骸の手に持たす。琵琶平手さてはといふ思入。

鮒助　此死骸に持たせおかば、盗賊は琵琶平め。

ト此内、琵琶平悪い奴だといふこなしにて、鮒助の鑑札を出し、死骸に持たせ、斯うしておけばよい、といふ思入あり、両人は是に氣の附かぬこなし。

辰次　イヤ、よく氣が附いた、彼奴は比良非の組下なればイデ此上は邪魔になる、兄弟を罪に取つて落せば、何も彼も此方の思ふ壺。

鮒助　イヤ、うまい手つがい。

辰次　最早、夜明け。

鮒助　人の見ぬ間に、お先へござれ。

辰次　合點だ。

ト始終本釣鐘にて、辰次先に立ち鮒助も行かうとする。此時琵琶平窺ひ寄つて辰次の錨を持つて引き留める。辰次扨はといふこなしにて振り拂ひ行く。鮒助隔てる。始終くらがりの模樣、だんまりの心にて、三人引つ張りの見得にて、此道具廻る。

本舞臺通し二重、金の大襖、總て栗津家城中大廣間の模樣、右二重の眞中に、若殿本太郎、着附、長上下にて褥に居り、後ろに、麻上下の近習二人、小姓二人居並び、上の方に上使左衞門、着附長上下にて高椙引にかゝり居る。此前の筒花活に菊の花活けあり。右二重下手に刑部、着附上下にて控へ平舞臺上手に、諸士一二、下の方に三四、皆々、麻上下にて居並び、此見得明け六ツの太鼓にて道具留る。

刑部　今日は重陽の御壽。

士一　鎌倉在府の大殿を始め奉り。

士二　若殿本太郎樣にも益々。

士三　御機嫌うるはしく。

士四　恐悅至極に。

皆々　存じ奉ります。（ト皆々平伏する。序の舞になり。）

刑部　則ち御當家の御先祖平八郎忠勝様には、信州天神坂の合戰、天祿二年九月九日日頃手馴し松倉卿の鎗引提げ、數千の敵を突破り、遂には城を乘取つて比類なき手柄を顯はし給ふ。

左衛　其御り、勳功ありし松倉卿の穗先を以て短刀となし、當家の寶と承はる。

士一　則ち今日の儀式に用ゆる御家の先例。

士二　然るに其短刀、先達て紛失いたし。

士三　草を分つて詮議いたせど。

士四　今に於て在所知れず。

左衛　其所を計つて此左衛門、今日の役名を申受しも、當家の無事を計らはん爲。

刑部　ハア、萬事に御心添への段、有難う存じ奉ります。

左衛　此度某當家へ參りしは先達て申し入れし如く高丸家へ武將よりの御指圖を以て、當家の姫君夕照が婚姻の媒人は則ち此結城左衛門、結納の印として高丸の重寶鈴虫の香爐先達て差し送りし處、今に於て輿入延引は媒介たる左衛門が誤り、夫故急ぎ輿入ある樣改めて武將の嚴命。

刑部　イヤ、其儀は家老たる比良井市郎右衛門に申し付け置きましたれば、追つて返答申上るでござりませう。

左衛　シテ、比良井市郎右衛門は。

刑部　いまだ登城仕りませぬ。

左衛　斯く打捨ておくは某をないがしろのいたし方。此上は猶豫はならぬ、夕照輿入あるべき、其の日と申すは。

皆々　サア、その儀は。

左衛　但し又送り越せし鈴虫の香爐、お返しあるか。

皆々　サア、それは。

左衛　姫を伴ひ立ち歸らうか。

皆々　イヽヤ、その儀は。

左衛　香爐を受取り申さうか。

皆々　サア。

左衛　御返答は如何でござるな。（トきつと言ふ、此時揚幕にて市郎右衛門。）

市郎　アイヤ其御返答、比良井市郎右衛門それへ參つて、申し上げん。

ト序の舞になり、市郎右衛門着附、上下、家老のなりにてツカ〳〵と出で來り、直に本舞臺へ來て、

よき庭に控へる。若殿本太郎思入あつて。

本太　ヲヽ、市郎右衛門、只今登城いたしたか。

市郎　ハア、先づは若殿初め御上使様、一家中の各々、今日は重陽の祝儀。

刑部　先づ以てお互ひに、

皆々　恐悦至極に存じまする。（トこなし。左衛門思入あつて。）

左衛　[illegible]市郎右衛門。

市郎　ハ、・・・

左衛　[illegible]守殿には鎌倉在府なれども、萬事を計らふ其方なれば、婚姻首尾よく整へば兩家の然るに今に姫の輿入延引、斯く捨ておかるゝは様子あつてか、返答によつて計らふべき、市郎右衛門、何と。

刑部　[illegible]御上使の仰せらるゝが御尤も、早速輿入いたすにも肝心の夕照姫は。

市郎　イヤ、それは拙者申し上げん、刑部様にはお控へ下され、成程左衛門様仰せの通り承知仕る、[illegible]よりの指圖の縁組早速取り急がんと思ふ折柄、志賀の別荘にて短刀の紛失、あづかりし[illegible]の誤り、大殿には鎌倉御在府中の事なれば如何はせんと思ふ折柄、姫君様には御病氣

左衛　シテ、比良井市郎右衛門は。
刑部　いまだ登城仕りませぬ。
左衛　斯く打捨ておくは某をないがしろのいたし方。此上は猶豫はならぬ、夕照輿入あるべき、其の日と申すは。
皆々　サア、その儀は。
左衛　但し又送り越せし鈴虫の香爐、お返しあるか。
皆々　サア、それは。
左衛　姫を伴ひ立ち歸らうか。
皆々　イヽヤ、その儀は。
左衛　香爐を受取り申さうか。
皆々　サア〱。
左衛　御返答は如何でござるな。（トきつと言ふ、此時揚幕にて市郎右衛門。）
市郎　アイヤ其御返答、比良井市郎右衛門それへ參つて、申し上げん。
ト序の舞になり、市郎右衛門着附、上下、家老のなりにてツカ〱と出で來り、直に本舞臺へ來て、

よき座に控へる。若殿本太郎思入あつて。

本太　ヲヽ、市郎右衛門、只今登城いたしたか。

市郎　ハア、先づは若殿初め御上使樣、一家中の各々、今日は重陽の祝儀。

刑部　先づ以てお互ひに、

皆々　[illegible]に存じまする。（トこなし。左衛門思入あつて。）

左衛　ハヽ[illegible]郎右衛門。

市郎　ハヽ、、

左衛　[illegible]守殿には鎌倉在府なれども、萬事を計つふ其方なれば、婚姻首尾よく整へば兩家の[illegible]るに今に姬の輿入延引、斯く捨ておかるゝは樣子あつてか、返答によつて計らふべき[illegible]、市郎右衛門、何と。

刑部　[illegible]上使の仰せらるゝが御尤も、早速輿入いたすにも肝心の夕照姬は。

市郎　ハイ、、それは拙者申し上げん、刑部樣にはお控へ下され、成程左衛門樣仰せの通り承知仕る、[illegible]よりの指圖の緣組早速取り急がんと思ふ折柄、志賀の別壯にて短刀の紛失、あづかりし[illegible]郎の誤り、大殿には鎌倉御在府中の事なれば如何はせんと思ふ折柄、姬君樣には御病氣

南無三、輿入延引いたさば高丸家への申譯立ち難く、とやせんかくやと晝夜心を勞する折柄、又候や再度の御上使、只此上は夕照姫病氣平癒あらば、早速輿入いたすに依て暫時の間は、何卒左衞門樣の御計ひにて。

諸士皆々　デモ、みす〳〵。

市郎　ハテ、其方達が知つた事ではないわサ。

四人　ぢやと、申して。

市郎　ハテ、いらざる差し出、控へおらう。

左衞　市郎右衞門、寶の紛失姫の身の上、國家の納り、嘸、心勞であらうなア。

市郎　ハア、拙者が胸中、憚り乍ら御推量下さりませ。

左衞　斯申す家老が祖父、大部友光は當家の先祖平八郎忠勝殿の家臣、味方原の功名が鎌倉殿の御目にとまり直參に召し出され、則ち此粟津家は拙者に取つては、古主の嫡流。

市郎　誠に深き御好みを思召し、御猶餘下さらば主人が悦び、拙者が安堵、此儀願ひ奉る。

左衞　シテ、夕照の病氣は。

市郎　物怪同然。

左衛　何と。

市郎　人は四百四病の病の器、何時どの様な御病氣の起らうやら、物の怪の業と見え、折に觸れては物狂はしきその有様。

左衛　アイヤ、市郎右衛門、汝如何程包みかくす共、夕照姫は。

士一　國遠なされて。

同二　御館には。

四人　お越しなされぬぞや。

市郎　ムヽ。（ト前にある花活けの菊を見て）此菊は諸花に勝れ、自ら君子の徳あり、故に菊は花の弟と賞す。

左衛　昔唐土周王に仕へし慈童、誤つて君の枕を越ゆる。

市郎　群臣共の罪をあげて、遠き山路に捨てんと奏す。

左衛　帝、深くあはれみ給ひ四句の偈を授け給ふ。

市郎　慈童心に彼の偈を保ち、常に菊の花の雫をなめて。

左衛　七百余歳の命を延はる、則ち彭祖是なり。

市郎　それは、如何。

左衛　是は今。

市郎　世俗の者の諺にも。

左衛　一寸延びれば尋とやら。

市郎　スリヤ御上使の御賢慮にて。

左衛　菊の判斷。

市郎　國家の納り。

左衛　合點がいたか。

市郎　御芳志の程。（ト飛びしさり。）有難う存じ奉りまする。（ト平伏する、本太郎思入あつて。）

本太　申し付し品、是へ。

小姓　ハア。（ト白木の箱を三方に乘せ、持出で左衛門の前へ直す。）

本太　ハア、本太郎が心を籠めし其一品、御披見下さりませう。

左衛　何か樣子の有磯海、深き思案の此箱は。

本太　あけて言はれぬ拙者が心。

左衛　籠めし一品知られ共、奥へ參つて後程披見。
市郎　先づそれ迄は對客の間にて御酒一獻。
本太　今様の節検校殿に申し付けて御氣慰みに。
刑部　此上は姫の身の上。
諸士四人　短刀の一件。
左衛　問ふも語るも、今宵の落着。
本太　萬事の思案。
市郎　後程迄に。
左衛　然らば、本太郎殿。
本太　左衛門様。
市郎　御上使様には。
刑部皆々　先づ、いらせられませう。

ト唄になり、左衛門先に本太郎、刑部、その外皆々附添ひはひる。後に市郎右衛門殘り、合方になり。

市郎　今左衞門樣のお渡しなされし此の菊の一本、ム、。（ト菊を取上げ、こなしあつて。）夫れ花は臣下、根元は御主君、落花微塵になすとも根元を枯らす謂なし、忠義は金鐵さりながら、寶の紛失は若殿の越度、其身に引受け忠義を立つる弟九市郎、察する所伯父刑部殿を初め、守山辰次とは思へ共荒立てられぬ寶の詮議、若殿の御身の納り姫君の御身の上、花物言はねど今宵の中、事を納める工夫が、（ト花を下におく、是を道具替りの知らせ。）ありさうなものぢやなア。

ト思案の思入、合方にて道具廻る。

本舞臺三間の間數寄屋建、見附鼠壁、床の間に金比羅のお札を飾り、神酒、洗米を供へあり、東西落間、後に寄せて建仁寺垣、石燈籠、柴垣、舞臺一面の菊の花檀、いつもの所に枝折門、右二重に九市郎、着流し一本差し、座布團を敷き、硯箱を置き、手紙を認めてゐる。よき處に蟲籠あり、此見得、獨吟にて道具納まる。

へ迷ふにぞ、今日こそ秋に萩の葉の、露草程も僞の、あるかなきかは白菊の。

ト是にて九市郎筆を止め。

九市　ヲヽ、思へば武士の身の上程味氣なきものがあらうか、短刀の紛失二つには、鎌倉御舘の御敎書を誤り裂きし若殿の、科を此身に引き受けて潔く切腹と、覺悟は兼ねて極めしが、心にかかるは若殿の御短慮、諫書を殘し相果てなば、憐れ不便と思召し、御心和ぐものなれば死後

の忠節此上なし。

〽床にゆかしき夕月夜、塒釣り葉の奥座敷、寢ぬ夢に聞くおとり草。

ト右の唄にて、又手紙を認める。花道より娘おらん振袖、屋敷風、小さき提灯を袱紗にて包み、携へ出て、花道にて。

らん　ア、嬉しや、どうやら斯うやら爰迄は來たれ共、向うに見えるあの數寄屋が九市郎様の御居間であらう、ヲヽ、さうぢや〳〵。

〽あやめもわかぬ夕顔の、その睦言のしるしだに。

ト合方にておらん本舞臺へ來て、切戸の傍へ行き思入ありて。

らん　ハイ、誰ぞお頼み申ます。モシ。ヲヽ、しんき、取り次ぎの衆はござらぬかいなア。

ト九市郎氣附き。

九市　ハテ心得ぬ、誰れ問ふ者もなき閑居の一間、殊に女の聲にて音信しは。（トおらん此聲を聞き。）

らん　ヲヽ、さうおつしやるは九市郎様、こゝあけて下さりませいなア。

九市　ム、其聲は。（ト手早く書置を巻き納め、切戸の傍へ行く。）ヲヽ、こなたはおらん殿か。

らん　九市郎様。

九市　思ひも寄らぬ。

らん　ようまア、おまめでおいでなされましたなア。（ト取付く。）

九市　アヽコレ、人や見ん、サア内へ〳〵。（ト手を取り内へ入れて）御咎めを蒙る閑居の某、番人を附け出入を許さぬ此別莊へ、こなたはどうしてござつた。

らん　ハイ、門番の衆へお金をあげて、事を分けて頼んだれば。

九市　アヽ、たつて咎めもせず。

らん　心よう通してくれたわいなア。

九市　ハテ、粹な番人ぢやよなア。

らん　マア、何から申しませうやら、思ひもよらぬ今度の御難儀。

九市　マア立ちながら話もなるまい、サア〳〵是へ。（ト兩人二重へ上り、こなしあつて、）そもじは夕照樣の御傍仕へ、自由に出ては御前の首尾が。

らん　サア、其姫君樣には此程より、御行衞が知れませぬわいなア。

九市　スリヤ姫君には、ア、御出國なされしとか、ムヽ。

らん　人に洩れては一大事と兄市郎衛右門樣のお計ひにて、御病氣と披露して忍び〳〵に御行衞を、

御詮議申してをりますわいなア。（ト合方になり。）妾やあなたの女房ではござりませぬかいなア。御主の罪を此身に引受け此川崎の下屋敷へ、押込めにおなりあそばせしと、きいて身もよもあられませうか、又其上に悲しいは義理ある兄辰次殿、兄や弟ではない元は他人、女房になれと無體の戀慕、操を守つて得心せねば所詮生けてはおかぬとの事、非道の刃に死ぬるともせなためてあのお顔が一目、見たいばかりに參りましたに、こりやまアなんといたしませうぞいなア。

九市　扨はさういふ事であつたか、あの辰次といふ男は言語道斷の不埒者ぢやなア。（ト此時奥にて。）

鼻之　表に人音するは、誰ぢや／＼。

九市　馬鹿者の鼻之丞、見咎められては面倒な。（トかくす。鼻之丞、前髮着附にて出る。）

鼻之　何でも此所に。（ト見まはして、きよろ／＼する。九市郎こなしあつて。）

九市　エヽ、馬鹿者め、何をきよろ／＼。

鼻之　イヤサ、たつた今こゝで。

九市　用事はない、立つて行け／＼。

鼻之　それでも今こゝに。

九市　ヱヽ、参れと申に。

鼻之　ハア、と答へて失せにけり。（ト淨瑠璃を語りながら、奥へはひる、九市郎後を見送り。）

九市　イヤ、モウよい。何とまア困つた奴ではないか。

らん　さうして召し上りものは、皆あの人がこしらへますのかえ。

九市　どうして〳〵、朝夕三度の食事は親類なれば小左衛門殿、屋敷の賄。

らん　そりやまア、嘸御不自由でござりませうなア。

九市　御推量下されい。

らん　さうあらうと存じまして。（ト以前の袱紗より、杯のつきし提重を出し。）内外の者の目顔を忍び、手づから調へて参りました、無調法ながらせめてもの御氣晴し。まア御酒一つ召上つて下さりませ。

九市　是は近頃忝い、凡そ此廿日餘り酒と言ふ名も忘れをつたが、早速賞翫いたさう。

らん　そのやうにおつしやつて下さりますると、嬉しい事でござりますわいなア。

九市　さらば一献。（ト杯を取り上る。）

らん　ドレ、お酌いたしませう。（ト酌をしようとする。九市郎止め。）

九市　イヤ、此杯は、先づ〳〵お手前から。
らん　そりや何故でござります、まア〳〵あなたから。
九市　ハテ、おもたせの御馳走なれば、亭主役にお始めなされい。
らん　ほんに言號とは名ばかりにて、まだ祝言も此度の騒動、そんなら私から始めませうわいなア。
九市　ヲヽ、それがよい〳〵、ドレ身共が酌をばいたさうか。
らん　是は憚りでござりまする（ト一口呑んで。）憚りながらあなた様へ。（ト九市郎呑んで。）
九市　ヲヽ、甘露々々。（ト此時鼻之丞、奥より出て来り。）
鼻之　ヤア、見つけた、見つけた。（ト兩人びつくりなし。）
らん　ヲヽ、びつくりしたわいなア。
鼻之　お咎めの身を以て美しい娘を引ずり込み、酒宴をやらかすとは蟲がよい、此由を注進する。
九市　アヽ、コレ〳〵まて〳〵、是は唯の娘ではないぞ。
鼻之　ムヽ、唯の娘でなくば、金を出して買つたのか。
九市　イヤサ、おゝさうぢや、日頃信心する金比羅様の御化身ぢやわいなう。
鼻之　エヽ、そりや嘘ぢや、金比羅様は男神。

九市　ハテ、其所が神道變生女子。
鼻之　ヱ、。
九市　ハテ、勿體ない。（トおらんの手を取り上座へなほし。）南無金比羅大權現おんあびらうんけんそはか。
鼻之　ム、、そんならその女は、金比羅樣の御化身か。
九市　神慮を輕んじ、慮外すれば罰が當るぞよ。
鼻之　ヤア。
九市　後で某がお詫び申さう程に、早く奥へ行け〳〵。
鼻之　男が女に化けるのか。（ト鼻之丞奥へはひる。後に兩人こなしあつて。）
九市　日頃我々兄弟は、象頭山を信仰なし奉る事をよく知つて居る故、今の樣に言うたのぢや。
らん　勿體ない、罰の當る事はないかえ。
九市　ハテ神は見通し、大事ない〳〵。
らん　久し振りにてお酒を一ツ戴きましたれば、大さう醉うて參りました。
九市　身共も餘程酩酊いたした、ア、是にて此程よりの氣散じが出來た。

らん　それは宜しうござりました。（ト此時九市郎以前の書置を落す。おらん目早く見て。）こりや何やら書いたものが。（ト是にて九市郎びつくりなし、書置を引つたくる。又獨吟になり。）

〽ついに一歳、二歳に、三歳を待つや小車の。

らん　もうし九市郎様、今の書いたものはありやなんでござんすえ。

九市　是でござるか、ヲヽそれ／＼、弓矢の秘傳の書物ぢやわいなう。

らん　イヱ／＼、さうではござんすまい、さうおかくしあそばすのは餘所のお女中からの、お文でがなござんせう。

九市　なんの左様なものではござらぬ。

らん　さうでなくば今のを一寸。（ト懐へ手をかける。）

九市　ハテ扨しつこい。（ト兩人爭ふ事あり。トド書置を見て。）

らん　ヤ、こりや是、書置き。

九市　ア、コレ。（ト押へるを獨吟になる。）

〽勤の内の忍ぶ筆、口說した夜の思ひ草。

ト兩人引張りの見得にて、此道具廻る。

本舞臺三間の間見附金襖。東西障子屋體、右二重、眞中に本太郎、羽織袴にて褥に座り居る。麻上下の侍二人、小性兩人附添ひ、下手に刑部着附、上下にて居並び、平舞臺眞中に走井文吾腹を卷き鉢卷きをせし早打のなりにて、悶絶してゐるを諸士四人介抱してゐる、上手に辰次着附、上下、下手に市郎右衛門、銀の藥呑を持ち、双方より立かゝり居る。此見得早舞、バタ〳〵にて、道具止る。

皆々　文吾殿、御前でござるぞ、文吾どの〳〵。（ト市郎右衛門、文吾を引き起し、耳に口を寄せ。）

市郎　走井文吾、時が切れた。

辰次　不忠者めが。（ト兩方よりきつと云ふ、是にて文吾、心附き兩人の顏を見て。）

文吾　御家老樣、辰次樣、いづれも樣。

市郎　心が附いたか。

文吾　ハア、御手づからの御介抱、勿體至極にござります。

辰次　若殿樣にも、是に御出座。

文吾　ハア。（ト平伏する。）

本太　鎌倉表の次第心元ない、樣子は何と。

文吾　ハア、大殿壹岐守樣には先日下旬の頃より、些少の御所勞。

辰次　何、大殿には。（ト辰次、刑部と顔見合せ思入あり、）

皆々　御不例とな。

文吾　ハア、御病氣も御全快なく、御食事とても召し上られず、百日が其間に御藥の利目見えざれば、御本服の程も心元なしと典藥の醫案、未だ重らせ給はぬ中、若殿を武將家へ御目見得の上、御家督相續あらば大殿を初め一家中の安堵、急ぎ御下向あるべき赴き、大殿の御上意でござる。

市郎　ハテ、存じも寄らぬ大殿の御不例、總て膈と申す病は百日を限るもの、急ぎ彼の地へ御下向あつて、御家督御相續あそばせば、中將家の御師範と、言はれ給ふ當家の面目。

辰次　アイヤ御家老、若殿御家督御相續とあるからは、兼ねて武將の御懇望當家に傳はる松倉卿の短刀、差し上げる筈なれどその一振りは先達てより、紛失いたしてをりませうがなア。

市郎　夫故にこそ唐崎九市郎、身の誤りとあつて閉門御付られ、押籠の身の上。

辰次　ムヽ、その九市郎を押籠めおかば、短刀は手に入りまするか。

市郎　サア、其所は身共が詮議をなし、きつとお上へ差上げまする。

辰次　何、その短刀をば。

市郎　如何にも。
辰次　ハテたア。（ト思案のこなし。）
市郎　他家にあつて益なき短刀、當栗津家の家國に望をかける奴等の仕業、さすれば此盜賊は近くにある。（ト刑部、辰次に目を附ける。兩人は顏をそむける。）
士一　短刀詮議の目當は足輕の曾平太。
士二　朋輩足立甚助を討つたる曲者、此程より牢屋へ押込め。
士三　樣々に糾明いたせども。
士四　今に於て白狀せぬしぶとい奴。
市郎　天罰といふ責木にかけて、立所に白狀いたさせ、奪ひ返さんに何の手間暇。
刑部　イヤ〳〵、さう味く行けばよけれど何として〳〵、なう辰次。
辰次　左樣々々、今迄知れぬ短刀の行衞、ハテ心元ない。
市郎　其所を取得で御覽にいれん。
辰次　もし又、手に入らぬ其時は。
市郎　申譯の工夫は種々。

辰次　ぢやと申して。

市郎　ハテ、いらざる心遣ひ御無用々々。イヤナニ文吾、其方は長途の勞れ、次へ參つて休息あれ。

文吾　有難うござります、併し大殿より内密の儀もござれば。

市郎　イヤ、その儀は追つて、暫時休息。

文吾　衣服を改め、後程出仕。

市郎　早打大儀。

文吾　ハア、左樣なれば、後刻御意得まする。（ト文吾はひる。四ツの時計鳴る。此時揚幕にて。）

呼び　比良井才次郎樣御出仕。（ト序の舞になり、才次郎、着附麻上下にて出で、本太郎を見て。）

才次　ハア、思ひも寄らぬ若殿樣へ間近の出仕、ハア。（ト花道よき處に平伏して。）大殿壹岐守樣御不例のよし、早速の注進承ると等しく、取る物も取り敢ず出仕いたしてござります。

本太　ヲヽ待兼ねた、才次郎近う／＼。

才次　ハア、各々御めん下され。（ト本舞臺へ來り、下手へ控へる。本太郎思入あつて。）

本太　比良井正春。

才次　ハア。

本太　此度東國より知せに依て早速彼の地に發足いたせば、父上の家督を讓り受け、中將家の御師範となる此本太郎、軍學弓馬槍劍の道は豫め得たりと雖も、柔道捕り物は未だ其奧を極めず、柔道の奧儀水月と名づくる秘密、此座に於て傳授いたせよ。

才次　ハア、御意を返すは恐れながら、御傳授の儀は今暫く御猶餘願ひ奉りまする。

本太　遠慮いたすは傳授を惜むか。

才次　身命全き事君の賜、何しに惜みませう樣はござりませぬ。

本太　ム、、扨は藝道未熟と侮り夫故の事なるか。

才次　イヤ、全く以て。

本太　大事故許さぬのか。（トきつと言ふ。）

才次　ハア、御意の通りにござりまする。（ト是にて本太郎赤面する。）

本太　ム、。

辰次　アノ、是サ／＼才次郎殿、そりや御心違ひでござらう。御自分には近頃東國より歸らしやつて、若殿の武藝の御上達は御存じあるまいが、持つて產れし御器用肌拙者なども柔道には、餘程骨を折りましたが、イヤモウ何として何として、一家中は申すに及ばず近國近在の諸先生、

刑部　毎度試合に参られても、若殿の御手に立つ者は一人もござらぬわ。只今辰次の申す如く武藝は拔群の本太郎殿、よい程に傳授を許し高祿にありついた方が、よささうなものだぞよ。

才次　イヤ未熟若輩の拙者なれ共武藝は師の導きに依て、其の甲乙は豫め承知いたしまかりあるが、コリヤ各々には、御存じない儀にござりまする。〇（ト此時本太郎、羽織を脱ぎ、立ち上り。）

本太　四人の者、立合の用意〳〵。

四人　ハア。（ト四人身拵へする。本太郎鐵扇を持て、ツカ〳〵と平舞臺へ下り。）

本太　サア、四人の者共、余に勝たば褒美は加增、遠慮いたさば曲事なるぞ。

士一　主從の禮儀は禮儀。

士二　慮外いたすも。

士三　武藝の勵み。

士四　恐れながら御容赦は。

四人　仕らぬ。

本太　ヲヽ、出かす〳〵。

四人　恐れながら。ト是より白囃子になり、本太郎、一、二の両人を取て投げる。三、四、双方より窺ひ。）
油断の窺ひ、（ト立廻りあり、トヾ四人を投げ、きつと見得。）

本大　見たか才次郎、飛鳥を欺く今の働き、是でも奥儀は許されぬか。

才次　天晴の御上達驚き入り奉る、さりながら身體手足の働に毛頭透はござらね共、御心の御修行足らざれば、御傳授は申されませぬ。

本太　何と申す。

才次　同じ武藝と申す中にも、劍術と柔道は、心理の沙汰に等しからず、劍を持つては進むを可とし、體に取つては退くを元となす、君藝道に誇る御心あらば極意を得たりと慢心起り、御身に誤ちあらんは必定、その意を察し差控へ故意と御傳授申さぬは、御大切と存ずる故。

本太　ヤア、口賢くも言ひ曲るよな、さ言ふ汝が自慢の鼻を打ち折りくれん。

ト本太郎きつとなる。才太郎両手を背に置きて笑ふ。本太郎せき込み腕を取つてねぢ上る。才次郎わざとねぢられる。是より六段の合方になり、いろ〳〵本手の立廻りあり、

本太　如何に才次郎、斯様に備へし身體の固め、投げらるゝなら投げて見よ。

才次　イヤ、其儀は無禮。

本太　許す。

才次　御免。（ト本太郎を投げる。是にて一同びつくりなし。）

皆々　ヤア、若殿樣。（と此時、市郎右衛門立ち上り、才次郎の襟上を取つて引附け。）

市郎　アノ爰な無禮者めが、如何に御免あればとて大切なる主君に對し、手向ふとは不敵な汝、異見のしもとは斯う〳〵。（ト扇子にて才次郎を打つ。）大殿への申譯、いつそ身共が手にかけて。

本太　ヤレ待て市郎右衛門、はやまるな。

市郎　イヤ憎い弟、此場に於て。（ト又斬りかゝるを、本太郎、留めて。）

本太　傳へ聞く唐土の孟燕は、成王に鞭て四百餘州を起せしためし、今才次郎が働きは我が高慢を取りひしぐ、無禮は却て彼が忠節、たとひ主從たりと雖師となり弟子となるからは、五體の骨を取りひしいでも、教へ諭すが武門の習ひ。

市郎　それぢやと申して。

本太　今正春に說破され、日頃の慢心忽ち折れ、心理を得たる我が悅び。

市郎　スリヤ無禮の御咎もなく。ハア流石は寬仁の御計ひ、先づ〳〵。（ト手を取つて、上座へ直し。）

辰次　それでは餘り依怙の沙汰、いつそ身共が。（トツカ〳〵と傍へ來て。）御前叶はぬ。

皆々　立つしやれ。（ト引立にかゝるを振り拂ひ、辰次かゝるを留めて。）

才次　それ、水月と書く文字は即ち水の月。（ト辰次を引きまはしてよろしくあり。本太郎是を見て。）

本太　ム、。（トきつと呑込みしこなし、兩人立廻つて。）

才次　手にも取られず、窺ふにも述べられず。（ト靜に辰次を引廻し、本太郎に諭す思入。）

本太　ム、。（ト得心せし思入。）

才次　心を以て心に傳ふる矢流の相傳、柔の極意。

本太　ム、。

才次　柔能く剛を制すと言ふ一心の置き處は。とくと御會得。（ト辰次をとんと下に置き。）なされませ。

本太　ヲ、傳授はすんだ、承知々々。（ト市郎右衛門、感服の思入あつて。）

市郎　ム、、教へたり、習ふたり、命を的に御主君を諫めし忠臣、無禮を許せし若殿は君子なり。市郎右衛門感心いたしてござります。

本太　斯樣な家來を持ちしは他門への面目家の譽れ、新地二百石加增なし、予を初め一家中へ師範の役目申附くるぞ。

市郎　何、新地二百石下されんとな。コリヤ才次郎承つたか。

才次　ハア、有難き君の御仁政。
市郎　須彌蒼海にも増りし御恩。
才次　心魂に徹しまして。
兩人　有難く存じ奉りまする。（ト嬉し涙に泣く。刑部思入あつて。）
刑部　何と辰次、世は末になつたではないか。主君を投げて二百石とは妙な世の中。
辰次　左様でござる、いつそ踏殺したら一萬石にもなりませうか、なう何れも。
士一　イヤ、我々も斯様に鍛錬いたしておつたら。
士二　せめて若殿の足でも持つて引き倒し。
士三　五十石か、百石位は貰ふもの。
皆々　イヤ、殘念な儀でござる。
木太　水月の傳授相濟む上は親人の御不例心元なし、初更を相圖に出發なし、夜を日に次いで急がん。
刑部　御家督相續の徴りなくて叶はぬ松影の轡、即ち本家の系圖も同然。
辰次　イヤ、たとひ轡は持參なす共、御婚禮の松倉卿の短刀差し上げねば、御家督相續は相なりますまい。

市郎　ヤア、又しても〳〵、其方共の存ぜぬ事だ控へてよからう。

辰次　イヤ御家を大事に存ずる故。

市郎　氣遣ひいたすな、若殿御出立迄に詮議いたして見せる、いらざる差し出、控へてゐよと申すに。

辰次　ム、、然らば控へませう。（ト九ツの時計鳴る。）

士一　最早午の上刻。

士二　御祝儀の刻限で。

四人　ござりまする。

才次　何樣、今日は九月九日重陽の御壽、御先祖忠勝公、數度の合戰に比類なき手柄を顯し、拜領ありし松影の轡。

市郎　則ち御家の系圖と定め、御家督相續の砌は、武將の上覽に備へる古例。

才次　さるに依つて、今日は御家にとつては吉例の日柄。

刑部　本太郎樣には御上使の饗應、座席を改め。

皆々　御祝儀の御酒一獻。

本太　何様、東國へ出府の門出、祝ふ別れの杯くまん。

市郎　才次郎、若殿に附添ひ奥へ參つて何かの用意、一家中へ申し渡してよからう。

才次　畏つてござります。

刑部　シテ御上使への返答は。

市郎　其返答も初更限り。

辰次　お家の落着。

才次　若殿の御發足。

形部　先づそれ迄は。

市郎　暫時の休息。

才次　若殿様。

本太　才次郎。

市郎　先づお入り。

皆々　あられませう。（ト唄にて皆々はひる、後に市郎右衛門、辰次、刑部、諸士二人殘る。）

刑部　何、雁平、軍次、その方共は科極つた長濱會平太を引き出し、成敗いたしてよからう。

鴈平
軍次　ハア、心得ました、（ト兩人立つを。）

市郎　コリヤ、兩人共何れへ參る。

鴈平　ハア、獄屋へ參り科人曾平太引き出し。

軍次　成敗いたさうと存じまして。

市郎　イヤ、一國の政道は家老たる某の役目、其方達の詮議はたのまぬ。

兩人　デモ、刑部樣の御指圖なれば。

市郎　イヤ、御一門とは申しながら御隱居同樣の刑部樣、無益の御指圖、御無用になされませう。

辰次　イヽヤ、殿の御家來、安達甚助を手にかけし科人なれば。

市郎　下手人は私事、鎌倉武將へ差上る短刀の紛失は、疑もなき足輕曾平太。

辰次　イヤ、如何樣に申す共、短刀の紛失は唐崎丸市郎が誤りと、言はれたではござらぬか。

刑部　みす／＼知れた下手人を、許すと言ふは依怙の沙汰、政道が暗い／＼。

市郎　ムヽ、類を以て友を呼ぶ、烏を鷺と爭つても助命をもと思はるゝに、却つて成敗急がるゝは刑部殿の御勝手に、惡い事でもござりまするか。

刑部　何サ／＼、身共決して左樣な事は。

市郎　然らば辰次、お手前は。

辰次　イヤ何も無い。

市郎　左樣なればいらざる御配慮、御控へ召され。

トきつと言ふ。皆々顏見合せ、惡いと言ふ思入、バタ〳〵になり以前の文吾、上下に改め幕あきの金兵衛の死骸を戸板に乘せ、近習兩人にかゝせて出で來り、

久吾　何れも、一大事でござる。

皆々　何、一大事とは。

久吾　ハア、若殿の御指圖にて、松影の轡取り出さん爲、瀨田口の御寶藏へ參りし處、盜賊の仕業と見え番士金兵衛は殺害され、寶の轡は外箱ばかりにて紛失いたしてござります。

市郎　何、スリヤ、轡は紛失いたせしとな。（ト當惑の思入。）

辰次　ヤア〳〵そりや轡は紛失とな、短刀の紛失といひ若殿の御出府の折柄、御持參なくては跡目も叶はず。

刑部　萬一其内に、大殿御死去ある時は御家は斷絶。

辰次　短刀献上の願ひは延引もならうけれど、若殿御發足の今となつては。

刑部　大切な轡がなくては、御家は滅亡。

鵬平 運平　御家老、コリヤ何如なされます。（ト思案の思入、此時揚幕にて。）

鮒助　何れも、轡の盗賊、捕へましてござります。

皆々　なんと。（ト早舞にて、鮒助、琵琶平、兩人立廻りながら出る。皆々是を見て。）

鵬平　ヤア、守山組の下郎鮒助。

軍平　比良井組の中間、琵琶平。

刑部　盗賊とはこりや。

辰次　何れが盜賊だ。

鮒助　さればでござります、夜前御頭の御用にて京都へ參つた歸り足、通りかゝつた瀬田口の御寶藏表通り宮の前の藪際より、うろたへ出たる此の琵琶平、こやつうろんと引つ捕へて斯くの仕合せ。

ト右のセリフの中、立廻りながら、兩人本舞臺へ來る。

琵琶　ウヌ、正直正路な琵琶平に其言ひかけ、ヱヽ覺えはないわい。（ト又立廻る。）

辰次　アヽコリヤ〳〵、組下に盜賊あらば頭たる者の不調法、シテ其の琵琶平を盜賊とは。

鮒助　ハア、慥な證據は金兵衛の手に握つたる此鑑札。（ト是にて文吾、金兵衛を改める。）

文吾　ム丶、誠に。

鮒助　此良井組の琵琶平と、ありく書いてござりますれば、それに相違はござりませぬ。

辰次　文吾殿、その品是へ。（ト文吾はためらふ。）

鮒助　何を御猶豫なされます、（ト文吾の手から鑑札を取り。）イザ御改め下さりませ、（ト辰次に渡す。）

辰次　斯ういふたしかな證據があれば。（ト言ひながら鑑札の袋を取つて見る。）

辰次　ナニ、守山辰次組下、坂口部屋鮒助。

敵役皆々　ヤア。（ト顔を見合す。此内市郎右衛門思入あつて。）

市郎　琵琶平、その下郎めに繩打て。

琵琶　ハツ。（ト鮒助逃げようとするを捕へ。）サア、繩にかゝれ。

鮒助　コリヤおれを何とするのだ。

琵琶　鞾の盜賊、繩にかゝれ。

鮒助　べら棒め、うぬが名の鑑札がどうしておれの科になる。

琵琶　こいつ耳にはひらぬか、不便な奴ぢや。

市郎　サア、辰次今の名を讀つしやい。
辰次　イヤ、是は。
琵琶　讀めずば私が讀みませう。（ト引き取り。）守山辰次組下坂口部屋鮒助。なんと是でもあらがふか。
鮒助　どうしてそれが。イヤ何御頭、なんとかして下さりませ。
辰次　うぬが疎相で手盛りを喰うたを、夫を身共が知るものかい。
鮒助　そりやまたあんまり。
辰次　ヱヽ、控へておらう。（ト押へつける。）
市郎　近習の者、金兵衛の死骸片附い。（是にて近習二人、下手にはひる。）
市郎　コリヤ〳〵、鮒助、近う參れ。
鮒助　へイ。（トためらふ。）
市郎　今身共が尋ぬる仔細、僞らずと言ひ聞せよ。松影の曲人に頼まれ、其方奪ひ取つたであらう。
鮒助　イヤ、左樣な事は。
市郎　イヤ〳〵最早露顯に及ぶからは、誰れ彼れの遠慮はない、シテ其頼み手は。

鮒助　サア、それは。

市郎　よもや是に居られる、御人達ではあるまい。

鮒助　コリヤモウこゝには。（ト逃け出すを、琵琶平押へる。）

琵琶　ウヌ、さうはさせぬぞ。

ト此時鵬平、運平の兩人立かゝり、鮒助を押へる心にて、琵琶平にかゝる。琵琶平兩人に當身をくれる。辰次これにて琵琶平にかゝる。市郎右衛門二重より下り辰次の刀を落す。刑部立ち上らうとして、市郎右衛門に目を附けられそのまゝになる。琵琶平此中、鮒助を當てる。

市郎　辰次、其方は此刀で誰を斬る。

辰次　憎い鮒助、眞二つにいたさうと存じて。

市郎　いや、詮議ある鮒助を手にかくれば、轡の行方も知れざる道理。

辰次　ヤ。

市部　餘りお世話をおやきになさるな。（ト辰次を突放す。）

辰次　ヱヽ、命冥加な。（ト市郎右衛門と顏を見合せ。）下郎めぢやなア。（ト元の座に直る。）

市郎　コリヤ琵琶平、鮒助に詮議もあれば取逃さぬやう、心を附けよ。

琵琶　ハア畏りました。（ト鯰助に活を入れ、手早く縄をかけ。）キリ／＼立たう。

鯰助　エヽ、いま／＼しいなア。（ト琵琶平に引かれてはひる。時の鐘鳴る。）

市郎　最早黄昏、誰そある、燈火持て。

近習　ハア。（ト燭臺を二本持ち出で、よき所におく。）

市郎　辰次殿、一寸是へ。

辰次　あの身共に。（ト合方になり。）

市郎　外でもござらぬ、お聞きの通りの仕儀、家老の某甚だ心痛いたするが、御手前何ぞ御思案はござるまいか。

辰次　さればでござる、お家の重寶松影の轡の盗賊、只今の處では十が九ツ鯰助と目星はつけ共、餘り手強く拷問なし若し相果てでもいたしなば、詮議の目當もござるまい。と申して若殿御發足迄に手に入らねばならず、コリヤ如何思召しますな。

市郎　何を申すも大切なる寶の紛失、アノ鯰助を拷問なし、寶の出でぬ其時には申譯には身共が腹。

辰次　スリヤあの申譯にはお腹を召すとな、外に詮議の仕様もありさうなものぢやなア。

市郎　如何様、拙者とて好んで切腹など仕らぬ、なれ共轡の在所知れざる時は此の身の上、とはい

へ雲を當てなる詮議、二重箱の其中は。

辰次　金梨子の高蒔畫。

市郎　袋の切れは世にも稀なる。

辰次　古錦襴の二重鶴。

市郎　シテ、その鐔の金色は。

辰次　南蠻鐵の丸、

市郎　ム、、それぞ則ち松影の鐔、慥に御身が。

辰次　ヱ、。

市郎　持つて居ようが。

辰次　アイヤ御家老、そりや何を言はるゝ、鐔の賊は下郎の鮒助、身共は一向存じませぬ。

市郎　いや、下郎に盜ませ其方が、かくしおるに相違ない。（是にて、辰次きつとなつて。）

辰次　何だ、下郎に言ひ附け身共が所持せしとは、役目を功に出るまゝの其一言、祿に高下はあるとても同じ侍だ、曇り霞のなき某を樣々との言ひかけ、科に取つて落さんとは、守山辰次其手にや乘らぬ。

市郎　ム、左程潔白の其方なれば、此印籠の覺えはあるまい。（ト印籠を出して見せる。）

辰次　南無三、それを。（ト奪はうとする。市郎右衛門その手を打つ。）

市郎　夜前鮒助寶藏へ忍び入り、轡を盜んで立ち退く處を、番士金兵衛に見咎められ殺害なせし其處へ其方來つて轡を受取りかくしゐるに相違あるまい、證據と云ふは此印籠、死骸の傍に落ちたるは、何と是でも言譯あるか。

辰次　サア、それは。

市郎　速かに轡を出すか。

辰次　サア。

市郎　拷問せうか。

辰次　サア。

兩人　サア〳〵。

辰次　さう言やいつそ。（ト斷つてかゝるを立廻り、辰次の後より轡を取り出す）や、それを。

ト取りにかゝるを市郎右衛門引きつける。敵役皆々氣を揉む思入

市郎　動きおるな。人外めが、（ト合方になり。）元來其方は五ケ年以前是なる刑部様の推擧を以て、刀

脇差の研磨に妙を得たるを以て、小身ながら當家へ有りつき、御親子は申すに及ばず一家中にもへつらひ、表に仁義は飾れども心に企む邪智佞奸、此市郎右衛門の目鑑に違はず、言語道斷の不行跡組下の下郎に言ひ附け轡を盜ませし企みの段々。トサア、白眼んだ眼に相違はあるまい祿盜人とも人外とも、言はう樣なき人非人めが、天罰至つて報ひ來ておのれを責むる苛責のしもと、カウ〳〵、（ト扇にて打ち、）コリヤ、此樣な不鍛練な手の内にて身共に刃向ふとは及ばぬ事だ、馬鹿者めが、（ト突きはなし、奥へ向ひ、）ハア御上使樣、御聞きあられましたか。

左衛　ヲヽ、委細の樣子聞いた〳〵。（ト正面の襖をあけ、左衛門尉近習兩人出る。）

市郎　ハア、無事に手に入る松影の轡、イザ、御受取り下されませう。

ト三方に乘せ、左衛門尉の前へ直し、引き下つて平伏する。

左衛　今に始めぬ市郎右衛門の計ひ、系圖の轡に兇事なければ初更を相圖に出府の用意。

市郎　畏つてござれ共、心がかりは今一品の、松倉卿の短刀の行衞。

左衛　イヤ、其儀は少しも氣遣ひいたすな、獻上の日限延引の儀は斯く申す左衛門が、きつとよしなに計ひ得させん。

市郎　ハア。重々の御厚志、拙者當城に殘り詮儀仕出し、追つて上へ差し上げませう。

左衛　それ聞いて先づ安堵。（ト市郎右衛門刑部を見て。）

市郎　刑部樣にも。（ト思入あつて。）嘸御悦びでござりませう。

刑部　イヤモウ、轡の無事に手に入るもそちの働き、滿足々々。

左衛　此上は奥へ參つて本太郎殿の門出の杯仕らん、市郎右衛門は後より。

市郎　左樣なれば左衛門樣。

左衛　市郎右衛門、後刻。（ト唄になり刑部、左衛門はひる。辰次、市郎右衛門の傍へ來り。）

辰次　ハア、我ながら迷うたり、若氣の至り後先の辨へもなく、慾といふ字に目がくれし出來心、只今の御異見は、辰次の五體に染み渡たり、面目もなき次第、誤つて改むるに憚る事なしとは聖人の教えの今月今日只今より魂を入れ替へ、是迄の不忠を改め身を粉に碎き。（ト市郎右衛門に寄り。）喩へにもいふ、慈悲は上から、御家老樣のお取計ひにて、此儀何卒穩便に。

市郎　若殿始めての御參勤、先づ御先乘りは小姓組、才次郎の役目は諸士の役り。

辰次　サア、段々との御立腹は、御尤ではござりますれど。

市郎　御臺所を始めとして、諸侯方への御土産は先格の通り、ム、是もよしよし。

辰次　スリヤ、如何樣に願ひましても。

市郎　初更と言うても今暫く、ハテ、心ぜきな事ではあるわえ。

辰次　イヤサ御家老、今一應御思案を。（トいろ〳〵言つても市郎右衛門取り上げぬこなし。）ムヽ、コリヤ御家老には啞か聾か聞えぬふりか。モウよい、モウ頼まぬ、身に誤りがあればこそ言葉をつくして詫をするのだ、モウ頼まぬ、何程ばかりに日は照らぬ。じたい刀劍の研磨、新刀古刀の目利に於ては凡そ日本に並びのない此辰次、何れの諸侯にても五百石や三百石はすぐにくれるわ、あやまればよい事にして武士に恥辱を與へたな、其上身共を不鍛練とぬかしたな、その不鍛練の手の內、受けて見よ。（ト辰次斬つてかゝるを、市郎右衛門押へ。）

市郎　コリや、動かるゝなら動いてみよ、此扇が刃物なら、汝が首はころりと落るぞ。

辰次　何を、其の廣言。（ト又斬りかゝる。此時敵役二人も斬つてかゝる。トド三人共、打ち据え。）

市郎　コリヤ、身動きなせば命がないぞ。（トきつとこなしあつて。）此度は助けてくれる、此座は叶はぬ立つて失せう。（ト刀を前にほうり出し。）ハテ不便千萬。ドレ、御前へ參らう。

ト唄になり、こなしあつて市郎右衛門奥へはひる、敵役の諸士二人は辰次を見て馬鹿々々しいと言ふ思入にて奥へはひる、辰次一人殘り奥を見て、只一討ちといふこなしにて花道へはひる。後合方にて奥より才次郎、刀を提げ出で來り。

才次　誠に有難き師の御恩、まだ部屋住みの某に、奥義の秘傳下されし故にこそ今日の幸ひ、夫につけても兄九市郎殿、此度の災難に主君の大事を身に引き受け、心の底は切腹と覺悟召されしいたはしさ、御命救ふ思案と言ふは。（ト行からとして立ちどまり。）イヤ／＼御閉門の御身の上、それにつけても大兄市郎右衞門様の、深き御思案あつての事か、心ならざる事ぢやなう。

ト思案の思入、此時合方きつぱりと成り、奥女中みどり、島田わげ、着附淺黄無垢、忌中のなりにて出て來り、

みど　是は才次郎様でござりまするか、妾はあなた様にちと御願ひがござりまする。

才次　ヲヽ、誰かと思へば奥女中のみどり殿、御親父甚助殿の不慮の御最期、御愁傷の段察し入る。

みど　御推量なされて下さりませ、産みの母には三つで別れ杖とも思ふ父上に、夢見たやうな、本意ない別れ、悲しい事でござりまする。

才次　ム、、シテ身共に願ひとは。

みど　妾が願ひと申しまするは。

才次　その仔細は。

みど　サア、それは。

才次　何事でござるな。

みど　アノ、それは、（ト扇を出し、）是見て下さりませ。（ト才次郎、開き見て。）

才次　ム、、扇面の畫は八景の第一。

みど　唐崎の雨の景色。

才次　砂地に雨は。

みど　御判斷下さりませいなア。（ト合方になり。）今更申すも恥しながら過し月見の御遊の時、思ひ染めたる心の一心、思ひの程も情なや、水臭いすげない御返事、不束かな姿なれば御心には入るまいけれどせつない心を思ひやり、どうぞ叶へて下されませいなア。（ト取付くを振拂ひ、）

才次　アノ愛ないいたづら者めが、父母の忌は三ヶ年それさへ未だ滿たざる內、歎きを外にみだら千萬。

みど　其御叱りは無理ならねど、外に願ひがござりまして。

才次　ム、、助太刀がして貰ひたいか。

みど　サア。それは。

才次　何と、違ひはあるまいがの。

みど　サア、誠は敵が討ちたいと思うて見ても誰といふ、頼みに思ふ人もなし、戀と孝との二道を思

ひ込んだる妾の願ひ、力となつて父樣の無念をお晴し下さりませいなア。

才次　ム、さこそあらん。義に依て頼まれたものなれ共、討つべき敵は國家の科人、夫故仇討は出來ぬ故、此戀は叶ふまい。

みど　それでは敵を目前に見ながら、討つ事は出來ませぬか、父上樣への申譯、さうぢや。

ト自害しようとするに、才次郎是を留める。

才次　ヤレまてせくな、たとひ罪人なればとて、罪一等を輕くして、曾平太を出牢させる工夫もある。

みど　スリヤ曾平太の出牢あれば、助太刀なされて下さりまするか。

才次　義を見てせざるは勇なきなり。（ト扇を投げ。）開いて見よ。（トみどり見て。）

みど　ム、、此扇は矢走の歸帆。

才次　引きは返さぬ弓取の。

みど　つもる恨みも比良ケ根の。

才次　雪諸共に。

みど　打ち解けて。

才次　返事を三井の。

みど　兼ての約束。

才次　時の至るを一ツ松。

みど　かならず逢うて下さんすな。（ト手を合せ拜む。）

才次　何の、拙者の心は石山。

みど　エヽ嬉しうござんすわいなア。（ト取付く。）

才次　身共は兄九市郎殿の、御閑居へ參つて何かの相談。

みど　アレまア待つて、下さんせいなア。

才次　イヤさうしては。

ト振り切るはずみに鐺當り、みどりムヽと倒れる。才次郎見て思入あつて、印籠を投出し、花道へはひる、是にて道具廻る。

本舞臺元の數寄屋へ戻る。月を出し花道へ菊の土手板を出し、花壇に蝶飛んでゐる。右二重の眞中に九市郎住ひ、蝶に目をつけて居る。能き所に遠州形の行燈を灯し、合方にて道具留る。

九市　ハテ心得ぬ、夜陰に蝶の飛び交ふは。それ兵を起す時は天理を考へ次に人の道を知る。扨は佞

才次　人あつてお家を横領せんと窺ふものあると覺えたり、是を思へば寶の紛失姫君の御出國、ハテ心にかゝる事ぢやなア。（ト花道より才次郎、着附袴にてツカ〳〵と出で、花道にとまり。）兄九市郎殿閑居の居間、何卒お目にかゝりし上、此身の願ひお家の納り兄々への孝の道、思案の的は今宵の中。

ト懷中より一書を出して、傍の案山子の弓矢を取つて、一書をくゝりて射る。仕かけにて上手の柱へ立つ。九市郎、是を見て。

九市　羽ひゞきもせぬ、忍びの矢標。（ト見て。）此一書は。

才次　イヤ、其矢の主は拙者でござる。（ト切戸をあけてはひる。）

九市　ヤア、其方は弟才次郎。

才次　閑居の御身故掟を守り心ならざる此疎遠、眞平御免下さりませ。

九市　何の〳〵、同じ骨肉の兄弟なれども、御身は剛勇にして短慮の氣質、某は又柔弱故、心合さる兄弟と思ふ故、左のみ不審にも思はぬわ。

才次　何は格別、今宵わざ〳〵參りしは、チトお願ひの儀があつて。

九市　ム、改めて願ひとは。

才次　其仔細は是でござる。（ト傍にある矢柄を取つて差出す。）

九市　ム、傳へきく唐土には、他人同志深く交り兄弟の儀を結ぶ時は、矢柄を折つて誓ひを立てる。

才次　イヤ、其古事とは相違して兄弟の緣をきつこの通り。（ト矢を二つに折る。）今日今宵、兄でない、弟でないと言ふ御一言が承りたい。

九市　そりやまた何故。

才次　ハテ知れた事、科人の兄を持つては手前の迷惑、大兄市郎右衛門殿は役柄なれば格別の沙汰、此方目下なればこなたの身の成行で、如何なる祟りあらうも知れず、表向き役人中へ、此事屆けおきたれば他人の拙者、最早祟りは參らぬ筈、さつぱりと勘當なされて下さりませ。

九市　長幼序あるは聖人の敎へ、兄は弟を深く憫み弟は兄を敬ふが、人たるものゝ誠の道、木石にも劣りし其方、弟といふも穢はしい、望みの通り勘當ぢや。

才次　ソリヤ、その詞に相違はござらぬか。

九市　ハテ、犬猫に論は無益。

才次　如何樣。兄弟は他人の始りぢや。（ト花道へ行きかゝるを。）

九市　才次郎、待て。（ト見にて振り返り。）

才次　用がござるか。

九市　言ひ置く事はそればかりか、死してはものは言はれぬぞや。

才次　何と。（トギックリこなし。）

九市　兄が科を身に引受け、潔く腹切つて死ぬる覺悟、後の心を思ひやり心にもなき惡口雜言、よもや逢ひはあるまいがな。（ト是にて才次郎、ツカ〱と戻り下に居て。）

才次　スリヤ、拙者が心底を。

九市　オヽサ、知らいでならうか骨肉同腹、事に望んで義を磨くは親人讓りの魂。（ト才次郎思入。）

才次　ヱヽ、恨めしい兄者人、主人の科を身に引受け一命投げ出しこなた一人が、忠義を立つて弟の拙者はなんとなりまする、こなた樣は御目鏡を以て他家を相續、今腹切つては、唐崎の苗字を失ふ、忠孝二つは武士の長、主君の御爲國の爲、それ故拙者が命を捨て、末世の記錄に忠臣の名を殘させて下さりませ、兄者人賴みまする。

九市　イヤ〱、一旦科を受けし身共、如何に弟なればとて罪を讓り存命なせば、武士の道は何處で立つ、その方は後に殘り兄市郎右衛門殿諸共に、寶の在所詮議して犬死ならぬやうにして、死後の汚名を雪いでくりやれ。

才次　スリヤどうあつても拙者の望は、聞き入れては下さりませぬか。
九市　死ぬばかりが忠義にあらず、生きての忠義は尚大切、とつくりと合點いたせよ。
才次　是非に及ばぬ。（ト刀の柄に手をかける。）
九市　ヤレ待て弟、早まるな。
才次　それぢやと申して。
九市　イヤ、冥土の魁、此方も。（ト九市郎刀の柄に手をかける。）
才次　イヤ兄上、誤り給うな。
九市　イヽヤ身共が。
才次　イヽヤ拙者が。（ト双方互ひに爭ふ。此時市郎右衛門、ツカ〳〵と兩人の眞中へはひる。）
九市　兄弟共、物に狂ふか、うつけ者めが。（ト双方へ突放す。）
才次　ヤア、いつの間にやら兄者人。
九市　どうして、爰へは。
市郎　兩人共に死を爭ひ命を惜まぬ志は、見事武士の魂なれ共、其後に貸が出れば犬死同然、才次郎とても其如く九市郎になり替り、切腹なせば義理は立たうが主君へ對して第一不忠、何故存

命して諸共に、寶の詮議はいたさぬぞ。

兩人　サア、それは。

市郎　生は難く死は易し、死ぬるは必ずとゞまれよ。

才次　オヽ、其詮議は刑部が屋敷。

市郎　イヽヤ、それとても樣々に間者を入れてさぐれ共、企みの洩れん事を恐れ、國を隔てし身寄りの者へ二品を送りしに相違なし、今彼等を荒立てたば毛を吹いて疵を求むる喩、うかつに手出しもなるまいわい。

九市　然らば、我等長らへて。

才次　主君へ忠義が立ちませうか。

市郎　サア、御發明にはましませど元來短慮な若殿樣、弟才次郎は若殿のお傍に附添ひ兄に替つて忠義を盡し、まつた九市郎は出國なされし姫君の御行衛香爐の詮議、某は後に殘り短刀をば詮議いたし兄弟仲よく長らへて、主君へ忠義を盡せし上、忠孝二道の譽れの二道、名も高松の家名の榮へ、かならず共に忘るゝな。

九市　ハア有難き御教訓、心魂に徹し有難く、必ず忘却仕りませぬ。

才次　我々は仰せに從ひ、若殿のお傍に附添ひきつと守護なし奉らん。
市郎　オヽ、這は返答滿足いたす。さり乍ら事に望んで身を忘るゝは、珍らしいからぬ武門の習ひ。
九市　仰せの如く、生は死の元。
才次　逢ふは別れの始りと聞く。
市郎　是今生の、暇乞にもならうやら、九市郎。
九市　ハア。
市郎　才次郎。
才次　ハア。
市郎　よう顔見せてくれいやい。（ト三人顏を見合せ、愁ひのこなしあつて、氣を替へ。）ハヽヽヽ、大事の門途に涙は不吉。　ト懷中より守袋を出し。）コリヤ金比羅大權現の御守り、九市郎其方へ讓り置けば、大事にかけて出立いたせ。（ト又刀を出し。）此一腰は來國俊身共の秘藏、覺えの業物。
　　ト九市郎、刀を拔き見て。
九市　刀は武士の長道具、拙者の帶劍は小烏正守。
才次　又私のは備前國光。

市郎　我が一腰は重光へ譲り。
九市　拙者が刀は正春へ。
才次　さし詰め、拙者は兄者人へ。（ト取り替へ受取る事あつて。）
市郎　斯う取り替せば兄弟三人。
九市　たとひ所は隔つとも。
才次　朝夕お傍に居る心。
兩人　兄者人。
市郎　無事の便りを待つて居るぞよ。（ト此時、時計鳴る。）
九市　アリヤモウ、初更。
才次　若殿の御立の刻限。
市郎　用意いたせ。
才次　ハア。（ト行からとする。此時鮒助、窺ひ出で。）
鮒助　才次郎、覺悟。（ト斬つてかゝるに突き廻はして、取つて押へ。）
才次　コリヤこれ下郎の鮒助。

市郎　かまはずと行けゝ。
才次　ハア。（ト立廻はつて、見事に投返し、花道へはひる、奥よりおらん出で。）
らん　九市郎樣。
九市　おらん殿。
らん　樣子は殘らず聞きました、思ひも寄らぬ今宵の旅立ち、迚も斯うなる上からは、お連れなされて下さりませ。
九市　なかゝ以て左樣な事が、大事を前に抱へながら女を連れては足手まとひ。
らん　それぢやと申して。
九市　そちは後に殘り居て兄者人の御介抱、我れは是より直樣發足。（ト立ちかゝるを。）
鮒助　われをやつては。（トかゝるを突き廻し。）
九市　たとひ鐵石城に隱しあるとも、香爐を無事に取返し姫君の御供をして立ち歸らん。
市郎　オヽ、潔しゝ、身共は是より曾平太を詮議いたし、短刀の在所も何れ今宵の中。
九市　然らば此まゝ。（ト鮒助を投る事あつて。）おさらば。（ト行きかける。おらんとめる。）
市郎　早行け。

九市　ハア。（ト急ぎ花道へはひる。市郎右衛門、後を見送り。）

市郎　ハテ、いさましい。（ト又鯛助かゝるを刀を引つたくり斬りつけ。）若者ぢやなア。

トポンと返すを、道具替りの知らせ、おらんは市郎右衛門に取り附き、市郎右衛門は向ふを見込むよろしく合方にて廻る。

本舞臺一面黑幕、牢屋の塀、忍び返し附き。眞中に柳の立木仕掛あり。よき處に番所行燈、上手に文吾相引にかゝり居る。傍に牢屋の役人兩人、十手を持ち控へ居る。此見得、時の太鼓にて道具留る。

文吾　此度、大殿の御不例に就き若殿には御出府、鎌倉へ差し出す短刀の紛失、詮議の目當は安達甚助を手にかけし長濱曾平太と極りし故、此程より拷問にかくれ共、今に於て白狀いたさぬよし、御家老市郎右衛門樣の仰せを受けし此文吾、只今短刀の在所白狀させん、ソレ曾平太を此處へ。

兩人　ハア、畏ってござります。（ト兩人上手へはひり、繩付きの曾平太を引出し來る。）下におれ。

曾平　コリヤ〳〵、さう大きな聲をするなえ、俺が勝手に下に居るわ、どいつもこいつもまじまじとしたしやツつらだわえ。（ト曾平太こなしあり、文吾思入あって。）

文吾　コリヤ、曾平太、其方先達て安達甚助を手にかけ、松倉卿の短刀を盜み隱せしに相違あるま

い、サア眞直に白狀いたしてしまへ。

曾平　イヤ、一向に存じませぬ、覺えはござりませぬ。

文吾　ム、、しぶとき一言、ソレ責にかけろ。

曾平　たとひ水火の拷問でも、白狀いたす氣は毛頭ござりませぬ。

文吾　ヤア、憎き一言、ソレ。

兩人　ハア、（ト立ちかゝるを、此時下手より奴提灯を持ち、後より市郎右衛門出る、）

文吾　是は〳〵御家老樣。

市郎　ヲヽ、文吾大儀〳〵。（ト入れ替り、上手へかけ）シテ〳〵、白狀いたせしか。

文吾　ハア、情けを以て、色々に詮議いたしますれど、今以て白狀はいたしませぬ。

市郎　ム、、さうあらう〳〵、此奴中々一應や再應にては申すまじ、今宵の吟味は某が直々にいたすであらう、其方達は此所を遠ざかつてよからう。

文吾　畏つてござります。

市郎　コリヤ文吾、其方は。（ト囁く。）

文吾　畏つてござります。（ト棒鞘の刀を市郎右衛門に渡し、皆々下手へはひる。）

市郎　コリヤ曾平太、其方が一命はお家の大事にかゝはる命、足輕風情がお家の寶に、目をかける謂はあるまい、コリヤ外に頼み手があらう。サア、其頼み手は何者ぢや、白狀さへいたすれば其人の褒美、一命を助け金子を與へ追ひ拂はうが、サア、盜み取りし短刀の隱し處を申上げい、どうぢや。（ト物和かに言ふ。曾平太こなしあつて。）

曾平　ム、待てよ、白狀さへすりや命を助けた上で褒美の金、コリヤ、味い風が吹いて來たわい。

市郎　只今言ひ聞かす通り、白狀なせばその身の仕合せ、又たつて白狀せずば是を見よ。ためさねばならぬ新身の刀、不便ながらも此場にて。

曾平　ム、如何にも味い話だが、マアよさう、短刀の在所何も彼も言はせておいてばつさり、イヤ、そんな甘口に乘るやうな、曾平太ぢやないわえ。

市郎　スリヤ、如何樣に申しても。

曾平　千度言つても同じ事だよ。

市郎　モシ又此場に於て助けなば。

曾平　命に替る寶はない、白狀せうかい。

市郎　スリヤ、しかと白狀いたすか。

曾平　ハテ、御念には及びませぬ。（ト市郎右衛門思入あつて棒鞘をぬき。）

市郎　ヱイ。（トいましめの繩を切る。）

曾平　これは。

市郎　サア、命は助けた、して短刀の在所と申すは。

曾平　ム丶、命を助かる上からは、短刀はお渡しいたしませう。

ト曾平太上手へ行く。市郎右衛門提灯を持ち、目を附けて居る。此時後より辰次頰冠り尻からげ手鍬を持ち、傳の木を傳ひ、塀の上よりおりる。曾平太捨石を取り退け、下より短刀を出して。

曾平　則ち松倉郷の短刀、イザ御受取り下さいまし。

ト差し出す振りにて油断を見すまし斬りつける。辰次、提灯の火を消す。市郎右衛門は曾平太の短刀を引つたくり引きすへる。此時辰次、市郎右衛門の太股の處を突く。市郎右衛門突かれ乍ら。

市郎　欺し討ちとは卑怯な奴め。

辰次　こま言ぬかさず、くたばつてしまへ。

ト鍬を捨て、刀にて斬つてかゝる。此中へ曾平太はひり短刀にて斬りつける、市郎右衛門深手を負ふ、三人よろしく立ち廻はつて、市郎右衛門斬り倒され、とどめをさす。

辰次　ヤレ／＼、中々手強い奴だわえ。

會平　大骨を折らしやアがつた。（ト短刀を出し。）是が則ち望みの短刀。

辰次　かたじけない。併し、そちも身共も、高飛びせずばなるまい。

會平　そりや、あたりまへでござります。（ト兩人行かうとする。此時番人兩人出で。）

番人　曲者。（ト一人づゝかゝるを、ポンと返し。）

辰次　早く行きやれ。

會平　合點だ。（ト花道へはひる。辰次柳の木へ登り、向うを見込む。此道具廻る。）

本舞臺平舞臺、一面牢屋の塀外の模樣、番小屋、此眞中に才次郎、柳の枝の動くのを見てゐる。此傍に琵琶平龕燈提灯を持ち袖に隱くして窺うてゐる。此見得、合方にて、道具とまる。ト本釣鐘虫の聲にて、辰次以前のなりにて柳の木を傳ひ、塀を乘越へ、番所の屋根を足代にし飛び下り、身拵へして行きかゝるを、兩人こなしあつて、才次郎、辰次の帶際を取つて引き戻す。琵琶平龕燈を差し出す。是にて三人きつと見得、辰次逃げようとするを、琵琶平向ふへ廻り立ちふさがる。辰次、才次郎に斬りつける。才次郎身をかはし立廻はつて、辰次すりぬけ花道へかかる。才次郎すかし見て

才次　曲者。（トすかす。）

辰次　エイ。

ト小柄を打つ才次郎程よく受け留める。琵琶平は下に居る。才次郎向ふを見込むを木の頭、辰次は走りはひる。後双方引張りよろしく。

ひやうし　幕

三幕目

阿雷明神前の場
信州十市渡しの場

役名　唐崎九市郎、同才次郎、守山辰次、田村外記左衛門、篠塚傳内、絹屋松之助、宿引き兵四郎、刑部家來寸平、もがりの竹、すりの辰、田村の娘おまき、娘おつる、浪人の藥賣り、茶店の女房お銀、旅僧、醫者、馬子、船頭田村の供等。

本舞臺平舞臺。向ふ淺黄幕、上の方石の鳥居、玉垣、松の立木。下の方、葭簀張りの出茶屋眞中に壹間半の床几を直し、藥賣り、浪人のこしらへ、深編笠、朱鞘の一本差し、藥箱の上に紙を並べ、

口上を言つてゐる、此傍に病人の腹ふくれ杖にすがり居る。旅僧、醫者、立つてゐる。巾着切りの辰、皆々の腰の廻りを窺居る。下手に絹屋松之助、半合羽、脚絆、壹本差しにて煙草を呑み床几にかゝり居る。茶店の女房、前垂れがけにて仕出しを呼んで居る。參詣の旅人行き違ひ、此見得辻打ちにて幕あく。

女房　サア〳〵、どなたもお休みなすつてお出なさいまし。

藥賣　私が家の名法萬病療治膏と申すは、世間の醫者が見放したる難病でも、即座に治るといふ妙藥でございます。

松之　時にお銀さん、隣りの吾妻屋は皆達者でござるかの。

女房　ハイ、どなたも變る事はござりませぬ、さうしてあなたは東屋へお泊りかえ。

松之　いつも此宮の本では、向うが定宿でござるわいなう。

女房　左樣でござりまするかえ。

醫者　コレ〳〵藥屋さん、この萬病に利くといふ藥を私に賣つて下さい。

藥屋　サア〳〵、お購め下さい。

旅僧　イヤ、斯う見た處が其許は醫者の樣子、醫者が藥を買ふといふのは、どういふものでござりますの。

醫者　ハア、問はれて誠に面目ないが、此頃始めた醫者故に藥の調合を存じませぬ故、萬病の藥にて、間に合はさうと思ひまして。

旅僧　それで、受け賣りと出かけたのか。

醫者　イヤ、面目次第もござりませぬ。

松之　イヤ、お銀さん、大きにお世話になりました。

女房　是から何處へお出なさいます。

松之　明神樣へ參詣をして、吾妻屋へ行つて泊ります。

女房　それでは、晩程又お目にかゝりませう。

松之　ドリヤ、參つて來ませうか。（ト神樂になり、松之助、鳥居の内へはひる、巾着切り後をつける。）

旅僧　愚僧も參詣いたさう。

醫者　そんなら、藥屋殿。

藥賣　有難うござりまする。（ト皆々鳥居の内へはひる。藥賣りと茶店の女房殘る。）

女房　モシ、藥賣りの銀藏さん、大分賣れましたねえ。

藥賣　イヤおかげで商ひがありました、ドレ　私は一寸呑んで參ります、店をお頼み申します。

女房　サア／＼、行つておいでなさいまし。（ト葭簀の内へはひる。唄になりおつる振袖にて出る。）

兵四　モシ／＼おつるさん、おつるさん。（ト宿引兵四郎、後より出で來り。）

つる　オヽ、誰れかと思へばこなたは兵四郎、こなたに用はありませぬわいなア。

兵四　おまへはなうても、私はあるのぢや、マア／＼、向うへお出なされませ。（ト本舞臺へ來る。）モシおつるさん、おまへはなア／＼。（ト合方になり。）廿四孝の濡衣ではないが、そも内方へ奉公に來た其の日からお姿を見てツイ可愛らしいと思うたが因果の緣、其故此明神様へ立願して、思ひ焦るゝ此兵四郎、少しはさつして下さりませいなア。

ト此時茶店の女房出る。

女房　モシ兵四郎さん、それでお前はすむかいなう、イヽヱイナア、妾が斯うして稼ぐお金も、皆んなお前に入り上げて、今更おつるさんに見替へるとは、アノ業な女喰ひめが。

兵四　ヱヽつべこべとやかましい、今大事の處ぢや、引き込んで居ろ。

女房　引き込んでゐろもないものだ、腹さんざん欺しておいて、妾や腹が立つて／＼ならぬわいなア。（ト兵四郎の胸ぐらを取つて立廻る、おつる、鳥居の内へはひる、兵四郎見て。）

兵四　南無三、おつるさんを逃がしては。（ト行からうとするを。）

女房　お前をやつて、なるものかいなア。

ト兩人立廻り、兵四郎先に女房はひる。大拍子になり花道より、辰次着流し、深編笠、浪人のこしらへにて出で來り

辰次　アヽ、殊の外なる宮居の繁昌、實に泰平の御代ぢやなア。

ト本舞臺へ來る。此時、下手より、下郎寸平、半纏股引、大小飛脚のこしらへにて三度笠を持ち出で來り、顏を見合せ。

辰次　コリヤ〳〵、其方は刑部樣の家來、寸平ならずや。

寸平　ムヽウ、さうおつしやるは、慥に。（ト笠の内を覗き。）ヤア、あなたは。

辰次　コリヤ〳〵、めつたに本名はいはぬ事ぢや。

寸平　イヤモウあなた樣のお行衛を、處々方々と尋ねました折柄、則ち主人刑部樣より、お尋の御書狀。（ト首にかけし狀箱を渡す。辰次、あたりに氣を兼ね讀み終り、腰より矢立を出し、返事を認める。）

辰次　遠路の所お使ひ大儀、委細の儀は認めあれば、よろしく御手渡し申してくりやれ。

寸平　ヘイ、畏りました。（ト狀箱を受取り。）眞平御免下さりませう。（ト寸平花道へはひる。）

辰次　アヽ木にも萱にも恐るゝ此身、誠にびつくりいたしたわえ。（ト此時兵四郎出で。）

兵四　何處へ隱れたか、一向に知れぬわい。(トウロ〳〵搜してゐる。)

辰次　ア丶コリヤ〳〵、兵四郎、兵四郎、(ト是にて、笠の內を覗き。)

兵四　ヲ丶、是は〳〵旦那樣、あなた樣には何御用あつて、此處へ。

辰次　イヤ、其方に用事あつて、近う〳〵。

兵四　へイ〳〵。(ト合方になり、腰をかけ。)

辰次　元來そちは身共を育てし乳母の倅、いはゞ譜代の家來も同然、ナリヤ、何事も打あけて、賴むは其方只一人。

兵四　へイ昨日御嶽の宿で不思議にもおめにかゝりましたが、一家一門に見放され、此信州路迄さ迷ひ來て、今では吾妻屋の奉公人、お賴みにもなりますまいが、よい折柄でござりました。

辰次　それに就き密々の話と言ふは、國元より持參せし路用も手薄に相成れば、此短刀を、質入れなしてくりやれ。(ト短刀を出し。)是は兼て奪ひ取りし松介卿の短刀、寶物なればよしなに賴む。

兵四　へイ〳〵、爰は田舍の事なれば、目の明いたものもござりませぬが、力いつぱい働きませう。

(ト此時鳥居の中にて。)

つる　お銀さん、妾や先きへ行きますわいなア。

兵四　ヤア、ありや、モウ歸りか。

辰次　たつた今刑部樣より、御內意の書狀到來。

兵四　ヱヽ、一寸待つて下さりませ。（トあわてゝ、鳥居の中へはひる。）

辰次　アヽコリヤ兵四郎、ハテ何をきよと〳〵、一向賴みにならぬ奴、こりやうつかり大事の品をあづけて近年の粗相と申すもの、何はしかれ宿迄歸り一思案いたして見よう。

ト靜かなる大拍子にて、花道にかゝらうとして、向うを見て、

ヤア〳〵あれへ參るは慥かに唐崎九市郎、彼奴に逢うては面倒だ。（ト又後へ立ち戻り。）緣日なれば、社內も定めし人込みならん、コリヤ、いかゞいたしたものであらう。（トいろ〳〵うろたへ、茶屋の見世を見て。）ムヽ、よし〳〵。

ト深編笠を冠り居る。此時大拍子にて、花道より九市郎四天割りかけ、菅笠を持つて出來り。

九市　ムヽ、向うに見ゆるが當國の大社阿曾明神、ハテ賑かな宮居ぢやなア。

ト矢張り右の唄にて、本舞臺へ來ると、鳥居の中よりおつる出で。

つる　お銀さんは、モウ行かれたかしらん。

九市　オヽ、幸ひの此茶店、是にて暫く休息のいたして參らう。

トおつると行き違ひ、互ひに除ける心にてつけまはし、おつる九市郎に見惚れる思入。九市郎、かまはず床几にかけ。

九市　イヤ何女中、こなたは此茶店のあるじかな。（トおつる上氣して、耳へはひらぬこなし。）茶を一ツ下されい。（ト矢張り默つてゐる故、煙草を呑まうとして。）コリヤ火がござらぬ、火を一ツ下されい。ハア此娘は聾ぢやさうな。（ト此中女房鳥居の中より出る。）

女房　オヽ店にお客さうな、ようおいでなされました。

九市　コリヤ、煙草の火をくりやれ。

女房　ハイ／＼、消えましたかいなア。（ト茶釜の下の火を入れて持つて來る。おつるとらうとする。）おつるさん何をしなさる。（トおつるかまはず引つたくり、）

つる　ハイ、お火をあげませう。

九市　ハヽア、聾でもなかつたさうな。

ト此中辰次、笠の内より九市郎を見て立たうとする。九市郎こちらを見ると又藥などいぢくり居るおつる矢張り見惚れてゐる事。

九市　さうしてお女中、モウ何時でござるな。

つる　ハイ何時でござりませうなア。
九市　モウ、七ツでもあらうかな。
つる　七ツでもござりませうなア。
九市　ハヽ、コリヤ、餘程時刻が遲れた、ドレ〳〵一寸參詣して宿を取り、休息いたさう。些少なれども茶代は爰へ。（ト懷より、錢を出してやる。）
つる　モそつと、御ゆるりお休みなされませ。
九市　イヤ、ゆるりと休みました。（ト行かうとする。）
つる　アヽモシ、（ト留める。）
九市　イヤお世話でござつた。

ト振り切り九市郎辰次の前を通る。是にて辰次面を背ける。此内九市郎は鳥居の内へはひる。おつるはうつとり見惚れて居る。此内女房は店を仕舞ひ。

女房　今夜はおまへの處へ嫁御を連れて行かねばならぬ、私も早仕舞にして行きませう、モシおつるさん。（ト言へども、見惚れて居るゆゑ。）モシ、行かうではないかいなア。
つる　オヽびつくりした、妾しや行くのはいやぢやわいなア。

女房　遲うなつたら清兵衛さんのお叱り、サア〳〵ござんせいなア。（ト手を取りはひる。）

辰次　アヽヤレ〳〵、あぶない事〳〵、彼奴が當所へ入り込んだれば最早此地に足は留められぬ、今宵の中に難所を越へて北國路へ志さん、コリヤ急に心がせいて來たわえ。

ト神樂になり、氣を急いて、辰次下手にはひる。バタ〳〵にて鳥居の中より、松之助、すりお辰の袖を捕へ、出て來り。

松之　オヽ、お前ぢや〳〵。

辰　ヱヽ、おりやア知らねえと言ふ事よ。（ト競り合ふ、此時もがりの竹、博奕打のなりにて出る。）

竹　何だ〳〵、わりやア辰ぢやねえか、どうしたのだ〳〵。

辰　ヲヽ竹か、此二才め、おれを盜人だとぬかしやアがるから了簡がならねえのだ。

ト言ひ乍らそつと竹に錢入れを渡す。此前より九市郎鳥居内より出て見て居て思入あり。

松之　ヱヽ盜人猛々しいと、おのれが奪つたに違ひない、サア戻してくれ〳〵。

竹　かう〳〵、若いの〳〵、マア〳〵待ちねえ、おりやア此土地でもがりの竹といふ顏役だ、奪られたに違ひなくば取り返してやる、マア〳〵まちなせえ〳〵。

松之　ハイ〳〵、宜敷うおたのみ申しまする。

竹　奪つたと言ふのも奪らねえと言ふのも、證據がなけりや水掛論だ、裸になつて震つて見せるがいゝ。

辰　よし、見せてやらア。（ト帯を解き、着物を振ひ。）サア、どうだ、あつたか。

松之　ヱヽおのれ、今現在懐から、奪つた紙入れ、ない筈はない。（トよく〳〵見て、不審の思入。）

竹　どうだ有るか、イヤサ、紙入はあつたのか。

松之　ハテ、たしかに。（ト是にて、辰は松之助の襟髪を取つて。）

辰　アノ妛な大がたりめが、よくも言ひがけをしたな、サアどうするか、覺えてゐやアがれ。

ト掘りこぶしにて打つ。

松之　ヱヽ、悔しい〳〵。（ト打たれ乍らもがく、此時九市郎辰を投げる。）

辰　アイタヽヽ。（ト竹前へ出で。）

竹　イヤお侍、おめえは何しにこゝへ。

九市　何しにとは横道者、紙入れを奪ひ其上に、馴れ合つて打ち打擲、見かねて留に出たのだわ。

竹　ムヽ、それぢやお前さんも此奴をば、盗人とおつしやるのか。

九市　さう言ふ汝も同類なるわ。

竹　何だと。

九市　サア、只今是にて見てをれば、留る振りにて立ち舞ふ中、手から手へ渡せし紙入、身共が慥かに見屆けおいた。

辰　それ知られたら、モウ是れまでだ。

竹　ウヌ、覺悟しやアがれ。

ト兩人して九市郎に打つてかゝる。九市郎立廻つて竹の懷中より紙入を引き出し、松之助の前へ投げ出して、兩人を打ちすえる。

九市　それにてとくと、改め見やれ。

松之　お蔭で無事に戻りました、有難うございます。

九市　いゝ、ちゝらが無くば、こやつも勝手に。（ト突き放す。兩人下手へ逃げてはひる。）

松之　何れのお方か存じませぬが有難うございます、私は甲州郡内にて絹屋松之助と申す者、當所へ糸の買ひ出しに參り、元手の金子を奪られましては、國元の親共へ申譯もございませぬ所、あなた樣のお蔭にて無事に戻り、嬉しうございます、何卒失禮ではございまするが、私の宿迄お越し下さりませうなれば、有難う存じまする。

九市　イヤ、御厚志の段は過分なれども、望みあつて遍歴いたせば、その意には任せ難し、自儘なれどもこのまゝに。

松之　左樣に仰せられましては、達つてと申すも却つて失禮。

九市　イヤ〳〵、決してかまやるな、障りなき中少しも早く。

松之　左樣なれば、御言葉に隨ひまして。

九市　氣を附けて參れ。（ト大拍子になり、松之助は花道へはひる。）コノ身が參らずば危い難儀、ハテ仕合な男ぢやなア。（ト思入あつて。）國元を出でし日より、晝は一日足に任せ夜は早泊りの旅籠屋とても、旅人の噂に耳を峙て樣々と心を碎けど、香爐の在所姬君の御行衞、今に於て手がかりなく。（ト此時以前のすり辰窺ひ出で。）

辰　ウヌ。（トかゝるを。）

九市　ハテ、何とした。（ト投げ退けて。）ものであらうなア。

ト此模樣よろしく思案のこなし、合方にて道具廻る。

本舞臺向う淺黃幕、通しの草土手。上手の方、浪板渡し場の上り口。下手、松の大樹蘆原、此前に田舍茶屋、茶店の亭主莚を敷き、草鞋を作つてゐる。すべて信州姫津川十市渡しの場。在鄉唄にて、道具留る。

ト上手より渡し船にて、仕出し大勢乘つて來る。船頭竹棹をさして出で。

船頭　ソレ、當るぞ〳〵。（ト皆々、捨ゼリフにて下手へはひる。）　オイ〳〵太助どん、青柳の酒樽はまだ來ぬか。

亭主　ヲイ、まだゞよ。

船頭　さうか、そりやア勝手が惡いなア。

ト言ひ乍ら船を漕ぎはひる。馬子唄になり、花道より才次郎、かるさん風呂敷包を背負ひ、大小にて出る、後より馬子やかましく言ひ乍ら出て來り、花道にて。

馬子　ヲイ〳〵侍、さう二本差しだと思つて威張るなえ、威張るなえ。

才次　何の威張るの何のと、迷惑千萬な事を申す奴ぢや。

馬子　それぢや何故乘らうと言つたに、何故乘らねえのだ。

才次　イヤ、此方馬、駕は望みでない、初手から斷りを申したのぢや。

馬子　エヽ、何をぬかしやがるのだ。（ト才次郎の手を取り。その手を捩ぢ上げる。）

才次　エヽ、命冥加な。（ト突き放す故。）

馬子　おれ樣ぢやなア。（ト馬子逃げてはひる。）

才次　何處の浦にも國に盜賊、彼奴も刀の錆になる奴、アヽなげかはしきものぢやなア、オヽ、向うへ見ゆるが十市の渡し、ドレ船の便りを相待たうか。（ト舞臺へ來る。）

亭主　お休みなされておいでなさいまし。

才次　如何さま日脚も七ツ下り、休息いたして參らうわえ。

ト腰をかける。亭主茶を出す。禪の勤めになり、上手より外記左衛門着附、ぶつさき羽織、野袴、大小にて、娘おまき、振袖の旅なり杖を突き、奴雨掛を傍に置き、船にて出る。

船頭　旦那、上り場を氣を附けて下さいまし。

外記　オヽ、娘、すべらぬ樣に氣を附けて參れ。

まき　アイ〳〵。

外記　コリヤ角藏、雨掛を氣を附けろ。

角藏　ヘイ、畏りました。（ト外記左衛門先に、皆々上り。）

外記　そんなら娘、そろ〳〵行かうか。

まき　ハイ、參りませうわいなア。（ト鳴物キツパリとなり、舞臺を歩きながら、）申し父さん、あの傳内と言ふ奴は、惡い者人でござりまするなア。

外記　イヤモウ、悪いのなんのと、それ故に工夫して昨夜の泊りで出しぬき、是にて厄病神を拂うたと言ふものぢや。

まき　是で私も、心が落着きましたわいなア。

ト言ひ乍ら花道へ行きかゝる。花道より篠塚傳内、半纒ぶつさき股引にて、後ろを振り返り〳〵こなしあつて。

傳内　先へ行きしか但しは後か、是非見當てたいものぢやなア。(ト附け際にて、行き逢ひ。)オヽ、是は是は外記左衛門殿、おまき殿、お早うござつたなう。

外記　オヽ、篠塚氏か。(トおまきと顔を見合せ。)

まき　傳内樣。

傳内　イヤモウ、御兩所に逢はうと存じ地藏の辻から近道を横切り、青柳迄參る道の棒鼻にて尋ねたれば、まだお越しはないとの事、それでは道が違つたのかと取つて返して參りましたが、ハテよい處にてお目にかゝり、ヤレ〳〵嬉しや〳〵。

外記　未明に宿を立ちました時、御手前には寢入つてござつた故、給仕女に傳言をいたし、ソロ〳〵是迄參つてござる。

傳内　青柳迄は一里餘り、暫く是にて休息いたして參らう。

外記　何さま、ソレ角藏雨掛をそれへおろせ。

角藏　ヘイ〱。（ト雨掛を下ろす。）

外記　サア、娘もかけやれ。

まき　アイ〱。（トかける。）

外記　ドリヤ、一服いたさうか。（ト皆々かけて。）

傳内　外記左衛門殿、途中ではござれども、御同宿も今晩限り、是非明日は追分より、お別れ申さにやならぬ仕儀、就いては諏訪の温泉にて申し上げたる、御息女の身の上。

外記　不束な娘を度々の御所望なれども、彼れには許嫁の夫がござれば、心に任せる譯には參らず、夫故御斷り申せどもお聞き入れなく、又候の仰せ、此儀はひたすらお斷り申す。

傳内　サアそこでござる、たとひ許嫁がござらうとも約束變替は常の習ひ、殊更貴殿の御病中、晝夜御介抱申す中おまき殿にも申し聞けたら、父上さへ得心なら如何樣共と、申されたれば。

まき　左樣に申したは當座の遁れ、父樣は御病中無體な事をなさる故。

傳内　スリヤ、身共を欺されたのか。

外記　アイヤそれは格別、武士たる者が一旦約束を致しおき、今更違變が相成りませうや、御手前には、是迄の緣と諦め下されい。
傳內　ム、スリヤ武士故に約束をば、面白い、身共も武士だ、言ひ出した上からは刀にかけても貰うてみせう、サア田村外記左衞門、性根を据えて返答おしやれ。
外記　さう聞いては愈々罷りならぬ、御身が刀にかけるなら此方とても刀にかけて、やるまいと云うたら如何いたす。
傳內　ム、、斯うするわ。（ト息込む。此時才次郎ツカ〳〵と出で。）
才次　御兩所待つた、暫く〳〵。
兩人　何と。
才次　只一言申し度き仔細がござる、御兩所共に早まりめさるな。
外記　見受けますれば旅のお侍。
傳內　我々が爭ひをば。
兩人　お留めめされし、其仔細は。
才次　外でもござらぬ、身不肖の拙者なれども、お預けなされて下さるまいか。

外記　心有り氣なお侍、手前は事は好み申さぬ。
傳內　拙者は貴殿の留められし、其仔細を承りし上の事。
才次　サ、其所でござる、御兩所爭ひなさるれば、討つか討たるゝは知れた事、左樣あつては第一主君に對して大不忠、又貴殿とても主ある女を御所望なさる御心根は、近頃狹い御分別。
傳內　だまらつしやい。
才次　挨拶は時の氏神とやら。
傳內　だまらつしやい。
才次　此爭ひは何卒拙者に。
傳內　ヱヽ、だまりをらう、身共に於ては不承知だ。
才次　ムヽ、スリヤ御得心はござらぬか。
傳內　知れた事だ。
才次　成程、御手前の如き人面獸心、利非のわからぬ侍は理解を申しても聞き入れまい、それでも侍か。イヤサ武士か。
傳內　イヤ、言はせておけば、雜言過言、汝から先へばらしてくれるは。（ト拔き打ちに斬りつける、

才次　是はまた御短慮千萬、御承知なければ、御相手になりませうか。（ト利き腕を捩じ上げる。）

傳内　サア、それは。

才次　御得心下さるか。

傳内　サア、それは。

才次　御返答は、如何でござる。（ト突き放す。此内外記左衞門、感心せしこなし。傳内思入。）

傳内　ム、、如何にも挨拶承知いたした。

才次　然らば違背ござらぬか。

傳内　オヽ、如何にも。

才次　それでこそ、拙者の詞も相立つ、イザお刀を。（ト拾つてやる。傳内きまりの悪きこなし。）

傳内　最早用なき拙者故、罷り歸る。

才次　サア、御勝手に御出なされい。（ト傳内二足三足行きかけて。）

傳内　アヽ思へば〳〵。

才次　まだ言ひ分がござるか。

傳内　イヤ、何もないわい。（ト花道へ走りはひる。才次郎後を見て。）

才次　ハヽヽヽ。（ト笑ふ。外記左衞門見て。）
外記　イヤ、御年若とは申し乍ら、天晴の御手の内、實に感心、ナウ娘。
まき　サイナア、さうしてまア、天晴な殿御振り。
外記　お蔭を以て無事に納まり、何と御禮を申さうやら。
まき　有難う存じます。
才次　是は〳〵痛み入つたる御挨拶、イヤ何れの家來か存ぜね共、世には無法な奴もあればあるもの、嘸お困りでござつたらう。
外記　未熟の拙者ではござれども、彼等如きの二人や三人、あながち恐るゝにはあらねども、娘といふ足手まといがござる故斯くの仕合、又拙者には鎌倉の呢近田村外記左衞門と申す者、近頃は、弟内記に家督を讓り諸大名方へ射術の指南、シテ又御身樣の御姓名は。
才次　お尋ねなくとも此方より、名乘るべき筈なれども、浪人なればおこがましく。
外記　何、御浪人とナ。
才次　一所不住の境界でござる。
外記　近頃不躾ながら拙者宅へお越しあつて、門弟共の御世話下さる譯には參るまいか。

まき　ほんに今日の御恩送り、おいやではござりませうが、妾の家へ御出あつて、ならう事なら一生でも。

才次　イヤ、其儀は身共如何ばかり、大慶至極に存ずれども、大切な望みがござれば。

外記　ナニ大切な望み、スリヤ早残念千萬、次第によらば不束の娘の聟に願はんと思ひし事も成らざるか。

まき　そりや、妾のお願ひも。

外記　オヽ、是非ない儀ぢやと諦めよ。

まき　ハアー。（ト泣く。）

才次　イヤ、數ならぬ拙者をば、左程迄仰せあるは有難き事なれど、それにしても御兩所の御言葉にては、御息女には御言號の有る御様子。

外記　イヤ、其儀は傳内の無理所望を防がん爲の作り事。（ト思入ありて。）只今仰せありし御望みの儀。（トすこし考へ。）矢流一家の奥儀を極め、武藝といひ天晴智勇、ムヽ、其望みの儀は、扨は御邊が心中身共の推量、よもや相違はござるまい、左様とは存ぜずに身勝手な事申し並べ、面目次第もござりませぬ。

才次　アヽ、よしなき拙者がお出合申し御心配をかけ申した、望みだに成就の上は縁組の儀は叶はずとも、再會の時節もござらう。

外記　申す迄もなけれ共、何分共に御身を大事に。

才次　其許樣にも御健勝にて。（ト暮六ツの鐘なる。）

外記　南無三、最早暮るゝさうな。

才次　哀れを誘ふ、秋の暮れ。

外記　心殘りは多けれども、

才次　最早お越しなさるゝか。

外記　是非に及ばぬ、御別れ申さう、サア娘行け〳〵。（ト言へども、名殘りを惜しむ思入。）ヲヽ、道理、ハテ扨行けと申すに。（ト花道へ突きやる。角藏は雨掛を擔ぐ。おまきは見返る。）アア、挾箱が目障りになるわえ。（ト雨掛が邪魔になることなし。）アノ傳内めが不行跡。

まき　それに引き替へ、花も實も。

外記　右にはいやなり。

まき　思ふはならず。

外記　とは能く言うた、譬ぢやなア。（ト唄になり、心を殘して三人花道へはひる。）

才次　アヽ思ひよらざる親子の親切、若し鎌倉へ赴く時は、コリヤよい便りを求めたわえ。

ト禪の勤めになり、花道より以前の寸平出て來り。

寸平　暮れたれば渡しがあるまいと、急いで爰迄參つたが、どうやらまだある樣だ。（ト本舞臺に來て）コリヤ、船頭〳〵。ト呼ぶけれども、返事なき故）エヽ、寢てでもゐるか、いま〳〵しい。

ト才次郎、寸平に目をつけ、

才次　御手前は、江州粟津家の御飛脚ではござらぬか。

寸平　オヽ如何にも。イヤ〳〵大阪の者。

才次　イヤ、かくさつしやるな、丸に木の字の合印。

寸平　ヤア。

才次　見知りある刑部が家來、何と違ひはあるまいがな。（ト是にてよく〳〵見て。）

寸平　ヲヽほんにわりやア比良井才次郎。

才次　ムヽ、扨は曾平太、辰次への内通の使ひだな。

寸平　イヤ、そんな使ひぢやないわえ。

才次　心得ぬは其状箱。

寸平　コリヤモウ、たまらぬ。（ト逃げ出すを引戻して、状箱を取り上げる。）それ奪はれては。

ト抜き身にて切つてかゝる。立廻りの内状箱を投げつける。是にて密書出る。

才次　何々、遠路の處御書状有難く、つぶさに拜見仕候、此所は讀むに及ばず。

寸平　それを。（ト取らうとするを、引きまはして。）

才次　且又短刀の儀、仰せ下され早速返上仕り度く候へ共、末々に拙者出世の種共仕り度候へば、御断り申上候、達つて御懇望に候はゞ金子二百兩、御つかはし下さる樣賴み上げ奉り候、以上、粟津刑部殿へ、守山辰次より、ムヽ、コリヤよいものが。

寸平　それを。（ト又取りにかゝるを見事に返し、足にてふまへるを、木の頭。）

才次　手に入つたわえ。

トよろしく、合方にて。

ひやうし　幕

四幕目　吾妻屋の場

役名　唐崎九市郎、同才次郎、守山辰次、吾妻屋清兵衛、絹屋松之助、下男兵四郎、すりの辰、清兵衛妹おつる、花嫁お宮實は腰元宮城野、下女およし茶屋女房お銀等。

本舞臺、平舞臺、正面本二階。見附納戸口。下手に駄荷の書割り。上下押入れ。此上手大段階子、上手高二重の中二階。下手板塀、此前に馬除けの石　いつもの東門口。是にかけ行燈、商人衆御宿、吾妻屋、と書いてあり。右平舞臺に亭主清兵衛、煙草盆を控へ居る。前幕の松之助着流しにて脇に座り、飯を喰つてゐる、下女給仕をしてゐる上手に娘おつる、鏡臺に向ひ髪を撫で付けてゐる。丸行燈に灯を點し。向う通るは熊野道者の唄にて、幕あく。

下女　もそつとお上りなされませ。

松之　イヤもう澤山でござります。（ト箸をおく、清兵衛こなしあつて。）

清兵　若旦那、只今のお話は、危い事でござりましたなア。

松之　イヤモウ危い段か、命がけの目に遭ひました。

清兵　あなたも御存じかは知りませぬが、此宮の本から二里足らずの、信州越中の國境、いゝ、くりから峠

と申す難所へ山賊の頭が住んで、手下の盗人が此邊へ働きに出る取沙汰。

松之　フム、そんなら大方今日の奴等も、その手下でがなあらうわい。

下女　モシ、御膳がすみましたら、お湯をお召しなされませ。

松之　ハイ〳〵、イヤモウ怪しからぬ目に遭うたので、大分に草臥れました。

清兵　コレおよしや、按摩を呼んで來いよ。

下女　畏りました。

松之　そんなら清兵衛。

清兵　ごゆるりとお休みなされませ。（ト松之助下へおよし、奥へはひる。）まア何は兎もあれ、若旦那は運の强い御方ぢや。

つる　モシ兄さん、最前茶店のお銀さんが、今夜は嫁さんを連れて來ると言はしやんしたが、そりや本眞の事でござりますかえ。

清兵　さればさ、そちも何時迄家へも置かれず、何れへなりと、嫁入りさせねばならぬ身の上、さうなる時は後が困れば、相應な者があれば世話してくれと賴んであるが、さうして今夜連れて來ると。

つる　アイ、言うたわいなア。まア兄さんも嫁御が來るなら、いろ〱仕度もあらうのに、その樣に落ち附いてゐて、すむかいなう。

清兵　サア、突然に來る嫁ぢや、何なり共有り合せた器で、ツイ杯を出しておけ。

つる　いくらかまはぬと言うても、何か支度をせずばなるまい。是々、誰かおぢや。

兵四　ヘイ〱、（ト奥より出る。）何か御用でござりまするか。

つる　アノ今夜急に兄さんの處へ、お嫁が來るとの事、祝儀のお肴を拵へてたもや。

兵四　ヘイ、畏りました。

つる　早くたのみますぞや。

兵四　ヘイ〱。（ト奥へはひる。引き違へて下女およし出る。）

下女　おつる樣、御目出度いお話でござんすなア。

つる　オヽ、よい所へ來た、そなたは押入れの棚にある三ツ重ねの杯と、お正月の組重と、銚子を出してたも。

下女　ハイ、畏りました。（ト奥へはひる。）

つる　コレ兄さん、お前風呂へなとはひり、首筋の垢でも落しておきなさんせいなア。

清兵　コレ、何を言ふぞい、正のものを正で見せる、汚れた所が値打ぢや。

つる　ヱヽモウ、負惜みな事ばかり、しんきな御方ではあるわいなア。

ト賑かなる唄になり、花道より以前の茶屋の女房お銀、二升樽と肴籠とを持ち出る、後より、嫁お宮着流し、綿帽子にて、風呂敷包を抱へ、出て來り。

お宮　コレ〳〵、お銀さん、妾が頼んでおいた事はよいかえ。

お銀　よいとも〳〵、何もかも呑み込んでゐる、氣をもまずとサア〳〵お出。（ト本舞臺に來り。）ハイ、おたのみ申しまする。

清兵　コレ妹、お客ぢやさうな。

つる　アイ〳〵、（ト門口へ來て。）どなたかおはひりなされませ。

お銀　おつるさん、妾ぢや、嫁御を連れて來ましたわいなア。

つる　オヽ、お銀さん。モシ〳〵兄さん、モウ嫁さんが來てぢやわいなア。」

清兵　何ぢや、モウ來たのか、そりや大變ぢや。（トそこらを片附ける。）

お銀　サア〳〵お宮さん、おはひりなさんせ。

お宮　アイ〳〵。（ト兩人はひる。）

お銀　マア、花婿御の事なれば、先づ上座へ。（ト手を取つてよき處へ座らせ。）して肝心の花聟様は。

清兵　ハイ〳〵、聟君は是にをられます。

つる　兄さん、お前、何をしてぢやぞいなう。

お銀　サア〳〵、爰へ御出なされまし。

清兵　ハイ、只今それへ。（トうぢ〳〵してゐる。）

お銀　是はしたり、何をまア、その様に。

清兵　イヤサ、おれも恥かしいわえ。

お銀　何を言うてぢやや。（ト手を取り。）先づ聟様のお席はこちらへ。（ト座らせ。）斯うした處は、聟様やら見合やら、ナア申し清兵衛様、氣に入りましたかえ。

清兵　イヤ、おれの女房にはちつと過ぎましたわいなう。

お銀　嬉しや〳〵。マア〳〵納つたと言ふもの、お宮さん、聟様に御挨拶を。

お宮　ハイ〳〵、不束な者なれども、よろしくお頼み申しまする。

お銀　アヽコレ〳〵、此子はなア、おつるさんと言うて、清兵衛様の妹、仲好うして上げて下さんせ。

つる　イヤモウ、妾の爲には大事の兄嫁、仲好うせいでなりませうかいなア。

お宮　何分お頼み申しまする。（ト此時奥にて。）

兵四　ヤレ〳〵、忙しいな〳〵。（ト片肌ぬぎ、俎の上へ野菜を乘せ持ち出て來り。）コレ〳〵、一人では手が廻らぬ、此芋の皮を剥いて下され。

つる　コレ兵四郎、そんなものを、爰へ持つて來ては困るわいなう。（トお宮を見て。）

兵四　フム、爰にゐるのは、嫁御樣か。（トツイと奥へはひる。）

お銀　おつるさん、ちやつと杯を出して下さい。

つる　アイ〳〵、コレ、およしや〳〵。（ト呼ぶ）

下女　ハイ〳〵。（ト三ツ組の杯、銚子を持ち出る、お銀、取つて前に置く。）

お宮　モシ、お銀さん、初手から妾の頼んだ事をば。

お銀　ほんにさうぢや。（トこちらへ來て。）時に清兵衛樣、杯をせぬ前方、すこし頼みがござんすぞえ。

清兵　ハヽア、そりやまア、どの樣な頼みぢやなう。

お銀　ハイ、別の事でもござんせぬが、女夫になるはなるけれども、一つ寝をせぬ樣にとくれ〳〵も

頼みぢや。

清兵　ハア、そんなら何か、あの人を女房に持つても、一つ寢は出來んと言ふのか。

お銀　近頃無理な、願ひぢやけれどなア。

清兵　そりやつまらぬ、その樣な女房が何處の國に在るものか、それでは俺を、欺したのぢやな。

お銀　イヱ〲、さう言ふ譯ではなけれど。

松之　何か、御目出度い話ぢやなう。（ト奥から松之助出る。）

清兵　ヘイ、その目出度いは目出度いが、どうもその……。」

松之　それがとは、どうしたのぢや。

清兵　どうしたと申して、親の命日に、魚を貰うた樣なものでなア。」

松之　何を言ふのやら、一向にわからぬわ。（是を頭になり、花道より九市郎出る。）

九市　途中にて承つた、旅籠屋の目印、これぢやわえ。（ト門口へ來て）コリヤ〲若イ者、吾妻屋と申す、旅籠屋は是か。

お銀　ハイ、こちらでござります。

九市　然らば、今宵は止宿を頼む。

お銀　ヘイ／＼、一寸お待ち下さりませ。（トこちらへ來り。）申し旦那、お客樣でございます。

清兵　何御客人、今夜はどうも困る。（ト言ひ乍ら門口へ來て。）ヘイ／＼、御覽の通り見苦しき田舍家、間數とてもございませねば、御宿の儀は平に御斷り申しまする。

九市　イヤ／＼、苦しうない、不自由は旅の修行、たとひ簀のこの上にでも。

清兵　左樣なれば、御不自由さへおいとひなく、お泊りなされて下さるなら、如何樣共いたしませう。

九市　それは承知ぢや、許せ。（ト内へはひる。）

清兵　それおつるや、お客樣ぢや。

つる　ハイ／＼、只今お滌ぎを取りませう。

九市　イヤ／＼、それには及び申さぬ。（ト此時おつる九市郎を見て。）

つる　ヤア、あなたは。

九市　ムヽ、さう言ふ女中は。

つる　今日、明神樣でお目にかゝつた。

九市　その時の、娘御。

つる　ようまア御出なされましたなア。（ト悦ぶこなし。松之助も九市郎を見て。）

松之　コレ〳〵清兵衛殿、今日の難儀を救ふて下されたは、あなたぢや〳〵。

清兵　是はまア、妹と言ひあなた迄、何をキョト〳〵なされます。

松之　サア、今日悪者の難儀を遁れたは、あなたのお蔭。

九市　ムウ、誠に甲州郡内の絹屋殿。

松之　よろしう御禮を申してたも。

清兵　ハイ　承知いたしました、（ト九市郎に向ひ。）是はまア不思議の御縁で、私方へ御出下されまして、有難うござりまする、何をおかくし申しませう、此方は私の爲には御恩を受けし御主筋、勘當の身の落所へあなたがお越し下さりまして、お助け下されしとの事、その御禮も申したうございますれば、お心置きなういつ迄も御逗留なされて下さりませ。

九市　いかさま、佛説に言ふ一樹の蔭、身共が宿りを求めしは、何んぞの因縁でがなあらうわい。

（ト此時おつるいろ〳〵こなしあつて、九市郎が傍に寄り。）

つる　申しそれでは御窮屈、お召物をお着替えなされて、御ゆるりとなされませ。（ト此時兵四郎出る）

兵四　ハヽア、それではお娘は此侍に氣有り名古屋と來てゐるな、そりやあんまりぢや〳〵。

清兵　ヤイ〳〵兵四郎、おのれそりや何を言ふのぢや、大事なお客様の前をも憚らず。
兵四　イヤモウ、破れかぶれぢや。
清兵　エヽ何を言ふのぢや、すつこんでをれ。（ト小言を言ひ、お宮に向ひ。）コレ〳〵女房共、此お客様はおれが爲には、大事の〳〵のお客様ぢや、御挨拶を申しておけ。
お宮　アイ〳〵。（ト衣紋をつくろひ。）是はまア、どなた様かは存じませぬが、よう御出なされました。
九市　スリヤ、こなたは當家の。
つる　ハイ、たつた今、見えました。
松之　女房でござりまする。（トお宮九市郎の顔を見てびつくりなし。）
お宮　ヤ、あなたは。
九市　オヽ、こなたは。
お宮　思ひも寄らぬ。
九市　變つた所で遭ひしよなア。（ト膝をたゝき、不思議の思入。）
お宮　ほんにあなたにお目にかゝつたら、何からお話し申さうやら。

九市　身共とても早速尋ねたき仔細もあれど、こゝは旅籠屋、諸人の入り込み、うかつた事は言うまいぞ。

ト清兵衛、九市郎の顏を見て、

清兵　コリヤ〳〵女房共、あのお侍は近附きか。
お宮　アイ、妾が前方上方で、御奉公に上つたお屋敷の若旦那様。
清兵　アノ若旦那。ハテなア。コレ〳〵お銀どん、一寸愛へ來て下さい。
お銀　何んぞ、用でござんすかえ。
清兵　俺への頼み、斷りの筋が知れた。
お銀　知れたかえ。
清兵　ソレ。（ト九市郎の方を見て、又お宮を見て。）なア。（トこなし、兵四郎思入。）
兵四　成程、根ざしは斯くと知られたり。
お銀　そんな事かも知れぬわいなア。（ト清兵衛、むつとして。）
清兵　ヱヽ、何やらいま〳〵しうて、氣合が惡うてならぬわい。
松之　ア、コレ〳〵、氣合が惡いとは何がその樣に腹が立つのぢや。

清兵　立ちませいでか若旦那、ようものを思うても見て下され、何處の國にか嫁に來て夫婦一ツ寢は斷りぢやと、そんな嫁がどこにあります。

兵四　オヽ親方、そりやお前が尤ぢや、一體、此お銀さんが惡いのぢや。

お銀　何と、妾が惡い、妾よりお前よう妾を欺したねえ。

清兵　サア〱、モウ誰れでも堪忍がならぬ、堪忍袋の緒が切れたぞ。（ト立ち上る。）

松之　アヽコレ、私の爲には大恩のある旦那樣の前で、何をするのぢや、何をするのぢや、こなたは氣でも違ひはせぬか。

清兵　ヘイ〱、誠にどうも恐れ入りました、ツイ持病が起りまして旦那樣の前をも憚らず、眞平御免下さりませ。

九市　なんのなんの、此樣な處へ參り合すも、一ツは旅のうさ晴らし、その心配は必ず無用。

つる　ほんにまア、いろ〱の取り込みで肝心の御飯を忘れてをりました。コレよしや、ちやつと持つて來やいなう。

九市　アイヤ〱、札の辻とか申す所で當國の名物、信濃蕎麥を澤山にたべましたれば、後程にして下され。

つる　左樣なら、お風呂へおはひりなされませ。
九市　如何樣、湯に入らねば草臥も休まらぬて。
つる　アノお脊中は、妾がお流し申しませうわいなア。
清兵　女房共、こなたは勝手へ。
お宮　何かの事は、必ず後で。
九市　然らば、御亭主。
松之　お侍樣。
清兵　御ゆるりとお召しなされませ。（ト唄になり皆々奥へはひる。淸兵衛こなしあつて。）いか程御馳走申しても、あきたりない大事のお客、放れ座敷は普請中二階は疊が汚れてある、まだしも南の中二階、きれいで至極上等なれど昨夜からの浪人客、まさか座敷の取り替へもなるまい、ハテどうしたものであらうなア。
ト思案のこなしにて奥へはひる。此時中二階の障子を引き拔き、辰次脚袢をはき身ごしらへをしてゐる。
辰次　ア、ヤレ〳〵、恐ろしや〳〵、今日の晝明神の前で遭遇し、危い處を脫れたが、又も此家へ泊

りに來るとは、コリヤまた何とした因果ぢややら、何んでも爰を拔け出して曾平太が隱れ家、くりから峠へ尋ね行き、その上で何とか思案せずばなるまい。

ト尻をからげ身ごしらへをする。唄になり花道より、才次郎、以前のなりにて出る。

才次　入口のうどん屋で、敎えてくれし旅籠屋の目印、吾妻屋と言ふのはあの行燈、さうぢや〳〵。

ト本舞臺へ來る。此內辰次身ごしらへして出て來り。

辰次　何んでも早く逃げるが勝、さうぢや〳〵。（ト上り段へ片足かけると門口へ才次郎來て。）

才次　賴まう〳〵。

辰次　ヤレ情けない、どいつか又來をつた。（トそつと引き込む。）

下女　コレお松どん、店に御客があるさうな。（ト言ひ乍ら奥から出る。）どなたでござります。

才次　手前は、諸國武者修行いたす者、一宿が賴みたい。

下女　ヘイ、左樣でござりまするか、旦那樣に左樣申しますれば、まアこちらへ、お這入りなさりませ。

才次　然らば、許しやれ。（ト上手へ通る。下女煙草盆を出し、奥へはひる。）ヤレ〳〵、先づ一服いたさうか。（ト煙草を呑み乍ら。）最前十市の渡し場にて手に入つたる敵の密書、此狀の文體にては敵

は是非共此邊りを、徘徊なすに相違なし、それにしても兄者人九市郎樣の御身の上、姬のお在所尋ねん爲御出國のその後にて、大見市郎右衞門樣の不慮の御最期。騷動の樣子も御存じなく何處にどうしてござるやら、片時も早くお目にかゝり兄弟一致し日頃の本望、ア、何かの樣子、お知らせ申したいものぢやなア。（ト此の奥より清兵衞出る。）

清兵　へイ、お泊りのお客樣は、あなた樣でござりまするか。

才次　御身は當家の御亭主か、身共は諸國修業の浪人、何卒今宵の一宿をば。

清兵　そりや、斷うても申さねばなりませぬが、お連れ樣とても見えませねば。

才次　ムヽ、一人旅故ならぬと申すか。

清兵　へイ、御氣の毒樣乍ら、旅籠屋仲間の掟でござりますれば。

才次　ムヽ、成程、掟とあらば力及ばぬ。ハテ、江口の君ぢやよなア。（ト立ち上り、出ようとする。）

清兵　アヽモシお待ち下さりませ。江口の君とは御心あつてか。

才次　世の中をいとふ迄こそ堅からめ。

清兵　假の宿りを惜む君哉。

才次　古歌の心は、身が述懷。

清兵　斯程優しきお侍、お歸し申すも餘りの殘念。
才次　デモお手前の、家業の掟。
清兵　破らぬ思案は。ム丶。(ト行燈を取つて來て。) まツこの通り。
才次　ム丶、雲間に秋の月一ツ。
清兵　影は二ツの、お連れ樣。
才次　天晴頓智の。(ト此時辰次そつと覗き、才次郎と顔を見合せ障子を閉める。才次郎思入あつて。)
ム丶、慥かに。(ト行からうとする。)
清兵　まア、奥へ。(ト隔てる。ござりませ。(ト才次郎、氣を替へ。)
才次　お世話でござる。
ト唄になり才次郎中二階へ目を附け奥へはひる。清兵衛小首を傾け奥を見て又二階を見、いろ〳〵こなしある。此内辰次は障子をあけ、ツカ〳〵と下りて、表の方へ出ようとするを、清兵衛留めて。
清兵　御客樣、何れへお越しなされます。
辰次　イヤ、身共は一寸。
清兵　見受けますればお立ちの御樣子、何んぞ御氣に障りし事でも。

辰次　イヤ何も氣に障りし事は。イヤ何、氣に入らぬ事がある。

清兵　そりや、何事でござります。

辰次　あの座敷が氣に入らぬ、あまり端近く騷々しうてならぬ。

清兵　左樣なれば、二階の小座敷にいたしませう。

辰次　ムヽ左樣か、それなれば參つてやらう。

清兵　左樣なればお出下さりませ、お夜具も押入れにござりまする。

辰次　左樣か、ドリヤゆるりと休まうか。（ト二階に上る。淸兵衞こなしあつて。）

清兵　イヤ案じるよりは產むが安いと、こちらから頼んでも入れ替つて貰ひたい所を、向うから取り替ろとは、願うたり、叶うたり、コリヤ／＼誰ぞ來い／＼。

下女　ハイ／＼。（ト出で來り。）何ぞ、御用でござりまするか。

清兵　オヽよしか、中二階をきれいにして、煙草盆へ火を入れて置けよ。

下女　ハイ畏りました。（ト中二階へ上り掃除をする。合方になり九市郎手拭にて顏をふき乍ら出る。おつる大小を抱へ、付いて出る。）

九市　アヽヤレ／＼、さつぱりとしたわえ。

清兵　お湯の加減は、どうでござりました。
九市　イヤモウ、熱からず、ぬるからず、近年の上湯であつた。
つる　兄さん、妾が附いてゐるわいなア。
清兵　何を言ふぞい。コレおよし、掃除はよいか。
下女　ハイ、すつぱりと掃つて、お床ものべておきました。
清兵　オヽそれでよい、イヤ何、旦那様には終日のお草臥れ。
つる　モウ、お休みなされませいなア。
九市　いか様、彼是と夜も更けた、モウ何時であらうなア。
清兵　モウ四ツ前でもござりませうか。
九市　ドレ、然らば休まうか。
つる　サア、からお出でなされませ。（ト合方になり、おつる案内して上手の中二階へ上る。）
清兵　コレおつるや、行燈の灯が消えると悪い、附木をお枕元へ置くがよいぞ。
九市　イヤ〳〵、火打袋を持参いたせばその心配には及び申さぬ。
清兵　イヤ、お武家と申すものは、御用心のよいものでござりまするなア。

九市　其許にも嘸お勞れ、早くお休みなされませ。

清兵　ヘイ〳〵、あなたも、お休みなされませ。

ト清兵衞表の行燈を入れ門口を閉める。此内九市郎布團の上へあがる。おつる世話をしてゐる故、

九市　ア、コレ、モウ宜しうござる、早く下へお出下され。

つる　左樣でもござりませうが、せめておみあしでも。

九市　イヤ〳〵、闇夜に婦女に灯を借りずと、御身も身共も若い同志、一緒に居ぬが人の愼み。

つる　それぢやと申して。

九市　ハテ、御出なされと云ふに。（ト此時淸兵衞。）

清兵　コレ、おつるや〳〵。

つる　アイ。（ト出る、九市郎障子を閉める。）

清兵　妹や、モウ旦那はお休みになつたか。

つる　ヱ、、知らぬわいなア。（ト奥へはひる。）

清兵　ようぷり〳〵と怒る奴ぢや、ドレ、表口の閉りを見て、一寢入りしてこまさう。（ト行燈を消し。）火の用心〳〵。

ト夜番の太鼓、割竹の音になり、探り〳〵奥へはひる、此時奥より才次郎下締を襷にして出る、上手の中二階へ目を附け、忍び寄つて障子を踏み放すと、是にて行燈の火消える。九市郎は、ハット心得起き上り枕元の刀を取り身がまへする。才次郎布團を引き退けても人が居ぬ故不審のこなし。此内九市郎は刀を拔く。此光りにて。

才次 扨こそな。

トせき込んで斬りつける。九市郎は斬り結ぶ。互に刀の光りを目當てにツカ〳〵と平舞臺へ下り、九市郎階下の脇に積んである、澁紙の荷物に躓き、刀にて荷繩を切り中より白木綿の反物出る。是を才次郎目當にめくら投げに打ち附け、手利き同志のたふき立廻り、いろ〳〵あつて。

九市 狼籍者か、盜賊か。

才次 何んと。

九市 但しは、宵の意趣斬りか。

才次 何を。

九市 仔細を語れ、ナナなんと。(ト此中、才次郎聞き耳立てゝ)

才次 ム、、其五音、聲音は。

九市 ム、、さう言ふ聲は。

才次　中兄九市郎様ではござらぬか。

九市　弟才次郎、まて〳〵、控へて居よ。

ト火打袋より火打を出し才次郎はさぐり寄り、行燈をさし寄せる。行燈をつけ顔を見合せ。

才次　オヽ、誰にこなたは。

九市　寝所へ斬り入りしは、盗賊の所爲と心得。

才次　敵の在所と心得、兄上とも、

九市　弟とも知らず、

才次　打ち合せたる、

九市　白刃と、

才次　白刃、

兩人　ハテ、危い事なう。（トこなし。）

九市　今、其方が詞の中、敵の在所と言ひたるは、義に依つてみどりに頼まれ、甚助が仇曾平大を討

け覘ふ存意ぢやな。

才次　兄上には國許の様子、まだ御存じはござりませぬな。

九市　何、本國の樣子とは。

才次　大兄市郎右衞門樣には、こなた樣御發足のその後にて、人手にかゝり無慘の横死をなされました。

九市　ム、、シテ〱、敵は何處の何者。

才次　日頃よりお目をかけられし、守山辰次の仕業でござる。

九市　何、スリヤ敵は辰次とな。（トびつくりなし。）

才次　サア、今更申すも便なき仕合せ、松倉卿の短刀詮議に御心を苦しめられ、惡事の根ざしは刑部なれども、荒立てられぬ本家の流れ、彼に一致の長濱曾平太寶の在所を探り問はんと、密に獄屋にお越しなされしを、欺し討ちと相見えて、數ケ所の深手に無慘の御最期、是非もなき武運の末、兄上殘念にござりまする。（ト是にて九市郎思入、才次郎の襟髮取って引き付け。）

九市　アノコ、ナ卑怯者めが、此九市郎は今の今迄夢にも知らぬ兄の御最期、おのれ後に殘り乍ら何故敵を取り逃した。言はう樣なき大腰拔けめが。（ト突き放す。）

才次　ヱ、恨めしい兄者人、身共は若殿御出府の御見送り、草津の宿迄參りし處、怪しからぬ胸騒ぎに、お暇願ひ宙を飛んで立歸る獄屋の裏門、柳の下にて摺れ違ふ怪しの曲者、辰次にあらうと

は夢にも知らず、待てと一聲かけたれば、エイと飛び來る手裏劍のよく〳〵見れば兄者人が、守山辰次に遣はされたる後藤の細工、今一足早くんばと思ひしも後の祭り、涙と共に御遺骸を相雲寺へ葬りし上、こなたの行衛敵の在所、此信濃路へ入り込みしと風の便りを力となし尋ね參りし今日今宵、不思議に兄弟再會せしも世になき兄の御導き、斯く御目にかゝる上からは、兄弟互ひに心を合せ仇を報ずる思召しはござらぬか、拙者が卑怯でない申譯、御死遺がまゐりましたか。

九市　ア、誤つたり弟、兄の最期に心の顛倒、空しくお果てなされしとは、露いささかも知らずして香花一つたむけぬは。

才次　宿業とは言ひ乍ら。

九市　よく〳〵うすき兄弟の。

才次　果敢ない御緣で。

兩人　ありしよなア。（此時辰次浴衣を行燈にかぶせる事あり。）

才次　歎きにまぎれ遲れたり、最前此家へ參りし折柄、はからずチラと見かけしはまさしく守山。

九市　何、敵辰次が此家へ。

才次　見届けしはアノ一間、思ひ違ひが手引となりて、兄弟の名乗り合ひ。」
九市　吾々が入り込みし、樣子を氣取り此家の內より。
才次　逃げ去らんも計られず。
九市　二階天井、押入下家。
才次　隈なく搜し、引きずり出し。
九市　本望遂ぐるは。
才次　今此時。（ト二階を目がけ行かうとする。）
九市　コリヤ、密かに〳〵。（ト此時辰次片手にて疊をまくり、水を下家へ流す。是にて行燈消る。）
才次　南無三、灯しが。
九市　弟、ぬかるな。
才次　御油斷あるな。（ト此時奧より兵四郎寢まきなりにてあくびを仕乍ら出て來り。）
兵四　何んぢや、まつくらがりぢや、少しもわからぬ。

ト門口へ行く。辰次忍び足にて、二階を下り、九市郎は二階へ上る。辰次又才次郎とすれ違ひ門口へ出て、兵四郎に突き當る。

兵四　エヽ、誰ぢや、どいつぢや。（ト言はれて、辰次鼻をつまみ。）

辰次　申し、大和屋と言ふ宿屋はどこでござります。

兵四　エヽ、ソリヤ東へ五軒目ぢや。

辰次　有難うござります。

トそつと花道へ行つて、ヤレ〳〵嬉しやといふ思入あつて、辰次花道へはひる。

兵四　エヽ、誰ぢや。（ト兵四郎才次郎に突き當る。）

才次　何。（ト當てる。此時お宮の宮城野手燭を持つて出で來り。）

お宮　九市郎樣はいづれに御出でなさるゝやら。（ト才次郎見て。）

才次　オヽ、こなたは宮城野殿。

お宮　才次郎樣か。（ト此時九市郎門口を見て。）

九市　ソレ、門口が開いてをるぞ。

才次　ムヽ、誠に今のくらがりまぎれに。

九市　風を喰うて逃げ失せたり。

才次　少しも早く。（トツカ〳〵と花道へ行く。）

九市　ヤレ待て、早まるな。

才次　イヤ、人面獸心の守山辰次、引捉へて一刀の下に。

九市　イヤ、心の急くは尤なれ共、闇夜と申し不知案内。

才次　ぢやと申して。

九市　ヱヽ、早まつて仕損ずるな、待てと申さばまア〳〵待ちやれ。

才次　ヱヽ、殘念千萬。（ト戻つて來る。此時九市郎下へおり。）

九市　先、何は差置き宮城野殿、承り度きは姫君の御身の上。

宮城　さればでござりまする、御心一途の夕照樣、いろ〳〵お諫め申せどお聞き入れあそばされず御國を立退き、妾の故鄕越中富山の兩親にお預け申して御結納の寶、鈴虫の香爐を、再び手に入れお詫びの種と姿をやつし、所々方々心を盡して居りますわいなア。

九市　スリヤ、姫君樣には御安泰となア、チヱヽ忝い。（ト倒れてゐる兵四郎を才次郎引き起し。）

才次　此奴が面はどうやら覺えが、オヽ、それよ守山方に因みの下郎。

九市　敵の行衞、詮議の糸は。（ト活を入れ。）

才次　コリヤ、汝は辰次が身内の者、落付く先を知らぬ事はあるまい、サア白狀いたせ。

兵四　イヽヤ、俺は知らぬ、覺えがない。
才次　エヽ、言はぬなら、いつそ斯うして。（ト刀を振上げる。）
兵四　アヽ待つてくれ〳〵、口でまざ〳〵言はうより、辰次が自筆の此書附け。（ト才次郎見る。）
九市　シテまた、姫君の御在所は。
宮城　越中富山、鷹匠町。
才次　辰次が在所は相州鎌倉、芝口二丁目。
兵四　井澤承順と申しまする。
九市　スリヤ、姫君には北國へ。
才次　扨は敵は東國へ。
九市　身共は越中へ立越えて、彼の夕照姫の身の納まり。
才次　拙者は鎌倉へ趣き、辰次が實否を見屆けん。（ト此時淸兵衞勝栗揚昆布を三方に乘せ出で來り。）
淸兵　ハア、恐れ乍ら御兩所様へ、吾妻屋淸兵衞、御餞別の仕りります。
九市　何、吾々に。
才次　餞別とな。

清兵　ヘイ、お話の様子承り、當所の名産此二品、心ばかりのお立ちの悦び。
才次　勝を搗栗。
九市　名を揚昆布。
清兵　ヘイ、御目出度うございます。
才次　其許の志。
兩人　過分々々。
清兵　殊に申し上げますには、御兄弟樣には北國へお越しとあれば、是より先に二里ばかり信濃越中の國境、くりから峠の半腹には獅子戻りと申しまして、難所がございまする、こなたの崖よりあなたの崖へ、藤づるを引きまして皿籠に人を乗せ双方へ引き渡す、下は數十丈の地獄谷、御用心が肝腎でございます。（ト此時九ツの鐘鳴る。）
宮城　アノ鐘は、モウ子の刻。
才次　忠と孝とに。
九市　東と北へ、立別れ。
才次　敵の實否。

九市　姫の案否。
才次　見屆けし其上にて。
九市　飛札を以つて。
才次　互ひの、通路。
九市　出遭ふ所は。
才次　四ツ谷新宿。
九市　上州屋十右衞門。
才次　比良井の家には、恩あるもの。
九市　時刻移さず。
才次　すぐ樣、發足。（ト行かうとする。此前より、すりの辰窺ひ出で、兵四郎に目配せして。）
兵四辰　おのれをやつては。（トかゝるを、才次郎は兵四郎を、九市郎は辰を引付け。）
九市　敵の枝葉は。
才次　此場の血祭り。（ト兩人を一時に返すを、木の頭。）
清兵　ヨウ〳〵、御見事々々。

ト扇を廣げ感心のこなし、是をキザミにて、よろしく。

幕

五幕目

尾花ヶ原の場

倶利迦羅峠の場

役名　唐崎九市郎、同才次郎、絹屋松之助、長濱曾平太、守山辰次、米屋喜兵衛、獵人獅子右衛門、渡し守德六、同姉六、虚無僧燕山、腰元みどり、手下大勢等。

本舞臺平舞臺、向う黒幕。眞中に石の地藏尊、臺座附き。所々すゝきの茂み、能き處に掛稻、松の釣枝、すべて信州尾花ヶ原の體、風の音にて幕あく。と淨瑠璃になる。

〽次第なり、更渡る尾花ヶ原の秋の霜、月西山に影遠く、狐の聲も谺して、いと物凄く聞えたり。

ト本釣鐘になる。花道より腰元みどり、菅笠を持ち、杖を突き出る。後より獵人獅子右衛門、袖なし輕さん、白髪のこしらへにて、鐵砲をかたげ付添ひ出る。

獅子　ア、コレ〳〵女中、見りやアまだ若い身空で、人も通はぬ尾花ヶ原、夜更けて通るといふ様な大膽な事があるものか。

みど　さればでござんす、後の一ツ家で問うたれば、四五町行けば家續き旅籠屋もあると聞き、ツイ十町二十町一里餘りも參りました。

獅子　ア、コリヤそなた欺されたのぢや、木曾の宿から街道へ拔ける道、四里半といふものは、腰をかける所もないわいな。

〽聞くよりハッと心には、驚き乍らさあらぬ體。

みど　イヤモウ、袖乞同様の一人旅、是迄野宿をした事は幾度もござりますれば、何處たりと行き付き次第、案じることもござりませぬ。

獅子　イヤ、いくら何んでも大膽な、去年の秋からくりから山には、盜賊の頭が住んで巢を張つてゐるといふ山中、金を奪られた其上に如何なる事にならうも知れぬ、私の家へ來さつしやれと言ふに。

〽顔に似合ぬ眞實に、みどりは氣をば落ち附けて。

みど　是はまア、御親切に有難うござります、お前の話の有り様に、今更後へも戻られずどうしたも

獅子　のと思うたに、そんならお詞に從ひまして、何卒今宵の一宿を。
オヽ心安い事ぢや、その代りには夜具もなければ、進ぜる物も稗か粟か、まアひだるうさへなければよいと、一夜さの我慢さつしやれ。

みど　ほんにまア、良い御方に御目にかゝり、難儀の場所を助かりました。

獅子　そりやアさうと夜も更ける、少しも早く行きませう。

みど　ハイ／＼、お連れなされて下さりませ。

〽地獄で逢つた獅子右衛門鬼の念佛打ち連れ立ちて、二足三足。

ト是にて兩人本舞臺へ來る。みどり花道附際にて草履の切れしこなし。

みど　アヽもし／＼、一寸待つて下さりませ。

獅子　どうした／＼。

みど　ひよんな所で、草履の鼻緒が。

獅子　何鼻緒が切れた、俺がすげてやりませう、アヽ何んぞ其處等にないかしらん。（ト稻村を見て）
オヽあるぞ／＼。

〽幸ひ立ち寄る稻村の、内より突き出る氷の刃、ハツと斗りに七轉八倒。

みど　もウし、どうなされました。
　〽立ち寄るみどり、掛稲分けてぬつと出たる大男。（ト曾平太黒羽二重大小にて出る）
　〽髪はおどろに髭ぼう〳〵、血刀提げて突立ちしは、夫と言はねど山賊と、
　看板打つたる有様なり、（トみどりこなし。）
獅子　ヱヽ、欺し討ちとは、卑怯な奴め。
　〽よろぼひ〳〵立ち寄るを、片手なぐりの片車、二ツになつて死してけり。
　ト曾平太獅子右衛門を殺し、刀を突き立て思入。
曾平　みどり、久しいな。
みど　ヱヽ。（ト見て、びつくりなし。）
曾平　コレ長濱曾平太様ぢや、見忘れはせまいがな。
みど　何、曾平太とや。オヽ誠にそちは曾平太、父様の敵、覚悟しや。
　〽用意の刃物抜くより早く、只一討ちと突きかゝるを、かいくぐつてしつか
と押へ。

會平　コレみどり、此曾平太様の言ふ事を、耳をさらつて能く聞けよ。(ト上下の合方になり。)われが親の甚助を殺せしは、われを女房にくれぬ遺恨、今でも俺の言ふ事聞きやア其身の出世になる事だ、又厭と言ふが最後、此の老耄同様に首と胴との生き別れ、生死の境これみどり、いゝ返事を聞かしてくれ。

〽猫撫で聲の面憎さ。

みど　エヽ、言はうやうなき大悪人、女でこそあれおのれをば一太刀斬つて父様の、修羅の御無念晴らさんと、神々様へ願をかけ巡り遭うたは天の導引、サア尋常に勝負せよ。

〽勝負々々と詰め寄つたり。

會平　ハヽア、さりとは悪い合點、たとひ天狗の化けたのでも高の知れた女一人、其手が一本動くが最後、美しい首が飛ぶぞよ、首のねえのは不自由だから思ひ直して女房になれ、みんな其方の爲ぢやわやい。

〽戀に目の無き油斷を見すまし、飛びかかつて左の肩先一刀。

アイタヽヽヽ、わりやア俺を斬つたなア。

〽うろたへを眼附込み〳〵、たゝみかけて斬りつくるを、しつかと留めて。

會平　スリヤ、いよ〳〵聞かぬのぢやな。」

みど　エヽ、耳の穢れ、けがらはしい。

〽言ふより早く拜み討ち、受けつ流しつ斬り結ぶ、無法の手の内女業、危かりける。

會平　エヽ口惜しや、心は彌猛に逸れども言ふに甲斐なき女業、敵を討たぬのみならず、此身も敵の手に掛かり死ぬる命は是非もなし、父樣許して下さりませいなア。

〽言ふ聲さへも細り行く、野末にすだく虫の聲、ともに哀や添へぬらん。

會平　オヽ、悲しからう〳〵、是がいやさにさつきから、いくら言うても聞き入れなく、片意地張つたしぶとい女郎、嬲り殺しだ、觀念なせ。

〽肩先き脊筋容赦なく、此所を一寸彼所を二寸、無慘と言ふも愚なり。

トみどり切られ死す。

そりや、今が往生だ。（トとどめを刺さうとして。）イヤ待て、惜しいものだなア。

〽ためらふ所へ急ぎ來る才次郎政春、月の明りに斯くと見て、足を早めてかけ來り、首筋掴んですでんどう、心地よかりし有樣なり。（ト會平太を投げ退

け、みどりを見て。)

才次　ヤア、コリヤこれみどりが數ケ所の深手、扨は山賊等の仕業よな。
〽許しはせじと立ち向ふ。

會平　ヤア、わりや比良井才次郎だなア。

才次　ムヽ、相好は變れ共、慥かに汝は長濱會平太。

會平　ウヌも、ついでに。
〽我武者の會平太無双の手の內、苦もなく刀打ち落され、只一討ちと振り上ぐる。

アヽ、コレ〳〵待つてくれ、これには段々言譯がある。

才次　何、言譯とな、サア早くぬかせ、どうぢや〳〵。

會平　その仔細は。(ト油斷を見て。)と云うて逃げるのだ。
〽かけ行く肩先き後袈裟、ばらりずんと斬り下げられ、のた打ち廻る四苦八苦、報いは目前天の罰、車返しの胴斬りは、心地よかりし有様なり。

才次　扨はみどりに出合ひ返り討ちにいたせし、極重惡人よな、義に依つて助太刀賴まれ、はからず此場へ參り合せ討つて捨てしは甚助みどりが、我を導きせしならん、親子が恨み思ひ知れ。

〽そつ首はつしと打ち落せば、五體は朱に氣味よき最期。

ト首を斬り、みどりを引き起し。

コリヤみどり、氣を慥に持つてくれ、比良井才次郎なるぞ。

〽今際の耳に通じけん、手負ひはやう〳〵目を開き。

みど　ヤア、あなたは才次郎樣か。

才次　オヽ才次郎だ、敵長谷部平太は身共が討つて、まツこの通り。（ト首を見せ。）迚も存命叶はぬ深手、未來へ土產の敵の首父甚助に追ひ付きて此世の仇を報いしと、修羅の恨みを晴らさせよ。

〽言ひ聞かすれば、みどりは嬉しく。

みど　嬉うござんす、才次郎樣。

〽とは言ふものゝ味氣なや、日頃戀しい床しいと、焦れ慕うた政春樣。

せめて此世の思ひ出に、二世の夫よ、つま鳥の。

〽比翼の床の添伏しに、解けて逢ふ夜の月魄を、待つに甲斐なき此最期、此

世の縁は薄くとも、未來の契りを待ちますと、言ふも苦しき斷末魔、此世の名殘りおし鳥の、尾花ヶ原の草の露、消えて果敢なくなりにけり。

才次　アヽ、是非もなき今宵の仕儀、今一足早くんばかゝる愁ひも見まじきもの、不便のものゝ身の上やなア。

〽項羽を欺く政春も、そゞろ別れに堪えかねて、涙にむせぶばかりなり。

アヽ我れ乍ら迷うたり、大望ある身に不覺の涙、一寸延れば暫時の不孝、此のまゝ東國へ發足せん、さうぢや〳〵。

〽すでに、行かんとなす所へ。(ト此時盗賊の手下大勢出で來り。)

手下　ヤア、頭を殺した侍め、片附けてしまへ。

皆々　合點だ。

〽皆拔きつれて追つ取り卷く、政春ふつと吹き出し。

才次　ムハヽヽ、小ざかしき山賊共、矢流の奥儀を受け傳へ、天が下には一人も恐るゝ者なき政春を、猫に劣りし鼠輩の奴等、我が手にかけるは刀の汚れ、素頭微塵に打ち碎き此世の暇とらせ

てくれん。

〽手頃の小松を引き拔きて、當るを幸ひ、右往左往に投げ廻せば、コリヤ叶はぬと山賊共、ちり〴〵ぱつと逃げ散つたり。（ト是にて皆々逃げてはひる。）

〽相手なければ政春は、四方をきつと打ち見やり。

〽今はこれまでこれよりは、敵の在所しらま弓、やたけ心の若武者が忠と孝との追分や、道は二筋身は一つ。

ト此時、手下の〇、窺ひ出で。

手下　ウヌ、やらぬ。

〽かゝるを取つてあづま投げ、廻る月日はひま行く駒、踏み出す足の膝栗毛

トいろ〳〵あつて、手下を投げ。

〽東の空へと。（ト床の三重にて才次郎向うを見込む。是にて淺黄幕をかぶせる。）

本舞臺向う打ち拔き奥深に山の絶頂を見せ。大柱外險岨なる山、眞中二間の間通しの谷間。所々霞にて見切り。すべて信州越中の國境くりから峠の體。上手に渡し守徳五、下手に同じく梯六、煙草を呑んでゐる。一聲打ち上げ、風の音になり、道具納まる。

「へ急ぎ行く、山又山を經廻りて、登り詰めたる絶頂は、くりから峠の嶮岨にて、岩石そば立ち谷川の、水音遠く物凄さ、此所にも住めば住む人の。

柿六　オヽ、德又よ。

德五　何んぢやい。

柿六　今朝暗い内一番に越した浪人、後に戻つて來るさうなが、アリヤ、何處へ行つたのであらう。

德五　大方、岩屋の不動樣へ、參つたのであらう。

ト南方より高峯にて言ふ、此時上手へ米屋竹藏、股引尻からげ、帳と財布を割り掛けにして、出で來り。

米屋　どうぢや德又、此頃は逢はぬなう。

德五　オヽ、塚原の米屋殿、掛取りに行かつしやるのか。

米屋　さうぢや〳〵、今日は少し道が遠い程に、早うやつて下さんせやア。」

德五　合點ぢや〳〵、サア〳〵乘らんせ〳〵。

米屋　オイ〳〵。（ト皿籠に乘る。）

德五　よしかの、ヲイ、柿六ヤアイ――。

柿六　ヲヽイ。（ト東より繩を引く。米屋、向うへ越して籠を出る。）
米屋　ヤア有難いく、錢は戻りに置きますぞや。
柿六　ヲヽようござんす、早う行つてござんせや。
米屋　ヲイく。（ト東へはひる。松之助前のなりにて東より出る。）
松之　お世話乍ら、越させて下され。
柿六　アイく。
松之　いくらぢやなう。
柿六　廿四文でござんすわい。
松之　ソレ、廿四文。
柿六　サアく乘らんせく。（ト松之助乘つて。）
松之　おりやア初めてぢやが、氣味の惡いものぢや、怪我はないかなう。
柿六　何を言はんす、旅人一人落したら下手人にとられるわいなう、下を見ると惡い故目をふさいで居さんせ。
松之　よしく。

柿六　徳五、そりや引け。

徳五　ヲヽイ。（ト西へ引きつけ）サア〱出さつしやれ〱。

松之　ホヽウ、モウよいのか、ヤレ〱命拾ひをしました。

ト西の方へはひる、引き違へて、辰次覆面頭巾着流し大小にて出で來る。

徳五　ヲヽ、こなたは最前越した浪人殿、早う戻つてござんしたなう。

辰次　さればサ、大切なものを預けて置き、心急くまゝ失念した、早く元へ戻してくれ。

徳五　ハイ、サア〱乘つたり〱。

辰次　よし、よし。（ト乘る事）

徳五　何んぢや、どうしたか繩がたるんだ樣だ。（ト繩を結び直す、東の假花道より以前の九市郎出る。）

九市　ハア、清兵衛が言ひ聞かせし、獅子戻りといふは此所ぢやなア。

柿六　アイ、昔はふごで引いたげな、危ないに依つて只今は駕で越しますよ。

九市　ムヽ、シテ價は何程ぢや。

柿六　ハイ、廿四文でござりまするが、お侍と御出家は、何處でも只越しますわいなう。

九市　イヤ、さうではない。ソレ。（ト錢を渡す。）

柿六　ハイ〳〵ありがたうごんす、サア〳〵ちやつと乘んなされ〳〵。

九市　ヲヽ、承知ぢや。（ト籠に乘る。）

柿六　德五よ、今度は兩方から引き違ひぢや。

德五　ヲツト、承知ぢや〳〵。

兩人　そりや。（トよろしくあつて。）

〽命の藤綱蔦かづら、見下ろす谷は數千丈、猛虎の窺ひ毒蛇の口、危ふかりける。

ト此淨瑠璃にて兩方より靜に引き違へ、能き所にて行き逢ふ。双方顏を見合し、

辰次　ヤア、おのれは。

九市　そちは。

ト辰次拔き打ちに九市郎の乘りし籠を切り落す。九市郎は谷間へ落ちる。辰次は手早く東の方に渡る。是にて淺黃幕をかぶせ、道具出來次第切つて落す。

本舞臺平舞臺。正面見事なる大瀧、前側流れ。東西峙山、舞臺前土手板打ち返し、總て谷底の體。爰に九市郎衣裳破れ大小の鞘は碎け、下手に悶絕してゐる。眞中に虛無僧燕山、岩臺に腰をかけ天蓋を背に結びつけ尺八を持ち、九市郎に目を附けてゐる、一聲打ち上げ、風の音、道具納る。

燕山　此山の絶頂は獅子戻りと號する絶所、皿籠の引き渡し、ム、扨は藤綱にあやまちありて此谷底へ落ち入りしか、何にもせよ。
　へ仔細あらんと立ち寄つて、鳩尾のあたり手足の六脈、心靜にとつくと伺ひさ、呼吸は絶ゆれど心腎の脈、慥かなるは、甦らん事疑ひなし。（ト印籠の藥を飮ませ。）
　へあたりの谷水すくひ上げ、顏にそそいで耳に口。
旅のお侍、なう〳〵、心を慥かに持たつしやれ。
　へ谺に響く一聲に、筋骨忽ちうごめきて、眼を開きてあたりを眺め。
どうぢや、お心が附きましたるか。
九市　ハア、何國の誰人かは存じませぬが、思ひ寄らざる御介抱、シテあなた樣は。
燕山　身共は一生不住の虚無僧燕山と申す者、參り合せて斯くの仕合せ、ハテ、命冥加なお侍ぢやなア。
九市　是と申すも御手前樣の御介抱のお蔭、一命助かり何とお禮を申さうやら。
燕山　命に別條はなけれども、斯樣な大難身體の勞れ、此所より四五丁行けば拙者の知る邊もある故
九市　ハア重々の御厚意、辭退に及ばず御介抱に相なり申さん。

燕山　然らば、此のまゝ御同道仕らう。

九市　何分宜しく願ひまする。

へ立たんとすればこはいかに、腰より下は大盤石、刀を杖に立ち上りては、又がつくり。

燕山　イヤ〳〵、御心はせくならんも筋骨砕け、容易に歩行は叶ふまい、身共が肩をお貸し申さう。

九市　イヤ、それでは却つて。

燕山　ハテ、遠慮も時により申す。

へ是非共斯うと手を取つて、弱きを助ける肩車。

ト肩へ引きかけ二足三足行くと、トヒヨになり、破風より鷹一羽、引きせんにて向うへ飛び去る。

燕山　アレ〳〵、御覧あれ中空に。

九市　秋風立ちて、白雲飛び。

燕山　草木枯れて、鷹南に帰る。

九市　漢の蘇武といふ者。

燕山　夷狄の為に両足の筋をたゝれ。

九市　足蹇となつて凡九年。

燕山　遂に歸國いたせし故事。

九市　時に取つての此身の吉兆。

燕山　お心慥に。

九市　忝い。

〽引くに引かれぬ世の中の、人は情けの花車、片輪車の足曳や、山路を指して。

ト兩人ちよつとよろめく。燕山こなしあつて、

〽たどり行く。

ト三重にて、よろしく、

幕

護持院ヶ原の場
九段坂小屋の場
英龍軒住居の場

六幕目

役名　唐崎九市郎、同才次郎、非人亀藏實ハ十右衞門の子分、中間琵琶平、夜鷹お辨、蔦の者折助、ぢゞむのへげ忠、中間、侍金吾、同銀吾、奴二人、英龍軒實ハ外記左衞門、九市郎妻おらん、外記左衞門娘おまき、こし元等。

本舞臺平舞臺雪の草土手、中遠見。城の塀、角矢倉。眞中に番小屋。下手に入口あり。下寄りに茶屋床几を持たせかけあり、すべて護持院ヶ原の體。夜鷹のお辨立つてゐる、蔦の者折助等ひやかしてゐる。此見得四ツ竹の合方にて幕あく。

折助　ヲヽ寒い〳〵、どうだ、お辨坊忙がしいか。
お辨　アヽ、大晦日は近くなるし、雪が降つて寒いせゐか御客樣もすくないよ。
蔦　どうだ、おれ達を客にする氣はねえか。
お辨　お前ならお斷りだよ、聞けばおつるさんといふ色があるさうだ。
蔦　常談言つちやいけねえ、そんな者はねえよ。

折助　時に、四五日後から此近所へ、美しい夜鷹が出るといふが本當か。

お辨　ア丶、そりや私の妹分だが、今夜は此雪だから休みかも知れないよ。

折助　さうか、樂しみにしてゐたが、そりやつまらねえ。

蔦　それを聞いたら、早く歸らう。

折助　俺も、河岸へ行つて、一杯引つかけよう。

兩人　ア丶、寒い〱。（ト兩人、捨ゼリフにて下手にはひる。）

お辨　何だ、人をひやかしやアがつて、ア丶、寒い、震えあがらア。

ト花道より、おらん眉入れの着附け、傘をさし下駄ばきにて出で、

らん　ア丶、此樣にまア明けても暮れても、降つてゐるとは困つたものぢやなア、それはさうとあのお辨さんが嘸待ちかねてゐやしやんせう。ドレ、立場へ行かうわいなア。

ト雪おろしにて、本舞臺へ來る、お辨見て、

お辨　ヲヤ〱、おらんさん、大そう遲かつたねえ。

らん　さいなア、妾も早く來るのだけれども、ありやうは主にも深くかくし、虎の門の金比羅樣へ夜參りをすると云うて來る故、それで遲いのぢやわいなア。

お辨　そりや尤でござんす、何を云うても侍の果て、堅苦しいのは仕方がないわえ。

らん　ハイ、先頃お話した通り妾は上方者、仔細あつて所を立ち退き、此江戸へ來て此程より、主の大病、着類は元より頭の物迄も賣りつくして藥に代へ、今では其日の煙も立て兼ね、斯うしてお世話になりまするが、此上共に何分おたのみ申しまする。

お辨　そりやお前、妾が引き受けお前を囮に客を引きかけ、葭簀の内は私が代り、一度もつとめはさせないが、立ちまへは割を能くあげてゐるよ。

らん　毎夜々々あなたにばかり御苦勞かけ、お氣の毒にござります。

お辨　何に、いゝやね、お互ひの事だから、モウ客の來る時分、着物を着替えて仕度をおしよ。

らん　アイ／＼。

ト葭簀の内へはひる。合方になり花道より中間赤合羽にて箱提灯を持ち出る。後よりをかしみの侍長合羽大小蛇の目の傘をさし、いやらしきこしらへにて出る。此時葭簀の内よりおらん出て立つてゐる。侍おらんを見て立ち留る。おらん袖にて顔をかくす。

侍　アヽ、コリヤ／＼、可内待て。

中間　ハア。

侍　ハテ、うるはしき夜鷹の形相、唐土にては楊貴妃我朝にては小野小町、それにもおさ〳〵劣らぬ俤、ア、美しき女子ぢやなア。

らん　申し、お遊びなさんせぬかいなア。

侍　ム、、遊び度きものなれども、まさか供の者を待たせておいて葭簀の內へもはひれまい、又出直して參らう、可內參れ。

中間　ハア（ト上手へはひる。）

らん　何んぢややら、すかんお人ぢやなア。（ト又小屋の內へはひる。）

ト合方になり、花道より、琵琶平、破れし赤合羽、古びた菅笠を持ち出て來り、

琵琶　ア、、まだ雪は止まぬと見える、今年のやうに降る年もないものぢやなア。（トおらん又出る。）寒いつめたいと言つた所が、おら達は丈夫な身體、お旦那は嘸おつらからう、兄御樣市郎右衞門樣の仇を報いんものと、御出國なされし後、おらん樣のお供をして、お後を慕ひ尋ね廻り、やう〳〵お目にかゝつた所が、敵の爲に計られて足腰立たぬ御難病、良い藥が差上げたいと思つてもそれもならず、ア、、どうしたものであらうなア。と考へた所で仕方がない、ドリヤ、早く歸りませう。（ト本舞臺へ來る、おらん見て。）

らん　モシ、お遊びなさんせいなア。（ト袖を引く。）

琵琶　エヽ、面白くもねえ、そんな機嫌ぢやねえわえ。（ト顔を見合せ。）ヤア、あなたは。

らん　ヲヽ、こなたは。

ト此時お辨出て眞中へはひり、琵琶平の道具をたゝき落す、おらんは顔をかくしお辨は下に居る。

琵琶　思ひがけない、ムヽ。

ト手を組む。此の引張りよろしく、道具廻る

本舞臺平舞臺、向う一面の雪幕、眞中に非人小屋、能き處に雪持ちの紅梅、雪おろしにて道具止る

〽信濃なる淺間樣に立つ煙り、遠近人の袖寒く、吹くや嵐の大井山、今ぞ浮世を放れ坂、雪の衣のうすひ川、佐野の渡りに着きにけり。

ト此謠にて、花道より九市郎非人のなり、いざり車に乘り竹杖にてこぎながら出る。

九市　ヤレ／＼、草臥た、手足の達者な時には歩行は左程苦にはならねど、斯うなつては仕方がないやう／＼此所までこぎつけたれば、先づ一服いたさうか。

ト膝の下より、煙草入、煙管を出し、火入れの火をほぢり、

アヽ、コリヤ火があるぞ／＼。（ト吸ひ付け、思入。）國を出でしは三年以前、姫の御行衛香爐の在

所、松倉卿の紛失二つには兄の仇、何卒討たんと憂き苦勞、却つて敵の其爲に數千丈の谷間へ落され、死すべき命を虛無僧の燕山殿に助けられ、生れもつかぬ片輪となり生き甲斐のなき九市郎、斯る中にもおらんの貞節琵琶平が忠義、二人の者に廻り會ひしは是も一つの天の加護、又二つには才次郎元來彼は短慮の性質、身に誤りはありはせぬかと案じらるゝは血筋の兄弟、斯く月日を送る內モシ辰次が病死なせば、誰を目當に本意を遂げん、アヽ口惜し〳〵、イヤイヤ身共が力を落しては、二人の者が案じるであらう、さらば小屋へ立ち歸り、二人の歸るを待つといたさう。（ト小屋の方へ行きかける、此時非人龜藏出る。）

龜藏　オヽ、いざりの松九郎殿か。

九市　お仲間の龜藏殿、ドレそれへ參つて。（ト刀を杖に車より下りようとする。）

龜藏　ヲツト、やつぱりさうして居たり、車は俺が、引込んでやるわ。

九市　イヤそれはあんまり、

龜藏　ハテ、遠慮には及ばぬわいなう。

〽藤澤寺の門前に。

ト綱を持つて、小屋の內へ引き込む。此時上手より侍○△の二人、股引ぶつさき、大小にて出て、

九市郎に目を掛ける。九市郎は鼓を取り。

九市　雨の夜も風の夜も、木の葉の時雨雪ふりし。

侍○　ヤイ〱非人、見ればいやしからざる人品、何故斯く迄落ちぶれしぞ。

九市　是はお尋ねとも覺えませぬ、御覽の通り雨足叶はず、斯くの仕合せにござりまする。

侍△　ハテ、不便千萬。（ト錢を出し。）合力いたさう。（ト九市郎扇にて受ける。）

龜藏　モシ〱旦那、私にも下さりませ。

侍○　エヽ、汝は達者な身體を持つて、横着者めが。

龜藏　ヘイ、くれなきア、くれねえでいゝわ。

侍○　たはけたやつの、サア、參らうか。

侍△　先づ〱。（ト兩人花道へ行き。）

侍○　イヤ何、金吾殿、いよ〱彼奴に相違ないかな。

侍△　如何にも九市郎に、まぎれござらぬ。

侍○　兼ねて守山氏のお頼みの通り。

侍△　今宵夜更けて、我々兩人。

侍〇　アコレ、必ずぬかるな。

侍△　御案じ下されるな。

九市　ハテ、らんは何をいたしてをるやら、モウ戻りさうなものぢやなア。

ト兩人、花道へはひる。入れ違つておらん、五合德利を提げ出て來る、

らん　モウ〳〵、最前琵琶平に逢うた時の間の惡さ、何卒主に知れねばよいがなア。

ト本舞臺に來り。

ハイ、只今歸りましてござります。

九市　ヲヽ、おらんか、今宵は大分遲かつたなう。

らん　ハイ、金比羅樣へ參りまして、ツイ手間が取れました。

九市　ヲヽ、さうであらう、今爰に居る龜藏殿に世話になつた、禮を言うてくりやれ。

らん　それはまア御親切に、ありがたうござります。

龜藏　イヤ、その禮には及ばぬ事、ドレ私も行つて寢るとしよう。

二人　大きに有難うござりました。（ト西ツ竹の合方にてはひる。九市郎こなし。）

九市　何んと、怪しからぬ寒さではないか。

らん　ハイ、お寒からうと存じまして、少しばかり買つてまゐりました。（ト德利を出す。）

九市　コリヤ好物の諸白、コリヤ能く氣が付いた、其所等邊りに繩切れはないか。

らん　ハイ。（ト繩切れを出す。）

九市　その德利を松の枝にくゝし付けて、下から焚火をすると燗が出來るぞ。

らん　ほんに、是はよい思ひ付きでござりまするなア。

九市　林間に酒をあたゝめるといふ趣向ぢや。

らん　成程左樣でござりまするなア。

ト枯木を集め火を附け焚火をなす。四ツ竹の合方になり、花道より、琵琶平竹の皮包を提げて出て來る。

琵琶　定めし旦那樣にもおまち兼ね、ドレ、急いで參りませう。（ト本舞臺へ來て、）只今歸りました。

九市　琵琶平なるか。

らん　ヲヽ琵琶平、歸つたか。

琵琶　奥樣。

らん　アヽコレ。（ト何んにも云ふなといふ思入、琵琶平承知ぢやといふこなし。）

九市　ヲ、能い所へ戻つて來た、おらんが土産の諸白、モウ燗が出來たであらう、コレおらん〳〵。

ト呼べども、おらんうつむきゐる故。

九市　是はしたり、又癪でもいたむのか。

らん　イヱ〳〵、何んともござりませぬわいなア。（ト徳利を取り九市郎かけ碗を出し酌をなし。）

九市　ア、、上燗ぢやわ〳〵。（ト琵琶平、竹の皮包みを廣げ。）

琵琶　せめてお肴に是なりとも。

九市　何んぢや、煮染か、イヤ賞玩いたさう。（ト喰ふ、琵琶平、ホロリとなし。）

琵琶　ア、、おいたはしい事だなア。（ト合方になり。）誰あらう粟津の御家中、五百石の旦那樣が今諸白と此煮染を、御賞玩なさるゝとは、まだ其上に奥樣があさましい。（ト氣をかへ。）イヤサ、世に淺間しい此境界、下郎の腹は裂けるやうでござります、（トよろしく泣く。）

らん　道理ぢや、尤ぢやわいなア。（トよろしく、泣く。）

九市　さりとは愚痴な、晉の豫讓は漆を呑み智伯が仇を報ぜんとなす、我も弟に廻り逢ひ首尾よく敵を討つまでは、何んの苦勞も思はぬわい、琵琶平泣くな。

琵琶　ハイ。

九市　女房も泣くな。

らん　ハイ。

九市　エヽ、泣くなと申すに。

兩人　ハア……。（トよろしくこなし。九市郎思入。）

九市　さうして琵琶平、モウその合羽を脱いでもよいに。

琵琶　イヤ、此合羽はどうも。

九市　ハテ、脱がしてやれ。

らん　ハイ。（ト無理に合羽を脱がせる。）

九市　そちは裸ではないか。

らん　今朝迄着てゐやつたが、どうしやつた。

琵琶　へイ、虫がつきました故雪の中へ埋めておきました、さうして私は八ツ時分から、根津の殿様の御國入りで、品川迄長持をかついで來る約束をいたしましたれば、一寸行つて參ります。

九市　それはよいが、その裸では、此雪に。

琵琶　イエ〳〵、長持をかきますれば、汗が出まする。（ト小屋の内より、息杖を持ち來り。）旦那様、奥

様、お風を召さぬ様になされませ。ドリヤ行つて参りませうか。（ト花道へ行き。）まけりやアナ
アまける程、長持かるいなア。ア、寒い〳〵。

ト雲助唄を唄ひ乍ら、花道へはひる。後を見送り。

九市　モウ、行つたか、テモ感心な奴ぢやなア。（ト合方になり。）人の情も世にある時、我れ本國にありし時は、召仕うた者も數多ありしが、只今にてはちり〳〵ばら〳〵、今の此身になる迄も附き添ひくるゝは、彼一人。

らん　忘れはおかぬ、嬉しいぞや。

九市　アヽ、持つべきものは、家來ぢやなア。（ト思入、此時雪降り出す。）

らん　ヲヽ、又雪が降つて來た、雪風あたらばお身の障り。

九市　なにさま夜も更けて來た、小屋にはひつて休まうか。

らん　さうなされませ。

九市　大儀乍ら、此車を引いてたもれ。

らん　アイ〳〵。

〽引けば因果のめぐり來る、片輪車を甲斐々々しく、小屋の内へと引入れて、

足曳ならぬ尾長鳥、遠寺の鐘も鳴り響く、哀れをさそふ雪吹雪、おらんは
小屋より窺ひ出で、思ひありげに立ち止り。

らん　サア〳〵お休みなされませ、妾しや、火の要心をして參りまする。（ト靜に、本釣鐘雪おろし、おらん下手へ來て思入。）思ひ廻せば勿體ない、假りにも夫の目顏を忍び、たとひ肌身は穢さず共心の穢れ名の穢れ、お許しなされて下さりませ。

〽身をふるはして伏し拜む、涙の雨か雪吹雪。

それに付けても情けなきは夫の身の上、たとひ今守山辰次にめぐり逢ふとも、本意の程は思ひもよらず、重光樣ともあらう身が、野末の小屋に落ちふれて、まだその上に此御病氣、助けたいと心は碎けど、心にまかせぬ貧の病。

〽凍えの雪を清めの水、取り出す一軸押開き。（ト一軸を出し。）

日頃信ずる象頭山金比羅大權現へ誓をかけ、我が命を生贄に夫の病氣を救はせ給へと、思ひ込みし七日の斷食、今宵が滿願明けなば知死期。

〽さら〳〵と一軸を、梅の小枝に打ちかけて。

南無金比羅大權現、夫の病苦を救はせ給へ。

ヘ上着を脱げば、心も清き白木綿、女の念力一心不亂。

夫の爲にはいとはぬ苦行、南無金比羅大權現樣。

ヘ降り來る雪に身をさらし、姿も容も白雪の、亂れ心の亂れ髮、女の操ぞ。

ト床の三重、おらん手を合せ下にどうとなる。此見得よろしく三重にて道具廻る

本舞臺中足の二重。見附けに模樣の唐紙、上手折廻しの茶壁、向う鼠壁、床の間に軸をかけ、鈴蟲の香爐を飾り、茶の湯道具一式を飾り、いつもの處に大振の屋敷門。下手屋敷塀、切り破りあり。右二重に外記左衞門、着附け袴にて、利休行燈にて歌書を讀みゐる。此傍に、おまき、振り袖屋敷娘にて茶を立てゝゐる。二重の下に腰元、茶臼を挽いてゐる。此見得琴唄にて道具留る。

外記　此徒然草の作者吉田の兼好といふ坊主は、中々しやれた者ぢやわえ。

まき　御茶の御稽古にお勞れもあそばさず、夜の更ける迄歌書を御讀なされて、さぞ御氣欝にござりませう。（ト茶碗を持つて來たり。）まア、一ぷく召し上がられませう。

外記　ヲヽ、コリヤ忝い。先づ御手前から。

まき　まア〱、御父上樣から。

外記　ヲヽ、然らば。(ト呑み。)中々服加減ぢや。
まき　何んぞよい、御口取りを。
外記　イヤ〳〵、それは榮耀の沙汰、常に釜をかけるものが、さう奢つてはたまらぬて。
まき　あなた様がさう仰つしやります故、御出入の衆が、しはい旦那ぢやと申しまする。
外記　下々の者は儉約の意を知らぬ、打ち捨ておいたがよい。
まき　今一服、差し上げませうか。
外記　モウよい〳〵。イヤ何おまき、明日は根岸の宗匠の月並ぢやが、おぬしの歌は出來たかの。
まき　趣向は浮みましたれども、未だ出來ませぬ。
外記　拙者も何かよい歌を讀んで、社中を驚かしてやりたいものぢや。
腰元　申し、夜も更けましたれば、モウ御休みあそばしませ。
外記　ヲヽ、モウ臥つてもよからうわえ、表へ氣を附けよ。
腰元　畏りました。
まき　此お部屋が暖かうござります、これへお床を延べませう。
外記　イヤ茶席で臥せるといふ法はない。さうして明日は早朝から池尻の屋敷へ出ねばならぬ、かい

巻と枕を貸してくりやれ。

まき　それでは、お寒うござりませう。

外記　大事ない、別して寒うもあるまいわえ。

ト外記左衛門こなしあり。おまき障子屋體へかい巻き枕を持つて行き、腰元表を閉める。外記左衛門煙草盆を提げて一間へはひる。

外記　今宵は別して冷える、必ず風を引くまいぞ。

まき　有難うござります。

外記　サア休みやれ／＼。（ト障子を閉める。）

まき　お岩や、モウ何時であらうなア。

腰元　四ツ過ぎで、ござりませう。

まき　冬の夜は長いなう。（ト唄になり、奥へはひる。）

腰元　さうして内の旦那樣は御裕福故、去年の秋三百兩といふ金を出して、鈴虫の香爐をお買ひなされたが、妾にあのお金があつたら、櫛笄を買はうもの、アヽつまらぬ身の上ぢやなア。

ト唄になり奥へはひる、本釣鐘合方にて、才次郎黑羽二重着流し黑縮緬の頭巾、大小高下駄にて傘

をさし、花道より出て來りよき處に留まる。月出る

才次　やう／＼雪も晴れ渡る、老女の化粧冬の月、ア、物凄き眺めぢやなア。（ト思入あって。）ア、いつぞや信州宮の前なる吾妻屋にて、兄九市郎殿にお別れ申し、敵を尋ねん爲南部仙臺津輕の果さ迷ひ廻るも二歳餘り、淺草寺にて結城左衛門樣に計らずも御目見得とげ、姫君のお身の上は御病氣と披露なし、志津馬、宮城野と共にお館に、かくまひ下されしとの事、先づ是にて一つの安堵、此上は御結納に用ゆる鈴虫の香爐、是非共讃州高松家へ御返し申さねば、兩家の婚姻御家の大切、某きつと詮議仕出し差上げませうと、御受け合ひ申せしは、小[illegible]軒といふ香術の師匠が、鈴虫の香爐買ひ求め所持たすよし、讓り受けんも金子はなし一面識もなき御人故、借りる譯にはゆきがたし、と云うて香爐の手に入らぬ其時は。（ト思入あって）いつその事忍び込んで、イヤ／＼如何に忠義のためぢやとて、盜みをなせば盜賊の汚名、ア、如何いたしたものぢやなア。（ト本舞臺へ來る。此時奥よりおまき出て。）

まき　思ひ出せば去年の秋、十市の渡しで見染めし殿御、思ひ出しては寢附かれず、ア、辛氣な事ではあるわいなア、オ、斯ういふ時は歌でも讀んで、氣を晴さうか。

（ト徒然草を出して見て居る。此内才次郎いろ／＼家に目を附けて。）

才次　コリヤ、丈夫な普請の樣子、中々素人などには窺ひがたし。（ト下手の塀を見て）ム、爰から。よし〳〵。（ト此時、太鼓、割竹の音して夜廻りの來る體。）ア、、比良井才次郎ともいはれる身が、夜盗をするも忠義の爲、天道神佛許させ給へ。

ト思ひ切つて塀を破る。凄き合方にて犬の聲などよろしく、おまき聞耳立つて。

まき　あの音は、（ト才次郎塀を破る事。よろしく。）ヤア父上樣、盗賊がはひりました。

外記　何、盗賊ぢや。（ト刀かけの大小を取り。）コリヤ、騷ぐな〳〵。

ト手を取り襖を小楯に窺ひ居る。才次郎下手の障子をあける。外記左衛門すかし見て、此時鎗を突き出し。

ウヌ、盗賊覺悟。（ト突きかける。才次郎是を留めて、合方替り手練同志の立廻り。）コリヤ、娘、手燭〳〵。（トおまきウロ〳〵して、手燭へ火を灯し差し出す。）

才次　待つた〳〵、身共は物奪りではござらぬ、暫く〳〵。

外記　何を。（ト又立廻り。）

才次　先づ、暫く〳〵。（ト此時おまき才次郎の顏を見て。）

まき　ヤアあなたは、ヲ、さうぢや〳〵矢張りあなたぢや、父上樣、此盗賊樣は十市の渡しで、お目

にかゝつた。

外記　エ、。

まき　その時の、お侍様ぢやわいなア。

外記　何をたはけた事を、此侍は非道な業を。

まき　イエ〳〵、見違ひはいたしませぬ、ソレとつくりと、あなたのお顔を。（ト手燭を見せる。）

外記　ム、、誠に。（トびつくりなし。鉈を落す。）

まき　何んと違ひは、ござんすまいがなア。

外記　ハテナア。（トあきれし思入、思案をして、）イヤ何お侍、先達ては信州にて、御意得ましたその折柄、主の敵か、親の敵か、何づれ大望ある身の上とは、身共とくと見受けしが、それに引き代へ今宵の有様、サア包まず是にて御話しなされい。

才次　御不審は御尤も、御當家の英龍軒殿を外記左衛門殿とは夢にも知らず、面目もなき御對面、御尋ねにあづかりまして何しに僞り申さんや、拙者は江州粟津の家來比良井市郎右衛門が弟、同苗比良井才次郎政春と申す者。

外記　ム、扨は、矢流家第一の高弟、政春殿とは御手前であつたよな。

まき　そんなら噂の高い劒術の御名人、才次郎樣とはあなた樣でござりましたか。

才次　ハア、主君の姫君を結城左衞門樣の媒介にて、高丸讃岐之助樣へ御婚姻の御取り結び、御結納の印たる鈴虫の香爐、詮議の役目を承り國元發足の折柄、大兄直政を守山辰次の爲に討たれ敵の在所實の詮議、然る所御當家に香爐のある事承り、武士たる者にあるまじき事乍ら、日限に差し迫まり、今宵密に忍び入り奪ひ取らんとせし此場の仕儀、何卒御推量下されたし。

外記　ハア、驚き入りし御心底、侍の名を捨て、主君の爲に賊となる、イヤお出かしなされた、お出かしなされた。

才次　拙者何卒兄九市郎に面會なし、共に敵を討ちます存意、別に命は惜しうござらぬ。

外記　ム、さうして、その九市郎殿と申す兄御には、近頃廻り逢はれしか。

才次　何處に御出なさるゝやら、別れまして早二歳、御心當りでもござりませぬか。

外記　その九市郎殿の面體は。

才次　天庭廣く面長にして、年の頃は廿三四、きなじりに黑子のあるは、母の譲りにござります。

外記　ム、扨は甲州よりの歸り道、九段下の松の根岸に饑の浪人、よしあり氣なる侍と不便に思ひ烏目惠み、よく／＼面體見てまゐりしが、瓜を二つの貴殿の面さし。

才次　ム、、その非人が兄九市郎殿のなれの果、浪人なしてをらるゝならば、此身に取つて何より重疊。（ト此時おまきこなしあり。）

まき　これいなア父上樣、いつぞやより云うた事、何卒叶えて下さんせ。

外記　ム、よし〳〵。（ト床の間の香爐を持ち來り。）才次郎殿、大切なる香爐確に御受け取りなされい。

才次　スリヤ、此香爐を私に。

外記　それが則ち聟引き手、不束なやつなれど、末長く添うて下され。

才次　ム、。（ト思案のこなし。）

外記　猶豫の體は、不得心か。

まき　アノ、妾が御氣に入りませぬか。

才次　イヤ、全く左樣な儀ではござらねども、兄の敵を討つべき身の上、敵の爲に返り討ちになるまいものとも申されぬ故、今宵の情けは明日の歎き、此儀は何んとも御返事が。

外記　その儀は兼ねて承知の上、望みを遂せし曉には、ナウ娘。

まき　それさへ御承引下さらば、長くお待ち申しまする。

才次　それ程のお詞、然らばその儀は如何樣共。

まき　アレ、父上樣、如何樣共とおつしやるわいなア。
外記　ム、先づは御承引の段忝し。然らばせめて、ム、。（ト思入、罐子の茶を立て、持ち來り。）此茶の銘は友白髪、只何時迄も添ひとげるやう、娘が呑んで聟殿へ。
まき　アイ〳〵。（ト一ト口呑み。）憚り乍ら。（ト才次郎呑む。次に外記左衞門も呑み。）
外記　イヤ、目出度し〳〵。（ト八ツの鐘鳴る。）
才次　アイヤ最早丑滿五更の知らせ、直樣九段に罷り越し。
外記　御同苗共、對面あれ。
まき　それでは、直ぐに御出でゞござりまするか。
外記　親子三人因みは内證。
才次　首尾よく兄の敵を討ち。
まき　目出度く御歸りあそばす迄。
外記　鈴虫の香爐、奪はんとせし盜賊。（ト渡し。）
才次　忝し。（ト受け取り、ツカ〳〵と行くを。）
外記　盜賊待て。（ト小判の包みを打ち付ける。才次郎受け留める。）

才次　是は。
外記　道の路用。
才次　御厚志の段有難し。（ト才次郎、花道へ走りはひる。）
まき　アノ、申し。（ト行きかけるを、引きまはして。）
外記　ハテ、頼もしき若者ぢやなア。

ト感心の思入、早き合方にて此道具廻る。
本舞臺、元の非人小屋、本釣鐘合方にて、花道より、以前の○△の侍二人頬冠り尻からげ、奴二人附き添ひ出て來り。

侍○　イヤ何、金吾殿、いよ〳〵守山氏には今宵の中に。
侍△　密に讃岐へ出立、後の始末は我々へお頼み。
侍○　足は立たねど、彼奴もしれ者、欺し寄つてたつた一討ち。
侍△　合點だ。（ト皆々本舞臺へ來り奴に囁く。奴兩人小屋を窺ひて戻り。）
奴　お二人樣、よく寢ておりまする。
侍○　ム、、それは重疊々々。

侍△　サア、お越しなされい。（ト皆々支度をして、小屋の外より抜身を突き込む。）

九市　ワア、、。（ト菰を引き切り、惣身朱に染み、竹杖を突きはひ出る。おらんびつくりする。）ヤア、何奴なれば、欺し討ちとは、卑怯な奴め。

ト竹杖に仕込みの白刃を抜き斬りつける。

らん　コレ、御心慥かに御持ちあそばしませいなア。

皆々　ヱ、面倒な。（ト立廻り、トヾ九市郎を斬り倒す。△はおらんを押へつける。）

九市　ヱ、口惜い無念なわえ、足腰立たぬ此難病、犬死するは、残念ぢや。

侍　ヱ、、面倒な、いつそとどめを。（ト立ちかゝる此時おらん刎起き法劔を抜き。）

らん　南無金比羅大權現樣、何卒成就なさしめ給へ。

ト自害する。此時大ドロ／＼になり、松ケ枝の掛物仕かけにて燃える。是にてきられし九市郎むつくりと立ちて、四人を取つて投げる。此時、以前の琵琶平、竹ばさみの御教書を持ち出る。九市郎是を見て。

九市　ハテ、怪しや。

兩人　いぶかしやなア。

九市　神變不思議な此吉兆、梅の梢にかけ奉りし大權現の御守り、忽ち猛火に消え失せしは。

琵琶　無き玉の緒の連理にて、自然と是へ引き寄せられしは、主從二世の奇緣なるや。

九市　騙し討ちにて不覺を取り、數ケ所の疵を受けたるも、今又夢の覺めたる如く。

琵琶　誠にあなたのおみ足は、いつの間にやら立ちました。

九市　ヲヽ、立つたわい立つたわい。

琵琶　御平癒なされたは。

九市　ヌヽ、忝い。（ト此時、四人拔き連れてかゝるを、兩人して斬り倒し。）

らん　ヌヽ、嬉しや有難や、それで妾も安堵の臨終。

九市　扨はおらんの一念にて。

琵琶　神も納受ましませしか。

らん　我が夫、琵琶平、早おさらば。（トおらん、よろしく落ち入る。）

九市　アヽ、はや事は切れたるか、不便の最期を見るものぢやなア。

琵琶　悲しみあれば喜びと、結城樣のお情にて、姫君樣の御在所知れ、速に高丸家への御輿入れ、安堵の御教書。（ト渡す。九市郎押し戴き。）

九市　ヱ、[illegible]し、然し紛失の香爐刀、二品の揃はぬ間は申譯なき此身の不運、ハテ何んとしたものであらうなア。（ト思案のこなし。此時上手より。）

才次　イヤ、氣遣ひめさるな兄者人、其香爐は手に入りましたぞ。（ト才次郎出る。）

九市　ヤア、そちは才次郎、面目もなき不思議の對面。

才次　詮議に心を碎かれし、鈴虫の香爐は手に入りました。（ト差し出す。受取つて見て。）

九市　ム、、紛ふ方なき鈴虫の香爐、ヱ、忝い。シテ其方はいつぞや信州宮の前にて相別れ、それよりいたして何處に住所。

才次　あなたにお別れ申してより關八州を詮議なし、先達つてより當所の住所。

九市　ム、、忝くそちの計らひにて、香爐は手に入れど、今一色は松介卿の短刀。

兩人　如何いたしたものであらうなア。（ト此時、下手にて。）

龜藏　イヤ、松介卿の短刀、それへ持參いたしませう。

琵琶　ム、、あの聲は慥かに非人の龜藏。

九市　短刀を持參なすとは。

ト下手より、龜藏衣裳を着替へ、いさみのなりにて、袋入りの短刀を持ち出て、九市郎に渡す。九

市郎見てびつへりなし。

九市　ヤア、コリヤ是、お家の重寶、松倉卿の短刀、コレ弟。

才次　ム、、ドレ。（トよく〳〵見て。）誠に違はぬ、兄者人。

九市　弟。

兩人　忝い。

九市　シテ、龜藏殿の此姿、短刀持參のその仔細は。

龜藏　イヤ、私はあなた様の御恩になりし、麹町上州屋十右衛門の兒分でござります、あなた様が此所に御出なさるを、十右衛門が通りかゝり御見受け申して心ならず、私に仕返いたせよとの言ひ付け、それ故非人となり御用をきゝしは私の役、又それなる短刀も主人十右衛門が買ひ求め、あなた様へ差し上げますのでござります。

九市　ハア、驚き入つたる御親切、御禮は詞に述べ難し。

才次　此品手に入る上からは、敵辰次を搜し出し。

九市　日頃の本望、達してくれん。

龜藏　イヤ、辰次めは御當所に足を止めてをりましたが、又候や逐電いたしました。然し落ち行く先

きは是なる密書に。イザ、御被見下さりませ。

九市　何から何迄、重ね〴〵の御親切、琵琶平、讀み上げい。

琵琶　ハア、（ト開き見て。）何々書面を以て申達候、最早鎌倉へも比良井兄弟の者、入り込みし故、足も留めがたく、讃州高松領配下村へ立ち退き申候、就いては、彼地にて研屋辰次とお尋ね下され候、委細の事は到着の上萬々申上候、粟津刑部様へ、研屋辰次より。

九市　おのれ辰次、如何程に遁がるゝとも、本意を遂げんは寸時の間。

才次　御用意あれ、兄者人。

九市　ア、勇しゝ〳〵、今日の襤褸は會稽の、

龜藏　明日の錦と翻す、

琵琶　武名は四方に、

龜藏　かくれあらざる、

才次　讃岐の仇討。

九市　急いで發足。（ト此時以前の奴、二人窺ひ居て。）

二人　ウヌ、覺悟。

トかゝるを立廻つて、兩人を双方へ投げるを木の頭。皆々引張りの見得にてよろしく、

ひやうし　幕

大詰

丸龜濱の場
高松仇討の場

役名　唐崎九市郎、同才次郎、虛無僧燕山、守山辰次、田那上運平、和尚隨願、坊主才念、船宿の亭主、刀屋次右衞門、惡者一、同二、仕出し町人△、同〇、講中大勢等。

本舞臺。淺黃幕。上手に高く石垣を積み、其上に見事なる石燈籠、金比羅大權現と彫り付けたる常夜燈。すべて丸龜濱の體。下手に茶店、是に町人二人旅なりにて休みゐる。眞中に三八、立はだかり鈴を振つてゐる金比羅參りのこしらへ、代參箱を脊負ひ秘文を唱へてゐる。在鄕唄にて幕あく。

運平　象頭山金比羅大權現、奥の院には十一面觀世音。

△　是れはしたり行者樣、餘りちりん〳〵やられてはのぼせてならねわえ。（ト錢を出してやる。）

運平　有難や、只取る、そはかア。（ト無性に鈴を振る。△、耳を押へて。）

△　ア、モウよい〳〵、耳ががん〳〵するわえ。

□　ほんに最前から見たやうだと思つたら、お前は大和橋の籠正様ではござりませぬ。

△　是はどなたかと思つたら柳の文三様、金比羅様へお參りかな。

□　イヤ、少し商賣都合で阿波へ行く道すがら、勿體ないがお參りをして行きますわいなう。

△　ほんによう似た事もあるものぢや、私もついで乍ら、參詣と思うて。

□　それはよい道連れぢや、一休みして行きませうか。

△　さうしませうわいなう。

ト休む、『鎌倉見たか』の唄になり、花道より辰次合羽を着て、頭を手拭にて卷き風呂敷包みを提げて出て來る。後より船宿の亭主、合羽股引にて煙草を呑み乍ら出る。此後より虚無僧燕山、前のたりにて天蓋を冠り見えがくれに、辰次に目を付けながら出る。花道に留り、

辰次　扨亭主、此度は不思議の縁にて段々と世話になり申した、然し身共は金比羅様へ參詣をいたさねば相ならぬ故、殘念ながら此はづれにて別れ申す。

船宿　ハイ、それはお名殘り多うござりまするが、高松領とおつしやるがどの邊でござります。

辰次　イヤ、身共は、香西領迄參る者サ。

船宿　ヘイ、左樣なら追分迄御出なされませ、道も近うござりまする。

辰次　如何樣、そちは當地の勝手を能く知つてをると見ゆる。

船宿　大阪の船宿の事故、年に二三度づゝ通行いたしまするので、此邊はよく存じてをります。

辰次　然らば、追分迄同道いたさう。（ト兩人本舞臺へ來る。運平立ち塞がり。）

運平　おんきばらつしやうそはか。（ト鈴を振つて附け廻り。フト顏を見合せ。）

辰次　ヤア、そちは。

運平　誠に、貴殿は。（ト言はんとするを。）

辰次　コリヤ、報謝を願はゞ眼先きをきかせい、身共は金比羅に參詣いたす者ではないわえ。

ト押へる。船宿の亭主は錢を出してゐる。燕山はそろ／＼舞臺へ來り、兩人の樣子を窺ひ乍ら下手へはひる。

船宿　此邊りには澤山な金比羅參り、報謝すれば限りがないが、旦那の代りに報謝いたしませう。

ト錢を遣る。行者の運平辰次に目を附け乍ら。

運平　是は／＼思ひがけない、御對面でござりまする。（ト言ふを、目顏で知らせる。）

船宿　申し旦那、それにてお休みなされませ。

辰次　如何樣、幸ひの腰掛ぢや。（ト腰を掛ける。△□の兩人、船宿を見て。）

△　ヤア、貴公は、大彌先生ではござらぬか。

□　そんなら、モウ乘船が着きましたか。

船宿　イヤモウ、近年にない風浪故、思ひの外早う着きました。

△　時に範正樣、お前なり私なり、大彌の先生と來ては話しの合ふよい道連れ、御一緒に參らうではござらぬか。

□　成程々々、當時南では音に聞えた粹の水上、面白さうな道連れなれども、先方にもお連れがある樣ぢや。

辰次　ア、イヤ〳〵、手前は夜前大阪表より便船いたしたれば、幸ひ亭主が金比羅參詣と申す故、誠に海上にての一夜の馴染、是非共別れねばならぬ故、亭主何も遠慮に及ばぬ、御兩所に附き合うて、是より先へ參るがよいわ。

船宿　ヘイ〳〵、左樣なら自由乍ら、折角のお供なれども。

辰次　是にて、最早別れるであらう。

船宿　さやうなれば御免を願ひ。サア、御暇を受けたれば。
△　打ちこんじての三枚ざし。
□　連れ立つて、行きませう。
船宿　左樣なれば、旦那樣。
△　サア、行きませう。（ト三人、捨ゼリフにて上手へはひる。）
運平　辰次樣、お久しうござります。
辰次　思ひがけなき此出會ひ、そちや田那上運平、變り果てし其つなりは。
運平　イヤモウ、騷動の場から逐電して天竺浪人、思ひ附きし金比羅行者、猶又話に聞きますれば曾平太を語らうて、比良井市郎右衞門を。
辰次　コリヤ、大事な儀ぢや、うかと申すな、それ故身共は今の流浪、比良井兄弟の奴等身共を兄の敵と附け覘うてゐるけれど、身共は又根に任せ夜を日に次いで、大阪へ到着いたし、一日一夜の海上にも、此地へ渡つたれば、先づ暫くは安心の形ぢやて。
運平　兼ねて貴殿の生國は當所なりと聞いたる故、實は此地を徘徊なし御目にかゝらん心組、シテ刑部樣より、お便りがござりましたか。

辰次　スリヤ早、落ち附く先々より、書狀を以て知らすれば、便りの儀は度々あれども騷動以來は刑部樣にも、押込め同然の御身の上にて賴みにはならぬ故、斯く故鄕へ志せしは、彼の兄弟の奴等の息の通ふ中は何國の果てへ參つても、枕を高く寢られねば此地へ引きよせ、しまうて取る身共の思案、御身に出會ふこそ幸ひ、以前のよしみもある事故、力になつてくれるであらうなア。

運平　イヤ、そりや改めてお賴みなくとも、一旦の契約故何處迄も一味同心、如何にも其をりに及びし時は力になりませう、シテ貴殿の落ち付く先きは。（ト此時、燕山出て窺ひゐる。）

辰次　高松の城下にて香西領の下配下村といふ所で、研屋辰次と以前の名前で尋ぬれば、在所の事故早速に知れまするわ。

運平　成程、下配下村、承つておりまする。

辰次　然し身共は久々にて、故鄕へ急ぐ事なれば、甚だの心急き。

運平　直樣お越しなされまするか。

辰次　せめて道迄同道もいたしたけれ共、そのなりでは。

運平　イヤ、人目に立たぬやう、目先きをきかして參りまする。

辰次　然らば、何かは道々話さう。

運平　左様なれば、辰次様。

辰次　運平ではない金比羅行者、身に附いて参れ。（ト両人上手へはひる。燕山思入。）

燕山　誠に身共が推量に違はず故郷へたよる守山辰次、高松の城下下配下村とあるからは、此所より程近し、最早袋の鼠も同然、然し昨夜の正夢に九市郎初め、才次郎諸共当地へ参りし知らせなりしが、あれも正しく正夢なるか、いづれにもせよ辰次が實否、今一應見えがくれに後を慕ひ、ム、、、さうぢや。

ト笠を冠る。此模様よろし　道具廻る。

本舞臺眞中に三間の大師堂。前側化粧屋根、正面に連子格子をいれ賽錢箱、能き所に一間の床几を直し、此上に毛氈をかけ札を直し、此上に平瓦積山並べあり。平舞臺眞中、大竈に釜をかけ所々に床几を直し腰衣の坊主茶を汲んで居る。以前の仕出し腰をかけ煙草を呑んでゐる。三味線入りの鳴物の勤めにて、道具留る。

坊主　大師堂、瓦の御寄進、御志はござりませぬか。

治右　是れ〳〵御坊、火が消えたわい。（ト火入れを取りに行く。）

坊主　ハイ、火をさし上げませう。

治右　ハイ〳〵、是は憚り樣でござります、瓦の寄進一枚だけつきませう。（ト錢を出し。）

坊主　それは御奇特にござります。（ト机の傍へ行き、胡粉の筆を取つて。）御名前は何といたします。

治右　左樣、江州大津の商人、刀屋治右衞門と願ひます。

坊主　承知いたしました。

ト書いてゐる、花道より九市郎、才次郎着附け輕さん風呂敷包笠を持ち、柄袋大小、草鞋にて出る。

九市　ヤレ〳〵怪しからぬ早船であつたわえ。

才次　時に兄者人、此間より餘程の御步行、お障りはござりませぬか。

九市　イヤモウ、常よりは却つて、丈夫に覺えるわえ。

才次　それは結構にござります。何はしかれあれへ參つて、休んで參らうではござらぬか。

九市　如何樣左樣いたさう、サア來やれ〳〵。（ト兩人、本舞臺に來る。）

兩人　イヤ、御免下されい。（ト休む。坊主見て茶を出し。）

坊主　大師堂、瓦の御寄進はなされませぬかなア。

九市　成程、大分瓦の寄進があるやうぢやや。

才次　兄者人、何はしかれ象頭山へ、參詣いたさうではござらぬか。」

ト此時、治右衛門つくづく兩人を見て居る。坊主手桶を提げて。

坊主　あなた方の是にお出の內、一釣瓶提げてまゐります。(ト下手へはひる。治右衛門こなし。)

治右　イヤ、申し失禮乍ら、あなた方は粟津の御家中、比良井樣の。(ト是にて治右衛門を見て。)

九市　イヤ／＼、手前等は、何も其樣な者ではござらぬ。

才次　東國の者でござるが、シテこなた樣は。

治右　私は大津の者でござりまする。(ト額を見て、考へ。)イヤ／＼、矢張り比良井樣の御兄弟樣ぢや。私は大津の刀屋、雷治右衛門と申しまして、市郎右衛門樣とは到つて御入魂にいたしましたが、イヤモウ、あの辰次の爲には、今に難儀をしてをります。

九市　ハア、如何なる事やら手前一向、左樣な者でござらねば、何が何やら解り申さぬ。

才次　コリヤ、人違ひでござりませう。

治右　成程、それでは手前の思ひ違ひ、イヤ失禮な事申し上げました。

九市　なんの／＼、左樣な事はまゝある事ぢや。

才次　決して、何も申さぬわ。

治右　イヤ、恐れ入りましてござります、然し是を御緣にお山迄、お供いたしませう。

九市　イヤ、私等は後よりゆるりと參れば。

才次　まア、御先へ御出下されい。（ト是にて、治右衛門荷をかたげ。）

治右　ハテ、よう似た人もあればあるものぢやなア。（ト考へ。）左樣なら、お先へ參ります。

ト唄になり上手へはひる。後に兩人見送りて。

才次　兄者人、こなた樣には今の町人、御存じでござりまするか。

九市　されば見知つたやうなれ共、めつたに姓名は名乘られぬ。

才次　なれ共、正直さうな人に見受けました。

九市　イヤ／＼大事の前、決して油斷はいたされぬて。

才次　モウ、ソロ／＼參りませう。

九市　とはいへ、庵主が歸らねば。

才次　イヤ能うござる、せめて寄進に附いて參りませう。（ト傍にある瓦を見て。）何、施主研屋辰次上は、守山辰次が以前の姓名。

九市　ドレ。（ト取つて見て。）誠にこりや是辰次の手跡。

才次　スリヤ彼奴めは此所を、最早通り過ぎしよなア。

九市　いまだ胡粉のかはかぬは。
才次　遠くは行くまい。、
九市　弟、參れ。（ト行きかける。此時下手より燕山出る。）
燕山　アイヤ兄弟共、暫く〳〵。（ト天蓋を脱ぐ。）
九市才次　ヤア、其許は燕山殿。
燕山　久し振りの御面會。
九市　こなた樣にも、御健勝の體。
才次　拙者とても、一別以來。
燕山　シテ、九市郎殿の難病は癒えましたか。」
九市　イヤモウ、何からお話し申さうやら。
燕山　敵守山辰次が在所、明細に相知れましたぞ。」
九市　スリヤ、其許樣が。
才次　辰次の在所を。
燕山　見屆けしはたつた今、彼が故鄉は當國と承り、西國筋へ下りしは御身に助太刀いたさん爲、

先刻船より上りし時同じく上りし浪人者、敵辰次と聞くよりも直に實否を糺さんと、後をつけて參りしが蟲が知らせて取つて返し、思ひも寄らぬ此面會、最早本意を遂する時節、兄弟共に安心召され。
九市 シテ、辰次の在所と申すは。
才次 確と見屆け下されしか。
燕山 如何にも、當國香西領にて下配下村といへる所。
九市 ソリヤ、聞き及ぶ辰次が故鄕。
才次 下配下村へ、參りしとな。
九市 此上は、直ぐさまあとより。
才次 三人、三手に引き分れ。
燕山 出會ふ處は、下配下村。
九市 兄弟が日頃の望を。（ト瓦を持つて。）
才次 敵守山辰次めを。（ト兩人、瓦を手に取り投げつける。瓦二ツに割れる。）
燕山 二ツに割れしは、よき吉瑞。

二人　然らば此まゝ。

燕山　用意いたせ。

　　トはげしき見得にて、此道具廻る。

　本舞臺平舞臺。通しの寺の塀。此上手大門、此の兩方に西光寺と書きし提灯に、火を燈しあり。辰次、行かうとしてゐるを治右衛門是を捉へ居る。惡者三人さゝへ居る。此見得双盤にて道具止る。

辰次　エヽ放せ〳〵。

惡者　エヽ、退いた〳〵。（ト引き分けようとしてゐる。）

治右　イヤ〳〵、めつたには放さぬぞ、こなたに貸した十五兩、今爰で戻せ〳〵。

辰次　イヤサ、身共は今浪人の身の上、歸參をすれば返すといふに。

三人　待てと言つたら、待たねえのか。

治右　エヽ、何をこなた方の知つた事かえ、サア今爰で返してくれ。

辰次　サウぬかしやア、ウヌ。

三人　たゝきのめすぞ。

治右　面白い、手込めにするならして見さつしやれ。

皆々　エヽ、面倒な。

ト治右衛門を大勢して打つ。此時双盤を早め、下手より九市郎出て、此體を見て。

九市　ヤア、ウヌは守山辰次だなア。（ト辰次、びつくりして。）

辰次　ヤ、こりやたまらぬ。（ト逃げかゝるを、治右衛門取り附く。）

治右　サア金を戻せ。（ト是を振り切らうとする。爰へ花道より才次郎出て来り。）

才次　それにござるは、兄者人か。

九市　ヲヽ、弟、辰次は是に。

才次　何、辰次とナ。

ト本舞臺に来り捕へようとする。悪者三人邪魔をする。此時辰次は治右衛門を振り切り、門内へ逃げてはひる。下手より燕山出で。

燕山　才次郎殿か。

才次　ヲヽ、燕山殿、辰次は寺内へ。

燕山　何、此寺内へ。（ト引き退けて立廻り九市郎は悪者を投げ。）

九市　心元ない、さうぢや。（ト門内へ行からとするを悪者さゝへる。）

燕山　何にもせよ。（ト矢張惡者邪魔をする。）
二人　それをやつては。
　　　トかゝる。此模樣双盤にて道具廻る。
　　　本舞臺、眞中に三間の大佛殿、釋迦の座像、前通り天人の欄間すべて西光寺本堂。こゝに和尚墨衣にて、鉦をたゝき、講中大勢百萬遍の珠數を繰つてゐる。此見得にて道具止る。
皆々　南無阿彌陀佛々々々々々々々。
　　　ト夢中に珠數を繰つてゐる、辰次逃げて來り、ウロ〳〵して百萬遍の中へはひり、珠數を繰り居る皆々、心附かぬ體。
皆々　なまいだ〳〵。
　　　ト九市郎走り出て見廻し、いろ〳〵に尋ね、フット辰次と顏を見合せる。
九市　ウヌ、辰次め。
　　　ト飛びかゝらうとする。講中が邪魔になるこなしいろ〳〵あつて、珠數を潜つて眞中へはひり辰次を捕へようとする。辰次危ふく脱れる。
皆々　なんまいだ〳〵。（トぐる〳〵廻りに追ひ廻す。此時、才次郎走り出で。）
才次　ウヌ、辰次め。

ト是も大手をひろげ追ひ廻す。辰次上手へ逃げる。是にて兩人、追つてはひる。

皆々　なんまいだ〳〵。

ト此時下手より燕山出でウロ〳〵尋ね廻り、百萬遍の人數を一人々々見廻し、上手へはひる。引き違へて、辰次、走り出で、百萬遍の中へ飛び込み、和尚を倒し撞木を取らうとする。和尚びつくりして渡すまいとする。是を撞木にて頭を打ち黒衣を脱がせる。是にて和尚あきれてはひる。辰次手早く衣を着し鉦をたたきゐる。九市郎。才次郎氣をいらつて出で來り一人々々首筋を取つて、改めて見る。皆々びつくりして、

皆々　大變ぢや〳〵。

ト無茶苦茶に東西へ逃げてはひる。此時辰次震えながら鉦をたゝきゐる。氣味の惡いこなし。鉦をたたき後を見返り逃げたいといふ思入。ソロ〳〵立ち上がつては又座つてしまふ事あり。此中兄弟は上手へ再びはひる。此時以前の和尚出で來り、辰次の顏を見て、

和尚　ヤア、こなたは、どうやら。（ト小聲に言ふ。辰次あたりに氣を兼ね。）

辰次　是和尚樣、俺ぢや〳〵。

和尚　俺とは誰ぢや。（ト震え〳〵、顏を見てゐる。）

辰次　是、和尚樣見忘れさんしたか、ソレ、前方此處に居た、研屋辰次でござるわいなう。

和尚　ヲヽ、ほんにさう言はつしやれば、どうやら。オヽ、こなたは辰次殿ぢや〳〵。
辰次　久し振りにて此村へ戻つて來て、思ひも寄らぬ急難に出合ひ困却いたしまする、どうぞ匿まうて下さるまいか。
和尚　サア、そりや馴染のこなた故、匿まうて進ぜ度いものぢやが、急な事故どうやら。
ト氣味の惡きこなし。
辰次　サア〳〵、人を助けるは御出家の役、辰次が一生懸命の場合、助けて下され後生ぢや〳〵。
和尚　ぢやというて、どうしてよいやら。
トウロ〳〵する、此時以前門前に一緒に居た田那上運平を才次郎追うて來る。辰次びつくりして鉦を叩きゐる。才次郎運平を押へ付け、顏を見て。
才次　ヤア、うぬは一味の田那上運平、辰次を何處へ逃がした、サアそれをぬかせ。
運平　エヽ、それを身共が知るものかい。（ト振り切り、逃げようとする。）
才次　さう言や、いつそ。（ト拔きかける。）
運平　何を。
ト兩人一寸立廻り。此時九市郎上手より以前の惡者を追つて出る。九市郎兩人を引き捕へ顏を改め

突き放す。是にて辰次に突き當り辰次の冠りし花の帽子脱げる。辰次、びつくりする。兄弟辰次を見て。

九市　ヤア扨こそなア。

才次　辰次覺悟。

辰次　南無三。

ト傍の燈火を消す。是にて暗くなる。忍び三重の合方、

才次　ヤア、コリヤ燈火を。

ト此時、辰次上手へのがれはひる。九市郎は運平と、才次郎は惡者と、さぐりあつて引き捕へ、兩人一時にあてる、此見得、道具廻る。

本舞臺平舞臺、一面に竹挾みの塀、眞中に踏み込み附きの雪隱、松の立木、石の雪見燈籠、手水鉢奥庭の模樣。本釣鐘にて道具止る。トバタ〳〵にて上手より辰次逃げ出る、下手より以前の治右衛門出で來り辰次と突き當り、辰次にあてられ倒れる。辰次花道へ逃げ行き惡いといふ思入にて引き返し、上手へ行かうとして又引き返し、雪隱に心づき。

辰次　ヤレ〳〵、恐ろしや〳〵、コレ幸ひの隱れ處。どつこい、此燈籠を消しておかねば。

ト雪見燈籠を吹き消す。下手より燕山火繩を振ひて窺ひ出る。是にて辰次燈籠の蔭へかくれる。燕

山いろ〳〵見廻してフット雪隱に心付き、火繩を振り足にて戸をあけ内を窺ひ火繩を振り振り向うへ出る。是にて辰次四ツ這ひになり、ソロソロ雪隱の中へはひる。そつと戸を閉める、

燕山　ハテ心得ぬ、寺内の隈々尋ねても、行衛の知れぬ守山辰次、命冥加な奴であるわえ。

ト言ふ時、辰次正面の窓から顏を出し舌を出し悦ぶ。此時治右衞門氣が附き起き上り、燕山に行き當り。

治右　ヤア、ウヌ、辰次め。

ト燕山にしがみ附くを引き廻して火繩にて顏を改める。双方より九市郎　才次郎出で燕を知る邊に

兩人　辰次、覺悟。（ト燕山に双方より詰め寄る。）

燕山　イヤ、身共ぢや〳〵。（ト火繩を振つて見せる。）

九市　アノ、燕山殿でありしよなア。

才次　さうとは知らず、すんでの事に。

兩人　危い事なう。（トこなし、此時下手にて。）

捕頭　ソレ。（ト是にて、六人の捕手十手を持ち出で來り、三人を取り卷く。）

捕手　腕廻せ。

燕山　コリヤ何故の。

兩人　狼籍なるぞ。

捕手　コリヤ、手向ひか。（ト此時捕手頭馬乘提灯をさし附け、）

捕手　者共待て、（ト三人を見て。）見れば兩腰をた挾み居れば、仕官人か、浪人か、何れにもせよ夜中寺院へ踏み入つて、參詣人を騷がせしは何等の仔細あつての事か。訴へに依つて召捕に向ひし某、言譯あれば申せ、承らう。

九市　ハア、お役目御苦勞千萬、全く我々は怪しき者にあらず、當寺に逃げ込みし者あつて、是非なく、斯く寺內へ亂入はいたせしが。

才次　毛頭、不都合いたすべき者にあらず、御役目の表に對し他聞を憚る事なれ共、御疑念晴しに此一書、密かに御被見下されたし。

（ト懷より一書を取り出し捕手取次いで捕手頭に渡す。捕手頭書物を讀み。）

捕頭　此儀は早先達つてより承りし一條、スリヤ御貴殿方は比良井氏の御兄弟よな。

九市　拙者は唐崎九市郎。

才次　比良井才次郎めにござりまする。

捕手　シテ、それに控へられしは。

燕山　恐れながら拙者事は、義に依つて兄弟の者共へ助太刀いたす燕山と申す者。

捕頭　シテ、當寺へ入り込みし敵の展次、行衛は知れましたか。

九市　其故にこそ斯くの仕合せ。

才次　暗夜と申し、案内知れぬ此寺内。

燕山　取り逃がさば詮なき事、心勞いたして业りまする。

捕頭　イヤ、其儀は少しも氣遣ひ無用、既に拙者は右の次第、御領内へ觸渡しなば心許かに詮儀仕出し花々しく勝負をなし、世にその名を揚げられよ、拙者は手配り萬端に心を急げば早おさらば。

燕山　お役目の段。

三人　御苦勞に存じます。（ト捕手頭、行かうとして、腰の提灯をさし出し。）

捕頭　助太刀召さるゝ燕山とやら。

燕山　ハア。（ト向うへ出る。）

捕頭　暗夜を照らす、今宵の寸志。（ト差し出す。）

燕山　ハア、辭退申さず、お借用仕ります。
捕頭　家來、供いたせ。（ト皆々、花道へはひる。）
燕山　御兩所、此上共におこたりなく。
九市　天井、下家は言ふに及ばず。
才次　今一應、とくと吟味を。
燕山　油斷めさるな、コレ。

ト囁く。三人思入あつて上手へはひる。此時辰次戸をあけて表へ出る。左右の樣子を窺ひ又雲隱にはひる。戸を閉めて窓から顏を出してうまくいつたといふ思入。舌を出す。此模樣よろしく道具廻る。

本舞臺、平舞臺、以前の雲隱の裏手になる。本釣鐘、虫の聲蛙の聲にて道具止る。ト雲隱の壁を中よりあけ、辰次蜘蛛の巣だらけになり出る。此の時上手より九市郎、下手より才次郎出で、此の物音に聞耳を立てる。辰次着物の土を拂ひ、窺ひ乍ら、花道へ行きかける。

辰次　ア、日頃信心奉る金比羅樣の御利益にて、毒蛇の口を遁がれ出し、命冥加な俺樣ぢやなア。
九市　さてこそ、辰次め。

ト兩方より大手を廣げ詰め寄る。辰次びつくりなし、いろ〳〵逃げ廻る。トゞ九市郎は才次郎を捕

へる。辰次と思違へて。

九市　しめた。（ト才次郎びつくりなし。）

才次　兄者人。

九市　才次郎か。（ト言ふ内、辰次花道へ逃げのび此時思はず。）

辰次　ア、、嬉しや。（ト胸を撫でおろす。兩人向うを見て。）

九市　コリヤ、待ちをらう。

才次　何んでも、此の道。

ト花道の方へ來て辰次を捕へようとする。辰次命限り花道へはひる。才次郎此の後を追ふ。九市郎才次郎の影を辰次と思ひ、同じく追つてはひる。此の模樣道具廻る。

本舞臺淺黄幕、松原の體。上手へ月昇る。と韋駄天になり、花道より辰次一生懸命に逃げて出る。後より才次郎追ひかけ出る。辰次は本舞臺へ來り、西の通ひへかゝると西の揚幕より九市郎走り出で辰次と行き當る。

九市　ウヌ辰次、こんどは逃がさぬ。

ト捕へようとする。辰次（見物の席）場の中へ飛び込み。東の花道へ昇り東の場へかくれる。九市郎も場の中を東の花道へ上り見失ひ、本舞臺に來りウロ〳〵して、小家へはひる。辰次此時花道へ上

り、本舞臺へ行かうとする。下手より燕山出で辰次を見て、

燕山　コリヤ、辰次。

ト引き捕へる。是にて辰次振り切り逃げようとする。トゞ辰次花道へ逃げようとする。燕山追ひかける。花道より、九市郎出で、大手を廣げ待つて居る故、辰次場の中を西の方へ逃げようとする。才次郎出で通ひ道へ塞がる。辰次これにて西の通ひより、本舞臺へ退れようとする。燕山本舞臺より追ふ。辰次又場の中へ飛び込む。トゞ三方より、辰次を挾み、燕山提灯を振り差出みかざし。

燕山　うまい〳〵、モウ此度は逃がさぬ〳〵。

ト是にて本舞臺の淺黄幕、切つて落す。

ト本舞臺、見附け奧深に浪の遠見。前側手摺打ち寄せ。板松のすかし、高松の紋の高張り提灯を建て、侍麻上下に改め、合引にかゝり居る。以前の捕手皆々弓張りをかざし、六尺棒を持つて、立ちかゝり居る。浪の音にて、道具止る。と辰次三方より狹まれて絶體絶命になり、刀を拔き才次郎に斬つてかゝる。才次郎逃げる。燕山是を見て。

燕山　兄弟共、何を逃げる、サア勝負〳〵。（ト是にて兄弟辰次をよき所迄おびき寄せ。）

才次　兄者人、初太刀を召され。

九市　如何にも、その言葉を待つて居たのぢや。

ト是にて九市郎辰次とよろしく立廻り、トゞ辰次の腕を斬り落し控へる。此時辰次斬られし腕を接ぎ合す事などあり。才次郎是を蹴飛ばして渡り合ふ。燕山尺八にて辰次の頭を打ち、トゞ兩人辰次を斬り倒し控へる。是にて燕山辰次を引き起す。辰次刀を持つて落ちし自分の腕を取つて又立廻る。いろ〳〵あつて、辰次嬲り殺しにされる。

九市・才次　兄上の敵、思ひ知つたか。

トとどめを刺す。

侍　目出度い〳〵、敵討ち取る上からは。

燕山　早く此のまゝ、國入り〳〵。

ト此時頭取出で。

頭取　先づ今日は是限り。

ト此模様よろしく。

ひやうし、幕

打出し

研辰（終り）

大正十五年五月十七日印刷
大正十五年五月二十日發行

『世話狂言傑作集』第八卷

定價金參圓

檢印

編纂者　河竹繁俊
　　　　濱村米藏
　　　　渥美清太郎

發行者　東京市日本橋區通四丁目五番地
　　　　和田利彦

印刷者　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
　　　　瀧澤一郎

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
　　　　株式會社秀英舍

發行所　東京市日本橋區通四丁目五番地
　　　　春陽堂
　　　　（電話大手五一、四二一〇番
　　　　　振替東京一一六一七番）

河竹繁俊氏
渥村米藏氏
渥美清太郎氏 共編

歌舞伎劇大系（全三十卷）

時代・世話狂言傑作集各十五卷 各册

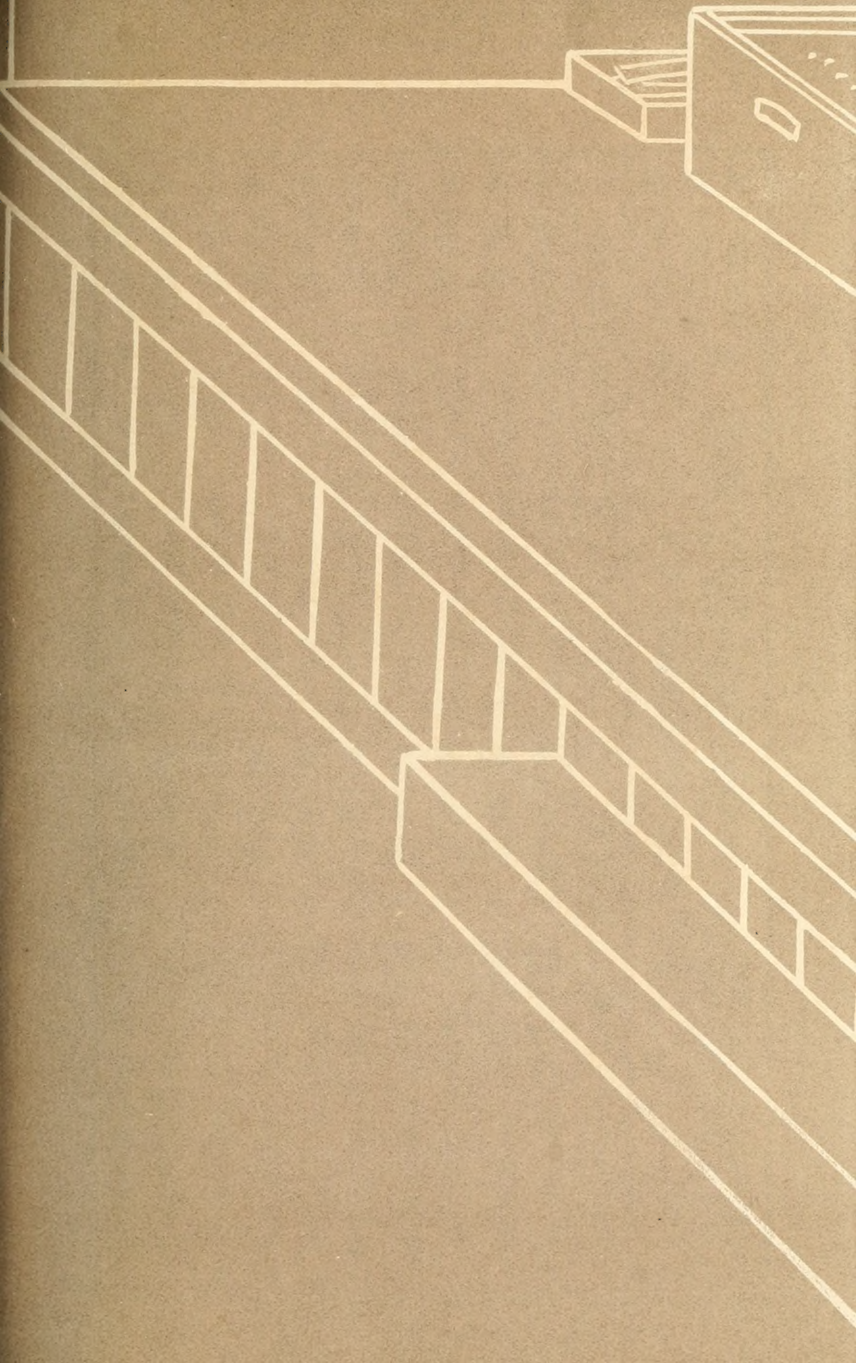
■四百頁乃至四百八十頁假訂
■美術解說詳細插繪豐富
■定價 參圓、送料八錢
■春陽堂發行

世話狂言傑作集（全十五卷）

第一卷（既刊） 四谷怪談。法界坊。嫁切り。梅川忠兵衛。
第二卷（同） 天竺徳兵衛。幡隨院長兵衛。酒屋。清玄。
第三卷（同） 八百屋お七。鈴木主水。乳貰ひ。宿無團七
第四卷（同） 唐人殺し。堀川。野崎村。五大力
第五卷（同） 女歌舞伎。殿樣勘六。東山。名工柿右衛門、鼓の里、裏表心曲尺。（榎本虎彦集）
第六卷（同） 累物語、白石噺。鬼神お松。夏祭り。
第七卷（同） め組の喧嘩、三人片輪。上野戰爭。松田の仇討。（竹柴其水集）
第八卷（同） 朝顏日記。二人新兵衛。廓文章。梅の由兵衛。
第九卷（續刊） 大經師。お妻八郎兵衛。千兩幟。かしく六三。
（以下續刊、卷次、内容には多少の變更あるべし）

時代狂言傑作集（全十五卷）

第一卷（既刊） 義經千本櫻、石切梶原。陣屋熊谷。蓮生物語 卅三間堂。
第二卷（同） 高野山。嫗山姥。玉三。義經腰越狀。新薄雪物語。
第三卷（同） 阿漕、菅原。板額。山門五三桐。
第四卷（同） 先代萩 國性爺。辨慶上使。曽我物狂。彥山權現
第五卷（續刊） 忠臣藏。小野道風。六彌太 娘景清。
第六卷（同） 廿四孝。平家女護島。宅兵衛上使。鎌倉三代記。
第七卷（同） ひらがな盛衰記。伊勢物語。岸姫松。輝虎配膳。
第八卷（同） 伊賀越、阿古屋。盛綱。安達ヶ原。有職鎌倉山。
第九卷（同） 一の谷。富士見西行。楠昔噺。八陣。
（以下續刊、卷次、内容には多少の變更あるべし）



EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 02988 8187

春陽堂版